欧州を参考にしたエコ・スクール活動
のあり方に関する研究

－ 滋賀県エコ・スクール推進事業を対象として －

中村　敦子

環境計画学科環境社会計画専攻において学士(環境科学)の学位授与の資格の
一部として滋賀県立大学環境科学部に提出した研究報告書

2005 年度

承認

_____

指導教員

欧州を参考にしたエコ・スクール活動のあり方に関する研究
～滋賀県エコ・スクール推進事業を対象として～

井手研究室　　0212023　　中村　敦子

1. 研究の背景

滋賀県では2001年より「滋賀県エコ・スクール推進事業」という事業が実施されている．同推進事業は，1990 年代初頭に欧州で生まれたエコスクールプロジェクトをモデルとして始められた事業である．

現在（2005 年度），滋賀県内の 13 の小中学校が同推進事業に参加し，エコ・スクール実践校として活動に取り組んでいる．同推進事業は開始から数年を経て，実践校も増え，その成果が徐々に現れはじめているが，一方，課題や問題点も明らかになりつつある．

2. 研究の目的・意義

本研究の目的は，滋賀県のエコ・スクール実践校におけるエコ・スクール活動の実態と，実践校になったことによる成果や課題，問題点を明らかにし，本研究で明らかになったことをもとに，エコ・スクール活動およびエコ・スクール推進事業の成果をさらに伸ばし，課題や問題点を解決していくための方策を考察して提案することである．

なお，本研究における成果とは，エコ・スクール活動という仕組みを取り入れたこと，あるいは同推進事業に登録したことによる成果のみならず，各校における活動が，後述する事業の目的を達成できていれば，それを同活動の成果とみなすことにする．

本研究によって，滋賀県内小中学校におけるエコ・スクール活動をさらに推進させることができるばかりでなく，今後，同様のエコ・スクール活動を導入する他都道府県の参考にもなると考える．

3. 研究方法

本研究は，主に実践校と関係者に対するヒアリング調査によって進めていく．

本研究のフロー図を図 1 に示す．

4. 滋賀県エコ・スクール推進事業

滋賀県エコ・スクール推進事業は，同事業への参加登録を行い，後述するエコ・スクール活動の実践を行っている学校を「エコ・スクール」として認定する事業である（活動プロセスを重視しているため，認定基準は定められていない）．同推進事業は，**「学習から実践活動へ結びつけること（授業と活動）」「学校と地域との連携・協力体制をつくること（地域との関わり）」「児童生徒の自主性を育成すること（子どもの自主性）」**の 3 点を主な目的とし，さらにエコ・スクール活動を実践するにあたって，**「全校をあげて活動に取り組むこと（全校との関わり）」**を推奨し，そのような活動を行う学校（エコ・スクール）を支援している．

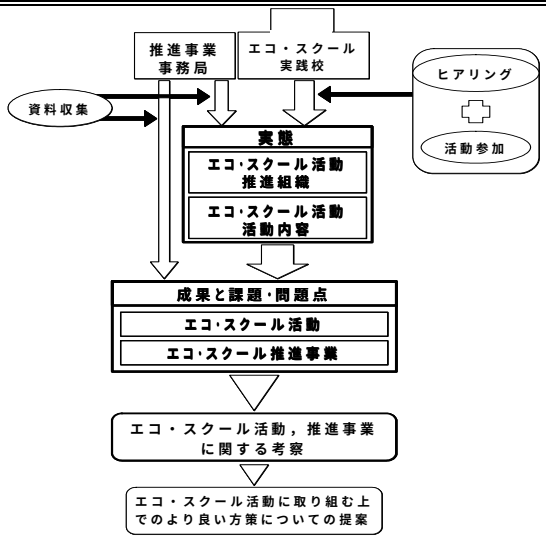

図 1　研究全体のフロー図

同推進事業は，2004 年度まで，環境学習 NPO に委託されていたが，2005 年度からは，委託がなくなり，滋賀県直執行の事業になっている．

事業開始から 2005 年度までに 13 の小中学校がエコ・スクール実践校に登録している．2001～2004 年度までの実践校および，事業への登録の経緯を表 1 に示す．なお，表中の「エコ・スクールセミナー」とは，同推進事業事務局が開催したものであり，エコ・スクール活動を広く告知し，参加の呼びかけを行うためのものである．なお，表 1 にあげなかった 5 校（2005 年度からの実践校）には，同推進事業事務局が各校を訪問し，登録依頼を行っている．

表 1　実践校の事業への登録経緯

学校名	登録経緯
油日小	県からの呼びかけにより参加した
御園小	
近江兄弟社小	自ら参加した
老蘇小	業務受託の NPO との話し合いによって参加した
逢坂小	エコ・スクールセミナーに出席後，参加した
能登川南小	
今津中	担当教諭が以前からエコ･スクール活動を実践していた
野洲中	自ら参加した

5. エコ・スクール活動の仕組み

滋賀県エコ・スクール推進事業における「エコ・スクール活動」は「①**活動推進組織の設立**（環境グループ+エコ・スクール委員会）→②環境グループが活動の中心となり**活動テーマや計画を立案**→③**活動**→④活動の**ふりかえり**」の順に各実践校において進められていく．その際，「⑤**学習や地域とのつながり**」をもつことが大切であるとされる．

また，全校を巻き込んだ活動が推奨されている．エコ・スクール活動の一連の流れを図 1 に示す．

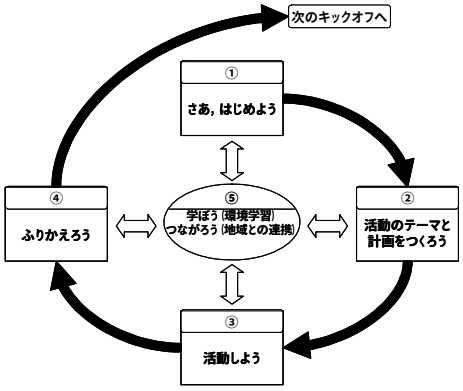

図 1　エコ・スクール活動の流れ

6. エコ・スクール実践校　調査事例

同推進事業では，各校での活動を推進するための組織として児童生徒による「環境グループ」と保護者や教諭，地域支援者による「エコ・スクール委員会」の設立を実践校に求めている．

推進事業開始年度から 2004 年度までの実践 8 校における環境グループの概要を表 2 に示す．

ほとんどの学校において環境グループは児童生徒会組織の中に位置づけられている．ただし，今津中に関しては，生徒会組織ではなく，担当教諭と希望者による任意のグループとして活動を行っている．

表 2　各校の環境グループの形態と主な活動

校名	形態	主な活動
油日小	児童会組織	ビオトープに関する活動
御園小		
老蘇小		
逢坂小		廃油回収など
能登川南小		ゴミ，電気，水の削減に関する活動
近江兄弟社小	縦割り授業のリーダー組織	同校，兄弟社村での縦割り授業の活動計画など
今津中	単独グループ	山の道の開発等
野洲中	生徒会組織	古紙再利用運動

また，エコ・スクール委員会の概要を表 3 に示す．なお，野洲中では，活動に対する他の教諭の理解がなかなか得られず，エコ・スクール委員会は設立できていない．また，御園小では，担当教諭の多忙さや学校長の異動等により，2005 年度はエコ・スクール委員会が開催されていない．

表 3　各校のエコ・スクール委員会の主な構成員と活動

校名	主な構成要員	主な活動
油日小	教諭，保護者	会合：3 回/年，自然観察会
老蘇小		会合：1 回/年，ビオトープ整備，自然観察会
近江兄弟社小	教諭，保護者，地域支援者	同校，兄弟社村の活動等に個々人が携わる
御園小	教諭，保護者，地域支援者（行政含む）	会合：3 回/年，自然観察会
逢坂小		会合：3 回/年，川の生き物調査
能登川南小		会合：3 回/年，雨水タンク設置
今津中		会合：1 回/年+文化際での激励，メンバー個々が，環境グループと一緒に活動

7. エコ・スクール活動，エコ・スクール推進事業における成果，課題・問題点

本研究では，エコ・スクール活動および同推進事業による成果や課題・問題点に関して，同推進事業関係者が行った評価を参考にした上で，本調査によって把握した各実践校での活動内容から，エコ・スクール活動と同推進事業に関する成果と課題・問題点を抽出した．同活動によって生じた成果や課題・問題点の中から特に重要と思われるものを表 4，5 に示す．

なお，表 5 に示した課題・問題点の他にも，同推進事業の今後の展開に関して，何を普及させるのか（「エコ・スクール認定校」「エコ・スクール実践校」「エコ・スクールの仕組み」のうちのどれを普及していくのか），さらには，活動を全県に広めることを目指すのか否かについての議論に決着をつけることが大きな課題となっていた．また，滋賀県で同県教育委員会によって実施されている環境教育モデル校の設置に関する事業との重複が指摘されていた．

表 4　同活動によって生じた成果，課題・問題点

主な成果	エコ・スクール委員会ができ，学校だけではできなかった活動が可能になった
	地域への活動の発信によって，地域の人々の活動に対する関心が高まった
	環境グループのメンバー（児童生徒）の実践・行動力の向上に結びついた
	学校全体の雰囲気づくりになっている
	学校の特色と児童生徒の発案が具現化されてきている
	教諭間での活動に対する意識共有になっている
主な課題・問題点	活動を行う上で，（教諭，児童生徒）保護者や地域の人々の理解が必要であること，特に，地域の人々の参画が必要であることが実施上のハードルになっている
	児童生徒の考えた活動計画を学校の年間カリキュラムに組み込むことが難しい
	クラス単位やクラブ単位での活動ではなく，学校全体の取り組みであるために活動が難しい
	他の教諭から活動に関する協力を得ることが難しく，現状では，（一人の）担当教諭だけが負担を負っている．そのため，学内になかなか活動が浸透しない

表 5　同推進事業によって生じた成果，課題・問題点

主な成果	エコ・スクール活動を実践する学校数が増え，実践校間の情報交換や交流が盛んになった
	実践校になったことによって，実践校は全校や地域に対する環境啓発活動をより効果的に行えるようになった
	環境 NPO からの研修によって，実践校の教諭たちは，児童生徒が主体的に考え，活動するプロセスを学習することができた
	実践校にとっては，認定を申請したことで，認定委員会から環境教育に関する情報や活動に対するアドバイスを受けることができた
主な課題・問題点	エコ・スクール推進事業は，ハンドブックだけでは，内容が十分に理解されず，敷居が高いイメージがある．また，「キックオフ宣言」と「支援する組織を構成する」という仕組みのため，敬遠されがちである
	エコ・スクール活動には，継続的な外部からの支援が必要であるが，必要な支援は学校によって異なる．そのため，オーダーメイドの支援が必要となるが，事業予算に限界があり，それができていない
	認定の基準が明確でなく，現在は，申請すれば，すべて認定されるようになっている．しかし，認定のハードルを下げて，何でもありにしたら，エコ・スクールとは言えない
	学校教育課の行う環境教育モデル校の設置事業と事業内容に重複がある

9. エコ・スクール活動，エコ・スクール推進事業に関する考察・提案

まず，2001 年度から活動を開始している実践校で行われている活動例の中からエコ・スクール活動および同推進事業の目的に沿った成果を得られている主な事例を表 6 に示す．

また，本調査の結果をもととして，エコ・スクール活動による成果をさらに伸ばし，課題や問題点を解決していくために提案したい方策を表 7 に示す．なお，表 6，7 ともに，表中の番号は図 1 で示した各ステップのものと同じである．

活動の最初のステップ（①）では，PTA をエコ・スクール委員会の核にすれば，保護者たちの参画を得ることができるだろう．ただし，活動がパターン化やルーチン化してしまうことが懸念されるため，地域で活動している幅広い分野の人々を同委員会のメンバーに加えることも同時に提案する．

また，活動を担当する教員チームを設置すれば，学校全体で活動に取り組むことができ，教諭間での活動に対する意識共有にもつながるだろう．

活動のテーマ・計画づくりのステップ（②）では，環境グループが計画した活動内容をエコ・スクール委員会のメンバーに詳しく知らせれば，同メンバーから活動に関するアドバイスや支援が得られ，学校だけではできなかった活動や児童生徒が発案した活動の実現化が期待できる．また，地域の人たちの活動に対する関心も高まり，さらに，児童生徒としては，エコ・スクール委員会メンバーという大人の前で発表することによってコミュニケーション能力を向上させることにつながるとも考えられる．

表 6　各校の事例内容とそれによって得られた成果

	校名	事例内容	得られた成果
①	油日小	エコ・スクール委員会メンバーの大半が PTA 役員である	エコ・スクール活動を PTA 活動の一環として継続的に行えた
	能登川南小	前年度の PTA 会長が次年度のエコ・スクール委員会の委員長になる	活動に対する PTA からの積極的な支援を得ることができた
	今津中	幅広い分野の地域支援者がエコ・スクール委員会メンバーに含まれる	エコ・スクール委員会からのさまざまな支援が可能となり，生徒が発案した活動を実現できた
	油日小	数人の教諭で構成される部会が全校で行うエコ・スクール活動を考案する	全校挙げて活動に取り組むことができた
②	能登川南小	環境グループの児童生徒が年度の活動計画をエコ・スクール委員会メンバーに発表	活動のための有効なアドバイスや支援をエコ・スクール委員会メンバーから受けることができた
	今津中		
	油日小	学校の教育テーマとエコ・スクール活動のテーマを同じものにする	各学級や委員会でも同テーマにそった活動が行え，全校挙げて活動に取り組むことができた
	御園小	学校ビオトープを活用した年間の授業計画をあらかじめ決めておく	エコ・スクール活動と授業とのつながりを無理なく図ることができた
	今津中	生徒が発案した活動案を，次年度以降の授業でも活かす	児童生徒の考えた活動計画を学校の年間カリキュラムに組み込むことができた
③	近江兄弟社小	全校で取り組む授業をエコ・スクール活動と位置づける	全校挙げて活動に取り組むことができた
	油日小	親子で参加できる活動を設け，保護者，地域にも参加を呼びかける	保護者や地域の人々を活動に巻き込むことができた
	近江兄弟社小		
	能登川南小	シンボルマークを地域の人からも募集する	
	老蘇小	同校ビオトープの維持管理活動への参加を地域にも呼びかける	
④	油日小	活動内容を地域のイベントなどを活用し，学外に発表する	地域の人々の活動に対する理解や関心が高まったと考えられる
	逢坂小		
	能登川南小	地域の広報誌に活動の様子を掲載する	

表 7　エコ・スクール活動に対する提案事項

①	・PTA をエコ・スクール委員会の核にする ・地域で活動している幅広い分野の人たちをエコ・スクール委員会のメンバーとする ・活動を統括する教員チームをつくる
②	・児童生徒の活動計画をエコ・スクール委員会のメンバーに周知させる ・学校の教育テーマとエコ・スクール活動のテーマを同じにし，毎年，全校挙げて取り組む活動内容を教員チームで決定する ・年度の活動内容をある程度固定し．長期計画で，児童生徒が発案した活動案を授業に取り込む
③	・全校が参加する授業や行事をエコ･スクール活動と関連付ける ・保護者や地域の人々も一緒にできるような活動を企画し，活動の案内を地域にも出す
④	・地域のイベントや広報誌などを活用して活動内容を発信する

活動のテーマに関しては，学校の教育テーマとエコ・スクール活動のテーマを同じものにすれば，学校全体で活動に取り組むことができるだろう．

また，毎年度の活動内容をある程度固定しておくことや，年度を超えた長期計画で活動を考えていくようにすれば，児童生徒の考えた活動計画を学校の年間カリキュラムに比較的組み込み易い．

実際に活動するステップ（③）では，全校が参加する授業や行事をエコ･スクール活動と関連付けておけば，学校全体で活動に取り組むことができる．また，保護者や地域の人々とも一緒にできるような活動を実施し，地域の広報誌など活用して活動への参加を地域にひろく呼びかけるようにしておけば，保護者や地域の人たちの活動に対する理解や関心も高まるであろう．

ふりかえりのステップ（④）では，地域の広報誌やイベントを活用して活動内容を発信すれば，地域の人々の活動に対する理解や関心が高まると考えられる．

最後に，滋賀県エコ・スクール推進事業による成果をさらに伸ばし，課題や問題点を解決していくために提案したい方策を示す．本研究の結果，同事業全体としては，マスとしての活動の普及とエリート校養成の 2 つを同時に目指しながら推進していくことが望ましいと考える．

エリート校養成に向けた認定段階での提案に関しては後述するが，事業全体としては，活動事例集やパンフレットの作成と配布，環境学習支援センターの HP やニュースレター，マスコミなど各種メディア等を活用したエコ・スクール活動および同事業に関する情報のより一層の広報が必要であろう．また，滋賀県が毎年開催している「滋賀県環境学習のつどい」の場において，同事業で行われている連絡協議会のような実践校同士の情報交換会を開催し，一般の人にも公開するようにすれば，同事業関係者以外の人たちにも実践校で行っている活動内容を知ってもらうことができ，同活動への理解が高まると期待される．また，環境教育モデル校の設置事業との違いをアピールすることにも役立つだけでなく，毎年必ず開催される行事に連絡協議会を組み込むことになるため，予算面から考えても，発表を準備する実践校側にとっても効率的であろう．

続いて，同事業全体に関しての提案を考慮した上で，同事業の段階ごとに出した主な提案事項を表 8 に示す．なお，同表中の記号は同事業での各段階（A．登録，B．活動，C．認定，D．更新）を指す．ただし，本研究では特に見られなかったため，更新段階での提案は省いた．

表 8　エコ・スクール推進事業に対する提案事項

A	・実践校になるための条件を緩和する
B	・実践校同士の交流を奨励し，ネットワークを構築する
C	・認定の際に各実践校が提出する活動資料をより効果的なものにする ・認定の基準を明確化するとともに，基準を引き上げ，きわめて優れた活動を実践できた数校程度のみが認定されるような狭き門とする

登録の段階（A）では，どんな学校でも実践校になれるよう，実践校になるための条件を一層，緩和していくべきである．実践校数が増えれば，実践校間の情報交換や交流もより盛んになる．

活動の段階（B）では，担当教諭間のメーリングリストや児童生徒も利用できる電子会議室の開設，複数校の児童生徒がオフラインで交流できる活動の場を設けるなどして，実践校間のネットワークを構築すれば，実践校間の情報交換や交流が盛んになり，また，このようなネットワークを得ること自体が実践校になることの動機付けにもなる．

認定の段階（C）では，認定委員会や連絡協議会の場で各実践校の活動を紹介するための資料の書式などを HP など広報媒体にそのまま載せられるよう，事務局が書式などをあらかじめ決めておけば，実践校側としては認定の申請時に慌ててまとめるということがなくなり，事務局としても HP 更新の労力を軽減することができる．また，実践校数の増加に伴い，連絡協議会など情報交換の場において，各校の活動報告が効果的に行えるような配慮も必要だろう．

認定の基準に関しては，あいまいな認定基準のままで実践校の数だけを増やしたのでは，同推進事業やエコ・スクール活動の目指すところが余計わかりにくくなってしまう恐れがあるだけでなく，実践校にとって認定校となることに価値が見出せない．したがって，エコ・スクール活動および同事業の 4 つの目標にそった具体的かつ客観的な認定基準項目を設け，きわめて優れた活動を実践できた数校のみが認定されるような狭き門とすることを提案する．認定校数を極端に少なくすれば，認定を受けられなかった学校からの不満は少ないはずである．また，認定基準の項目と評価内容および認定結果を HP などで公表しておけば，認定校のステータス向上につながるだけでなく，同推進事業が目指すものがどのような学校であり活動であるのかを明確に示すことにもつながるであろう．

The research on ideal way of eco-schools activity that was based on Europe

～For the Shiga Prefecture eco- schools promotion project～

Atsuko Nakamura　　Ide　labaratory

1. The background

The project that "Shiga Prefecture eco-schools promotion project" has been executed in Shiga Prefecture since 2001. It is a project from which the eco-schools project that had arisen in Europe 1990's was started as a model. It has mainly three points as aims. The first point, children's environmental study must tie from study to the environmental practice activity（lesson and action）. The second, cooperation and the cooperative relationship of the school and the community are made（school and community）.The third, bring up independent of the children. In addition, the project recommend and support schools which works on the activity by the whole school.

Now（the 2005）, elementary and junior high schools of 13 of the Shiga prefecture participate in this project, and the schools work on the activity as an eco-school.

Through several years, the practice school has been increases. As a result, the achievements and problems begin to appear gradually.

2. The purpose of this study

This study has two purposes. The first purpose is to clarify realities, achievements and problems about this project and action. The second purpose is make suggestion for extend good points and resolve bad points.

3. The method of this study

This study was investigated using documents and hearing.

4. The conclusion part1 of this study (realities, results and problems about this project and action)

Table1 and 2 show mainly achievements and problems about this project and action.

Table1: Mainly achievements and problems about this action

achievements	・It came to be able to do the activity that was not able to be done only by the school. ・The concern for the activity of people in the region has risen. ・It related to the improvement of practice and the action power of the member (children) of an environmental group. ・It is an atmosphere-making of the entire school. ・The trait of the school and the child student's conception have been achieved. ・It is sharing of consideration to the activity among teachers.
problems	・It is difficult to be necessary to participate of people in the region. ・It is difficult to build the activity plan that the children thought about into the curriculum during the year of the school. ・It is difficult to work by the entire school. ・Only the charge teacher owes the load.

Table2: Mainly achievements and problems about this project

achievements	・The information exchange and the exchange between the practice schools became active. ・The practice school came to be able to do an environmental enlightening activity to the whole school and the region more effectively. ・Teachers were able to study the process on which it acted.
problems	・The content of the project is incomprehensible. ・The support of the activity is not made enough because there is a limit in the project budget. ・The standard of recognition is not clear. ・There is repetition with other project.

5. The conclusion part2 of this study (suggestion for extend good points and resolve bad points)

The main proposal matter for extend good points and resolve bad points about this action is shown as follows.

- The teacher team that generalizes the activity is made in the school.
- PTA is made the nucleus of the activity.
- Various people in the region are made the center member of the activity.
- The activity idea that the child student conceived is taken into the class by the long range planning.
- An educational theme of the school is made the same as the theme of the eco-school activity.
- The whole school decides the content of the activity on which it works enumerating it in the teacher team.
- It informs the core members of child's idea.
- The activity that the guardian and people in the region can also combine is planned.
- The whole school event is related to the eco-school activity.
- It informs of the content of the activity with newspaper in the region.

The main proposal matter about this project is shown as follows.

- The condition of becoming a practice school is eased.
- Construct the network.
- The recognition standard is clarified. And raise the standard.
- The material needed for recognition is made effective.

目　　次

第一章	序論	1
1-1	研究の背景	1
1-2	研究の目的	1
1-3	研究の意義	1
1-4	調査・研究方法	2
1-5	本論文での言葉の定義	3
	＜参考文献＞	4
第二章	エコ・スクールプロジェクト（事業）およびエコ・スクールについて	5
2-1	欧州におけるエコ・スクール（プロジェクト）について	5
2-1-1	欧州型エコ・スクールプロジェクトの仕組み	5
2-2	日本型エコスクール（事業）について	9
2-2-1	エコスクールパイロットモデル事業	9
2-2-2	日本型エコスクールのさまざまなタイプ	9
2-3	欧州型エコ・スクールと日本型エコスクール	11
	＜参考文献＞	12
第三章	滋賀県エコ・スクール推進事業およびエコ・スクール活動について	13
3-1	滋賀県エコ・スクール推進事業	13
3-1-1	事業の導入目的について	13
3-1-2	滋賀県エコ・スクール推進事業の事務局と業務担当の変遷について	14
3-1-3	滋賀県エコ・スクール推進事業における業務内容について	14
3-2	滋賀県エコ・スクール推進事業参加の登録から認定までの流れについて	16
3-3	滋賀県エコ・スクール推進事業検討段階での議論内容について	21
3-3-1	検討委員会におけるエコ・スクール活動全体に対する意見内容	21
3-3-2	検討委員会におけるエコ・スクール活動を実践する学校に関する意見内容	22
3-3-3	検討委員会におけるエコ・スクール活動での学校と地域との関わりに対する意見内容	23
3-4	欧州型エコ・スクールプロジェクトとの違い	24
3-5	エコ・スクール実践校について	26
	＜参考文献＞	29
第四章	エコ・スクール実践校におけるエコ・スクール活動について	31
4-1	滋賀県甲賀市立油日小学校	31
4-1-1	油日小学校および校区の概要	31
4-1-2	油日小学校でのエコ・スクール活動	32
4-1-3	油日小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ	44
4-2	滋賀県東近江市立御園小学校	45
4-2-1	御園小学校および校区の概要	45
4-2-2	御園小学校でのエコ・スクール活動	45
4-2-3	御園小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ	55
4-3	近江兄弟社学園近江兄弟社小学校	57
4-3-1	近江兄弟社小学校および校区の概要	57
4-3-2	近江兄弟社小学校でのエコ・スクール活動	57

4-3-3　近江兄弟社小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ　68
4-4　滋賀県大津市立逢坂小学校　69
4-4-1　逢坂小学校および校区の概要　69
4-4-2　逢坂小学校でのエコ・スクール活動　69
4-4-3　逢坂小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ　78
4-5　滋賀県安土町立老蘇小学校　79
4-5-1　老蘇小学校および校区の概要　79
4-5-2　老蘇小学校でのエコ・スクール活動　79
4-5-3　老蘇小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ　86
4-6　滋賀県東近江市立能登川南小学校　87
4-6-1　能登川南小学校および校区の概要　87
4-6-2　能登川南小学校でのエコ・スクール活動　87
4-6-3　能登川南小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ　98
4-7　滋賀県高島市立今津中学校　99
4-7-1　今津中学校および校区の概要　99
4-7-2　今津中学校でのエコ・スクール活動　100
4-7-3　今津中学校におけるエコ・スクール活動のまとめ　112
4-8　滋賀県野洲市立野洲中学校　113
4-8-1　野洲中学校および校区の概要　113
4-8-2　野洲中学校でのエコ・スクール活動　114
4-8-3　野洲中学校におけるエコ・スクール活動のまとめ　117
4-9　滋賀県エコ・スクール推進事業による各実践校への支援内容について　118
4-9-1　エコ・スクール推進事業から油日小学校に対して行われた活動支援について　118
4-9-2　エコ・スクール推進事業から御園小学校に対して行われた活動支援について　119
4-9-3　エコ・スクール推進事業から近江兄弟社小学校に対して行われた活動支援について　120
4-9-4　エコ・スクール推進事業から逢坂小学校に対して行われた活動支援について　121
4-9-5　エコ・スクール推進事業から老蘇小学校に対して行われた活動支援について　121
4-9-6　エコ・スクール推進事業から能登川南小学校に対して行われた活動支援について　122
4-9-7　エコ・スクール推進事業から今津中学校に対して行われた活動支援について　123
4-9-8　エコ・スクール推進事業から野洲中学校に対して行われた活動支援について　124
4-9-9　連絡協議会議，認定委員会，その他，事業からの支援内容について　125
4-9-10　実践校に対する事業からの支援内容のまとめと考察　128
4-10　2005 年度新規エコ・スクール実践校について　130
4-10-1　高島市立本庄小学校　130
4-10-2　甲賀市立石部南小学校　131
4-10-3　草津市立笠縫東小学校　132
4-10-4　2005 年度認定委員会について　133
＜参考文献＞　134

第五章　エコ・スクール活動および滋賀県エコ・スクール推進事業に関する成果と課題・問題点　135
5-1　滋賀県エコ・スクール推進事業関係者によって挙げられたエコ・スクール活動および同推進事業に関する成果と課題・問題点について　135
5-1-1　滋賀県エコ・スクール推進事業関係者によって挙げられたエコ・スクール活動に関する成果と課題・問題点　135
5-1-2　滋賀県エコ・スクール推進事業関係者によって挙げられた同推進事業に関する成果と課題・問題点　137
5-1-3　各実践校の自己評価におけるエコ・スクール活動の課題　139
5-2　本研究の調査結果を踏まえたエコ・スクール活動における成果と課題・問題点　143
5-3　本研究の調査結果を踏まえた同推進事業における成果と課題・問題点　158
5-4　エコ・スクール活動および推進事業に関する成果と課題・問題点のまとめ　162
5-4-1　エコ・スクール活動に関する成果と課題・問題点のまとめ　163
5-4-2　滋賀県エコ・スクール推進事業に関する成果と課題・問題点のまとめ　168
＜参考文献＞　172

第六章　滋賀県エコ・スクール推進事業およびエコ・スクール活動の今後の進め方　173
6-1　滋賀県エコ・スクール推進事業の今後の展開の方向性について　173
6-2　エコ・スクール活動に関する考察と提案　177
6-3　滋賀県エコ・スクール推進事業に関する考察と提案　181

第七章　論議　186

謝辞　187

Appendix

図　表　目　次

図 1-1	研究全体のフロー図	2
図 2-1	エコ・スクールプロジェクトの進め方	5
図 2-2	欧州型エコ・スクール活動の 7 つのステップ	6
図 3-1	エコ・スクール活動の流れ	17
図 3-2	滋賀県エコ・スクール推進事業におけるエコ・スクール校認定の仕組み	19
図 3-3	エコ・スクール実践校 13 校（2005 年度現在）の滋賀県内における場所	27
図 4-1	油日小学校エコ・スクール支援委員会の構成（児童を除く）	34
図 4-2	御園小学校エコ・スクール支援委員会の構成（児童を除く）	48
図 4-3	逢坂小学校エコ・スクール支援委員会の構成（児童を除く）	71
図 4-4	老蘇小学校 PTA ビオトープ委員会の構成（児童を除く）	81
図 4-5	能登川南小学校エコ・スクール支援委員会の構成（児童を除く）	89
図 4-6	今津中学校エコ・スクール外部委員会の構成	102
表 2-1	エコ・スクール委員会の設立目的	7
表 2-2	目標と行動計画の例（環境レビューのための小冊子に記載されている例）	7
表 2-3	エコスクールパイロットモデル事業の内容	9
表 2-4	エコスクールの事業タイプ	10
表 2-5	エコスクール整備における重点	10
表 3-1	環境学習における課題とその改善案	13
表 3-2	滋賀県エコ・スクール推進事業の事務局と業務担当の変遷	14
表 3-3	滋賀県エコ・スクール推進事業で事務局が行う業務の内容（2005 年度現在）	15
表 3-4	エコ・スクール活動での各ステップの詳細	18
表 3-5	認定証の交付申請時にエコ・スクール実践校が事務局へ提出するもの	19
表 3-6	エコ・スクール推進事業開始当初に行われた検討委員会での議論	21
表 3-7	検討委員会における事業全体に対する意見	22
表 3-8	検討委員会におけるエコ・スクール活動を実践する学校に関する意見	23
表 3-9	検討委員会におけるエコ・スクール活動での学校と地域との関わりに対する意見	24
表 3-10	欧州（イギリス）と滋賀県でのエコ・スクール活動（プログラム）の相違点	25
表 3-11	欧州（イギリス）と滋賀県でのエコ・スクール事業事務局の違い	25
表 3-12	滋賀県のエコ・スクール実践校（2005 年度現在）	26
表 4-1	油日小学校の児童数と学級数（2005 年 5 月 27 日現在）	31
表 4-2	油日小学校エコ・スクール委員会の概要（2005 年度）	33
表 4-3	油日小学校エコ・スクール支援委員会の構成員（2005 年度）	33
表 4-4	油日小学校エコ・スクール委員会の活動内容（2002～2005 年度）	36
表 4-5	油日小学校エコ・スクール委員会主催の自然観察会の概要（2002～2005 年度）	38
表 4-6	油日小学校エコ・スクール支援委員会の活動内容（2002～2005 年度）	40
表 4-7	エコ・スクール認定申請時のチェックリスト（2003 年度）における△印の項目	41
表 4-8	油日小学校における学校内や地域の自然をいかした環境教育の内容（2005 年度）	42
表 4-9	油日小学校の「学級エコ宣言」（2005 年度）	43

表 4-10　エコ・スクール支援委員会以外の地域との連携（油日小学校，2005 年度）　44
表 4-11　御園小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 7 日現在）　45
表 4-12　御園小学校エコ委員会の概要（2005 年度）　47
表 4-13　御園小学校エコ・スクール支援委員会の構成員（2004 年度）　47
表 4-14　御園小学校エコ・スクール支援委員会メンバー中の地域支援者の変遷　48
表 4-15　御園小学校エコ・スクール支援委員会メンバー（地域支援者）　49
表 4-16　御園小学校エコ・スクール活動テーマとシンボルマーク　50
表 4-17　御園小学校エコ委員会の活動内容（2002～2005 年度）　51
表 4-18　御園小学校エコ・スクール支援委員会の活動内容（2002～2004 年度）　53
表 4-19　エコ・スクール認定申請時のチェックリスト（2004 年度）における△印の項目　54
表 4-20　御園小学校における，せせらぎの森を活用した授業の概要（2005 年度）　55
表 4-21　近江兄弟社小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 1 日現在）　57
表 4-22　近江兄弟社小学校兄弟社村（シンフォニー）プロジェクトチームの概要（2005 年度）　59
表 4-23　近江兄弟社小学校エコ・スクール支援委員会の構成員（2005 年度）　59
表 4-24　近江兄弟社小学校シンフォニー活動の内容（2002 年度）　60
表 4-25　兄弟社村づくりのテーマと村の原案の内容　61
表 4-26　近江兄弟社小学校シンフォニー活動の内容（2003 年度）　62
表 4-27　兄弟社村の原案としてあげられたものの詳細　62
表 4-28　逢坂小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 11 日現在）　69
表 4-29　逢坂小学校環境委員会の概要（2005 年度）　70
表 4-30　逢坂小学校エコ・スクール支援委員会の構成員（2005 年度）　71
表 4-31　逢坂小学校エコ・スクール支援委員会メンバー中の地域支援者の変遷　72
表 4-32　逢坂小学校エコ・スクール支援委員会メンバー（地域支援者）の選任理由　72
表 4-33　逢坂小学校環境委員会の活動内容（2003～2005 年度）　74
表 4-34　逢坂小学校のエコ・スクール活動において 4 年生以上の児童を対象としたもの　75
表 4-35　エコ・スクール認定申請時のチェックリスト（2004 年度）における△，×印の項目　76
表 4-36　逢坂小学校総合的な学習の時間における授業内容（2002～2004 年度）　77
表 4-37　老蘇小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 7 日現在）　79
表 4-38　老蘇小学校環境委員会概要（2005 年度）　80
表 4-39　老蘇小学校 PTA ビオトープ委員会の構成員（2005 年度）　81
表 4-40　老蘇小学校環境委員会の活動年間計画（2005 年度）　82
表 4-41　老蘇小学校 PTA ビオトープ委員会の活動内容（2003～2005 年度）　83
表 4-42　エコ・スクール認定申請時のチェックリスト（2004 年度）における△印の項目　84
表 4-43　老蘇小学校における学校内や地域の自然をいかした環境教育の内容（2005 年度）　85
表 4-44　PTA ビオトープ委員会以外の地域との連携（老蘇小学校，2004 年度）　86
表 4-45　能登川南小学校の児童数と学級数（2005 年 5 月 26 日現在）　87
表 4-46　能登川南小学校エコ・スクール委員会の概要（2005 年度）　88
表 4-47　能登川南小学校エコ・スクール支援委員会の構成員（2005 年度）　89
表 4-48　能登川南小学校エコ・スクール支援委員会メンバー中の地域支援者の変遷　90

表 4-49　能登川南小学校エコ・スクール支援委員会メンバー（地域支援者）の選任理由　91
表 4-50　能登川南小学校エコ・スクール委員会の活動内容（2003 年度）　93
表 4-51　能登川南小学校エコ・スクール委員会の活動内容（2004 年度）　94
表 4-52　能登川南小学校エコ・スクール委員会の活動内容（2005 年度）　95
表 4-53　能登川南小学校エコ・スクール支援委員会の活動内容（2003～2005 年度）　96
表 4-54　エコ・スクール認定申請時のチェックリスト（2004 年度）における△印の項目　97
表 4-55　今津中学校の生徒数と学級数（2005 年 7 月現在）　99
表 4-56　今津中学校エコ・スクール委員会の概要（2005 年度）　101
表 4-57　今津中学校エコ・スクール外部委員会の構成員（2005 年度）　102
表 4-58　今津中学校エコ・スクール外部委員会メンバー（地域支援者）の選任理由　103
表 4-59　今津中学校におけるエコ・スクール活動全体のテーマ　104
表 4-60　今津中学校自然環境ボランティアグループの活動内容（2001 年度 3 学期）　105
表 4-61　今津中学校エコ・スクール委員会の活動内容（2002 年度）　105
表 4-62　今津中学校エコ・スクール委員会の活動内容（2003～2004 年度）　106
表 4-63　各種ボランティアグループで活かされるエコ・スクール委員から出された活動案　108
表 4-64　エコ･スクール認定申請時のチェックリスト（2003 年度）における無記入の項目　109
表 4-65　エコ・スクール委員会で発案された活動を授業等で行っている事例　110
表 4-66　自然体験活動（2002 年度）で行われた各コースの目標と具体的なコース，引率者　111
表 4-67　野洲中学校の児童数と学級数（2005 年度現在）　113
表 4-68　野洲中学校エコ・スクール委員会の概要（2005 年度）　114
表 4-69　野洲中学校における総合学習で行われる環境学習の概要（2003，2004 年度）　116
表 4-70　エコ・スクール推進事業から油日小学校への活動支援の内容　118
表 4-71　エコ・スクール推進事業から御園小学校への活動支援の内容　119
表 4-72　エコ・スクール推進事業から近江兄弟社小学校への活動支援の内容　120
表 4-73　エコ・スクール推進事業から逢坂小学校への活動支援の内容　121
表 4-74　エコ・スクール推進事業から老蘇小学校への活動支援の内容　122
表 4-75　エコ・スクール推進事業から能登川南小学校への活動支援の内容　123
表 4-76　エコ・スクール推進事業から今津中学校への活動支援の内容　124
表 4-77　エコ・スクール推進事業から野洲中学校への活動支援の内容　125
表 4-78　エコ・スクール実践校間連絡協議会儀（2002～2004 年度）の概要　126
表 4-79　認定委員会（2002～2004 年度）の概要　127
表 4-80　滋賀県県民環境学習のつどい（2004 年度までの滋賀県環境学習フェア）　128
表 4-81　本庄小学校の児童数と学級数（2005 年度 7 月 15 日現在）　130
表 4-82　石部南小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 23 日現在）　131
表 4-83　笠縫東小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 20 日現在）　132
表 4-84　認定委員会（2005 年度）の概要　133
表 5-1　エコ･スクール活動に関する成果と課題や問題点　136
表 5-2　エコ・スクール推進事業に関する成果と課題や問題点　138

表 5-3　活動を評価するチェックリストに環境グループが低い評価をつけた項目　140
表 5-4　活動を評価するチェックリストにエコ・スクール委員が低い評価をつけた項目　142
表 5-5　エコ・スクール活動を始める際に活動と地域との関わりが見受けられる事例　144
表 5-6　エコ・スクール活動を始める際に子どもの自主性を育成することに関わる事例　146
表 5-7　エコ・スクール活動を始める際に活動と全校との関わりが見受けられる事例　147
表 5-8　活動のテーマと計画立案時において授業と活動との関わりが見受けられる事例　147
表 5-9　活動のテーマと計画立案時において活動と地域との関わりが見受けられる事例　148
表 5-10　活動のテーマと計画立案時において子どもの自主性を育成することに関わる事例　149
表 5-11　活動のテーマと計画立案時において活動と全校との関わりが見受けられる事例　150
表 5-12　活動実践時において授業と活動との関わりが見受けられる事例　151
表 5-13　活動実践時において活動と地域との関わりが見受けられる事例　152
表 5-14　活動実践時において子どもの自主性を育成することに関わる事例　153
表 5-15　活動実践時において活動と全校との関わりが見受けられる事例　154
表 5-16　活動のふりかえり時において活動と授業との関わりが見受けられる事例　155
表 5-17　活動のふりかえり時において活動と地域との関わりが見受けられる事例　156
表 5-18　活動のふりかえり時において子どもの自主性を育成することに関わる事例　157
表 5-19　活動のふりかえり時において活動と全校との関わりが見受けられる事例　158
表 5-20　事業の登録段階において事業事務局および実践校が行うこと　158
表 5-21　事業事務局の募集活動と実践校の登録のきっかけ　159
表 5-22　事業の活動段階において，事業事務局および実践校が行うこと　160
表 5-23　事業の認定段階において，事業事務局および実践校が行うこと　161
表 5-24　事業の更新段階において，事業事務局および実践校が行うこと　162
表 5-25　エコ・スクール活動による成果　163
表 5-26　エコ・スクール活動によって生じた課題・問題点　164
表 5-27　チェックリストから見えてくるエコ・スクール活動の課題・問題点　165
表 5-28　環境グループを児童生徒会組織の一委員会した場合の特徴　166
表 5-29　環境グループを縦割り授業のリーダー組織にした場合の特徴　166
表 5-30　環境グループを任意のグループとして設立した場合の特徴　167
表 5-31　エコ・スクール委員会が学校教諭と保護者で構成される場合の特徴　167
表 5-32　エコ・スクール委員会が学校教諭と保護者，地域支援者で構成される場合の特徴　168
表 5-33　エコ・スクール推進事業に関する成果と課題や問題点　169
表 5-34　環境教育モデル校の設置事業とエコ・スクール推進事業との比較　171

写真 3-1　エコ・スクールフラッグ　16
写真 3-2　エコ・スクール認定証　20
写真 4-1　油日小学校の活動シンボルマーク　35
写真 4-2　学校ビオトープで撮った写真の展示風景　37
写真 4-3　油日小学校学級エコ宣言の展示風景　43
写真 4-4　御園小学校活動シンボルマークの「キノキノ君」と「ハチ君」　50
写真 4-5　御園小学校みそのミュージアム　52
写真 4-6　児童たちが「ひみつの基地」の外壁に絵を描いている様子　63
写真 4-7　児童たちが描いた「ひみつの基地」の壁面画　64
写真 4-8　記念樹植樹の様子　65
写真 4-9　記念樹植樹地付近に設けられた道と児童の絵を描いたテストピース　65
写真 4-10　能登川南小学校シンボルマーク　92

第一章 序論

1-1　研究の背景

滋賀県では 2001 年より「滋賀県エコ・スクール推進事業」という事業が実施されている[1)]．エコ・スクールとは，校内や周辺地域の環境を良くするための活動（エコ・スクール活動）を，児童が主体となり行っている学校のことを言う．

同推進事業は，このような学校を支援し，同活動を行った学校をエコ・スクールとして認定するものである．滋賀県の同事業は，1990 年代初頭から欧州で始まったエコ・スクールプロジェクトをモデルとしている．エコ・スクールプロジェクトは，現在では欧州に限らず，中国やオーストラリアなど世界各国で実施されている[2)]．しかし，日本において欧州型のエコ・スクールプロジェクトを取り入れたのは，滋賀県が初めてである[3)]．

2004 年度時点で，滋賀県内の 8 つの小中学校が同推進事業に参加し，エコ・スクール実践校として活動している. 実践校のうち, 2004 年 3 月には 4 校が, 2005 年 3 月には 5 校が, それぞれエコ・スクールとして認定された．さらに，2005 年度からは新たに 5 つの小中学校が実践校に加わっている[4)]．

このような滋賀県エコ・スクール推進事業であるが，開始から数年を経て，成果も徐々に現れてきているが，同時に課題や問題点も明らかになりつつある．

1-2　研究の目的

本研究の目的は, 滋賀県のエコ・スクール実践校におけるエコ・スクール活動の実態と, 実践校になったことによる成果や課題，問題点を明らかにし，本研究で明らかになったことをもとに，エコ・スクール活動およびエコ・スクール推進事業の成果をさらに伸ばし，課題や問題点を解決していくための方策を考察して提案することである．

なお，本研究における成果とは，エコ・スクール活動という仕組みを取り入れたことによる成果，また，同推進事業に登録したことによる成果を指すこととする．

1-3　研究の意義

本研究の結果は，滋賀県内小中学校におけるエコ・スクール活動をさらに推進させることに役立つとともに，今後，滋賀県のようなエコ・スクール推進事業を導入する他都道府県の参考にもなると考えられる．

1-4　調査・研究方法

本研究の研究フロー図を図 1-1 に示す．図に示すように，本研究では，以下の手順で調査・研究を行う．

1）欧州型エコ・スクールプロジェクトと日本におけるエコスクールに関する文献調査から，欧州型エコ・スクールプロジェクトの特徴を整理する．
2）滋賀県エコ・スクール推進事業の事業内容および同推進事業で推奨されているエコ・スクール活動の概要を同推進事業関係資料からまとめる
3）各エコ・スクール実践校で行われている活動への参加や，各実践校の活動担当教諭に対するヒアリング調査，また，推進事業関係資料の文献調査から，各実践校でのエコ・スクール活動推進組織と同活動の実態を明らかにする．
4）3）の結果をもとに，事業の目的に沿ってエコ・スクール活動および同推進事業による成果と課題・問題点を明らかにする．
5）3）および 4）の結果をもとに，エコ・スクール活動および同推進事業の成果をさらに伸ばし，課題や問題点を解決していくための方策を考察して提案する

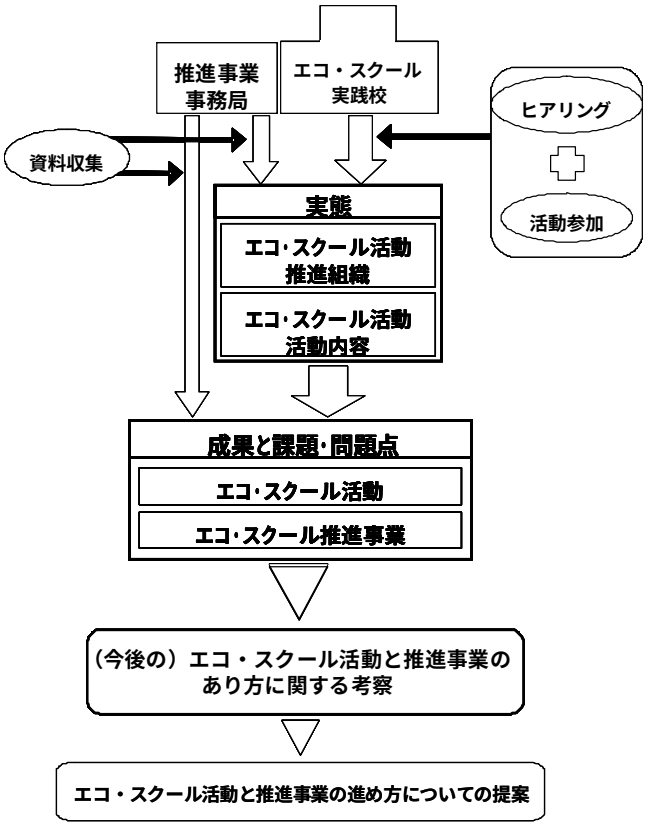

図 1-1　研究全体のフロー図

1-5　本論文での言葉の定義

これ以降の本論文において用いる言葉を次のように定義する.

□エコ・スクールプロジェクト（事業）：
エコ・スクールの普及を目指し，各学校におけるエコ・スクール活動を支援し，優れたエコ・スクール実践校（後述する）を「エコ・スクール」として認定する事業.
日本で一般的に言われている日本型エコスクール（第二章で述べる）と区別するため，本研究で対象とする滋賀県エコ・スクール推進事業のような欧州型エコ・スクール（プロジェクト）は，「エコ」と「スクール」の間に「・」を入れて表記する.

□エコ・スクール事務局：
エコ・スクールプロジェクト（エコ・スクール推進事業）を進めていく事務局

□エコ・スクール：
児童生徒が主体となり，地域を巻き込み，全校を挙げて，環境保全の実践活動に取り組んでいる学校.

□エコ・スクール活動：
各学校におけるエコ・スクールを目指した活動（学校現場における活動）.
狭義には，後述するエコ・スクール実践校において実践される活動.

□登録：
エコ・スクールを目指す学校は推進事業に登録して，エコ・スクール実践校とならなければならない.

□エコ・スクール実践校：
エコ・スクール推進事業に登録し，エコ・スクール活動を実践している学校.
認定校・非認定校を含む.

□エコ・スクール認定委員会
エコ・スクール実践校での活動への評価および活動に対するアドバイスを行い，優れた実践校をエコ・スクール認定校として知事に推薦する委員会．年 2 回の開催.

□エコ・スクール認定校：

エコ・スクール認定委員会の推薦によって滋賀県からエコ・スクールとして，認定された実践校.

＜参考文献＞

1）滋賀県：琵琶湖環境部 エコライフ推進課 エコ・スクール活動の支援
エコ・スクールプロジェクトのはじまり
<http://www.pref.shiga.jp/kakuka/d/ecolife/school/project_1.html>，2006-01-14

2）市川智史：日本におけるエコ・スクールの展開に関する研究，(課題番号：10680190）平成 10～11 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書，p.5，滋賀大学教育学部環境教育湖沼実習センター（2000）

3）滋賀県 環境政策課：エコ・スクールへのとびら，p.1，滋賀県（2002）

4）滋賀県 エコライフ推進課 滋賀県環境学習支援センター：滋賀県環境学習支援センター 第 2 回 企画運営委員会 会議次第，p.7，滋賀県（2005）

第二章　エコ・スクールプロジェクト（事業）およびエコ・スクールについて

エコスクールを推進する事業（プロジェクト）は 1990 年代初頭に欧州で始まった[1)]．同プロジェクトは，学校のカリキュラムの中で身につける環境に関する知識を，学校と地域の中での環境行動へと推し進めていくことをねらいとしている[2)]．日本にもエコスクールというプロジェトはあるが，同じ「エコスクール」という名前であっても，欧州と日本とでは内容が大きく異なる[1)].

本章では，欧州と日本におけるエコスクール（プロジェクト）について説明する．なお，以下，欧州型のエコスクールを，「エコ」と「スクール」の間に「・」を入れて「エコ・スクール」，日本型のエコスクールを「エコスクール」と表記して，区別する．

2-1　欧州におけるエコ・スクール（プロジェクト）について[2)]

欧州におけるエコ・スクールプロジェクトは，デンマークでグリーン・スクール・プロジェクトとしてスタートしたものが始まりとされる．同プロジェクトは，その後 1993 年より FEE（Foundation for Environmental Education（当時のヨーロッパ環境教育財団））によってエコ・スクールプロジェクトとして，まず欧州で推進され，その後，各国に広まっていった．現在では，欧州のみならず中国やオーストラリアなどでも実施されている．

2-1-1　欧州型エコ・スクールプロジェクトの仕組み

欧州型エコ・スクールプロジェクトの進め方は，各国によって様々であるが，ここでは標準とされているイギリスでの進め方を例に説明する．

イギリスのエコ・スクールプロジェクトは 1994 年に開始された．Tidy Britain Group という NGO が事務局を務めている．同プロジェクトは，図 2-1 に示すような A から D の 4 段階で進んでいく．

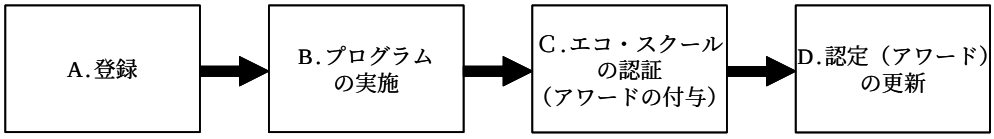

図 2-1　エコ・スクールプロジェクトの進め方[2)]

A．登録

エコ・スクールプロジェクトに興味を持った学校の教員は，まず，事務局に連絡を取り，同プロジェクトに関するハンドブックを入手する．ハンドブックを読んで，プロジェクトに参加しよう決心すると，附属の登録用紙に必要事項を記入の上，事務局に送付する．登録されると，登録証が事務局から送られてくる．しかし，この時点では単なる登録校であって，エコ・スクールではない．

B．プログラムの実施

各校における活動は，以下の 7 つのステップ（一連の流れを図 2-2 に示す）を踏んで進められていく．このような各校におけるエコ・スクールを目指した活動とそのプロセスを本研究では「エコ・スクール活動」と呼ぶ．同活動は年度単位で行われる．

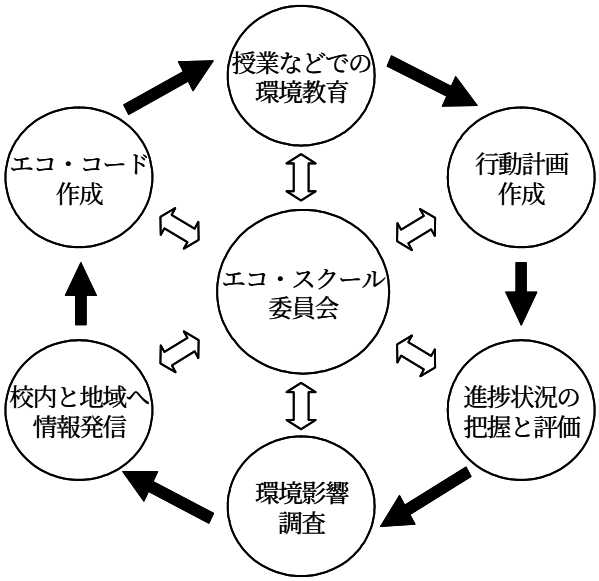

図 2-2　欧州型エコ・スクール活動の 7 つのステップ[4)5)]

i）エコ・スクール委員会（Eco-School Committee）の設立

エコ・スクールプロジェクトに登録した学校は，まず，子どもたちの代表と教員，保護者，地域の人々で構成される「エコ・スクール委員会」を設立する．同委員会の設立目的を表 2-1 に示す．同委員会が中心となって（各活動に同委員会がどの程度，関与するかは，各学校の判断に任される）各校のエコ・スクール活動を進めていく．

同委員会のうち，担当教員と児童生徒による話し合いは週に 1 回（もしくは 2 週間に 1

回程度）もたれる．大人の委員も含めた全体会議は 1 学期につき 1，2 回の開催である．

表 2-1　エコ・スクール委員会の設立目的[2)]

1.　他の 6 つのステップを確実に実施すること．
2.　子どもの責任感を育て，自分たちのアイディアには価値があることを理解させること．
3.　学校の構成員全員が，互いの見方を知り合えるようにするとともに，影響を及ぼしあえるようにすること．
4.　プロジェクトを確実に継続していくこと．
5.　学校運営と地域をつなぐこと．

ii）環境レビュー（Environmental Review）の実施

環境レビューのために事務局から小冊子が提供される．同冊子をもとに，児童生徒が中心となって学校の環境影響を調査し，現状の課題点を把握する．同冊子には，水やゴミなど学校から出る環境影響を調べるためのチェックリストが載っている．

iii）行動計画（Action Plan）を立てる

環境レビューで明らかになった問題点や課題を解決するため，具体的な目標と行動の計画を立てる．計画では，活動期間や数値的目標，担当者（教員，学年など）といった具体的な内容が定められる．その際，一部の活動を学年の教科の中で行うなど，授業と関連させることが推奨される（表 2-2 参照）．

表 2-2　目標と行動計画の例（環境レビューのための小冊子に記載されている例）[2)]

ゴール：7 月までに学校で売られているすべての缶をリサイクルする． ステップ：1 月までに 50%をリサイクルする．4 月までに 75%をリサイクルする．		
時期	責任を持つ人やグループ	行動
9 月	教員 A	誰が缶を捨てるのか見つける．
10 月	9 学年の数学	缶の数を継続的に調べる方法を考え出す．
10 月	10 学年の英語	児童生徒にとって最も適切なリサイクル箱の置き場所を決めるための調査を行う．
11 月	教員 B	リサイクル箱を設置する．
11 月	10 学年の技術	すべての児童生徒, 教員に対する広報を考え, 実施する．
1 月	9 学年の数学	リサイクル率を計算し，結果を掲示板で公表する．
1 月	エコ・スクール委員会	到達目標が達成されていない場合，行動計画を修正する．

iv）進捗状況の把握と評価（Monitoring and Evaluation）を行う

行動計画を立てる際に，進捗状況の把握や評価を行う時期と担当者（グループ）も決めておき，活動状況を把握，評価するとともに，必要があれば行動計画の修正を行う．

v）授業等での環境教育（Curriculum Work）

行動計画と授業で行う環境教育とが関連しあうよう，考慮する．エコ・スクールプロジェクトのハンドブックによると,「エコ・スクール活動の根底にある原則は，授業で学習している環境に関する内容が，学校全体の運営方法に影響を及ぼすべきである」と記載されている．

vi）学校と地域への広報と参加促進（Informing and Involving）を行う

学校全体や地域に対し，活動の広報や宣伝および活動への呼びかけを継続的に行う．

vii）エコ・コード（Eco-code）の作成

各学校の環境保全活動の目標を表すエコ・コード（環境に関する標語の様なもの）を作成する．エコ・コードは，学校だけでなく，地域にも PR できるようなものにする．

C．エコ・スクールの認定（アワードの付与）

一連のエコ・スクール活動を経た学校は，あらかじめ提示されている質問項目に対する回答と活動報告資料を事務局に提出し，アワード（認証）の申請を行う．同申請を受け取った事務局は，各校の地域の人々を評価委員（ローカル・アセッサー）に任命し，同委員が各校の活動を評価する．事務局は，同委員からのコメントを参考にしてアワードの付与を決定する．アワードを受けた学校には，エコ・スクールとして認証されたことを示す「緑の旗（グリーンフラッグ）」と認定証，ステッカーなどが授与される．なお，登録から申請までの期間は特に定められていない．

D．認定（アワード）の更新

エコ・スクールの認定（アワード）は 2 年に 1 回更新しなければならない．更新しなければ，エコ・スクールとしての認証は取り消され,「緑の旗」も返却しなければならない．

2-2　日本型エコスクール（事業）について

日本におけるエコスクール事業のはじまりとしては, 日本建築学会が 1993～1994 年にかけて文部省委託調査として「環境を考慮した学校施設（エコスクール）の在り方に関する調査研究」を行っている．この結果を受け，1997 年に文部省と通産省の共同のもと「環境を考慮した学校施設（エコスクール）の整備推進に関するパイロットモデル事業」がはじまった[6)]．当初，同事業は文部省と通産省の事業であったが，2005 年の時点では，文部科学省，農林水産省，経済産業省，環境省の 4 省庁の共同事業となっている[7)].

2-2-1　エコスクールパイロットモデル事業[7)]

同事業は，都道府県や市町村が事業主体となり，公立学校の校舎等を環境に配慮しながら新増築もしくは改築する際に掛かる経費等を支援するものである．毎年 1 月下旬頃に各都道府県教育委員会を通じて公募がある．公立学校校舎等の新築・改築を希望する者（各都道府県市町村）は事業事務局に事業の計画書を提出する[8)]．提出された計画書をもとに文部科学省，農林水産省，経済産業省，環境省の 4 省が協議を行い，事業実施対象校を決定する[8)]．選ばれた対象校は増築・改築に関する環境配慮の内容によって，表 2-3 のような支援が各省より受けられる．

表 2-3　エコスクールパイロットモデル事業の内容[7)]

文部科学省	○調査研究経費負担 ○施設整備負担 （新増築･･･費用の 1/2　　改築，大規模改造･･･費用の 1/3）
農林水産省	○地域材の導入に関する支援 （木造公共施設整備のうち学校関連施設整備･･･交付率：1/2 以内）
経済産業省	○太陽光発電その他，新エネルギーの導入に関する支援 （太陽光発電新技術等フィールドテスト事業･･･負担割合：1/2, 地域新エネルギー導入促進事業･･･補助率：1/2 以内　　）
環境省	○地球温暖化対策 （地球温暖化を防ぐ学校エコ改修事業･･･補助率：1/2, 学校への燃料電池導入事業･･･補助率：1/2　　）

2-2-2　日本型エコスクールのさまざまなタイプ

同事業におけるエコスクールとは，環境に配慮した学校の施設建物を指す．このような施設建物には表 2-4 に示すような種類がある．

表 2-4　エコスクールの事業タイプ [7)]

太陽光発電型		屋上・屋根等に太陽電池を設置し，発電した電力を活用.
太陽熱利用型		屋上等に太陽集熱板を設置し，熱を，暖房，給湯，プールの加熱等に利用する.
その他 新エネルギー 活用型	風力	屋上等に風車を設置し，発電した電力を活用.
	地中熱	地中に埋設した換気用チューブに室内空気を循環させ熱交換する.
	燃料電池	LP ガス等から水素を取出し，空気中の酸素と化学反応させ，水が出来る過程で発生する電気を利用.
省エネルギー 省資源型	断熱化	複層ガラスや二重サッシ等を利用.
	日除け	庇，ルーバー，バルコニー等を設ける.
	省エネ型設備	省エネルギー型の照明器具や空調設備を導入する.
	雨水利用	建物の屋根から集めた雨水を貯水槽に貯め，ろ過処理をしてトイレの洗浄水や校庭の散水に利用.
	排水再利用	施設内で発生した排水をろ過処理して，トイレの洗浄水などに利用.
自然共生型	建物緑化	建物の壁面や屋上の緑化を行う.
	屋外緑化	校庭を芝生化，ビオトープの設置.
木材利用型	地域材等の 利用	内装等を木質化.
資源 リサイクル型	リサイクル建材の活用	廃棄材を再利用して作られた建材を利用.
	生ゴミ処理 設備	給食の残飯の生ゴミを堆肥化したり，水にして排水し，ゴミを減らす.
その他	自然採光	トップライト，ハイサイドライトやライトシェルフを利用し，自然光を採り入れる.
	自然換気	吹き抜け等を利用し自然換気を行う.

日本型エコスクールにはさまざまなタイプがある．しかし，事業タイプに関わらず，日本型エコスクールでは表 2-5 に示す 3 点に留意することが求められている．

表 2-5　エコスクール整備における重点[9)]

1. 施設面：環境負荷の低減を目指して設計，建設がなされる施設であること.
2. 運営面：環境負荷の低減の目的に沿った運営，維持管理がなされる施設であること.
3. 教育面：環境教育にも活用されることが可能な施設であること.

2-3　欧州型エコ・スクールと日本型エコスクール

欧州型エコ・スクールは，児童生徒の主体性や認証取得までの取り組みやプロセスを重視した活動を実施している学校を指す[2)]．一方，日本型エコスクールでは，新増築もしくは改築する際に，その施設建物が建設される時から解体される時までに生じる環境影響を軽減するよう配慮されている学校を指すのが一般的である[7)]．

本研究で対象とする滋賀県のエコ・スクール推進事業は，後述するように，欧州型エコ・スクールプロジェクトを参考に，同プロジェクトを初めて日本に導入したものである[10)]．

＜参考文献＞

1）市川智史：日本におけるエコ・スクールの展開に関する研究，(課題番号：10680190) 平成 10～11 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書，p.5，滋賀大学教育学部環境教育湖沼実習センター（2000）

2）市川智史：日本におけるエコ・スクールの展開に関する研究，(課題番号：10680190) 平成 10～11 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書，pp.5-18，滋賀大学教育学部環境教育湖沼実習センター（2000）

3）教育新聞，1998-4-16

4）三重県：三重の環境 海外の子供達のエコ活動だよ～（学校版 ISO）
<http://www.eco.pref.mie.jp/forum/center/eco/mijika/kaigai/>，2006-01-14

5）FEE：Eco-School
<http://www.eco-schools.org/>，2005-12-27

6）市川智史：日本におけるエコ・スクールの展開に関する研究，(課題番号：10680190) 平成 10～11 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書，p.19，滋賀大学教育学部環境教育湖沼実習センター（2000）

7）文部科学省：文教施設施策（公立学校の施設整備）
環境を考慮した学校施設（エコスクール）の整備推進－環境にやさしい学校施設－
<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyosei/syuppan/05063001.pdf>，2006-01-10

8）文部科学省：文教施設施策（公立学校の施設整備） 実務 Q&A
<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyosei/zitu_qa.htm#q02>，2006-01-14

9）文部科学省：平成 13 年度 環境を考慮した学校施設（エコスクール）の現状と今後の推進に向けて 第 2 編エコスクールの計画－エコスクールの設計コンセプト－
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/006/toushin/020302/f.htm>，2006-01-10

10）滋賀県 環境政策課：エコ・スクールへのとびら，p.1，滋賀県（2002）

第三章　滋賀県エコ・スクール推進事業およびエコ・スクール活動について

滋賀県では 2001 年度から，滋賀県エコ・スクール推進事業を実施している[1)]．同推進事業は前章でも述べたように欧州でのエコ・スクールプロジェクトを参考に始められたものである．

本章では, 同推進事業の事業目的と 2001～2005 年度までの同推進事業事務局の変遷と業務内容を述べたあとに，各実践校が行う，同推進事業参加の登録から認定までの流れ（欧州を参考にしたもの）と，同推進事業開始当時（エコ・スクール活動および事業についての検討段階時）に関係者が事業およびエコ・スクール活動に関して議論していた内容，欧州型エコ・スクールプロジェクトとの違いについて述べる．

3-1　滋賀県エコ・スクール推進事業

3-1-1　事業の導入目的について[1)]

滋賀県では，1996 年 3 月に「滋賀県環境基本条例」が施行された．同条例では，県民による主体的な環境保全活動を意味する「環境自治」の推進を謳っている．この環境自治を進めるために重要となる環境学習について同県の関連部局と関係者によって検討がなされた結果，表 3-1 に示すような現状の課題と改善案がまとめられた．

表3-1　環境学習における課題とその改善案[1)]

	環境学習における現状課題	改善案
1	環境学習によって，環境に対する「関心をもつこと」「考え・理解を深めること」はできているが，「自ら課題に気づき・行動すること」まで至っていない．	「体験を学ぶ」のではなく「体験から学ぶ」ことができるような環境学習プログラムが必要．
2	体験を通じた学習の機会と場を子どもに提供する際，学校と保護者・地域住民が連携・協力する体制に整っていない．	地域の中で体験活動の機会や場を提供するための支援者ネットワークをつくっていく必要がある．
3	「環境自治」を継続して実施する力を高めていきたい．	子どもたちが，主体的に学べる体験型環境学習プログラムを提供していくことが必要．

滋賀県エコ・スクール推進事業は，表 3-1 に示した環境学習の現状課題を解決するために導入された事業である．このため，同推進事業は「学習から実践活動へ結びつけること」「学校と地域との連携・協力体制をつくること」「児童生徒の自主性を育成すること」の 3 点を主な目的として，県内の小中学校におけるエコ・スクール活動の普及を目指している．

3-1-2　滋賀県エコ・スクール推進事業の事務局と業務担当の変遷について[2)3)4)]

滋賀県エコ・スクール推進事業は，2001～2004 年度までの間，滋賀県（2001，2002 年度：環境政策課，2003，2004 年度：エコライフ推進課）が事務局となり，また，実際の業務は滋賀県から委託を受けた環境レイカーズという（近江八幡市を拠点とする）環境教育 NPO によって実施されてきた．しかし，滋賀県が滋賀県環境学習支援センターを新たに設置した 2005 年度からは，事業の業務に関する NPO への委託がなくなり，同支援センターが事業の事務局および業務を担当している（表 3-2 参照）．同支援センターは，滋賀県エコライフ推進課の分室であり，環境学習に取り組む人や団体等とのネットワークづくりや，また，環境学習プログラムの検討・普及，環境学習の企画や実践を行う人の育成など，滋賀県における環境学習の支援を目的として設立された組織である．

表 3-2　滋賀県エコ・スクール推進事業の事務局と業務担当の変遷

<table>
<tr><th>年度</th><th>事務局</th><th>業務担当</th></tr>
<tr><td>2001</td><td rowspan="2">環境政策課（現エコライフ推進課）</td><td rowspan="4">環境レイカーズ（NPO）</td></tr>
<tr><td>2002</td></tr>
<tr><td>2003</td><td rowspan="2">エコライフ推進課</td></tr>
<tr><td>2004</td></tr>
<tr><td>2005</td><td colspan="2">滋賀県環境学習支援センター</td></tr>
</table>

3-1-3　滋賀県エコ・スクール推進事業における業務内容について

滋賀県エコ・スクール推進事業では，表 3-3 に示すような業務を同推進事業事務局（2001～2004 年度までは環境レイカーズも含める）が行う．同推進事業が開始された 2001～2005 年度までの実践校に対する支援内容については，第四章の中で述べる．

なお，事業を開始した 2001 年度には，実践校を募集するために，エコ・スクール活動の一連の流れや同推進事業の内容を記したエコ・スクールハンドブックを作成し，滋賀県内の全ての小中学校に配布している．

表 3-3　滋賀県エコ・スクール推進事業で事務局が行う業務の内容（2005 年度現在）[5)]

	対象	回数	支援内容
実践校への支援業務	新規実践校	―	講師派遣・・・3 回／校・年. 滋賀県環境学習推進員による支援.
	継続実践校	―	滋賀県環境学習推進員による支援.
認定委員会の開催 （認定委員 8 名）	認定校を目指す実践校	2 回/年	事務局から任命されたエコ・スクール認定委員が，実践校におけるエコ・スクール活動の内容を把握，活動への助言を行う. エコ・スクールの認定申請を出した実践校に対しては，認定審査を行う. また，エコ・スクール推進事業の改善についても議論する.
実践校連絡会議の開催	実践校全て	1 回/年	主にエコ・スクール実践校同士の交流を図るため，実践校における担当教諭が一堂に集まり，各実践校でのエコ・スクール活動に関する現状と課題などについて意見交換を行う.
エコ･スクール旗の交付	実践校全て	―	エコ・スクールの旗を交付.
認定証の交付	認定校	―	「エコ・スクール認定証」の交付.
セミナーの開催	PTA や NPO, 事業所等，エコ・スクールに関心のある教員等	1 回/年	エコ・スクール活動の紹介を行うセミナーの開催.

3-2　滋賀県エコ・スクール推進事業参加の登録から認定までの流れについて[6)7)]

欧州型エコ・スクールプロジェクトには，前章 2-1 で述べたように，「登録」「プログラムの実施」「エコ・スクールの認定（アワードの授与）」「認定（アワード）の更新」の 4 つの段階がある．滋賀県エコ・スクール推進事業も，基本的に同じ 4 つの段階をもつ．エコ・スクール実践校は，同事業の参加から認定まで，次に示す A，B，C，D の順に手続きや活動を行っていく．

なお，B の段階で述べるのが，エコ・スクール実践校で行われるエコ・スクール活動の内容である．

A．滋賀県エコ・スクール推進事業への参加登録

滋賀県エコ・スクール推進事業に参加し，エコ・スクール活動に取り組もうと思った学校は，「エコ・スクールプロジェクト登録書」を事務局に提出する．登録を済ませると，エコ・スクール実践校であることを示す旗（エコ・スクールフラッグ（写真 3-1））が事務局から各校に届けられる．各実践校では，この旗を児童生徒の目にふれる場所に掲げることになっている．

写真 3-1　エコ・スクールフラッグ

B．エコ・スクール活動の実施

エコ・スクール活動には，図 3-1 に示す 4 つのステップ（図 3-1 中の①～④）がある．これらのステップに従って各実践校は同活動を進めていく．なお，同活動では，一連の活動を行う際に，授業などで行う環境学習や，地域との関わりをもたせることを推奨している（図 3-1 中の　参照）．

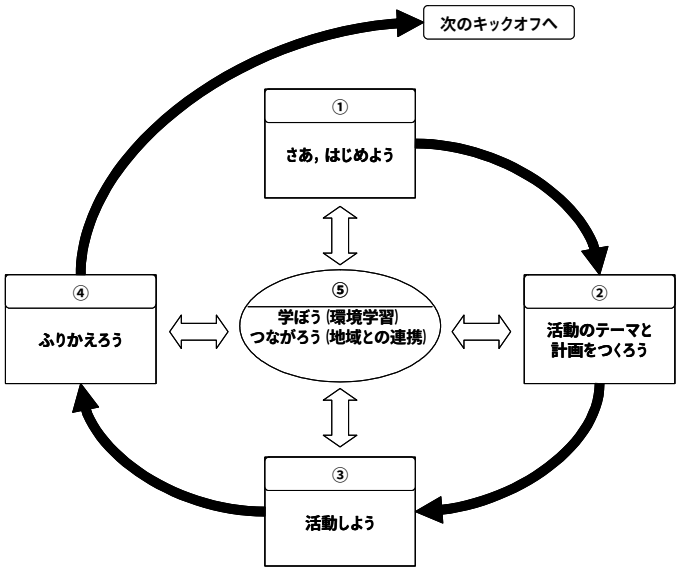

図 3-1　エコ・スクール活動の流れ

エコ・スクール活動での各ステップの詳細を表 3-4 に示す．

表 3-4　エコ・スクール活動での各ステップの詳細

<table>
<tr><td rowspan="3">①さあ，はじめよう</td><td colspan="2">キックオフ宣言</td><td>学校長が児童生徒，先生，保護者などに対して開始の宣言を行う．
エコ・スクール活動は，全校で取り組むものなので，学校の責任者である学校長の意思決定が重要．</td></tr>
<tr><td rowspan="2">活動推進組織を作る</td><td>環境グループ</td><td>活動の中心を担う児童生徒と担当教諭で構成．
メンバー選定方法や形式，名称等は自由．</td></tr>
<tr><td>エコ・スクール委員会</td><td>児童・教諭（学校長を含む）・保護者・地域の 4 者が参加する組織をつくる．
会議は必要に応じて適宜開催（1 学期に 1 回程度）．</td></tr>
<tr><td rowspan="4">②活動のテーマと計画をつくろう</td><td rowspan="2">活動のテーマ作り</td><td>目標づくり</td><td>自分たちのエコ・スクール像(イメージ)を描き，目標をつくる．共有化していくことが大切．</td></tr>
<tr><td>テーマづくり</td><td>環境グループの児童生徒がリーダーシップをとり，活動の具体的なテーマ(課題)を定める．
自分たちの学校や校区内の地域を見直す（環境探検チェックプログラム）ことが有効．</td></tr>
<tr><td colspan="2">活動の計画</td><td>実施するための活動計画を立てる．
計画では，できるだけ，いつ，どこで，誰が，何をするか，どこまでやるかを明確にする．
また，活動が単に無償労働にならないよう，学び(授業などでの環境学習)と連携させることが大切．</td></tr>
<tr><td colspan="2">キャッチフレーズ，シンボルマークづくり</td><td>合い言葉となるようなキャッチフレーズやシンボルマークがある方が，活動の励みになる．
キャッチフレーズやシンボルマークをつくることが，エコ・スクールのイメージづくりや活動のテーマづくりにつながることもあると考えられる．</td></tr>
<tr><td rowspan="2">③活動しよう</td><td colspan="2">活動計画の実践</td><td>全ての児童生徒が，発達段階や興味関心，個性(特徴)に応じて活動に参加. 活動の状況に応じて，適切な時間を確保．</td></tr>
<tr><td colspan="2">活動の状況把握</td><td>必要に応じ適宜計画をチェックし，修正・変更．
その際，児童生徒の気づきや学びが損なわれないこと．</td></tr>
<tr><td rowspan="2">④ふりかえろう</td><td colspan="2">活動のふりかえり
成果の確認</td><td>児童生徒が自分たちの活動，活動による成果を確認するために行う．
成果の確認と合わせて，壁新聞，作文，HP などを作ってみる．</td></tr>
<tr><td colspan="2">成果の発表</td><td>活動の成果物を学校全体や保護者，地域の人たちなどに公表する．
また，認定証の申請を行う．</td></tr>
<tr><td rowspan="2">⑤学ぼう，つながろう</td><td colspan="2">授業などでの環境学習</td><td>活動テーマに関連した学習を授業などで行う．</td></tr>
<tr><td colspan="2">保護者や地域との連携</td><td>児童生徒の活動計画や活動内容，あるいは進み具合，成果などを保護者や地域へ発信し，地域の人たちの参加を促し，連携を深める．</td></tr>
</table>

C．認定証の交付申請と認定について

一連の活動を経た実践校は，事務局に対して認定証の交付申請を行う．認定を申請する実践校が申請時に提出するものを表 3-5 に示す（チェックリストは APPENDIX 2 に掲載）．

表 3-5　認定証の交付申請時にエコ・スクール実践校が事務局へ提出するもの

	提出物	内容
1	活動計画書	登録書を含む．活動の変更や修正があれば，計画変更書も提出．
2	活動成果物	壁新聞など，活動の内容や成果がわかるもの．
3	感想文	児童生徒による環境グループメンバー数人分． A4 版原稿用紙 1 枚程度．
4	一言寄せ書き	エコ・スクール委員会メンバーによる一言寄せ書き （所定の用紙に記入）．
5	チェックリスト （APPENDIX 2 参照）	児童生徒を中心としたエコ・スクール活動をふりかえるためのチェック項目をまとめたもの．同活動の各ステップにそって，チェック項目が設けてあり，活動の目的である「子どもの自主的な取り組みを行うこと」や「学校と地域との連携をもつこと」，「全校あげての活動を行うこと」などが各項目において重視されている．子ども用と大人用に分かれており，環境グループとエコ・スクール委員がそれぞれ記入する．なお，チェックの仕方（記号）は特に決まっていない．

エコ・スクールの認定に関しては，事務局から選任されたエコ・スクール認定委員が認定委員会において各エコ・スクール実践校での活動の評価と認定を行い，滋賀県知事にエコ・スクール認定校としての推薦を行う．認定を受けた実践校には，滋賀県からエコ・スクールとして認定されたことを示す認定証（写真 3-2）が交付される（図 3-2 参照）．

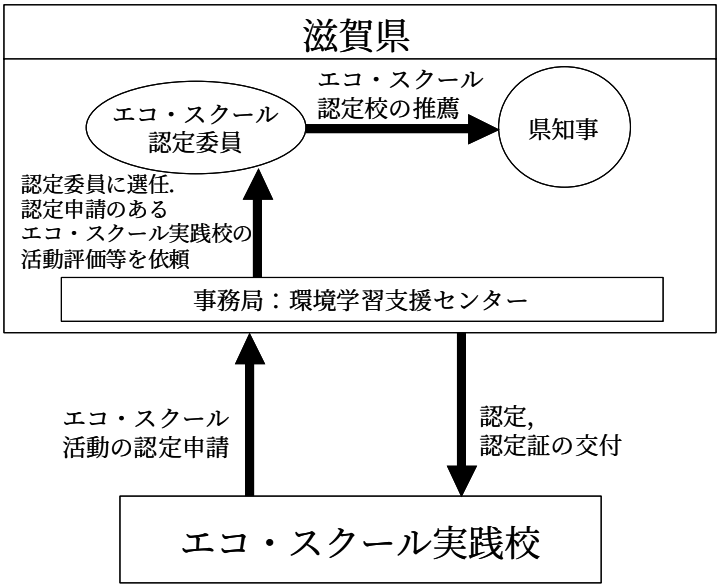

図 3-2　滋賀県エコ・スクール推進事業におけるエコ・スクール校認定の仕組み[3)]

エコ・スクール
認定証

キックオフ宣言

みなさんの学校は、環境について学んだことを、様々な活動をとおして学校全体で実践されていますので、「エコ・スクール」に認定します

これからも学校や地域の一員として私たちの美しい滋賀、そして地球の環境をまもるためにすすんで行動されることを期待します

平成　年　月　日

滋賀県知事　國松善次

写真 3-2　エコ・スクール認定証

認定委員会での各実践校に対する認定（評価）基準は，特に定められていない．滋賀県エコ・スクール推進事業では，各実践校の活動を本当に評価できるのは各校で活動を行っている児童生徒およびエコ・スクール委員会メンバー自身であると考えられている．そのため, 県から選任された認定委員は, 主に, 各校で実践されてきた活動プロセスを確認し, アドバイスや激励を行うことを主な役割としている[8)]．なお，認定は，2003 年度末から行っている．

D．活動の継続連絡

エコ・スクール実践校としての活動を継続する学校は，毎年年度のはじめに，登録書を再提出する．

3-3　滋賀県エコ・スクール推進事業検討段階での議論内容について[9)10)11)12)13)]

エコ・スクール推進事業が開始されて間もないとき，2001 年 10 月～2002 年 3 月までの間に計 4 回の同事業に関する検討委員会が開かれている．同委員会には，当時の滋賀県環境政策課や学校教育課の担当者および各方面の関係者と 2001 年度開始エコ･スクール実践校の学校長等が集まり，エコ・スクール活動や推進事業に関して議論を交わしている．各回の検討委員会の議題を表 3-6 に示す．なお，第 1 回目の検討委員会の時点では既に，同推進事業の案（フレームワーク）が欧州型エコ・スクールプロジェクトに基づき作成されていた．そのため，第 1 回目の検討委員会では主に，同フレームワークについて議論を行っている．

表 3-6　エコ・スクール推進事業開始当初に行われた検討委員会での議題

年/月/日	名称	議題
2001/10/24	第 1 回	事業概要，事業計画について．
		欧州および国内の事例について．
		エコ・スクールフレームワークおよび認証・支援組織について．
2002/02/01	第 2 回	エコ・スクール参加モデル校への支援状況について．
		基本プログラムおよびエコ・ハンドブックについて．
2002/03/05	第 3 回	プログラム内容およびエコ・ハンドブックについて．
		エコ・スクールの推進体制について．
2002/03/20	第 4 回	エコ・スクール推進体制について．
		エコ・ハンドブックについて．

以下，上記検討委員会で議論された内容の中から，事業全体とエコ・スクール活動を実践する学校，エコ・スクール活動における学校と地域とのつながりの 3 つの項目ごとに意見内容を見ていく．

3-3-1　検討委員会におけるエコ・スクール活動全体に対する意見内容

計 4 回のエコ・スクール検討委員会で議論された内容のうち，エコ・スクール活動全体に対する意見を同検討委員会議事録より抜き出し，まとめたものを表 3-7 に示す．

表 3-7　検討委員会における事業全体に対する意見

	出てきた意見内容
1	活動のプロセスを明確にしないと，火付けのみで終わってしまう.
2	取組みやすいかたちで，学校を拘束しないほうが良い.
3	柔軟性が必要.
4	学校の自主性や各学校の独自性を大事にしたい.
5	基本的枠をつくり，それ以外は，学校の実態にもとづいてやってほしい.
6	「子どもたちの主体性」「学校と地域等との関連性」が取り組みでのキーワード.
7	学校，地域，保護者などがエコ・スクール活動を行う上での必要条件となる.
8	学校のみではなく，家族，親子，NPO/NGO の働きなど，みんなで関わっていけることを視野に入れた取組みが大事.
9	外部からの専門的な支援が必要.
10	学校外部も関わるという視点からも教育長ではなく知事認証にする方が良い.
11	将来的には，関わっている学校，機関，団体・人等を結ぶ，エコ・スクール連絡推進協議会や環境教育連絡会のようなものが形成されていくのが望ましい.
12	市町村教育委員会には,連絡だけでなく,将来的には支援をしてもらえると有り難い.
13	滋賀県ではエコ･スクールを環境学習の核とするというように意識を集中できるようにしていくことが必要ではないか.
14	モデルをもとにしながら，全県的にひろめていきたい.

事業全体に関する意見内容を見てみると，エコ・スクール活動の基本的な枠組は設けるが，それ以外は各実践校の実態に合わせて柔軟に行えるように，各学校を拘束しないほうが良いとの意見が多い．また，エコ・スクール活動では学校と地域や保護者，NPO などとの関わりをもつことが重要であること，さらには，エコ・スクール実践校同士や事業に関わる人や団体等とのネットワークづくりの大切さがあげられている.

3-3-2　検討委員会におけるエコ・スクール活動を実践する学校に関する意見内容

エコ・スクール検討委員会で議論された内容のうち，エコ・スクール活動を実践する学校に関して出てきた意見をまとめて表 3-8 に示す.

表 3-8　検討委員会におけるエコ・スクール活動を実践する学校に関する意見

	出てきた意見内容
1	環境を意識し，実践する学校になることが前提.
2	学校内の委員会設置が大切.
3	独自の取組みをし，生徒会，児童会の活性化も図りたい.
4	子どもたちがどう動いたのかが大切.
5	行動目標があってもいいが，自然体で，主体的に各小中学校が関われるものでないといけない.
6	結果重視なのかプロセス重視なのか？/学校はプロセス重視でいいだろう.
7	どういうふうにみんなで決めたか，知っているのかなど，そのプロセス自体を評価したい.
8	環境問題に対する取組みを明確にするため，数値目標などを考えていくことも大切であろう.
9	学校でチェックの活動ばかりが先行するのは，良くない.
10	決められたチェックをしないほうが良い.
11	子どもたちが自分でやっていることを自己評価するという項目も必要.
12	数値目的などを考えていくことも大切である.
13	イギリスのように,（どの教科も担当しない）エコ・スクールプロジェクトの担当教諭は可能であるのか.
14	（成果を）子どもに還元するのか，社会に還元するのか.
15	時間の切り方をどうするか．短い時間での体験では，つくられた，仕組まれた体験しかできない.
16	子どもが変われば親も変わるというように，小さい子どもから動きをつくっていくのが大切.

表 3-8 で示した意見内容を集約すると，エコ・スクール活動では活動のチェックばかりを行うのではなく，活動のプロセスを重視することが大切であるという声が多い．また，子どもが主体的に実践活動を行うことによって，児童・生徒会活動や学校全体が活性化することが期待されている．一方，エコ・スクール活動を行う上での活動時間の取り方や同活動によって生じる担当教諭への負担等が懸念されている.

3-3-3　検討委員会におけるエコ・スクール活動での学校と地域との関わりに対する意見内容

次に，エコ・スクール検討委員会で議論された内容のうち，エコ・スクール活動での学校と地域とのかかわりに関して出てきた意見をまとめて表 3-9 に示す.

表 3-9　検討委員会におけるエコ・スクール活動での学校と地域との関わりに対する意見

	出てきた意見内容
1	欧州にはローカルアジェンダがあるが，日本にはないので，仕組みのみをもってくると問題がある．
2	この活動案では，地域までは難しいのではないか．
3	地元の人たちのこんな町づくりをしていきたいという将来ビジョンも必要． そうでないと地域の人たちもエコ・スクール活動に関われない．
4	地域との関わりが少ないので，最初から地域を巻き込む形にできないか？
5	地域につなげていくことが大切．
6	基本的には，家族や親子を巻き込んでいくものと考える．
7	保護者や地域への発信のみではなく，それらとの協働であろう．
8	子どもから親へ，そして地域へとつながっているように，学校から地域を変えるのは良い．

表 3-9 で示した意見内容を集約すると，エコ・スクール活動では，学校と地域との協働が特に強く求められている．しかし，エコ・スクール活動の先導的な事例である欧州ではそれぞれの町にローカルアジェンダや将来ビジョンがあるのに対し，日本にはそのような素地がない．そのため，地域を巻き込むことが難しいのではないか，あるいは，活動を行っていく仕組みとして，初めから地域を巻き込むような形はできないか，などという意見もでている．

3-4　欧州型エコ・スクールプロジェクトとの違い[14)]

滋賀県エコ・スクール推進事業は欧州型エコ・スクールプロジェクトを参考にしたものであるが，日本に導入するに当たって変更した点もある．欧州と滋賀県でのエコ・スクール活動（プログラム）の相違点を表 3-10 にまとめる．

表 3-10　欧州（イギリス）と滋賀県でのエコ・スクール活動（プログラム）の相違点

	欧州（イギリス）	滋賀県	変更の理由
活動推進組織	エコ･スクール委員会：児童生徒，教諭，保護者，地域支援者（非公式には, 児童生徒と担当教諭で行う会議もある）.	環境グループ：児童生徒と担当教諭. エコ・スクール委員会：児童生徒，教諭，保護者, 地域支援者などが関わる）.	日本の小中学校には, 児童会あるいは生徒会といった児童生徒の組織があるので, それをいかすために.
ハンドブック	児童生徒と教諭, 保護者, 地域支援者の関わりを示す図などはない.	児童生徒，と教諭，保護者, 地域支援者の関わりを示す図を掲載.	児童生徒と教諭，保護者, 地域支援者の関わりを明示するために.
活動計画時に用いる冊子	チェック項目を明記.	子ども向けに作られた冊子には, チェック項目のようなものはあるがチェックリストにはしていない.	計画を作る際に行う環境調査の項目を事務局の方から提示するのではなく, 各学校で独自に考えてもらいたかったため.
活動の内容や目標を示す標語等	エコ･コードとよばれる標語のようなもの.	キャッチフレーズやシンボルマーク.	子どもたちが親しみやすいように.
認定証交付申請時の提出物	（滋賀県では, イギリスのものを参考にせずに独自に作った）.	壁新聞や児童生徒の作文，エコ・スクール委員会メンバーからの寄せ書き等.	日本的な発想をいかし，独自に作った.

滋賀県エコ・スクール推進事業におけるエコ・スクール活動は，欧州型エコ・スクール活動と違い，活動の推進組織として，環境グループ（児童生徒と担当教諭から成るグループ）とエコ・スクール委員会（環境グループメンバーの一部に，地域の人なども含めた委員会）の 2 つの組織の設立を要求している．また，地域と学校とのつながりを意識させるために，同事業内容を説明したハンドブックに，児童生徒と教諭，保護者，地域支援者の関わりを示す図を掲載している．さらに，検討委員会において「学校の実態に合わせた柔軟性」をという意見が出されたことをふまえ，活動計画などは各学校が独自に作成できるように配慮されている．

また，エコ・スクール事業（プロジェクト）を進めていく上での大きな相違点としては事務局を担う主体の違いがある（表 3-11 参照）．欧州では NGO が事業の実施主体であるのに対して，滋賀県では行政が実施主体となっている．

表 3-11　欧州（イギリス）と滋賀県でのエコ・スクール事業事務局の違い

	欧州（イギリス）	滋賀県
事業の事務局	NGO（Tidy Britain Group）	行政（滋賀県）

3-5　エコ・スクール実践校について

表 3-12 に示すように，現在（2005 年度），滋賀県内 13 校の小中学校が，エコ・スクール実践校として活動に取り組んでいる[15]．同表の左欄には各実践校の略称を記しておく．以降，本論文では各実践校をこれらの略称で呼ぶこととする．なお，本節でのエコ・スクール実践校の紹介の順序は, 2005 年度の滋賀県エコ・スクール推進事業関連資料に準じる．

表 3-12　滋賀県のエコ・スクール実践校（2005 年度現在）

開始年度	実践校名		略称
2001	東近江市立	御園小学校	御園小
	甲賀市立	油日小学校	油日小
	近江兄弟社学園	近江兄弟社小学校	近江兄弟社小
	高島市立	今津中学校	今津中
2003	東近江市立	能登川南小学校	能登川南小
	大津市立	逢坂小学校	逢坂小
	安土町立	老蘇小学校	老蘇小
	野洲市立	野洲中学校	野洲中
2005	虎姫町立	虎姫中学校	虎姫中
	草津市立	笠縫東小学校	笠縫東小
	湖南市立	石部南小学校	石部南小
	高島市立	本庄小学校	本庄小
	安土町立	安土小学校	安土小

事業の開始にあたって，2001 年に事務局は先ず，滋賀県で行われた全国環境学習フェアにおいて参加していた滋賀県内の小中学校に対し，エコ・スクール実践校への参加を呼びかけた．その数日後には，また，同推進事業の説明会を開催している．説明会には 14～15 校の小中学校が参加した[16]．その中から 2001 年度より同推進事業への登録を行い, エコ・スクール活動に取り組むことになったのが，御園小，油日小，近江兄弟社小，今津中の 4 校である．

事業が開始されて 3 年目の 2003 年度からは，能登川南小と逢坂小，老蘇小，野洲中の 4 校が実践校に加わった. 2003 年度から活動を始めた 4 校に関しては, 表 3-3 で示したエコ・スクールセミナーとよばれるエコ・スクール活動を紹介するセミナーに参加し，活動を行ってみようと同推進事業に登録した学校が大半である．

事業開始初年度（2001 年度）から 2004 年度までの間，実践校として活動していた計 8 つの小中学校のうち，2003 年度（2004 年 3 月 5 日）には御園小，油日小，近江兄弟社小，今津中の 4 校がエコ・スクール認定校に認定された．さらに，2004 年度（2005 年 3 月 2

日）には，御園小，今津中，能登川南小，逢坂小，老蘇小の 5 校がエコ・スクール認定校に認定されている．

また，詳しくは後述するが，現在，同推進事業は，エコ・スクール実践校になるためのハードルが高いと受け取られているためか，自校から同推進事業に登録する学校がなかなかあらわれない，という問題を抱えている．そこで，2005 年度からは，事務局である環境学習支援センターの担当者が，比較的環境教育に熱心な学校や教諭を訪問し，事業への登録を個別に依頼しているという事実もある．そのような経緯を経て，2005 年度から実践校に登録したのが，虎姫中，笠縫東小，石部南小，本庄小，安土小の 5 校である．

エコ・スクール実践校として 2001～2005 年度までの間に登録した小中学校の場所を図 3-3 に示す（2001 年度および 2003 年度に同推進事業への登録を行った学校の校名は太字）．

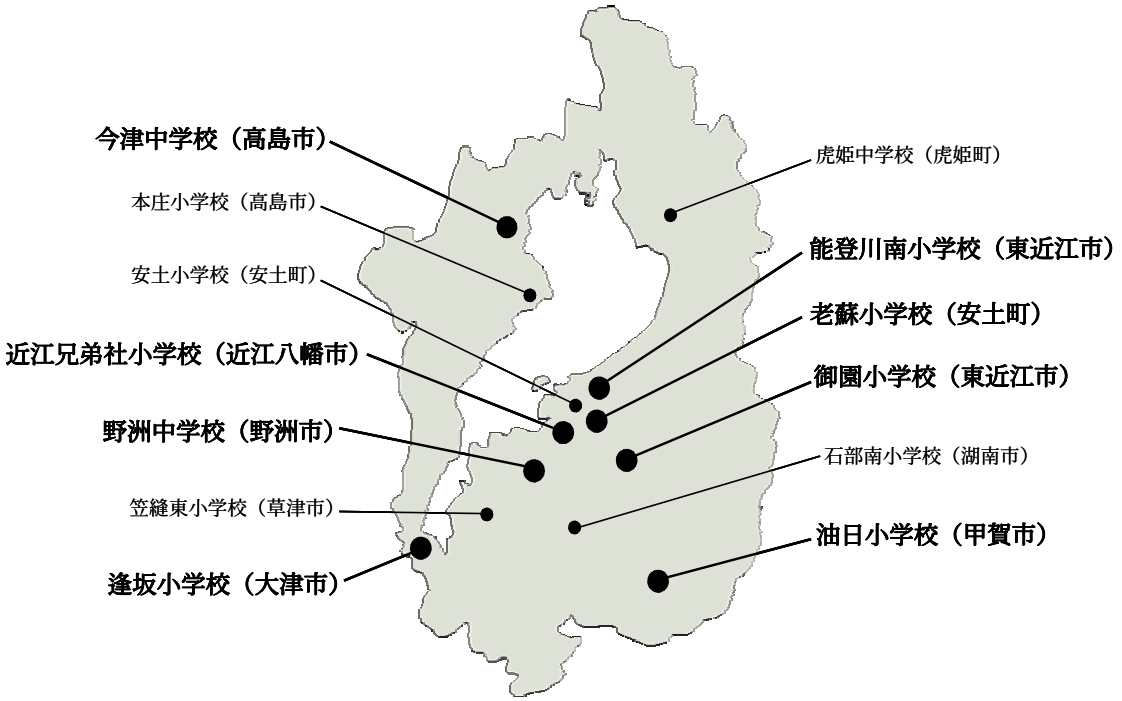

図 3-3　エコ・スクール実践校 13 校（2005 年度現在）の滋賀県内における場所[17)18)]

2001 年度および 2003 年度に同推進事業への登録を行った学校の校名は太字

同推進事業事務局は，2001 年度から実践校になった 4 校と 2003 年度から実践校になった 4 校の計 8 校（図 3-3 において太字で示した学校）の実践校におけるエコ・スクール活動の内容をまとめた「エコ・スクール実践事例集」を 2004 年 3 月に発行している[19)]．

本論文では，第四章において各実践校の活動内容を紹介する．ただし，2005 年度から実践校になった 5 校については，実践校としての活動が始まっていない学校も多い．そのため，2005 年度から実践校になった小中学校におけるエコ・スクール活動に関しては，ヒア

リング調査を行った笠縫東小，本庄小，石部南小に関してのみ述べることとする．

＜参考文献＞

1）滋賀県：琵琶湖環境部 エコライフ推進課 エコ・スクール活動の支援
エコ・スクールプロジェクトのはじまり
<http://www.pref.shiga.jp/kakuka/d/ecolife/school/project_1.html>，2006-01-14

2）滋賀県：琵琶湖環境部 エコライフ推進課 －滋賀県環境学習支援センター－
<http://www.pref.shiga.jp/d/ecolife/kankyou/>，2006-01-14

3）滋賀県 環境政策課：エコ・スクールへのとびら，p.9，滋賀県（2002）

4）滋賀県 エコライフ推進課：エコ・スクール実践事例集，p.74，滋賀県（2004）

5）滋賀県 エコライフ推進課 滋賀県環境学習支援センター：平成 17 年度「エコ・スクール」支援事業 実施要項，滋賀県（2005）

6）滋賀県 環境政策課「エコ・スクールプロジェクト」事務局：エコ・スクールへのとびら，pp.3-12，滋賀県（2002）

7）滋賀県 エコライフ推進課 滋賀県環境学習支援センター：エコ・スクールへのとびら 滋賀県エコ・スクールハンドブック（平成 17 年版），pp.3-12，滋賀県（2005）

8）滋賀県：平成 15 年度 エコ・スクール推進事業報告書，pp.63-64，滋賀県（2004）

9）滋賀県：平成 13 年度 環境省委託事業 体験的環境学習推進事業実施報告書，p.6，pp.49-52，滋賀県（2002）

10）滋賀県 環境政策課：滋賀県参加型環境学習推進事業「エコ・スクール」支援事業 第 1 回エコ・スクール検討委員会　議事録，pp.1-7，滋賀県（2001）

11）滋賀県 環境政策課：滋賀県参加型環境学習推進事業「エコ・スクール」支援事業 第 2 回エコ・スクール検討委員会 議事録，pp.1-3，滋賀県（2002）

12）滋賀県 環境政策課：滋賀県参加型環境学習推進事業「エコ・スクール」支援事業 第 3 回エコ・スクール検討委員会 議事録，pp.1-2，滋賀県（2002）

13）滋賀県 環境政策課：滋賀県参加型環境学習推進事業「エコ・スクール」支援事業 第 4 回エコ・スクール検討委員会 議事録，p.1，滋賀県（2002）

14）市川智史：RE:県立大の中村です，2005-01-13，私信

15）滋賀県 エコライフ推進課 滋賀県環境学習支援センター：滋賀県環境学習支援センター 第 2 回 企画運営委員会 会議次第，p.7，滋賀県（2005）

16）加藤理：行政の取り組み事例 滋賀県のエコ・スクール 滋賀県エコ・スクールプロジェクトの試み，リサイクル文化，（67），p.84（2002）

17）滋賀県 エコライフ推進課：エコ・スクール実践事例集，p.5，滋賀県（2004）

18）滋賀県：琵琶湖環境部 エコライフ推進課 エコ・スクール活動の支援
<http://www.pref.shiga.jp/kakuka/d/ecolife/school/index.html>，2006-01-26

19）環境レイカーズ：エコ・スクール information 2004.03.エコ・スクール実践事例集を発行
<http://www.kankyolakers.org/acm/contents/contents.php?d=156>，2006-01-16

第四章　エコ・スクール実践校におけるエコ・スクール活動について

本章では，2005 年度までに登録したエコ・スクール実践校 8 校と各校におけるエコ・スクール活動の概要について紹介する．紹介する実践校の順序は，2004 年 3 月に発行されたエコ・スクール実践事例集に準じる．

また，8 校の事例を述べたあとに，滋賀県エコ・スクール推進事業による各実践校への支援の内容および，2005 年度から実践校になった小中学校 5 校のうち 3 校におけるエコ・スクール活動について紹介する

4-1　滋賀県甲賀市立油日小学校

4-1-1　油日小学校および校区の概要

油日小は全校児童数 247 人と比較的規模の小さな小学校である（表 4-1 参照）. 学校は JR 油日駅の近くに立地するが，周囲は都市化されておらず，住宅地と田畑が広がっている．また，学校のすぐ側には一級河川である杣川が流れている．同校は，2004 年 10 月 1 日の市町村合併後，甲賀町立から甲賀市立に変わった.

表 4-1　油日小学校の児童数と学級数（2005 年 5 月 27 日現在）

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	合計
人数　　（人）	33	51	40	49	34	40	247
学級数（クラス）	1	2	1	2	1	1	8

同校のエコ・スクール活動に関しては，2005 年 7 月 8 日と 10 月 6 日の 2 度にわたり，同校エコ・スクール活動担当教諭に対してヒアリング調査を行った他，随時，同教諭とのメールや郵便，電話のやり取りを行った．以下，同校におけるエコ・スクール活動について述べる.

油日小は 1999 年度より滋賀県事業である「おうみ・森っこスクール」のモデル校となっている．また，同年 8 月からは児童や保護者の一部も交えての学校ビオトープ造りがはじまっている．ビオトープは 2000 年 3 月に完成．以後，ビオトープを中心とした環境学習を各学年の授業に取り入れている.

学校ビオトープが整備された翌年（2001 年），全国環境学習フェア（滋賀大会）におい

て，同校の児童が滋賀県の小学校を代表し，全国の子どもたちにむけ「自分を大切にすること」「人を大切にすること」「ものを大切にすること」の 3 つのメッセージを呼びかけた．当時，学校ビオトープを中心とした環境学習に取り組みはじめたということもあり，2001 年度 3 学期にエコ・スクール推進事業に登録，以降，エコ・スクール実践校として活動している．同校は 2004 年 3 月に，エコ・スクール認定校として滋賀県から認定された．

4-1-2　油日小学校でのエコ・スクール活動

同校のエコ・スクール活動の内容を，第三章で述べたエコ・スクール活動の流れ（①さあ，はじめよう　②活動テーマと計画をつくろう　③活動しよう　④ふりかえろう　⑤学ぼう，つながろう），に沿って述べていく．

①　さあ，はじめよう（キックオフ宣言，活動推進組織の設立）

1）キックオフ宣言

学校長が 2001 年度 3 学期（2002 年 1 月）の始業式において，「自分をだいじにしよう」「人をだいじにしよう」「ものをだいじにしよう」と全校児童に呼びかけるキックオフ宣言を行った. ただし, 2001 年度はレイカーズの支援のもと, 学校管理職と担当教諭との間で, エコ・スクール活動についての打ち合わせを行うとともに，教諭や児童の中でのエコ・スクールに対するイメージづくりを行っており，実際に全校をあげての活動が始まったのは 2002 年度に入ってからである．キックオフ宣言に似たものは，毎年，年度初めに学校長から全校に向けて行うようにしている（2003 年度のキックオフ宣言で,「自分」「人」「もの」の他に「自然」という言葉が加えられた）.

2）活動推進組織

キックオフ宣言の翌年度（2002 年度）に，児童が主体となる「エコ・スクール委員会」と学校教諭や地域の人が主要メンバーとなる「油日小学校エコ・スクール支援委員会」の 2 つの組織が新たに設立された．この 2 つの委員会が同校におけるエコ・スクール活動の推進組織である．

a．エコ・スクール委員会

実践校になったことに伴い,「エコ・スクール委員会」という委員会（環境グループ）が 2002 年 4 月，児童会組織の中に作られた．同委員会が，油日小学校におけるエコ・スクール活動のための児童推進組織になる．

同校のエコ・スクール委員会は実践校になる以前からあった「環境委員会」を引き継いだものである．環境委員会では主に校内掃除と美化活動を行っていたが，エコ・スクール

委員会に変わってから同委員会が行っていた主な活動は,他の委員会が行うようになった.

エコ委員会の構成メンバーと活動頻度を表 4-2 に示す．表中の常時活動頻度とは，児童会活動として定められている時間を指す．メンバーは，基本として希望者が同委員会に所属するようになっている（2005 年度の場合，5 年生 5 人，6 年生 7 人）.

表 4-2　油日小学校エコ・スクール委員会の概要（2005 年度）

名称	形態	人数	担当教諭数	常時活動頻度
エコ委員会	児童会（5・6 年生）	12 人	2 人	1 回/月

b．油日小学校エコ・スクール支援委員会

実践校となったことに伴い 2002 年,「油日小学校エコ・スクール支援委員会」という委員会が新たに設立された．同委員会が，エコ・スクールハンドブックにおけるエコ・スクール委員会にあたる．2005 年度の同支援委員会メンバーを表 4-3 に示す.

表 4-3　油日小学校エコ・スクール支援委員会の構成員（2005 年度）

メンバー構成（計 22 人）		数（人）
学校	学校長	1
	教頭	1
	教務	1
	油日小学校教諭（やさしさ部会）	3
	エコ委員会委員長（児童）	1
保護者	PTA 会長	1
	PTA 副会長	2
	各クラスの保護者学級委員（うち半数）	12

同支援委員会（児童を除いたメンバー）は，学校教諭と保護者 PTA で構成される（図 4-1 参照）.

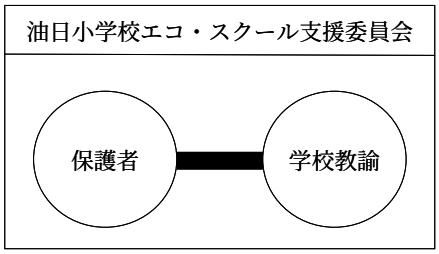

図 4-1　油日小学校エコ・スクール支援委員会の構成（児童を除く）

同校の場合，PTA 本部は本部役員と常任委員（地区委員），学級委員で構成されており，その中から，本部役員 3 人と学級委員の半数（2005 年度は 12 人）がエコ・スクール支援委員会に所属する仕組みになっている．学校教諭に関しては，同校には学校の教育目標にそった 3 つの指導部会（「生き方部会」「やさしさ部会」「すこやか部会」）があり，そのうちの「やさしさ部会（環境教育担当教諭，人権学習担当教諭などが含まれる部会）」から数人の教諭が同支援委員会に入ることになっている．

② 活動テーマと計画をつくろう

油日小学校では，（エコ・スクール）実践校になる以前から，「自分を大切に・人を大切に・もの（自然）を大切に」という大きなテーマをもっていた．これがエコ・スクール活動においても基本のテーマとなっている．実践校としての取り組みは，2001 年度 3 学期から始まった．同学期に環境レイカーズの支援のもと，教諭たちはエコ・スクールのイメージづくりを行い，児童たちは環境委員会と運営委員会，栽培委員会委員が委員会ごとに，これから始めるエコ・スクール活動の内容を話し合った．

同校では，毎年，やさしさ部会に所属する教諭たちが活動の重点目標を決め，全校あげての活動ができるように工夫している（2005 年度には，後述する「学級エコ宣言」というものを学級での取り組みとして設けている）．また，エコ委員会や支援委員会（エコ・スクール活動での推進組織）としての年間の計画は，ともにそれぞれ年度初めに話し合い，決めている．

シンボルマークとしては，「自分」「人」「物」「自然」という言葉を書いた四葉のクローバーを用いており（2003 年度より），校舎内の各所に掲示している（写真 4-1 参照）．また，同シンボルマークに準じた「エコ・スクール ゆめスクール 元気スクール」という語句をキャッチフレーズ的なものとして用いており，学校外からも見えるような場所に同フレーズを書いたポスターを貼り出している．シンボルマーク，キャッチフレーズともに教諭たちが作ったものである．

写真 4-1　油日小学校の活動シンボルマーク

③ 活動しよう

同校エコ・スクール活動推進組織（エコ・スクール委員会とエコ・スクール支援委員会）が 2002～ 2005 年度までの間に行ってきたエコ・スクール活動の内容について説明する.

1）エコ・スクール委員会（2001 年度時の環境委員会）の活動について

油日小学校では，エコ・スクール委員会を中心にエコ・スクール活動を行っている．また，同活動を学校全体の取り組みとするために，他の児童委員会でも「エコ」に関わる活動をできるだけ取り入れるようにしている.

ここでは，エコ・スクール委員会の活動をまとめた後に，他の児童委員会による活動について紹介する. まず, 同委員会における 2002～2005 年度までの活動内容を表 4-4 に示す. なお，表中の活動名下に活動年度を記したものは，記した年度限りのもの，記していないものは毎年度行っているものを表す.

表 4-4　油日小学校エコ・スクール委員会の活動内容（2002～2005 年度）

活動名	詳細
ビオトープの活動 （常時の活動を含む）	観察道に木のチップをしく．
	毎日（年度によっては週に 1 回），当番が見回り，ゴミ拾いを行う．
	ビオトープで採取した植物を校内のビオトープコーナーに飾る．
	ビオトープで撮った写真を校内のビオトープコーナーに掲示する（写真 4-2 参照）．
	鳥のエサ台にエサを置く．
樹木板の作りなおし （2004，2005 年度）	樹木板を新しく作りなおす（50 枚程度）． （2004 年度：ビオトープ内，2005 年度：校舎周り）
通学路美化活動での 活動まとめ	毎年 6 月に行う全校通学路美化活動で集まったゴミの重さや種類を調べ，全校児童の活動に対する感想等を模造紙にまとめ，全校集会時に全校に向けて発表する．
自然観察会の開催	年に数回，全校児童向けの自然観察会を昼休みの時間に行う．（2002～2005 年度までの同観察会の詳細は後掲する表 5-5 に示す）．
エコ標語の募集 （2002～2004 年度）	エコに関する標語を全校児童から募集． 集めた標語を用いて日めくりカレンダーを作成．校内に掲示．
「わたしのちょこっと エコ」の募集	環境のことを考えて行動していることを書いたミニ作文を全校児童から募集． 着られなくなった服は人にあげる，歯を磨く時は水を止める，ベルマークのついた商品を買う，などの作品が集まる． 集まった作文は，昼休みの放送で全校に紹介．
トイレスリッパの見回り （2003 年度）	トイレのスリッパの並び方を見回り，整頓． その後，校内放送を用い，スリッパの並び方の状況を全校児童に知らせる．
節電・節水 （2004 年度～）	節電と節水を呼びかける．
子ども環境交流会議に参加 （2004，2005 年度）	夏休み期間中にメンバー数人が，環境省事業である「子ども環境交流会議」に参加．同会議への参加は，滋賀県からの呼びかけによる．
子ども環境交流会議の内容を校内で発表 （2004，2005 年度）	「子ども環境交流会議」に参加した児童が，2 学期の始業式にて，同会議での活動内容や感想を全校児童の前で発表する．
滋賀県 環境学習のつどい参加	滋賀県環境学習のつどい（環境学習フェア）にて，同校のエコ・スクール活動内容を記した壁新聞の展示と活動発表を行う．

エコ・スクール委員会の活動は 2002 年度より本格的に動き始めた．同委員会では主に，学校ビオトープに関する活動を行っている．活動内容に，年度ごとの大きな変化はない．常時活動として行っているのはビオトープのゴミ拾いや，植物や生き物の採取，また，節電・節水の呼びかけなどである（節電節水活動は，2003 年度までは，児童会の運営委員会が行っていたものである）．節電・節水活動は，実際に計測したりするものではなく，全校へ呼びかけや意識づけなどの活動を中心に行っている．

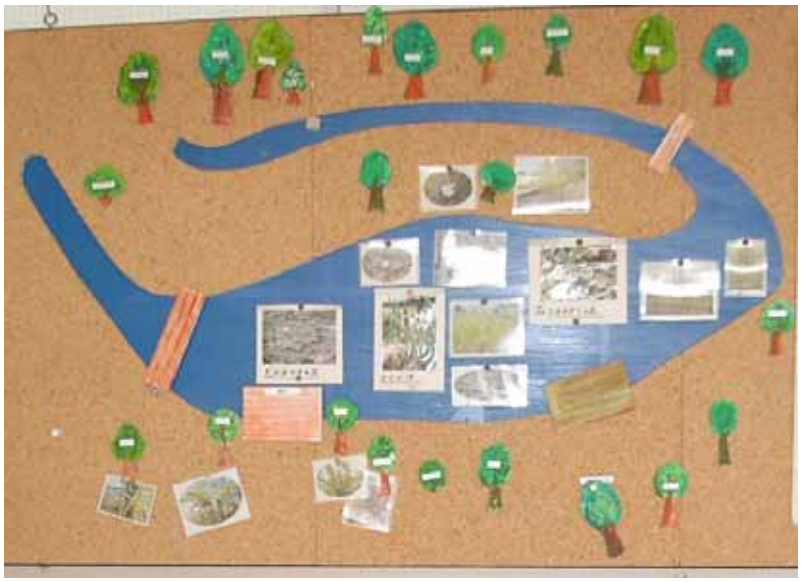

写真 4-2　学校ビオトープで撮った写真の展示風景

また，年に数回，全校児童に呼びかけ実施している自然観察会が同校エコ・スクール委員会の大きな特徴である．自然観察会は，全校児童に自然への興味をもってもらおうとの思いから始められた．エコ・スクール委員会主催の自然観察会の概要（2002～2005 年度までのもの）を表 4-5 に示す．

同委員会主催の自然観察会は，昼休みに行われる．参加呼びかけは全校児童に対して行う．自然観察会への参加者数は毎回，50～80 人程度であり，その大半が低学年の児童である．

表 4-5　油日小学校エコ・スクール委員会主催の自然観察会の概要（2002～2005 年度）

年度	活動名	詳細
2002	ビオトープ観察会	昼休みに開催．参加者 57 人． 捕虫網や箱メガネ，図鑑を貸し出し，植物についての説明等を行った．
	「秋を楽しもう会」	昼休みに開催．参加者約 70 人（低学年中心）． 学校のシンボルとなっているハナノキの説明． 落ち葉のトンネル．落ち葉の写し絵コーナー等．
2003	ビオトープ観察会	初夏のビオトープで見られる動植物をクイズ形式で紹介した．
	「草でっぽうをならそう会」	昼休みに開催．参加者約 80 人（低学年中心）． クズの葉などの大きい葉で作った草でっぽうの紹介，鳴らし方を指導．
	「草笛をふこう会」	昼休みに開催．参加者約 80 人（低学年中心）． 草笛の吹き方を紹介
	「ハナノキの下で」	昼休みに開催．参加者約 80 人（低学年中心）． 紅葉したハナノキの下でハナノキクイズ． 落ち葉を利用したしおり作り． ハナノキの歌（エコ委員が作った歌）の紹介．
2004	「自然と親しむ会 （杣川の生き物を探ろう）」	昼休みに開催．参加者約 70 人． モンドリや網を使った魚取りや，ヤゴなど水生昆虫の観察．
	「自然と親しむ会 （笹舟を作って流そう）」	昼休みに開催．参加者約 50 人． 学校近くを流れる杣川で笹舟を作って流す．
2005	「自然と親しむ会 （ヤゴ救出大作戦）」	昼休みに開催．参加者約 60 人． 当初は，プール掃除前の計画だったが，ヤゴがほとんど見つからなかったので，杣川での観察会に切り替えた．
	「自然と親しむ会 （秋と遊ぼう会）」	昼休みに開催．参加者約 80 人． 学校まわりの自然をいかしたウォークラリー．ビオトープでの生き物見つけ，葉っぱあわせ，松葉ずもう，ドングリゴマ作りを行った．

また油日小の特徴は，エコ・スクール委員会以外の児童会委員会によるエコ・スクール活動が活発な点である．運営委員会が「やさしさ集め」を行ったり，給食委員会が残飯調査を行ったりしている．運営委員会が毎年行っている「やさしさ集め」とは，同学校におけるエコ・スクール活動テーマのうちの一つである「人を大切に」という項目に関連させたものである．主な内容として，運営委員会が「人に親切にしてもらったこと」についての小作文を全校児童に対して募集，集まったものを整理し，校内に展示する．毎年，「通学途中や学校生活で親切にされたことが多い」など 50～60 程度の文章が集まるそうである．

2）油日小学校エコ・スクール支援委員会の活動内容について

支援委員会では，毎年 2 回の会合と親子自然観察会を 1 回開催している．また，学校ビ

オトープの整備なども行っている．親子自然観察会の開催は，2002 年 7 月にレイカーズの支援のもとに行った第一回目の支援委員会で，支援委員会が主催で行うことが決まった．以後，支援委員会が恒例行事として，毎年，当日プログラムの企画や講師の手配，準備などを行っている. ビオトープの整備作業に関しては, 学校側から要望があった年度に行う．

毎年，年度はじめの第一回目の会合では，当該年度の支援委員会としての取り組みおよび学校で行っている環境教育などについて話し合う．第二回目の年度終わりの会合には，年度によって児童も参加し，1 年間の活動結果を発表する．会合での議題などは，あらかじめ学校側で決めておき，その内容に沿って話し合いが行われる．例えば，2005 年度の第一回目の会合では，同年度の親子自然観察会のことや，学校敷地内にある休耕地の活用方法等について話し合われた．休耕地のことは，前年度からの懸案事項でもあり，同会議では出席者より，ある民間の分析会社の環境分析に関する専門家に相談してはどうかとの提案があった．このように，支援委員会の会合は，各年度の活動予定を議論するばかりでなく，メンバーがつなぎ役となり，学校の活動に学外からの協力を得るための話し合いの場にもなっている．

同支援委員会による，2002～2005 年度までの会合以外の活動を表 4-6 に示す．

表 4-6　油日小学校エコ・スクール支援委員会の活動内容（2002～2005 年度）

年度	名称	内容
2002	油日親子自然観察会開催	日曜の午前中に開催. 参加者：児童 30 人，保護者 20 人，一般 2 人. 学校ビオトープや学校周辺の自然を調べようという意図により「秋の植物」,「杣川の生き物」,「秋の虫」の 3 コースにわかれ行う. 各コースともに外部講師による指導のもと行う. 最後に，焼き芋やキノコ汁をみんなで食べる.
2003	油日親子自然観察会開催	土曜の午前中に開催.　参加者：親子約 40 人. 外部講師による指導のもと行う. 学校すぐ横の杣川，学校から車で約 30 分のところにある油日岳登り口付近の杣川，両 2 地点での透明度調査，よごれの度合い調査（パックテストを用いた），生き物調査. 最後に，焼き芋やキノコ汁をみんなで食べる.
2004	ビオトープ整備作業	学校からの要望により，学校ビオトープの整備，補修を行う.
	油日親子自然観察会開催	土曜の午前中に開催.　参加者：約 70 人. 外部講師による指導のもと行う. 学校ビオトープでの自然観察，ドングリを用いたクラフト作り，種まき. 最後に，栗おこわとキノコ汁をみんなで食べる.
2005	油日親子自然観察会開催	土曜の午前中に開催. 外部講師による指導のもと行う. 学校ビオトープでの自然観察とヨシ笛作り. 最後に，栗おこわとキノコ汁をみんなで食べる.

④　ふりかえろう

同校では，年度末に，エコ・スクール委員会や支援委員会等の場で一年間の活動のふりかえりを行っている．それ以外にも，活動のテーマである「自分を大切に・人を大切に・ものを大切に・自然を大切に」に沿った 20 の項目を設けたアンケート調査を毎年全校児童に行っている.

また，エコ・スクール認定申請時（2003 年度）にエコ・スクール推進事業事務局へ提出したチェックリストには，エコ・スクール委員会，支援委員会ともに○と△の二段階で，それぞれが同校のエコ・スクール活動に対する評価をつけている．同チェックリストの中で△印が記入されていた項目を表 4-7 に示す.

表 4-7　エコ・スクール認定申請時のチェックリスト（2003 年度）における△印の項目

	項目
エコ・スクール委員会	活動目標や計画を，学校や地域の人に知らせているか.
	キャッチフレーズやシンボルマークをみんなや先生と話し合って決めているか.
	自分たちから進んで環境グループやエコ・スクール委員会に参加しているか.
	自分たちの意見が受け入れられる環境グループ，エコ・スクール委員会や活動になっているか.
	計画通り活動が進んでいるか調べているか.
	ふりかえってわかったことや考えたことを学校のみんなや家の人，地域の人たちに知らせているか.
エコ・スクール支援委員会	目標達成状況を図る基準づくりのため，より詳細な調査（ex．散乱ゴミ量やリサイクルの程度）ができているか.
	計画づくりの第一歩である現状調査がきちんとできているか.
	子どもたちは環境グループやエコ・スクール委員会に主体的に参画しているか.
	活動の成果やふりかえりの結果を学校や家庭，地域に知らせているか.
	多くの人々に参加を呼びかけ，情報を提供しているか. （ex．全校一斉にエコ・スクール活動に取り組む日を設定する，地域の人たちへの継続的にエコ・スクール活動を PR する，ニュースレターの発行，アンケートの実施，校区地域での活動展示・発表会など）

エコ・スクール委員会と支援委員会が記入したチェックリストを見ると，2003 年度の時点では，両委員会ともに，学校でのエコ・スクール活動に関して，全校や地域に向けた活動の報告や児童の活動の自主性が弱いと感じていたことがわかる.

活動成果の発表に関しては，前述したようにエコ・スクール委員会が年度末の支援委員会の会合において，一年間の活動内容を報告している．一方，学外では，滋賀県環境学習のつどい（環境学習フェア）の場において一年の活動内容を発表している.

⑤　学ぼう，つながろう

1）学ぼう

油日小学校で行われている授業の中から学校ビオトープに関するものや地域の自然を活かした授業を表 4-8 に示す.

表 4-8　油日小学校における学校内や地域の自然を活かした環境教育の内容（2005 年度）

学年	科目	内容
1 年生	生活科	ビオトープ付近での草花あそび，草花しらべ
2 年生	生活科	ビオトープや杣川での生き物たんけん，生き物しらべ
3 年生	総合的学習の時間	地域の自然観察やビオトープにある薬草調べ
	理科	ビオトープでの生き物たんけん，植物・昆虫調べ
4 年生	総合的学習の時間	学校林での林業体験（おうみ森っ子スクールの活動）
	理科	ビオトープにすむ生き物のくらしを考える
5 年生	総合的学習の時間	学校田での米づくり体験
	理科	ビオトープや杣川でのプランクトンの観察
6 年生	総合的学習の時間	油日岳や杣川での水環境学習

また，前述のように，同校では「やさしさ部会」の教諭が話し合い，学級活動でもエコ・スクール活動のテーマに沿った活動を行うようにしている．学級でのエコ・スクール活動の一つとして 2005 年度は，「学級エコ宣言」というものを実施した．同活動は，エコ・スクール活動のテーマにそったエコ宣言を各学級で決めるというものである．各学級単位で作ったエコ宣言は画用紙に書かれ，廊下に掲示された（写真 4-3 参照）．各学級でのエコ宣言文を表 4-9 に示す．

写真 4-3　油日小学校学級エコ宣言の展示風景

表 4-9　油日小学校の「学級エコ宣言」（2005 年度）

クラス	科目
1 年	1 年生になったから，ともだち（草花や虫の名前もふくむ）百人できるようにします．
2 の 1	ビオトープの生き物を大切にして，たくさんしらべます．
2 の 2	水を出しっぱなしにしない．
3 年	物を大切にしよう．
4 の 1	落とし物をなくすために，物には名前を書く． 節水・節電にこころがける．
4 の 2	ゴミを拾っていつでもピカピカ通学路． 集めるぞ，アルミ缶とベルマーク．
5 年	ゴミを見つけたらゴミ箱に捨てる．
6 年	いつもきれいな学校にする．

2）つながろう

エコ・スクール支援委員会以外の地域支援者を表 4-10 に示す．

表 4-10　エコ・スクール支援委員会以外での地域との連携（油日小学校，2005 年度）

	油日小学校との関わり
滋賀県甲賀市 地域振興局 環境整備課	2002 年度の杣川の改修工事（「環境にやさしい河川整備」事業）の時に，工事に関するアイデアを児童から募集し工事に反映させた． 工事をしたことにより，川へ降りることができるようになり杣川での学習がしやすくなった． 2003，2004 年度は，「甲賀水源の里交流ひろば」で同校エコ・スクール担当教諭が学校での活動を発表． 2005 度は，台風の影響により，土砂で埋まったテラスの再整備を行った
滋賀県甲賀市 地域振興局 森林整備課	おうみ森っこスクール．
（株）関西技研	同校ビオトープ施工時に関係．
（株）ラーゴ	同校における学校ビオトープの施工と年 1 回のモニタリング調査（同校と契約）を行う．

また，2005 年度の地区懇談会では，PTA 会長が中心となり，同校エコ・スクール支援委員会の会合で話し合った内容をもとに，環境に関する話し合いがなされた．

4-1-3　油日小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ

油日小における児童の活動推進組織であるエコ・スクール委員会（環境グループ）は，児童会組織の中に位置づけられている．同委員会は，年に数回，学校ビオトープで自然観察会を行うなどの活動を実践しており，学外の場での活動の発表にも積極的である．

大人の活動推進組織であるエコ・スクール支援委員会（エコ・スクール委員会）は，同校の教諭と保護者（PTA）から構成されており，保護者が中心となった活動組織になっている．同支援委員会は，年に数回の会合と自然観察会を開催しており，特に年度末の会合にはエコ・スクール委員会の児童も参加する．同支援委員会が主催する親子自然観察会は定着した活動になってきており，その他，学校側の依頼に基づき，学校ビオトープの整備作業も行っている．

同校の活動の特徴は，学級エコ宣言（2005 年度）や年度末に全校児童に対して行うエコ・スクール活動に関するアンケート調査など，全校をあげてエコ・スクール活動に取り組んでいる点である．これは，学校の教育テーマである「自分を大切に・人を大切に・ものを大切に・自然を大切に」をそのままエコ・スクール活動のテーマとして掲げているからだと考えられる．また，複数の教諭で構成される「やさしさ部会」が同テーマに対して共通の意識を持ち，活動に主体的に取り組んでいることも大きな要因となっている．

4-2　滋賀県東近江市立御園小学校[1)]

4-2-1　御園小学校および校区の概要

御園小は全校児童数 435 人と比較的規模の大きな小学校である（表 4-11 参照）．学校は高速道路の八日市 IC 近辺に立地する．そのため，周辺地域は，大企業の工場などが多く，都市化が進んでいる．しかし，その一方で，校区には一級河川である愛知川が流れ，興福寺などの歴史的遺産物が数多く残る，恵まれた環境にある．同校は，2005 年 2 月 11 日の市町村合併後，八日市市立から東近江市立に変わった．

表 4-11　御園小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 7 日　現在）

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	合計
人数　　（人）	79	85	60	73	78	60	435
学級数（クラス）	3	3	2	2	2	2	14

同校のエコ・スクール活動に関しては，2005 年 5 月 18 日と 10 月 7 日，12 月 20 日の 3 度にわたり, 同校エコ・スクール活動担当教諭に対してヒアリング調査を行った他, 随時, 同教諭とのメールや電話のやり取りを行った．また，11 月 25 日には後述する同校ビオトープを活用した授業を参観した. 以下, 同校におけるエコ・スクール活動について述べる．

御園小学校は「せせらぎの森」と呼ばれるビオトープをもつ．同ビオトープは，旧八日市市が実施した「緑の湖づくり推進プラン事業」の第一号として 1995 年 3 月に竣工した．児童や保護者が主体的に関与したものではなく，行政（市）が整備したものである．

同校はエコ・スクール実践校になる以前（1997 年くらい）から，身近な場所での環境調査を取り入れた学習を学年単位で行っていた．その活動について過去に，八日市市で行われた環境教育大会で発表したり, NHK の番組の中で同校の児童がインタビューを受けたりしている．当時から環境学習に対して熱心に取り組んでいたということもあり，滋賀県から，エコ・スクール推進事業参加への誘いがあり，そのため，2001 年度 3 学期に同推進事業に登録，以降，エコ・スクール実践校として活動している．同校は，2004 年 3 月と 2005 年 3 月に，滋賀県からエコ・スクール認定校としての認定を受けた．

4-2-2　御園小学校でのエコ・スクール活動

同校でのエコ・スクール活動の内容を，エコ・スクール活動の流れ（①さあ，はじめよう　②活動テーマと計画をつくろう　③活動しよう　④ふりかえろう　⑤学ぼう，つなが

ろう），に沿って述べていく．

① さあ，はじめよう（キックオフ宣言，活動推進組織の設立）

1） キックオフ宣言

学校長が 2001 年度 3 学期（2002 年 1 月）の始業式において，エコ・スクール活動へ取り組みの開始を宣言するキックオフ宣言を行った．ただし，2001 年度はレイカーズの支援のもと，学校管理職と担当教諭との間で，エコ・スクール活動についての打ち合わせを行うとともに，教諭や児童の中でのエコ・スクールに対するイメージ作りを行っており，実際に全校を挙げての活動が始まったのは 2002 年度に入ってからである．活動のキックオフ宣言に似たものは，毎年，年度初めに学校長が全校に向けて行うようにしている．

2） 活動推進組織

キックオフ宣言の翌年度（2002 年度）に，児童が主体となる「エコ委員会」と学校教諭や地域の人々が主要メンバーとなる「御園小学校エコ・スクール支援委員会」の 2 つの組織が新たに設立された．この 2 つの委員会が同校におけるエコ・スクール活動の推進組織である．

a．エコ委員会

実践校になったことに伴い，「エコ委員会」という委員会（環境グループ）が 2002 年 4 月，児童会組織の中に作られた．同委員会が，御園小学校におけるエコ・スクール活動での児童推進組織になる．

実践校になる以前は，環境に関する委員会として「環境委員会」というものがあり，主に，花の栽培活動を行っていた．しかし，実践校になってからは，さらにエコ委員会というものを新しく設け，同委員会では学校全体の環境を考えるような活動を行っている．

エコ委員会の構成メンバーと活動頻度を表 4-12 に示す．表中の常時活動頻度とは，児童会活動として定められている時間を指す．毎日の観測活動など含め，特に活動内容が多い時期には週 1 回以上活動する場合もある．なお，メンバーの配属方法は，各クラスより何人という形をとっており，基本として希望者が同委員会に所属するようになっている（2005 年度の場合，5 年生 6 年生ともに 2 クラスずつあるので，各クラスより 3 人ずつ選出されている）．エコ・スクール活動担当教諭によると，エコ委員会は毎回，人気のある委員会だそうである．

表 4-12　御園小学校エコ委員会の概要（2005 年度）

名称	形態	人数	担当教諭数	常時活動頻度
エコ委員会	児童会（5・6 年生）	12 人	2 人	1 回/月

なお，御園小の委員会活動は，児童に色々な委員会に所属してもらいたいとの意から，前期後期でメンバーが入れ替わる仕組みになっている．

b．御園小学校エコ・スクール支援委員会

エコ・スクール実践校となったことに伴い 2002 年，「御園小学校エコ・スクール支援委員会」という委員会が新たに設立された．同委員会が，エコ・スクールハンドブックにおけるエコ・スクール委員会にあたる．なお，同校では，主にエコ・スクール活動担当教諭の忙しさや学校長の異動などにより，2005 年度に関しては，支援委員会メンバーの選任，会合ともに行われていない．2004 年度の同支援委員会メンバーを表 4-13 に示す．

表 4-13　御園小学校エコ・スクール支援委員会の構成員（2004 年度）

メンバー構成（計 14 人）	
学校	学校長
	教頭（庶務）
	エコ委員会担当
	環境主任　兼　エコ・スクール担当
保護者	PTA 会長
	PTA 副会長
	母親代表　兼　PTA 役員
地域等 支援者	M.S　氏（市役所，花と緑の推進室室長）
	N.O　氏（学校評議員，自然観察指導員）
	M.S　氏（植物愛好家）
	S.K　氏（市生活環境部長）
	H.Y　氏（自然観察指導員）
	S.T　氏（環境レイカーズ代表）
	N.R　氏（市教育委員会）

同支援委員会（児童を除いたメンバー）は，学校教諭と保護者 PTA，地域支援者（行政関係者を含む）で構成される（図 4-2 参照）．

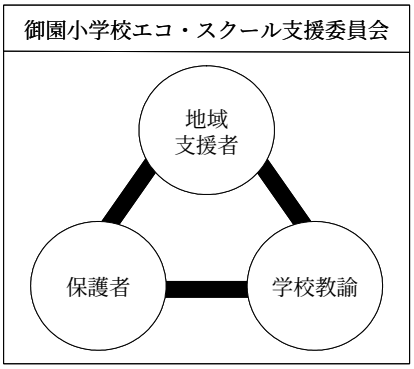

図 4-2　御園小学校エコ・スクール支援委員会の構成員（児童を除く）

支援委員会のメンバーは，毎年，学校長や教頭，エコ・スクール活動担当教諭による話し合いによって選任される．なお，支援委員会には，学校教諭からは学校長，教頭，教務やエコ委員会担当教諭および環境主任が入り，保護者からは，PTA の会長，副会長，環境部長などが入る．PTA 環境部は，せせらぎの森の改修工事の際，支援をしたという経緯があり，同環境部の部長がエコ・スクール支援委員会のメンバーとなることになっている．

地域支援者に関しては，年度によってメンバーが若干異なる．2002～2004 年度までの地域支援者メンバーの変遷を表 4-14 に示す．

表 4-14　御園小学校エコ・スクール支援委員会メンバー中の地域支援者の変遷

エコ・スクール支援委員会　地域支援者	2002 年	2003 年	2004 年
M.S　　氏（市役所，花と緑の推進室室長）	委員	委員	委員
N.O　　氏（学校評議員，自然観察指導員）	委員	委員	委員
M.S　　氏（植物愛好家）	委員	委員	委員
O.Y　　氏（地域コーディネーター）	委員		
K.H　　氏（地域コーディネーター）	委員		
S.K　　氏（市生活環境部長）		委員	委員
H.Y　　氏（自然観察指導員）		委員	委員
T.A　　氏（地域コーディネーター）		委員	
S.T　　氏（環境レイカーズ代表）			委員
N.R　　氏（市教育委員会）			委員

同支援委員会メンバーのうち，地域支援者は主に自然観察の指導が出来る人材が選出されている．活動当初は地域の公民館等でイベントを行う地域コーディネーターが含まれていたが，2004 年度からは地域コーディネーターの配属がなくなったため，同支援委員会のメンバーから外れている．また，2004 年度から教育委員会関係者をメンバーに加えている

ところが特徴的である．

次に，地域支援者に関して，各メンバーの選任された理由を表 4-15 に示す．

表 4-15　御園小学校エコ・スクール支援委員会メンバー（地域支援者）の選任理由

	支援委員会メンバー	学校との関係および支援委員会としての選任理由
地域支援者	N.O 氏 （自然観察指導員）	同校の近くにある公園の管理者． 以前より授業の一環として公園へ見学にいったり，学外講師として授業に招くこともあり，同校の環境教育に携わっていた．
	M.S 氏 （植物愛好家）	同校，ビオトープ竣工時に関わりがあった． 年に数回，学外講師として授業に招いている．
	H.Y 氏 （自然観察指導員）	自然観察に興味があり，自然観察に関して詳しい．
	地域コーディネーター	公民館などでイベント等の活動を行う．
	S.T 氏 （環境レイカーズ代表）	2004 年度の支援委員に含まれているが，事業を受託していた間は，各校の支援委員会には出席することになっていた．
行政関係者	M.S 氏 （市役所，花と緑の推進室）	同校，ビオトープ竣工時に関わりがあった． 以前より，同校の環境教育に携わっている．
	S.K 氏 （市生活環境部）	自然観察に興味がある．
	N.R 氏 （市教育委員会）	教育委員会とのつながりをもつため．

エコ・スクール支援委員会のうち，表 4-15 に示したメンバーに対しては，年度始めにエコ・スクール活動担当教諭が電話等で内諾をとるようになっている．

② 活動テーマと計画をつくろう

御園小学校では，後述するエコ委員会の一番初めの活動として行った環境ウォークラリーがきっかけとなり，学校ビオトープである「せせらぎの森」を中心とした活動を行うことになった．各年度の活動テーマを表 4-16 に示す．毎年の活動テーマと計画は，エコ委員会で年度初めに決めている．作業量の多い活動に関しては，グループに分かれ委員会活動日以外の中休みや昼休み等に集まり，分担して行っている．同委員会は前述したように前期と後期とでメンバーが異なる．そのため，一年間の大きな活動テーマは前期エコ委員会の児童が年度初めに決め，後期の児童は前期の活動を引き継いで行っている．

表 4-16　御園小学校エコ・スクール活動テーマとシンボルマーク

年度	活動テーマ	シンボルマーク
2002	せせらぎの森をみんなの宝物にしよう！	キノキノ君，ハチ君
2003	せせらぎの森をみんなの宝物にしよう！	
2004	せせらぎの森をメダカいっぱいの森にしよう！	
2005	生き物が住みやすいせせらぎの森にしよう！	

活動のシンボルマークとしては, 後述するエコ委員会の 2002 年度での活動によって決まった「キノキノ君」と「ハチ君」というキャラクターがある（写真 4-4 参照）．この 2 つのシンボルマークは，エコ委員会メンバーが紙に描き，後述する御園ミュージアムという学校内展示ブースに貼り出したり，エコ・スクール担当教諭がシール紙に印刷し，エコ委員会で行うウォークラリーや環境教育の授業の中で使用したり，エコ委員会のキャラクターとして用いるなど，広く活用されている．

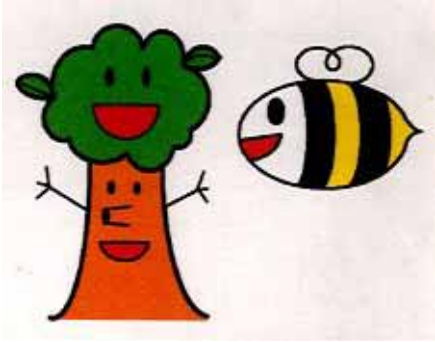

写真 4-4　御園小学校活動シンボルマークの「キノキノ君」と「ハチ君」

③　活動しよう

同校エコ・スクール活動推進組織（エコ委員会とエコ・スクール支援委員会）が 2002～2005 年度までの間に行ってきたエコ・スクール活動の内容について説明する．

1）エコ委員会の活動について

エコ委員会の活動は, 2002 年度より本格的に動き始めた．2002～2005 年度までの活動内容を表 4-17 に示す．なお，表中の活動名下に活動年度を記したものは，記した年度限りのもの，記していないものは毎年度行っているものを表す．

表 4-17　御園小学校エコ委員会の活動内容（2002～2005 年度）

活動名	詳細
環境ウォークラリー	委員会活動での重点目標を決めるため，昼休みに数日間かけて校内を見回り，環境チェックを行い，活動の中心とする内容を決定した．同活動は，毎年度，形式を変えて行うようにしている．
ポスター，看板作り	せせらぎの森に関するポスターや看板を作り，校舎内に掲示．
池の名前， キャラクター募集 （2002 年度のみ）	せせらぎの森にある池の名前とせせらぎの森のキャラクターを全校児童に募集し，エコ委員会の児童が選定． 池の名前は「やすらぎ池（みんなが安らげる場所になるように）」，キャラクターは「キノキノ君」と「ハチ君」に決まる．
せせらぎの森 マップ作り	全校児童に「生き物見つけたよカード」という紙を配り，せせらぎの森で見つけた生き物を同紙に書いてもらう．同紙は，1 枚目は必ず全校児童に配り，2 枚目以降は希望者のみに配布． 模造紙に池の絵を描き，集まった紙を貼り，廊下に掲示．
ペープサート劇 （2002 年度のみ）	主に低学年を対象にした，「せせらぎの森をみんなの宝物にしよう」という題名の劇を全校集会時に行う．シナリオ等，全てエコ委員会児童が作成．
せせらぎの森 ウォークラリー （2002 年度 ：低学年対象， 2003 年度～ ：全学年対象）	低学年の児童が対象．昼休みに開催． 参加者：児童 20～30 人程（記録は残っていない）． エコ委員会主催で簡単なクイズを交えたウォークラリー．
	低学年（1，2 年生）用，中学年（3，4 年生）用，高学年（5，6 年生）用にわけて実施．毎回，昼休みに開催． 参加者：児童 20～30 人程（記録は残っていない）． エコ委員会主催で簡単なクイズを交えたウォークラリー．
定点観察 （2002～2004 年度）	GLOBE 事業の一環として，やすらぎ池の水温を計る（水源部の水温とビオトープ内にある池の水温をチェックし，水温の変動をみる）．同時に，ゴミのチェック等，せせらぎの森全体の見回り．当番を決めて，各当番が冊子に記録．
「みそのミュージアム」 の設置 （2003 年度）	以前は表彰状などを掲示していたブースを環境に関したものを展示する「みそのミュージアム」に改変（写真 4-5 参照）． 同ミュージアムにエコ・フラッグ，せせらぎの森の模型，エコ委員会活動で活用した定点観察ノート，植物や生き物に関した本，各学年で取り組んだ環境学習の成果物などを設置．
メダカの里親募集 （2003～2005 年度）	メダカの里親を募集．飼育用具等は全て担当教諭が用意し，エコ委員児童は活動の呼びかけ等を行う．夏休みの間に各家庭で飼育してもらい，2 学期のはじめに，やすらぎ池に放す． 参加者：数人（2003 年度），50 人（2004 年度），38 人（2005 年度）．
GLOBE 事業に関する発表 （2004 年度のみ）	東京であった GLOBE 事業の発表会に児童数人が参加． 日ごろの活動内容を児童が発表した．
子ども環境交流事業 に参加 （2004，2005 年度）	夏休み期間中にメンバー数人が，環境省事業である「子ども環境交流会議」に参加．同会議への参加は，滋賀県からの呼びかけによる．
子ども環境交流事業での 内容を発表 （2004，2005 年度）	「子ども環境交流会議」に参加した児童が，2 学期の始業式にて，同会議での活動内容や感想を全校児童の前で発表する．
滋賀県 環境学習のつどい参加	滋賀県滋賀県環境学習のつどい（環境学習フェア）にて，同校のエコ・スクール活動内容を記した壁新聞の展示を行う．

エコ委員会として一番初めの活動である環境ウォークラリーが，同委員会での活動の出発点となる．同ウォークラリーの結果，校内の電気使用量，給食の残飯量，学校ビオトープである「せせらぎの森」の 3 点が重点的なテーマとして残った．電気使用量と残飯量に関しては何日間か計測した．しかし，せせらぎの森を守っていきたいという思いをもつ児童が多かったため，せせらぎの森にテーマを絞ることになる．当時，せせらぎの森は，ひどく荒れていた．そのため，まずは，せせらぎの森を知ってもらおうという活動が始められた. 各年度の特徴的な活動をあげると, 2002 年度は, せせらぎの森のキャラクター募集, ペープサート劇（せせらぎの森にザリガニを入れてはいけないことを，低学年の児童にも理解してもらえるように劇を行った），2003 年度は「みそのミュージアム」の設置，2004 年度および 2005 年度はメダカの里親制度（きれいな水にはメダカがいる，ということをもとにメダカを増やす活動が行われた）などである．

これらの活動を見ると, 表 4-16 に示すようにテーマの変遷とともに活動も変化していっていることがわかる．また，同校は 2003～ 2004 年度までの 2 年間，GLOBE（「環境のための地球学習観測プログラム」：児童生徒が身近な地域において環境に関する観測を行い，事業本拠地であるアメリカに観測のデータを送って情報交換するもの）という国際的な事業の実践校として文部科学省から指定されており，エコ委員会の児童が，せせらぎの森の水温等を定期的に計ったり，気温（最高と最低）や雲の様子を観測したりする活動を行っている．2004 年度末には，東京で行われた GLOBE 事業の大会にて同校エコ委員会の児童代表者が活動の報告を行った．同大会では，GLOBE 事業参加校の小中高生が全国から集まって交流をもち, 参加した児童生徒が大学教授から観察方法などに関する指導を受けた．

写真 4-5　御園小学校みそのミュージアム

2）御園小学校エコ・スクール支援委員会の活動内容について

支援委員会の活動は，年 3 回の会合が中心である．各会ともに学校で行っている環境教育や同校学校ビオトープに関した議題を中心とした話し合いをもつ．特に，第三回目の年度終わりの会合では，開催時間を放課後に設け，エコ委員会委員長や副委員長を中心に都合の合う児童も何人か同席し，一年間の活動内容の発表を行い，次年度に向けて支援委員から活動に対するアドバイスを受ける．

同支援委員会による，2002～2004 年度までの会合以外の活動を表 4-18 に示す．

表 4-18　御園小学校エコ・スクール支援委員会の活動内容（2002～2004 年度）

年度	名称	内容
2003	自然観察会	支援委員のうちの 3 人が指導講師となる． 学校ビオトープにおける観察会およびしおり作り． 参加者：53 人．
2004	自然観察会	雨天のため，中止
	自然観察会	支援委員のうちの 2 人が指導講師となる． 学校ビオトープにおける観察会およびしおり，どんぐりコマ，まつぼっくりツリー作り． 参加者：45 人．

自然観察会では，主に S.K 氏（市生活環境部），M.S 氏（市役所，花と緑の推進室），N.O 氏（学校評議員，自然観察指導員）の 3 人が自然観察指導員という立場で関わる．なお，御園小では，自然観察会のプログラム作成や当日の準備ともに同校エコ・スクール活動担当教諭が中心となって行っている．

④　ふりかえろう

同校では，年度末に，エコ委員会やエコ・スクール支援委員会等の場で一年間の活動のふりかえりを行なう．

また，エコ・スクール認定申請時（2003 年度）にエコ・スクール推進事業事務局へ提出したチェックリストには，エコ委員会は◎と○の二段階で，エコ・スクール支援委員会は A と B の二段階で，さらに，2004 年度エコ・スクール認定申請時に同事務局へ提出したチェックリストには，エコ委員会は◎，○，△の三段階で，エコ・スクール支援委員会は○と△の二段階で，それぞれが同校のエコ・スクール活動に対する評価（ふりかえり）を行っている．2004 年度申請時に提出されたチェックリストの中で△印が記入されていた項目を表 4-19 に示す．

表 4-19　エコ・スクール認定申請時のチェックリスト（2004 年度）における△印の項目

	項目
エコ委員会	ふりかえってわかったことや考えたことを学校のみんなや家の人，地域の人たちに知らせているか.
	クラスでやったことやできたことを，学校のみんなに知らせているか.
エコ・スクール支援委員会	目標達成状況を図る基準づくりのため，より詳細な調査（ex．散乱ゴミ量やリサイクルの程度）ができているか.
	計画づくりの第一歩である現状調査がきちんとできているか.
	活動の進み具合を確認し，必要に応じて計画を見直しているか.

エコ委員会とエコ・スクール支援委員会が記入したチェックリストを見ると，2004 年度の時点では，学校でのエコ・スクール活動に関して，エコ委員会は全校や地域に向けた活動の報告が弱い（特に地域への啓発活動を行っていかなければならない）と感じ，支援委員会は行動計画の見直しや現状調査が弱いと感じていたことがわかる.

活動成果の発表に関しては，前述したようにエコ委員会が年度末の支援委員会の会合において，一年間の活動内容を報告している．一方，学外では，滋賀県滋賀県環境学習のつどい（環境学習フェア）の場において一年の活動内容を発表している.

⑤　学ぼう，つながろう

1）学ぼう

御園小学校では授業の中にも学校ビオトープである「せせらぎの森」が活用されている．同ビオトープを活用した授業は，主に 2003 年度の途中から取り入れられるようになり，2004 年度からは，「せせらぎの森」を活用した全学年の授業内容に関する年間計画表[5)]がつくられるようになった．表 4-20 は，同計画書を参考に各学年における授業内容をまとめたものである.

表を見てわかるように，「せせらぎの森」を活用した授業は，主に，2002 年度から新たに設けられた総合的学習の時間の中に多く取り入れられている.

表 4-20　御園小学校における，せせらぎの森を活用した授業の概要（2005 年度）

学年	科目	授業概要
1 年生	生活	一年を通して，せせらぎの森の草花や生き物に関わる．
	国語科	せせらぎの森の自然に目を向け，感じたことを言葉であらわす．
2 年生	生活	一年を通して，せせらぎの森の草花や生き物に関わる．
3 年生	理科	ビオトープの探検．
	総合	一年を通して，せせらぎの森の草花や生き物に関わる．
4 年生	理科	一年を通して，せせらぎの森の草花や生き物を観察する．
	総合	やすらぎの池，池の中のプランクトン調査．
		一年を通して，せせらぎの森の草花や生き物に関わる．
5 年生	理科	やすらぎ池の水質調査，プランクトン調査．
	総合	一年を通して，せせらぎの森の草花や生き物に関わる．
6 年生	理科	一年を通して，せせらぎの森に関わった学習をする．
	総合	せせらぎの森を後輩に残し伝えるために何が必要か考え，実行する．

また，同校では，エコ・スクール活動担当教諭の呼びかけにより，2002 年度，ザリガニ専用の池（同校では,「ザリガニ池」と呼んでいる）が同校教諭数人によって作られている．

2）つながろう

エコ・スクール活動の一環としてメダカの里親制度を行ったことによって，2004 年度に「御園野生メダカの会」と呼ばれる組織が発足した．同組織は，2004 年度に行われたメダカの里親制度に参加した同校児童の保護者を中心とする，数名で構成されている．御園野生メダカの会のメンバーは，2004 年度のメダカの里親制度で卵から孵化させたメダカの一部を同校のやすらぎ池に放したあともメダカの飼育を続け,地域公民館の池で育てている．同校エコ・スクール担当教諭により，2005 年度の里親制度の際には，同組織メンバーがメダカの飼育方法を児童の前で教えている．同校エコ・スクール担当教諭によると，御園野生メダカの会メンバーは，同校のビオトープであるせせらぎの森の維持管理についても大変意欲的であるという．

4-2-3　御園小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ

御園小における児童の活動推進組織であるエコ委員会（環境グループ）は，児童会組織の中に位置づけられており，学校ビオトープである「せせらぎの森」を活用したウォークラリーや活動のシンボルマークを全校から募集するなどの活動を行っている．

大人の活動推進組織であるエコ・スクール支援委員会（エコ・スクール委員会）は，同校の教諭と保護者，行政関係者を含んだ地域支援者から構成され，年に数回の会合と同支援委員会メンバーが講師を務める自然観察会を主な活動としている．特に年度末の会合にはエコ・スクール委員会の児童も参加する．

しかし，2005 年度は担当教諭の忙しさや学校長の異動などにより，同支援委員会会合や

自然観察会は開催されていない．同校担当教諭は「支援委員会に行政関係者が入るのも良いが，学校で行われているエコ・スクール活動と地域とのつながりを強めるためには，もっと身近な地域の人が同支援委員会に入る必要がある．2004 年度までの支援委員会は，形だけのものになってしまっていた」と述べている．

同校の活動の特徴は，学校ビオトープであるせせらぎの森を中心とした，継続的な活動である．せせらぎの森は，実践校になる以前は荒れた状態になっていた．しかし，実践校になりエコ・スクール活動を行うようになってから，再び整備され，同ビオトープを活用した授業が増え，さらに，教諭たちの手でザリガニ専用の池が作られるまでになった．ザリガニ池の造成によって，同校の児童たちがザリガニをせせらぎの森の池にかえすことはなくなった．さらに，活動の影響により，保護者の間に「御園野生メダカの会」と呼ばれる組織が発足した. 同会は 2005 年度にはメダカの飼育方法を児童に指導している. しかし，これらの成果はエコ・スクール活動を始めたからだけではなく，担当教諭の積極的な働きかけがあった結果でもあろう．

4-3　近江兄弟社学園近江兄弟社小学校

4-3-1　近江兄弟社小学校および校区の概要

近江兄弟社小学校は近江兄弟社学園に属する全校児童数 187 人（表 4-21 参照）の滋賀県唯一の私立小学校である．学校は近江八幡市の市街地に立地するが，学校周辺には観光地として有名な八幡掘や八幡山，内湖などの自然も多く残っている．

表 4-21　近江兄弟社小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 1 日　現在）

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	合計
人数　　（人）	26	33	31	26	40	31	187
学級数（クラス）	1	1	1	1	2	1	7

同校のエコ･スクール活動に関しては, 2005 年 11 月 8 日と 12 月 12 日の 2 度にわたり，同校エコ・スクール活動担当教諭に対してヒアリング調査を行った他，随時，同教諭と電話のやり取りを行った．また，11 月 17 日には後述するシンフォニー活動の一環として行われた児童たちによる活動のワークショップを視察した．なお，後述する兄弟社村の視察は 2 回ほど行った．以下，同校におけるエコ・スクール活動について述べる．

近江兄弟社小学校は，2001 年度より滋賀県エコ・スクール推進事業に参加した．参加以降は，同校より北西約 1.5 km 離れた北の庄沢にある同校専用グラウンドの横の空き地（エコ・スクール活動を始めて以来，同校では「兄弟社村」と呼んでいる）を活用したエコ・スクール活動や体験学習に取り組んでいる．同活動開始以前の兄弟社村は，ガラスや大きな石などが転がっている荒れ地であり，同学園はその用途に困っていた．また，同時期に環境教育への本格的な取り組みが同校では検討されていた. そのような時期に, 県のエコ・スクール推進事業が始まったことを受けて，2001 年度 3 学期に同推進事業に登録，以降，エコ・スクール実践校として活動している．同校は，2004 年 3 月に，滋賀県からエコ・スクール認定校としての認定を受けた.

4-3-2　近江兄弟社小学校でのエコ・スクール活動

同校でのエコ・スクール活動の内容を，エコ・スクール活動の流れ（①さあ，はじめよう　②活動テーマと計画をつくろう　③活動しよう　④ふりかえろう　⑤学ぼう，つながろう），に沿って述べていく．

① さあ，はじめよう（キックオフ宣言，活動推進組織の設立）

1） キックオフ宣言

後述するシンフォニープロジェクトチームの児童代表者(議長)が 2002 年度 1 学期(2002 年 5 月）年度初めのシンフォニー（縦割り授業の時間）において，エコ・スクール活動への取り組みを宣言するキックオフ宣言を行った．同校では，前述した「兄弟社村」の開拓そのものをエコ・スクール活動と呼んでいる．そのため，キックオフ宣言の言葉は,「何年かかるかわからないが，世界にどこにもない村をみんなでつくろう」という内容のものであった．滋賀県エコ・スクール推進事業に登録したのは 2001 年度からであるが，実際に全校をあげての活動が始まったのは 2002 年度に入ってからである．

同校では，後述する兄弟社村（シンフォニー）プロジェクトチームが中心となり，シンフォニーの時間を活用してエコ・スクール活動（同校では，兄弟社村づくり）に取り組んでいる．シンフォニーとは，全校児童が各学年 6〜8 グループ（グループ数は，年度によって異なる）にわかれ，1〜6 年生交えて活動する縦割りの授業である．

2） 活動推進組織

近江兄弟社小学校校では，エコ・スクール実践校になる以前からあったシンフォニープロジェクトチームを兄弟社村（シンフォニー）プロジェクトチームとして児童の活動推進組織に位置づけている．学校教諭や地域の人が主要メンバーとなるエコ・スクール委員会に関しては，エコ・スクール実践校となったのを機に新たに設立された．この 2 つのチームが同校におけるエコ・スクール活動の推進組織である．

a. 兄弟社村（シンフォニー）プロジェクトチーム

同校では，前述したように，シンフォニー活動のリーダー組織であるシンフォニープロジェクトチーム（兄弟社村のプロジェクトチーム）をエコ・スクール活動での児童推進組織としている．

エコ・スクール実践校になる以前から同校では，シンフォニーの時間を利用し，花壇作りや紙すき，野焼きの製作，八幡山での昼食会などの活動を行っていた．また，シンフォニープロジェクトチームでは，シンフォニーの時間に行う各活動の計画を立てたり，奉仕活動としてユニセフへの献金活動を実施したりしていた．しかし，2001 年度よりエコ・スクール実践校となり，北の庄沢を中心とする活動を行うようになったことで，同チームの活動は一変する．

兄弟社村（シンフォニー）プロジェクトチームの構成メンバーと活動頻度を表 4-22 に示す．表中の常時活動頻度とは，同チームの話し合いを行う頻度を表す．メンバーは，希望者が立候補し，同チームに所属するようになっている（2005 年度の場合，5 年生 6 人，6 年生 6 人）．

表 4-22　近江兄弟社小学校兄弟社村プロジェクトチームの概要（2005 年度）

名称	形態	人数	担当教諭数	常時活動頻度
兄弟社村（シンフォニー）プロジェクトチーム	縦割り授業のリーダー組織（5・6 年生）	12 人	2 人	1 回/週

b.　近江兄弟社小学校エコ・スクール支援委員会

エコ・スクール実践校となったことに伴い 2002 年，近江兄弟社小学校エコ・スクール支援委員会が新たに設立された．同委員会が，エコ・スクールハンドブックにおけるエコ・スクール委員会にあたる．2005 年度の同支援委員会メンバーを表 4-23 に示す．

表 4-23　近江兄弟社小学校エコ・スクール支援委員会の構成員（2005 年度）

メンバー構成（計 14 人）	
学校	学校長
	体験学習長（エコ・スクール活動担当教諭）
	シンフォニー議長（児童）
	シンフォニー副議長（児童）
地域等支援者	S.T　氏（環境レイカーズ代表）
	M.K　氏（総合学習研究顧問，福井大学助教授）
	T.T　氏（元学園顧問，大阪経済大学教授）
	I.T　氏（北の庄沢を守る会）
	D.D　氏（陶芸家，元同校英語教師）
	N.H　氏（ビオトープ関係者）

表 4-23 に示したメンバーは，2005 年度エコ・スクール登録書に基づいて作成したものである．2001～2004 年度の登録書を見ると，支援委員会メンバーに PTA 環境美化委員の数人を入れていた年度もあり，委員会の構成メンバーは年度によって多少異なっている．また，同校支援委員会では，他の実践校のように定期的に集まる会合を設けておらず，支援委員会としての会合は，2005 年度の初めに一度開催された（T.T 氏と M.K 氏を除くメンバーで会合を開いた）だけである．同校支援委員会メンバーも，他の実践校のようには固定されておらず，兄弟社村に関わる地域支援者や保護者を同支援委員会メンバーとしているようである．

② 活動テーマと計画をつくろう

近江兄弟社小学校では，エコ・スクール実践校となって以来，「夢の兄弟社村をつくるぞ！！」というテーマのもと，活動を進めている．毎年度の大まかな予定は担当教諭があ

らかじめ決めておき，それをもとに兄弟社村（シンフォニー）プロジェクトチームの児童たちが話し合い，具体的な計画を立てていく．

また，2002 年度，レイカーズの支援のもと行った教員研修の中で教諭たちがエコ・スクール活動のシンボルマークを作った．しかし，同マークはあまり活用されておらず，2005 年度現在では，プロジェクトチームの児童が新たなシンボルマークを考えている．

③ 活動しよう

前述したように，同校では，シンフォニー（縦割り授業）の時間を利用し，兄弟社村（シンフォニー）プロジェクトチームを中心とした村（「兄弟社村」）づくりを全校あげて行っており，同校では，この活動をエコ・スクール活動としている．以下，2001 年度から 2005 年度までのシンフォニーの時間を利用した兄弟社村づくりに関する活動（同校にとってのエコ・スクール活動）の内容について説明する．

1）シンフォニーの時間を利用した兄弟社村づくりに関する主な活動の内容

同校におけるエコ・スクール活動である兄弟社村づくりは 2002 年度から本格的に始まった．

前述したように，現在の兄弟社村がある場所は，もともと荒れ地であり，クローバーをまいているだけの土地であった．兄弟社村づくりでは，そのような荒れ地から大きな石やガレキをどけて，児童が案を出しながら，後述する，現在のような村を作ってきた．

初年（2002）度のシンフォニー活動（主要なもの）を表 4-24 に示す．

表 4-24　近江兄弟社小学校シンフォニー活動の内容（2002 年度）

活動名	概要
白地図づくり	全校児童が「夢の兄弟社村」を紙に描く． シンフォニーの各班で個人が書いた絵をもとに話し合う．
昔の遊び	昔から残る遊びを教師や地域の人から学ぶ．
「兄弟社村」 白地図発表会 （ワークショップ）	代表作品を全校児童の前で紹介し，意見交流を行う． 意見交流から出てきた意見を取り入れ，再提案．
近江八幡山・ 落ち葉拾い	北の庄沢につくる畑の肥料とするため，学園近くの山へ行き，落ち葉を拾って，落ち葉から堆肥を作る．
「夢の兄弟社村」 白地図発表会 （ワークショップ）	全校の願いなど出てきた意見をふまえながら，プロジェクトチームで話し合い，代表作品 2 点に絞る． 再度，全校集会で発表し，投票によって，同村の白地図を決定．
もちつき大会 1 年の総まとめ	もちつき大会． 1 年の活動の総まとめ，活動発表を行う．
記念樹植え	シンフォニーごとに，カツラやハンノキなど，植えたい樹を決め，兄弟社村に植える．毎年数本ずつ植えていき，数年後，子どもたちが集える森ができればいい．

表 4-24 に示した活動において，話し合いの結果，決められた村づくり案（白地図）が，同校の兄弟社村の原案である．白地図発表会では，各シンフォニーから出された兄弟社村の原案が紹介され，全校児童の投票によって，代表作品が決められた（アスレチックの図案を考える際などにも，この方式で決定する．なお，このとき，シンフォニープロジェクトチームは，司会進行役を務める）．白地図の原案は 2002 年度 2 月に決定した．同白地図原案の概要を表 4-25 に示す．

表 4-25　兄弟社村づくりのテーマと村の原案の内容

テーマ「自然と資源を大切に」
・くすのきをシンボルにする． ・くすのきは高さ 40mほどまで伸び，その下にベンチを置き，休憩できるようにする． ・兄弟社村と書かれたバラのアーチをつくる． ・ログハウスは，屋根にソーラーパネルをつけ，花の時計をつける． ・花時計は少し角度をつけ，見えやすくする． ・花時計の周りには花を植える． ・壁はレンガにする． ・ハンモックは，樹の棒を使い，上と下に一つずつ作りたい． ・花壇は丸くし，どこから見ても全体が見えるようにする． ・アスレチックは遊ぶところがなくても楽しく遊べるように．

兄弟社村づくりでは，表 4-25 に示した内容を村の原案とし，兄弟社村（シンフォニー）プロジェクトチームが活動計画を立て，また，年に数回，全校児童によるワークショップを開催するなど，全校児童の意見を反映させた村づくりを行っている．

表 4-26 に 2003 年度のシンフォニー活動の概要（主要なもの）を示す．

表 4-26　近江兄弟社小学校シンフォニー活動の内容（2003 年度）

活動名	概要
北の庄沢・ 清掃作業	全校で北の庄沢の周りやグランド周辺の環境美化活動を行う（カンやビニール袋が多くあった）.
ワークショップ	前年度から数え，3 回目の兄弟社村に関するワークショップである．「私たちの力で何ができるか？」をテーマに，兄弟社村の構想案を全校児童が出し合った.
兄弟社村で遊ぼう	兄弟社村で何がしたいという問いかけ（アンケート）に対して，「兄弟社村で遊びたい」との意見が多く出た. そこで，シンフォニープロジェクトチームの児童が遊びの内容（カヌー遊び，魚釣り，写生や昆虫採取・岩石調べなどの野外活動，サッカーや野球・ドッジボールなどのグランド遊び，お昼寝，読書）を考え，これらの活動を，兄弟社村を活用して全校で行った.
穴窯づくり	8 月から穴窯を製作．11 月頃には，児童も穴窯づくりに参加した. また，陶器づくりを行った.
畑作り	2002 年度の活動で拾った落ち葉を腐らせ堆肥にした.
記念樹植え	前年度に同じ.

表 4-26 に示したワークショップでは，近江兄弟社村にあったらいいな，というものを全校児童が話し合った．その結果，「星の観測所」「花時計」「ビオトープ」「アスレチック」「森」「ひみつの基地」の 6 つの案が決まった．これら 6 つの案の詳細を表 4-27 に示す.

表 4-27　兄弟社村の原案としてあげられたものの詳細

	村の原案	児童から出た案の詳細
1	星の観測所	天体望遠鏡も設置したい.
2	花時計	どこにもない時計. 一年中いろいろな花を咲かせたい．兄弟社のマークも入れたい.
3	ビオトープ	魚がいっぱいいる池にしたい. 絶滅しそうな生き物を育てて復活させたい.
4	アスレチック	自分たちで考えたオリジナルのアスレチックが作りたい. 木で作ったブランコやタイヤ乗り，縄（ロープ）などを付けたい.
5	森	大きな木が育ったら，ツリーハウスをつくって住みたい. 竹林もいい．筍ができたら食べたい.
6	ひみつの基地	みんなで考えた絵をペインティングしたい. 部屋に入ったら，暖かくて楽しい気持ちになれる部屋にしたい. そして，泊まりたい．屋根は透明にして，手作りの家具を置き，きれいに掃除して，冬など，こたつを持ってきて寝たい.
7	その他	自然に任せ，自然のままに自由に観察したい.

兄弟社村の原案として挙げられた 6 つの案のうち，2005 年度現在，「星の観測所」「ビオトープ」「ひみつの基地」が既に近江兄弟社村に設けられている.

「星の観測所」とは，兄弟社村内の丘に大きな穴を掘り，穴の内側面に段を設けたものである．児童たちは，穴の中の段に座り，星を観測する．

「ビオトープ」は，兄弟社村の前にある北の庄沢を真似たものである（ミニ北の庄沢のようなもの）．ビオトープ内の植物は北の庄沢から移植した．同ビオトープは 2003 年度の 4 年生が中心となり，地域の専門家（2005 年度エコ・スクール支援委員会メンバーの 1 人）からアドバイスを受けながら作ったものである．ビオトープの整備作業は，主に同学年の授業を通して行われ，児童たちの保護者も同作業に参加した．

「ひみつ基地」とは，兄弟社村で授業を行う際などに活用する，一階立ての建物である．「ひみつ基地」をはじめ，兄弟社村の施設の大半が，兄弟社学園から出た廃材で作られている．例えば，「ひみつの基地」の側に設置されているキャンプ用炊事場の屋根は，学園の自転車置き場の屋根であったものを再利用したものである．2004 年度には，全校児童で，「ひみつの基地」の外壁に絵を描いた（写真 4-6，4-7 参照）．

写真 4-6　児童たちが「ひみつの基地」の外壁に絵を描いている様子

写真 4-7　児童たちが描いた「ひみつの基地」の壁面画

さらに,「アスレチック」に関しては，2005 年度のシンフォニー活動において，全校で原案を考え, ワークショップを行い, 全校児童の投票によって代表となる原画を決定した．今後，同原画をもとにしたアスレチックが兄弟社村に作られる予定である．

また,「森」づくりに関しては，毎年度，年度末に各シンフォニーのグループごとに植えたい樹を決め，カツラ，ハンノキ，クスノキ，クヌギ，コナラ，オリーブ，ケヤキなどの木を記念樹として植えている（写真 4-8 参照）．木を植える際にも，同校支援委員会メンバーなどからの専門的なアドバイスをもらう．また，木を植えている場所の近辺には，道を設け，道の端にテストピースを並べている．道に並べるテストピースは全校児童一人一人が好きな絵を描いたものである（写真 4-9 参照）．

写真 4-8　記念樹植樹の様子

写真 4-9　記念樹植樹地付近に設けられた道と児童の絵を描いたテストピース

ワークショップ（2003 年度）で出された兄弟社村の原案に加えて，2003 年度，支援委員会のメンバーである D.D 氏が中心となり，穴窯が兄弟社村に作られた．窯作りには，児童も一部の作業に参加している．さらに，窯が作られて以来，同校教諭や一部の保護者たちが，窯に火を入れる際に必要となる，薪割りの作業を行っている．

さらに，同年度（2003 年度）には，前年度の活動の時間に八幡山で拾ってきた落ち葉を一年間腐らせて作った堆肥を使い，支援委員会メンバーなどの専門家にアドバイスをもらいながら畑づくりを行った．

このように，実践校となり，エコ・スクール活動として，児童の主導によって兄弟社村

を作ってきたが，村にはトイレがない．そこで，2005 年度現在，プロジェクトチームの児童たちが，兄弟社村にバイオトイレを作ろうと計画中である．バイオトイレが提案されたのは，三県交流事業という環境省が行う事業に同校の児童が参加し，富士山へ行ったことがきっかけである（同交流事業は，滋賀県と静岡県，山梨県の小学生が集まり，環境に関する話し合いをするもの．滋賀県では，エコ・スクール実践校に対して同交流事業への参加の誘いがある）．富士山にはバイオトイレがあり，このトイレの仕組みを学んだプロジェクトチームの児童たちが，兄弟社村にもバイオトイレを作りたいと考えたようである．

2）近江兄弟社小学校エコ・スクール支援委員会の活動内容について

同支援委員会メンバーのうち，S.T 氏は，環境レイカーズの代表者である．滋賀県エコ・スクール推進事業が事業を環境レイカーズに委託していた期間，近江兄弟社小では，レイカーズから，教員研修および児童のエコ・スクール活動に関するワークショップの指導（支援）を受けていた．そのような支援がなくなった後も，同校では，教員研修（年に 2 回程度）の講師および児童によるワークショップに対する指導者として S.T 氏を活動に招いている．

大学教授である M.K 氏と T.T 氏からは，活動全般に対する意見やアドバイスをエコ・スクール活動担当教諭が年に数回，受けている．また，M.K 氏は年に 1 度，教員研修の講師も務めている．

北の庄沢を守る会の人たちとは，年に数回，児童や保護者と合同で北の庄沢の清掃活動を行っている．なお，同清掃活動は，実践校になる以前から行われていた．

陶芸家であり，同学園の元英語教諭であった D.D 氏に関しては，児童や保護者を対象とする陶芸教室を開く際，および，兄弟社村に設けた窯に火を入れる時に支援してもらっている（窯に火を入れる際には，4 昼夜泊り込みの作業となる）．

ビオトープ専門家である N.H 氏からはビオトープに関してのアドバイスをもらっている．

このように，近江兄弟社小では，他の実践校におけるエコ・スクール委員会のように年に数回の会合をもつのではなく，支援委員会に属する各メンバーがそれぞれ個人として活動に対する支援を行っている．しかし，個人として活動に参加してもらっているだけでは，参加している活動以外の活動のことがわかってもらえないことや，さらに，同支援委員会メンバーである S.T 氏（環境レイカーズ代表）からの提案もあり，2005 年度年頭に，初めて支援委員会としての会合を開いている（大学教授を除くメンバーが集まった）．

④ ふりかえろう

同校では，兄弟社村（シンフォニー）プロジェクトチームの児童が，学期ごとに活動のふりかえりを行っている．さらに，年度末には，シンフォニーの時間で行ってきた一年間の活動をまとめたシンフォニー新聞や文集を作っている．

また，エコ・スクール認定申請時（2003 年度）には，エコ・スクール推進事業事務局へ提出するチェックリストにおいても同校のエコ・スクール活動に対するふりかえりを行っている．ただし，同チェックリストでは，シンフォニープロジェクトチーム（児童）とエコ・スクール委員会（大人）ともに，すべての項目に対して「はい」（すべての項目ができている）という評価を下している．

活動の発表に関しては，シンフォニープロジェクトチームが年度末に行われる学習発表会の場において，一年間のシンフォニーでの活動内容を全校に向け，報告している．一方，学外では，滋賀県環境学習のつどい（環境学習フェア）の場において一年間の活動内容を発表している．

⑤　学ぼう，つながろう

1）学ぼう

近江兄弟社小学校では，シンフォニーの時間以外にも主に体験学習の時間を使って，各学年でも，兄弟社村を活用した授業を行うようにしている．前述したように，兄弟社村にあるビオトープは，当時の 4 年生が中心となって（授業を通して）作ったものである．現在，1 年生と 5 年生は，兄弟社村に作られた田んぼを活用して授業を行っている．田んぼの授業には，保護者の一部も参加するようである．また，兄弟社村でキャンプを行っている学年もある．

さらに，同校では，教諭たちも年に数回，支援委員会のメンバーを講師として招き，研修を行っている．

2）つながろう

近江兄弟社小学校では，兄弟社村を保護者や地域の人たちに身近に感じてもらえるよう，2003 年度より，北の庄沢親子プログラム（カヌーや陶芸教室）を企画し，各学期に 1，2 回，兄弟社村を保護者に開放している．さらに 2005 年度現在は，児童の家庭が好きなときに来て自由に遊べるようになっている．

また，同校では兄弟社村づくりに関して，支援委員会メンバー以外からの支援も受けている．支援委員会メンバー以外からの協力例として，地域に住む水資源機構の人物からマツの木を譲り受けたという事例がある．このような支援があったのは，同人物が同校の保護者を通じて兄弟社村の活動を知ったことによるそうである．このように，多方面からの支援を受けるようになり，エコ・スクール活動をはじめる以前は，学校に地域性がなかったが，同活動を行うようになり，地域とのつながりができるようになった，と同校エコ・スクール活動担当教諭は話している．

また，同担当教諭の話によると，兄弟社村を作っていくには，やはり金銭的な問題がある．活動を始めた当初はあまり協力的でなかった同学園経営陣も，兄弟社村の変化や保護

者の活動などを見て，活動に対して金銭面等でも支援をするようになったそうである．

さらに, エコ･スクール実践校になったことにより, 他の実践校と交流する機会ができ, 同校の教諭が今津中学校で行われる活動に参加し，また，反対に今津中学校の教諭が同校で行われている活動に参加したこともあった．

4-3-3　近江兄弟社小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ

近江兄弟社小における児童の活動推進組織である兄弟社村プロジェクトチーム（環境グループ）は，全校あげて行う縦割り授業（シンフォニー）のリーダー組織でもある．同授業と同チームでは，荒地だった同学園の土地を活用し，全校をあげて児童の夢の村（兄弟社村）づくりに取り組んでいる．

大人の活動推進組織であるエコ・スクール委員会は，同校の教諭と保護者，地域支援者などから構成され，同校の兄弟社村づくりを，各メンバーが個別に支援している．また，環境レイカーズに対する推進事業からの業務委託がなくなった後も, 同 NPO を講師として招いている．

同校では，シンフォニーでの活動（兄弟社村づくり）をエコ・スクール活動と位置づけている．また，他の授業でも兄弟社村をできるだけ活用するようにしており，土日に兄弟社村を開放したり，親子向けのイベントを開催したりしている．近年では，同活動に対する地域の認知も高まり，地域の団体からマツの木を譲り受けるなどの支援が得られるまでになってきた．その他，エコ・スクール実践校になったことをきっかけに，今津中との交流が生まれている．

4-4　滋賀県大津市立逢坂小学校[2)]

4-4-1　逢坂小学校および校区の概要

逢坂小は全校児童数 382 人の小学校である（表 4-28 参照）．学校は JR 大津駅の近くに立地しており，交通量の多い幹線道路に面している．一方，学校の裏には山があり，正福寺などの歴史的遺産もある．市街地の中にありながら，なお，文化の香が漂う地区に立地している．

表 4-28　逢坂小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 11 日　現在）

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	合計
人数　　（人）	62	71	54	63	65	67	382
学級数（クラス）	2	2	2	2	2	2	12

同校のエコ・スクール活動に関しては，2005 年 5 月 9 日，同校エコ・スクール活動担当教諭に対してヒアリング調査を行った他, 随時, 同教諭と電話のやり取りを行った. また, 2 月 25 日と 12 月 8 日に行われた同校エコ・スクール支援委員会会合に参加した他，7 月 29 日には後述する吾妻川の生き物調べという活動に参加した．以下，同校におけるエコ・スクール活動について述べる．

逢坂小学校は学校ビオトープをもつ. 同ビオトープは 1998 年に完成したものである. ビオトープとして整備する以前は, 単なる観察池で, 当時はゴミがたくさん散乱していたが, ゴミの学習をしていた当時の 4 年生が観察池の清掃を始めたことできっかけとなり，ビオトープを整備することになった．池の改修には，市民団体であるボテジャコトラストの協力を仰ぎ，土運びや水生植物の植え付けなどが行われた．

エコ・スクール推進事業には 2003 年度 1 学期より参加している. 同推進事業に参加したのは，2002 年度に行われたエコ・スクールセミナーに同校担当教諭が参加したことがきっかけである. 以降，エコ・スクール実践校として活動し，2005 年 3 月に，滋賀県からエコ・スクール認定校としての認定を受けた．

4-4-2　逢坂小学校でのエコ・スクール活動

同校のエコ・スクール活動の内容を，エコ・スクール活動の流れ（①さあ，はじめよう　②活動テーマと計画をつくろう　③活動しよう　④ふりかえろう　⑤学ぼう, つながろう），に沿って述べていく．

① さあ，はじめよう（キックオフ宣言，活動推進組織の設立）

1）キックオフ宣言

学校長が 2003 年度 1 学期の始業式において「環境のことを考える子どもになろう」と全校児童に呼びかけるキックオフ宣言を行った．また，学校長の異動に伴い，新しい学校長が 2005 年度 1 学期の始業式において，「みんなで進めよう！地球にやさしいこと」と全校児童に呼びかけ，改めて同宣言を行っている．

2） 活動推進組織

逢坂小では，実践校として活動を始めた 2003 年度当時，後述するように，エコ・スクール実践校になる以前から存在していたエコクラブを児童による活動推進組織としていた．しかし，2004 年度からはエコクラブをなくし，新たに児童会組織の中に環境委員会を設置した．一方，学校教諭や地域の人が主要メンバーとなるエコ・スクール委員会に関してはエコ・スクール実践校となったのを機に設立した．この 2 つの委員会が同校におけるエコ・スクール活動の推進組織である．

a. 環境委員会

逢坂小では，当初エコ・スクール実践校になる以前からあったエコクラブをエコ・スクール活動での児童推進組織としていたが，2004 年度からは児童会組織の中に新しく環境委員会という委員会を設け，同委員会が児童の推進組織を担っている．以前の活動推進組織であったエコクラブは通常のクラブ活動と違い，教育課程上に設けられた時間とは別の時間（昼休みや休日等）を利用して，3 年生以上を対象とした活動を行っていた．そのため，児童も教諭達も，活動の時間が取りにくい，といった問題を抱えていた．また，活動をもっと全校児童に広めたいという意図もあり，同クラブで行っていた活動を教育課程上の時間で活動できる児童会組織に位置づけることにした．ただし，活動内容としては，実践校となる以前から行っていた活動を継続している．

環境委員会の構成メンバーと活動頻度を表 4-29 に示す．表中の常時活動頻度とは，児童会活動として定められている時間を指す．メンバーは，基本として希望者が同委員会に所属するようになっている（2005 年度の場合，5 年生 8 人，6 年生 9 人）．

表 4-29　逢坂小学校環境委員会の概要（2005 年度）

名称	形態	人数	担当教諭数	常時活動頻度
環境委員会	児童会（5・6 年生）	17 人	3 人	1 回/月

b.　逢坂小学校エコ・スクール支援委員会

エコ・スクール実践校となったことに伴い 2003 年,「逢坂小学校エコ・スクール支援委員会」という委員会が新たに設立された．同委員会が，エコ・スクールハンドブックにおけるエコ・スクール委員会にあたる．2005 年度の同支援委員会メンバーを表 4-30 に示す．

表 4-30　逢坂小学校エコ・スクール支援委員会メンバーの構成員（2005 年度）

メンバー構成（計 14 人）	
学校	学校長
	教頭
	環境教育　兼　エコ・スクール担当
	逢坂小学校教諭　　3 人
保護者	環境委員会保護者　　2 人
	PTA 会員　　2 人
地域等 支援者	K.Y　氏（京都精華大学）
	M.M　氏（琵琶湖博物館）
	Y.N　氏（逢坂学区川を愛する会）
	K.S　氏（大津市環境監視センター）
	U.M　氏（逢坂市民センター）

同支援委員会（児童を除いたメンバー）は，学校教諭と保護者 PTA，地域支援者（行政関係者を含む）で構成される（図 4-3 参照）．

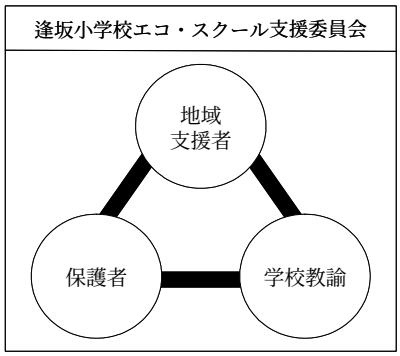

図 4-3　逢坂小学校エコ・スクール支援委員会の構成（児童を除く）

支援委員会のメンバーは, 主にエコ・スクール活動担当教諭によって選任される．なお, 支援委員会には，学校教諭から学校長と教頭，教務主任，エコ・スクール活動担当教諭や教諭の数人で構成される環境部会の中から数人が，保護者からは PTA 役員から 2 人，環境

委員会児童の保護者2人が入ることになっている. PTA役員に関してはPTA会長に依頼し，また，環境委員会の保護者に関しては，担当教諭が頼みやすい人に声をかけ，委員になってもらっているという.

地域支援者に関しては，各年度によってメンバーが若干異なる．2003～2005年度までの地域支援者メンバーの変遷を表4-31に示す.

表4-31　逢坂小学校エコ・スクール支援委員会中の地域支援者の変遷

エコ・スクール支援委員会　地域支援者	2003年	2004年	2005年
M.M　氏（琵琶湖博物館）	委員	委員	委員
K.S　氏（大津市環境監視センター）	委員	委員	委員
N.T　氏（逢坂学区川を愛する会）	委員		
Y.N　氏（逢坂学区川を愛する会）		委員	委員
Y.M　氏（逢坂市民センター）	委員		
U.M　氏（逢坂市民センター）		委員	委員
K.Y　氏（京都精華大学）			委員

同支援委員会メンバーのうち，地域の支援者には，有識者数人と行政関係者2人，地域の川に関わる団体の会長が選任されている.

次に，地域支援者に関して，各メンバーの選任された理由を表4-32に示す.

表4-32　逢坂小学校エコ・スクール支援委員会メンバー（地域支援者）の選任理由

	支援委員会メンバー	学校との関係および支援委員会としての選任理由
地域支援者	K.Y氏 （京都精華大学教授）	孫が逢坂小学校に通う. エコ・スクール活動担当教諭が，あるイベントで知り合ったのがきっかけ.
	M.M氏 （琵琶湖博物館）	元逢坂小学校PTA. 博物館では魚類生態学が専門であり，有識者として選ばれた.
	Y.N氏 （逢坂学区川を愛する会）	地域の河川に関わる団体の会長. 実践校になる以前から，同団体と一緒に河川清掃等を行っていたため.
行政関係者	K.S氏 （大津市環境監視センター）	大津市子どもエコクラブ担当者. 同校の環境委員会が大津市子どもエコクラブにも所属しているため.
	U.M氏 （逢坂市民センター）	公民館職員. 地域公民館で行われるイベントに，同校児童の多くが参加しているため.

エコ・スクール支援委員会のうち，表 4-32 に示したメンバーに対しては，年度始めにエコ・スクール活動担当教諭が電話等で就任の内諾を得る．

② 活動テーマと計画をつくろう

逢坂小学校では，「みんなで作ろう！21 世紀のモデルスクール」というテーマのもとに活動している．同テーマはエコ・スクール実践校になった当時（2003 年度）のエコクラブ児童が決めたものである．環境委員会の活動に関しては，年度初めの委員会で計画を立てる．活動計画は，前年度の計画を参考に立てられており，環境委員会で行う活動の中には，2005 年度現在，10 年近く継続されているものもある．

③ 活動しよう

同校エコ・スクール活動推進組織（環境委員会とエコ・スクール支援委員会）が，2003 年度から 2005 年度までの間に行ってきたエコ・スクール活動の内容について説明する．

1）環境委員会（2003 年度：エコ・クラブ）の活動について

環境委員会の 2003～2005 年度までの活動内容を表 4-33 に示す．なお，表中の活動名下に活動年度を記したものは，記した年度限りのもの，記していないものは毎年度行っているものを表す．

逢坂小学校では，エコ・スクール実践校になる以前から，廃食油を利用した石けんづくりや中庭にある池の清掃などの活動を行っていた．石けんづくりは，2005 年度現在で既に 10 年以上続いている活動である．このように継続した活動が可能なのは，環境教育担当教諭がこの間異動せず，活動をひっぱってきたからである．現在の環境委員会で行われている活動も，実践校になる以前から行っていた活動を引き継いでいるものが多い．しかし，2004 年度からは，廃油の回収を全校児童に呼びかける等の活動も行っており，新しい活動も見られる．

表 4-33　逢坂小学校環境委員会の活動内容（2003～2005 年度）

活動名	詳細
ビオトープでの 自然観察，整備	同校ビオトープや校地内での自然観察. ビオトープの池周辺の手入れ.
学校玄関の観察コーナー （ボテジャコ）の世話	ビオトープで発見した生き物を水槽に入れ, 学校玄関の観察コーナーに置き, 同委員の中で, 興味のある児童が世話をする．モリアオガエルやボテジャコなどが主.
中庭の池の清掃	中庭の池（十字池）の清掃.
吾妻川の清掃（月 1 回）	2005 年度は，5，6，10，12 月に実施. 清掃に加え，生き物の調査も同時に行う.
牛乳パックとヨシで 紙すき（2003 年度）	牛乳パックとヨシを用いた紙すきを行う.
EM 菌による給食の 残飯の肥料化	EM 菌を用いた給食残飯の肥料化.
「こんな学校にしたいな」 アンケート（2003 年度）	2006 年の学校校舎および敷地の改築をふまえ，全校児童に対して，どんな学校にしたいかを聞くアンケートを実施.
廃油回収（毎週金曜日に） （2004，2005 年度）	全校児童に呼びかけ，廃油の回収を行う（2004 年度は 10 *l* 程度回収）．毎週金曜日の登校時に環境委員の児童と担当教諭が回収所に待機し，児童が持ってきた廃油を受け取る．集まった廃油は，業者へ引き渡している.
ヨシの栽培および植え付け （2004，2005 年度）	学校の中庭でヨシを栽培し，植え付けを行う. 各年とも，大津市にある淡海環境保全財団の人を講師に招き，ヨシの学習も行う.
節電と節水の呼びかけ （2005 年度）	スイッチ付近に省エネを呼びかけるカードをつける.
児童会行事	エコフェスティバル（2003 年度）エコ・スポフェスティバル，（秋風祭）ネイチャーゲームの実施.
校内文化祭でのパネル発表	校内文化祭において，活動の発表をパネルの展示にて行う.
三県こども環境交流事業 参加（2004，2005 年度）	夏休み期間中にメンバー数人が，環境省事業である「子ども環境交流会議」に参加．同会議への参加は，滋賀県からの呼びかけによる.
滋賀県 環境学習のつどい参加	滋賀県環境学習のつどい（環境学習フェア）にて，同校のエコ・スクール活動内容を記した壁新聞の展示を行う.
大津市 PTA 環境シンポジウムへの参加 （2003 年度）	大津市 PTA 環境シンポジウムにおいて活動の発表を行う.
おおつエコ祭りへの参加 （2005 年度）	おおつエコ祭りでの「子ども環境交流事業」に参加 （2005 年度は環境委員会から児童 3 人が出席）.

また，環境委員会が直接主催している活動ではないが，環境委員会と学校長の名で案内文書が出され，4 年生以上の児童を対象に参加の募集を行う活動を表 4-34 に示す．これらの活動は，休み期間中に行われるため，環境委員会の児童が必ずしも参加するというわけではない．また，同表に示す活動は，同校がエコ・スクール実践校になる以前から毎年，行われているものである.

表 4-34　逢坂小学校のエコ・スクール活動において 4 年生以上の児童を対象としたもの

活動名	詳細
天ぷらの廃油を使った石けんづくり（2005 年度は台風のため中止）	4 年生以上を対象とし，全校児童に活動への参加を呼びかけ，廃油を用いた石けんづくりをおこなう．
逢坂学区河川掃除（6，9 月）	逢坂の川を愛する会主催． 学校の側を流れる吾妻川の清掃活動に参加する．
吾妻川の生き物調べ，モリアオガエルのおたまじゃくしの放流（7 月）	同校の側を流れる吾妻川にて，生き物調査を行う． 大津環境フォーラムという団体の数人が講師を務める． また，生き物調査を行う直前に，学校玄関で飼育していたモリアオガエルのおたまじゃくしを同校ビオトープに放す．

2）逢坂小学校エコ・スクール支援委員会の活動内容について

支援委員会は 2003 年 11 月に発足した．同支援委員会の活動は，年 3 回の会合（年に 2 回の年もある）が中心である．各会ともに学校で行っている環境教育（環境委員会の取り組みと各学年で行う総合学習での授業内容等）について主に話し合う．毎年，年度はじめの第一回目の会合では，児童の環境委員会で行う活動や授業での環境学習に関する該当年度での計画の説明を，第三回目の年度終わりの会合では一年間の活動報告を，エコ・スクール活動担当教諭（環境教育担当）が同支援委員会メンバーに対して行っている．なお，油日小や御園小のように児童が同席して活動を発表することはない．

過去に行われた支援委員会会合では，会合での担当教諭からの活動報告によって，ようやく児童の活動が見えてきたという意見が支援委員会メンバーから出たようである．また，2004 年度末に行われた同委員会会合では，同校のエコ・スクール活動に対して，活動を地域へ発信する機会が少ないことや活動に対する全校での意識の共有化が低いといった指摘があった．そのため，同会合では同委員会のメンバーによって地域へ発信する形の活動案が提案された．一方，2005 年度の同委員会会合では，同委員会のメンバーから，児童の環境委員会が一年間で行う活動の種類が多すぎるのではないか，という意見もあった．

また，同支援委員会の主催ではないが，委員会メンバーは，夏休みに行われる「吾妻川の生き物調べ」などの活動にも参加するようにしている．

④　ふりかえろう

同校では，年度末に，環境委員会やエコ・スクール支援委員会等の場で一年間の活動のふりかえりを行う（エコ・スクール支援委員会に児童は参加しない）．

また，エコ・スクール認定申請時（2004 年度）にエコ・スクール推進事業事務局へ提出したチェックリストには，環境委員会，エコ・スクール支援委員会ともに，◎と○，△，×の四段階で，それぞれが同校のエコ・スクール活動に対する評価（ふりかえり）を行っ

ている．2004 年度申請時に提出されたチェックリストの中で△印と×印が記入された項目を表 4-35 に示す．

環境委員会とエコ・スクール支援委員会が記入したチェックリストを見ると，2004 年度の時点では，エコ・スクール活動に関して，環境委員会，支援委員会ともに，学校内での活動の共有化や地域への発信，また，活動を進めていく上での計画性や各プロセスに不十分な点があると感じていたことがわかる．

表 4-35　エコ・スクール認定申請時のチェックリスト（2004 年度）における△，×印の項目

	項目
環境委員会	みんながキックオフ宣言を知っているか．
	考えた活動のテーマ（ゴミの量や電気の使用量，生き物，水など）についての詳しい調査をしているか．
	活動目標や計画を，学校や地域の人に知らせているか．
	キャッチフレーズやシンボルマークをみんなや先生と話し合って決めているか．
	自分たちの意見が受け入れられる環境グループ，エコ・スクール委員会や活動になっているか．
	計画通り活動が進んでいるか調べているか．
エコ・スクール支援委員会	宣言が学校全体で共有だれているか．
	活動のテーマや目標はわかりやすいものになっているか．
	期限を設定した達成可能な活動目標となっているか．
	目標達成状況を図る基準づくりのため，より詳細な調査ができているか．
	活動目標や計画がよく目立つ所に掲示され，新たな項目追加があれば更新されているか．
	活動のためのキャッチフレーズやシンボルマークをつくっているか．
	評価・ふりかえりのプロセスを，次の活動や新たな目標につなげるため，ふりかえりの結果が学校で共有されているか．
	活動の成果やふりかえりの結果を学校や家庭，地域に知らせているか．
	多くの人々に参加を呼びかけ，情報を提供しているか．

活動成果の発表に関しては，前述したようにエコ・スクール活動担当教諭が年度末の支援委員会の会合において，一年間の活動内容を報告している．一方，学外では，環境委員会の児童および同活動担当教諭が大津市 PTA 環境シンポジウムや滋賀県環境学習のつどい（環境学習フェア）の場において一年間の活動内容を発表している．

⑤ 学ぼう，つながろう

1）学ぼう

逢坂小学校では,「わたしの生き方を考えよう」というテーマのもと，総合的な学習の時間に，地域や人々と関わる内容の授業を行っている．表 4-36 に各学年で行っている総合的な学習の時間での授業内容を示す．同校では，環境委員会を中心とした活動と総合的な学習の時間とを環境学習の柱にしている．

表 4-36　逢坂小学校総合的な学習の時間における授業内容（2002～2004 年度）

学年	授業内容	
	（地域の）環境にかかわる学習	人とのかかわりを中心にした学習
1 年生	自然を生かして遊ぼう （校地の草花，昔からの遊び）	なかよく遊ぼう（幼稚園との交流）
2 年生	自然のなぞなぞずかん （校地の生き物，昔からの遊び）	なかよく遊ぼう（幼稚園との交流）
3 年生	ビオトープの生き物や草花, 大津祭	お年寄りと仲良くしよう （老人ホーム訪問）
4 年生	吾妻川	
5 年生	琵琶湖から学ぼう	楽しくすごそう，ふれあいタイム，給食交流会（幼稚園との交流）
6 年生	逢坂学区を考える （よりよい町，よりよい学校づくり）	国際交流を進めよう

なお，2004 年度の 4 年生で行われた吾妻川の授業は PTA も授業に参加できる形になっており，このことが，2004 年度の年度末に行われた支援委員会会合にて，同委員会メンバーより高く評価されている．

2）つながろう

同校のエコ・スクール活動には，淡海環境保全財団やおおつ環境フォーラムの人たちが支援を行っている．淡海環境保全財団が同校を支援するようになったのは，同校エコ・スクール活動担当教諭が同財団に連絡を取ったことがきっかけである．

また，同校エコ・スクール支援委員会のメンバーとして 2005 年度から新しく加わった K.Y 氏は，同支援委員になったことにより，2005 年度，夏休みの教員研修（防災に関する内容）や授業などでの講師を務めている．

その他，エコ・スクール活動の一環として作った廃油石けんは，2004 年度には同校のバザーで販売された．廃油石けんの売り上げは EM 菌の購入費等にあてているそうである．また，廃油石けんは同校の職員室でも使用している．

4-4-3　逢坂小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ

逢坂小における児童の活動推進組織である環境委員会（環境グループ）は，児童会組織の中に位置づけられており，実践校となる以前から行っていたビオトープでの自然観察会などの活動を行っている．活動の中には，10 年以上継続されているものもあるが，近年では，廃油回収など，全校を巻き込んだ新しい活動も始まっている．同委員会は，大津環境フォーラムや淡海環境保全財団の職員等から年に数回，活動への支援を受けており，その他，学外の場での発表にも積極的である．

大人の活動推進組織であるエコ・スクール支援委員会（エコ・スクール委員会）は，同校の教諭と保護者，行政関係者を含んだ地域支援者から構成され，年 3 回の会合を主な活動としている．

同校の特徴のある取り組みとしては，地域を流れる吾妻川をフィールドとしたものがある．河川愛護団体が主催する同河川の清掃活動に同校児童が参加したり，同河川で生き物調査を行ったり，同河川の学習を 4 年生の総合的な学習の時間の中に取り入れるなどの活動に取り組んでいる．

4-5　滋賀県安土町立老蘇小学校[3)]

4-5-1　老蘇小学校および校区の概要

老蘇小は全校児童数 208 人と比較的規模の小さな小学校である（表 4-37 参照）．同校の近くには，国道 8 号線や新幹線が通っているが，その一方，学校周辺には住宅地や田畑が広がっており，また，校区には，観音寺山や箕作山，老蘇の森などがあり，自然と歴史的遺産に恵まれた地区に立地している．

表 4-37　老蘇小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 7 日現在）

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	合計
人数　　（人）	28	32	31	39	40	38	208
学級数（クラス）	1	1	1	1	1	1	6

同校のエコ・スクール活動に関しては，2005 年 5 月 18 日と 12 月 7 日の 2 度にわたり，同校エコ・スクール活動担当教諭に対してヒアリング調査を行った他，随時，同教諭とのメールや FAX，電話のやり取りを行った．また，10 月 13 日には同校の地域を活かした授業の視察を行った．以下，同校におけるエコ・スクール活動について述べる．

老蘇小では 1998 年，当時の学校長の発案により学校ビオトープをつくることになった．このため，当時の PTA 会長と教頭（理科担当）が中心となり，保護者にも呼びかけ，ビオトープ企画委員会（発足当時，保護者 9 人と教諭 3 人）を発足させた．2000 年 9 月から始まったビオトープの造成には同委員会メンバーとともに，その他の保護者や児童も一部，参加している．ビオトープは 2001 年 3 月に完成．それ以降，同ビオトープは各学年で行われる環境学習で活用されている．また，ビオトープの完成後，同校 PTA 組織の中にビオトープを維持管理するための「ビオトープ委員会」が設置された．

当時の学校長が環境学習 NPO である環境レイカーズ代表者と話し合ったことがきっかけとなり，2003 年度 1 学期にエコ・スクール推進事業に登録，以降，エコ・スクール実践校として活動している．同校は 2005 年 3 月に，滋賀県からエコ・スクール認定校としての認定を受けた．

4-5-2　老蘇小学校でのエコ・スクール活動

同校のエコ・スクール活動の内容を，エコ・スクール活動の流れ（①さあ，はじめよう　②活動テーマと計画をつくろう　③活動しよう　④ふりかえろう　⑤学ぼう, つながろう），

に沿って述べていく．

① さあ，はじめよう（キックオフ宣言，活動推進組織の設立）

1） キックオフ宣言

学校長が 2003 年度 1 学期の始業式において，「環境にやさしい生活をするため私たちは学習し行動しましょう」と全校児童に呼びかけるキックオフ宣言を行った．

2） 活動推進組織

老蘇小では，児童，大人ともにエコ・スクール実践校になる以前からあった委員会を活動推進組織としている．

a．環境委員会

エコ・スクール実践校になった当初，同小学校ではビオトープ整備時からあった児童会ビオトープ委員会をエコ・スクール活動における児童推進組織としていた．しかし，その後，2004 年度からは新たに環境委員会という委員会を設置し，同委員会を推進組織としている．ただし同委員会は，新たな活動をするために作られたものではなく，児童や教諭の減少に伴い，以前からあった児童会のビオトープ委員会と美化委員会，栽培委員会を統合したものである．したがって，環境委員会には，ビオトープと美化，栽培の 3 グループが含まれる．

環境委員会の構成メンバーと活動頻度を表 4-38 に示す．表中の常時活動頻度とは，児童会活動として定められている時間を指す．メンバーは，基本として希望者が同委員会に所属するようになっている．なお，2005 年度の環境委員会メンバーは，ビオトープグループが 5 人，美化グループが 4 人，栽培グループが 4 人の内訳である．

表 4-38　老蘇小学校環境委員会の概要（2005 年度）

名称	形態	人数	担当教諭数	常時活動頻度
環境委員会	児童会（5・6 年生）	13 人	3 人	1 回/月

b．老蘇小学校 PTA ビオトープ委員会

前述したように，老蘇小では，学校ビオトープの造成計画が立てられた 1998 年に，保護者と教諭で構成されるビオトープ企画委員会が発足している．また，ビオトープが完成した 2001 年度からは，PTA 組織の中にビオトープの維持管理を担当するビオトープ委員会が設置されている．

同小学校では，同委員会をエコ・スクールハンドブックにおけるエコ・スクール委員会としている．2005 年度の同委員会メンバーを表 4-39 に示す．

表 4-39　老蘇小学校 PTA ビオトープ委員会の構成員（2005 年度）

メンバー構成（計 10 人）		数（人）
学校	学校長	1
	教頭	1
	教諭（PTA 研修部担当）	2
	環境委員会委員長	1
保護者	PTA 副会長	1
	PTA 研修部長	1
	PTA　OB	3

老蘇小 PTA ビオトープ委員会（児童を除いたメンバー）は，学校教諭と保護者 PTA（PTA の OB を含む）で構成される（図 4-4 参照）．

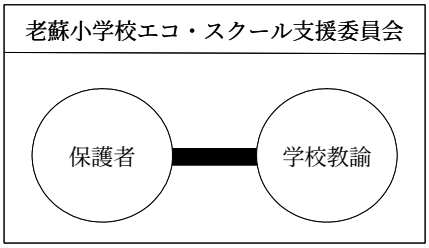

図 4-4　老蘇小学校 PTA ビオトープ委員会の構成員（児童を除く）

同校 PTA 組織は，本部役員と専門部会にわかれ，さらに専門部会は研修部，環境厚生部，保健安全部，広報補導部，学年部の 5 つにわかれる．そのうち，ビオトープ委員会には，研修部の数人と本部役員から PTA 会長と副会長が所属する仕組みになっている．また，ビオトープ造成時に携わっていた当時の保護者も同委員会に所属している．学校教諭に関しては，校長，教頭，PTA 研修部担当教諭，ビオトープ担当教諭が同委員会に入ることになっている．

② 活動テーマと計画をつくろう

老蘇小は 1998 年度よりから「生きる力を身につけた老蘇っ子の育成」というテーマを校内の研究主題として掲げ，環境教育と英語教育，情報教育に力を入れている．その中でも

環境教育に関しては「地域の環境を活かした環境学習」というテーマをさらに設け，今日まで取り組んでいる．なお，同校では，同テーマをエコ・スクール活動のテーマにもしている．

環境委員会や PTA ビオトープ委員会（エコ・スクール活動での推進組織）としての年間の計画は，ともにそれぞれ年度初めに話し合い，決めている．

③　活動しよう

同校エコ・スクール活動推進組織（環境委員会（児童会ビオトープ委員会）と PTA ビオトープ委員会）が 2003 年度から 2005 年度までの間に行ってきたエコ・スクール活動の内容について説明する．

1）環境委員会（2003 年度までの児童会ビオトープ委員会）の活動について

環境委員会では常時活動として，ビオトープの点検（ビオトープグループ）や掃除用具の点検（美化グループ），花の水やり（栽培グループ）などを行っている．2003 年度には，「老蘇なんでも発見」という用紙を全校に配布し，児童が校区で発見したものを同用紙に記入後，校区が描かれた地図上に同用紙を貼る，という活動を行っている．同用紙に記入された内容は同委員会が全校に発信した．2005 年度の活動内容を表 4-40 に示す．

なお，同表中の「クリーン大作戦」とは学校全体で行う地域清掃であり，同委員会では，全校生徒で行った掃除の結果をまとめ，放送などによって全校に知らせるといった活動を行っている．また，「イベントの開催」とは，環境委員会が全校児童に呼びかけ，昼休み等を活用し，ビオトープでのメダカとりや虫探しなどを行うものである．

同委員会では，通常の活動はグループ（ビオトープ，美化，栽培）ごとに当番を決めて行い，何かイベントを行う場合は委員会メンバー全員で行う活動形態をとっている．

表 4-40　老蘇小学校環境委員会の年間活動計画（2005 年度）

月	活動概要
5	ビオトープの手入れ.
6	花の植え込み，ビオトープの生き物やメダカの展示.
7	クリーン大作戦，掃除用具の点検.
9	花の世話.
10	ビオトープの手入れ，イベントの開催.
11	掃除用具の点検，花の手入れ.
12	クリーン大作戦.
1	ビオトープと花の手入れ.
2	クリーン大作戦，掃除用具の点検.
3	一年間の反省.

2）老蘇小学校 PTA ビオトープ委員会の活動内容について

PTA ビオトープ委員会では，毎年 1 回の会合に加えて，ビオトープの整備作業を年 5 回程度行っている．また，ビオトープを活用した自然観察会も年 2 回開催している．

ビオトープの整備作業には全校児童にも参加を呼びかける（通常の整備作業の場合には，対象学年を決めて呼びかける．スペシャル作業日には全校児童に対して参加の呼びかけを行う）．さらに，同校の敷地に隣接している幼稚園の保護者に，同校ビオトープの整備作業への参加を呼びかける場合もある．なお，毎回のビオトープ整備作業では，参加者が楽しみながら活動できるように，作業とイベント（エコパンづくりなどの企画）を同じ日に行うといった工夫もしている．一方，自然観察会は，PTA 研修部が主体となって実施している取り組みである．

毎年，年度初めの会合では，同委員会の前年度の活動報告が行われ，その後，当該年度の委員会としての取り組みについて話し合い，計画を立てる．

同委員会による，2003 年度から 2005 年度までの会合以外の活動を表 4-41 に示す．2003 年度 1 月に同校で行われた学校ビオトープシンポジウムでは，多くのビオトープ関係者が同校を訪れ，同校ビオトープの視察を行った．

また，ビオトープの整備作業に関する報告は，同委員会のメンバーが簡単な報告書にまとめ，全校に配布する他，学校通信の中で学校長が紹介することもある．

表 4-41　老蘇小学校 PTA ビオトープ委員会の活動内容（2003～2005 年度）

年度	月	活動の概要
2003	6	事業計画（PTA ビオトープ委員会）， ビオトープ整備作業，田植え，野菜の天ぷら．
	7	ビオトープ整備作業．
	8	ビオトープ整備作業，エコパン作り．
	9	ビオトープ整備作業+エコパン作り（公募）．
	10	自然観察会+稲刈り+ビオトープ整備作業（公募）．
	1	第 2 回全国学校ビオトープシンポジウムエクスカーション会場受入．
2004	5	ビオトープ整備作業．
	6	ビオトープ整備作業+もち米の苗植え．
	6	第一回自然観察会+草花の天ぷら．
	9	第二回自然観察会．
2005	5	スペシャル整備作業．
		ビオトープ整備作業+カートンドッグ．
	6	ビオトープ整備作業+野菜の天ぷら．
		ビオトープ整備作業（臨時作業）．
		ビオトープにて水車の製作，設置．
	7	ビオトープ整備作業+流しそうめん．
	9	ビオトープ整備作業+エコパン．
	10	ビオトープ整備作業+稲刈り+竹ご飯．

④　ふりかえろう

同校では，環境委員会が各年度末の児童会活動で一年間の活動のふりかえりを行っており，次年度への活動の引継ぎは，年度末に全校児童が集まる 6 年生を送る会で行う．

エコ・スクール認定申請時（2004 年度）にエコ・スクール推進事業事務局へ提出したチェックリストには，環境委員会，PTA ビオトープ委員会ともに◎，○，△の三段階で，それぞれが同校のエコ・スクール活動に対する評価（ふりかえり）を行っている．同チェックリストの中で△印が記入されていた項目を表 4-42 に示す．

表 4-42　エコ・スクール認定申請時のチェックリスト（2004 年度）における△印の項目

	項目
環境委員会	友だちや先生，家の人，地域の人たちからの意見をよく聞いているか．
	計画通り活動が進んでいるか調べているか．
PTA ビオトープ委員会	宣言が学校全体で共有されているか．
	活動目標や計画がよく目立つ所に掲示され, 新たな項目追加があれば更新されているか．
	活動のためのキャッチフレーズやシンボルマークをつくっているか．
	活動の進み具合を確認し，必要に応じて計画を見直しているか．
	子どもたち自身が評価・ふりかえりを行っているか．
	活動の成果やふりかえりの結果を学校や家庭，地域に知らせているか．

環境委員会と PTA ビオトープ委員会が記入したチェックリストを見ると，2004 年度の時点では，両委員会ともに，学校でのエコ・スクール活動に関して，全校や地域に向けた活動の報告や実践活動のふりかえりなどの点が弱いと感じていたことがわかる．

⑤　学ぼう，つながろう

1）学ぼう

老蘇小では，同校ビオトープや地域の自然をいかした授業がエコ・スクール実践校になる以前から行われていた．同校がエコ・スクール推進事業事務局に提出した 2005 年度のエコ・スクール活動計画書を参考に，同校におけるビオトープや地域の自然を活用した授業を表 4-43 に示す．

表 4-43　老蘇小学校における学校内や地域の自然を活かした環境教育の内容（2005 年度）

学年	授業概要
1 年生	ビオトープにて，よもぎもちパーティー（幼稚園との交流を通して）.
	春や秋の虫さがし.
	十三仏（石寺の森）で秋を楽しもう（おうみ森っこスクールの協力にて）.
2 年生	種送り集会.
	春や秋の花や虫探検.
	十三仏の木の実であそぼう（おうみ森っこスクールの協力にて）.
3 年生	カブト虫をふやそう.
	菜種を育てよう（おうみ森っこスクールの協力にて）.
	校内，町内めぐり.
4 年生	轟川探検～愛知川探検～西の湖探検.
	魚のゆりかご水田学習（田んぼで鮒を放流）（東近江振興局と連携）.
	森林間伐体験（おうみ森っこスクールの協力にて）.
5 年生	あいがも農法での農業体験(グリーンファームの協力にて).
	琵琶湖学習（マキ水泳場，びわ湖フローティングスクール，沖島）.
	学習したことを NHK 放送体験クラブで伝えよう！
	親子もちつき大会.
6 年生	歴史・自然体験学習（安土城考古学博物館，奈良・三重方面）.
	沖島体験学習（未来のびわ湖を考えよう）.
	植林体験学習.

前述したように，老蘇小学校では,「地域の環境を活かした環境学習」というテーマの下に環境教育を行っている．そのため，同校では，毎年，学年ごとに同テーマに基づいた授業内容を検討し授業計画を立てている.

2）つながろう

PTA ビオトープ委員会以外の地域支援者を 2004 年度のものを例として, 表 4-44 に示す.

同表中の「西の湖の漁師」「農業改良普及員」「グリーンファーム 21」からの支援に関しては, 毎年, 同支援者および団体との連絡を安土町役場とともに老蘇小学校が取っている.

表 4-44　PTA ビオトープ委員会以外での地域との連携（老蘇小学校，2004 年度）

	老蘇小学校との関わり
東近江地域振興局 森林整備課・環境課	おうみ森っこスクール．
西の湖の漁師	4 年生の授業の中で，西の湖の学習をする際，講師をしてもらう等の支援を受けている．
農業改良普及員 グリーンファーム 21	5 年生の授業の中で，田んぼの学習をする際，支援を受けている．
ヨシ職人	4 年生の授業の中で，ヨシの勉強を行うとき際，支援を受けた．
滋賀県バイコロジー運動を進める会	レイカーズの支援もあり，6 年生の児童たちが，環境への啓発運動を目的に，自転車に乗って琵琶湖一周を行った． 同会は，その際の支援団体である．

4-5-3　老蘇小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ

老蘇小では，実践校になる以前からあった組織をそのまま推進組織にしているため，活動に関して実践校になる前後での変化はあまり見られない．

児童の活動推進組織である環境委員会（環境グループ）は，児童会組織の中に位置づけられており，学校ビオトープでのイベントなどを主な活動としている．

大人の活動推進組織である PTA ビオトープ委員会（エコ・スクール委員会）は，同校の教諭と保護者（保護者 OB を含む）から構成されており，保護者が中心となった活動組織になっている．同委員会は，同校にビオトープが整備されて以来，年に数回の会合と自然観察会の開催やビオトープの整備などを継続的に行ってきた．

同校では，エコ・スクール実践校になる以前から，ビオトープを中心とした活動が盛んであり，実践校になった以降も，同ビオトープを中心に PTA ビオトープ委員会や児童の環境委員会が活発に活動を展開している．また，同ビオトープを授業でも活用するなど，地域と学校をあげて活動に取り組んでいる．

4-6　滋賀県東近江市立能登川南小学校[4)]

4-6-1　能登川南小学校および校区の概要

能登川南小は全校児童数 587 人と比較的規模の大きな小学校である（表 4-45 参照）．児童数はここ数年，増加の傾向にある．学校は JR 能登川駅の近くに立地しており，周辺には商店街や工場，住宅地が広がっている．一方，学校から徒歩約 5 分のところには猪子山と呼ばれる里山があり，また，湧水が豊富で，水のきれいな川が学校付近を流れている．その他，古墳や遺跡などもあり，歴史的遺産物にも恵まれた地区である．同校は，2006 年 1 月 1 日の市町村合併後，能登川町立から東近江市立に変わった．

表 4-45　能登川南小学校の児童数と学級数（2005 年 5 月 26 日　現在）

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	合計
人数　　（人）	99	119	91	94	102	82	587
学級数（クラス）	3	3	3	3	3	3	18

同校のエコ・スクール活動に関しては，2005 年 5 月 20 日と 10 月 4 日の 2 度にわたり，同校エコ・スクール活動担当教諭に対してヒアリング調査を行った他，随時，同教諭とメールや電話のやり取りを行った．また，2 月 16 日と 10 月 24 日には同校環境グループの活動を視察した他, 11 月 2 日には後述する猪子山活動に参加した. 以下, 同校におけるエコ・スクール活動について述べる.

能登川南小はエコ・スクール実践校に登録する以前から，全校での環境学習を学校近くの里山（猪子山）で年 2 回行っていた．また，学校付近を流れる川（山路川）を活用した水環境学習を 5 年生の授業に取り入れていた．しかし，山や川を活用した環境学習は行えているが，授業で学んだ知識が実践的な活動に活かされていないと学校長が感じていたことがきっかけとなり，2003 年度にエコ・スクール推進事業に登録，以降，エコ・スクール実践校として活動している．同校は 2005 年 3 月に，滋賀県からエコ・スクール認定校としての認定を受けた.

4-6-2　能登川南小学校でのエコ・スクール活動

同校のエコ・スクール活動の内容を，エコ・スクール活動の流れ（①さあ，はじめよう　②活動テーマと計画をつくろう　③活動しよう　④ふりかえろう　⑤学ぼう, つながろう），に沿って述べていく.

① さあ，はじめよう（キックオフ宣言，活動推進組織の設立）

1） キックオフ宣言

学校長が 2003 年度 1 学期（2003 年 4 月）の始業式において，「現在，大きな問題となっている環境問題を全校で考え，ふるさとの美しい山，美しい川，そしてびわ湖を守っていくことが大切です．環境に優しい学校，エコ・スクールに全員で取り組みましょう」とのキックオフ宣言を行った．翌年度（2004）以降，同宣言は行われていないが，後述するエコ・スクール委員会からの活動の報告は全校児童に向け，毎月 1 回行われている．

2） 活動推進組織

活動開始年度（2003 年度）に，児童が主体となる「エコ・スクール委員会」と学校教諭や地域の人が主要メンバーとなる「能登川南小学校エコ・スクール支援委員会」の 2 つの組織が新たに設立された．この 2 つの委員会が同校におけるエコ・スクール活動の推進組織である．

a. エコ・スクール委員会

実践校になったことに伴い，「エコ・スクール委員会」という委員会（環境グループ）が 2003 年 4 月，児童会組織の中に作られた．同委員会が，能登川南小学校におけるエコ・スクール活動での児童推進組織になる．

実践校になる以前は，環境に関する委員会として「環境美化委員会」と「栽培委員会」があった．「環境美化委員会」では掃除用具の点検を，「栽培委員会」では花の水やりなどを行っていた．これら両委員会をなくし，新たに，エコ・スクール委員会を作ったことで，活動は一変する．

エコ・スクール委員会の構成メンバーと活動頻度を表 4-46 に示す．表中の常時活動頻度とは，児童会活動として定められている時間を指す．活動内容が多い時期には週 1 回以上（多い時で週 4 日連続）・昼休みなどの時間に集まって，活動することもある．なお，メンバーの配属方法は，各クラスより何人という形をとっており，基本として希望者が同委員会に所属するようになっている（2005 年度の場合，5 年生 8 人と 6 年生と 9 人が選出されている）．エコ・スクール活動担当教諭によると，メンバー内でも活動に対しての温度差があるようである．

表 4-46　能登川南小学校エコ・スクール委員会の概要（2005 年度）

名称	形態	人数	担当教諭数	常時活動頻度
エコ・スクール委員会	児童会（5・6 年生）	17 人	3 人	2 回/月

b.　能登川南小学校エコ・スクール支援委員会

エコ・スクール実践校となったことに伴い 2003 年，能登川南小学校エコ・スクール支援委員会という委員会が新たに設立された．同委員会が，エコ・スクールハンドブックにおけるエコ・スクール委員会にあたる．2005 年度の同支援委員会メンバーを表 4-47 に示す．

表 4-47　能登川南小学校エコ・スクール支援委員会の構成員（2005 年度）

メンバー構成（計 15 人）	
学校	学校長
	教頭
	エコ・スクール担当　兼　教務
	エコ・スクール委員会担当教諭
	エコ・スクール委員会担当教諭
	エコ委員会委員長
保護者	2004 年度 PTA 会長（支援委員会委員長）
	2005 年度 PTA 会長
地域等支援者	T.S　氏（能登川の水生生物調査会）
	S.K　氏（能登川町きぬがさ山の会）
	S.T　氏（能登川町埋蔵文化財センター）
	I.T　氏（水環境有識者）
	K.N　氏（環境教育有識者）
	U.B　氏（能登川町住民環境課長）
	O.S　氏（能登川町農林水産課長）

同支援委員会（児童を除いたメンバー）は，学校教諭と保護者 PTA，地域支援者（行政関係者を含む）で構成される（図 4-5 参照）．

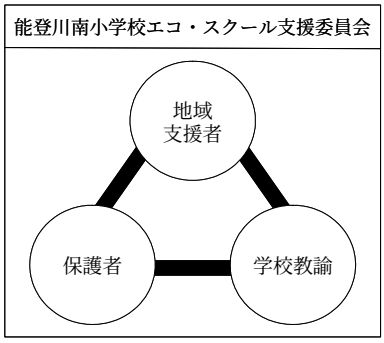

図 4-5　能登川南小学校エコ・スクール支援委員会の構成（児童を除く）

支援委員会のメンバーは，主にエコ・スクール活動担当教諭によって選任される．なお，支援委員会には，学校教諭から学校長，教頭，教務やエコ・スクール委員会担当教諭およびエコ・スクール活動担当教諭が，保護者からは当該年度および前年度の PTA 会長が入ることになっており，前年度の会長が支援委員会の会長を務める仕組みをとっている．同校エコ・スクール活動担当教諭によると， PTA 会長は各年度の PTA 全体をまとめ，先導するという役割を果たす人材であるため，エコ・スクール支援委員会のような組織の活動にも熱心に取り組んでもらえるそうである．また，各年度の PTA 会長が会長としての役目を終えた後も，同支援委員会に入る仕組みになっているため，PTA 会長の OB 会のようにもなっているそうである．

地域支援者に関しては，各年度によってメンバーが若干異なる．2002～2004 年度までの地域支援者メンバーの変遷を表 4-48 に示す．

表 4-48　能登川南小学校エコ・スクール支援委員会メンバー中の地域支援者の変遷

エコ・スクール支援委員会　地域支援者	2003 年	2004 年	2005 年
T.S　氏（能登川の水生生物調査会）	委員	委員	委員
S.K　氏（能登川町きぬがさ山の会）	委員	委員	委員
S.T　氏（能登川町埋蔵文化財センター）	委員	委員	委員
K.T　氏（能登川町住民環境課長）	委員	委員	
I.T　氏（水環境有識者）		委員	委員
U.M　氏（能登川町住民環境課長）		委員	
O.S　氏（能登川町農林水産課課長）		委員	委員
K.N　氏（環境教育有識者）			委員
U.B　氏（能登川町住民環境課長）			委員

同支援委員会メンバーのうち，地域（行政関係者を除いた）支援者は，表 4-48 中の T.S 氏と S.K 氏，S.T 氏の 3 人が中心メンバーであり，活動実施年が経つにつれて，環境教育の専門家が加わっている．行政関係者としては，能登川町住民環境課と農林水産課から 1 人ずつ加わっている．

次に，地域支援者に関して，各メンバーの選任された理由を表 4-49 に示す．エコ・スクール支援委員会のうち，同表に示したメンバーに対しては，年度始めにエコ・スクール活動担当教諭が電話等で就任の内諾を得る．行政関係者については，エコ・スクール活動を始めた年に，同活動担当教諭が各課を訪問，依頼し，了解を得たそうである．

表 4-49　能登川南小学校エコ・スクール支援委員会メンバー（地域支援者）の選任理由

	支援委員会メンバー	学校との関係および支援委員会としての選任理由
地域支援者	T.S 氏 （能登川の水生生物調査会）	以前より環境学習の講師（年 3 回）として同校の環境教育に携わっていた．学外において，同校エコ・スクール活動担当教諭とともに環境保全活動を行っている．
	S.K 氏 （能登川町きぬがさ山の会）	以前より環境学習の講師（年 3 回）として同校の環境教育に携わっていた．
	S.T 氏 （能登川町 埋蔵文化財センター）	以前より学校の環境学習（年 2 回）と職員用研修（年 1 回）の講師として同校の環境教育に携わっていた．子どもが同校に通っている．また，以前，同校エコ・スクール活動担当教諭と同じ職場（教育委員会）に勤めていた．
	I.T 氏 （水環境有識者）	2002 年度 PTA 会長（2002 年度よりエコ・スクール支援委員会メンバー）．水に関する仕事をしており，設備面に関して詳しい．
	K.N 氏 （環境教育有識者）	2003 年度 PTA 会長（2003 年度よりエコ・スクール支援委員会メンバー）．
行政関係者	能登川町住民環境課	同校エコ・スクール活動担当教諭が行政担当者として委員への参加を依頼．
	能登川町農林水産課	同校エコ・スクール活動担当教諭が行政担当者として委員への参加を依頼．

② 活動テーマと計画をつくろう

能登川南小エコ・スクール委員会では，実践校となってから初めての委員会活動時に，担当教諭から活動に取り組む理由として「エコ・スクールは環境に優しい学校です．環境を大切にしないと私たち人間もほろんでしまいます．だから，能登川南小から環境を大切にする活動を始めることにしました」という内容の説明があった．この「環境に優しい学校」が同校におけるエコ・スクール活動のテーマになっている．同テーマをもとに児童たちが話し合い，自分たちが何をすると良いか考えた結果，「水を大切にすること」「電気を大切にすること」「物を大切にしてごみを減らすこと」の 3 つの目標が決まった．以後，この 3 つの目標のもと，グループごとに活動している．同校エコ・スクール委員会は「水」「電気」「ごみ」の 3 グループに別れている．活動計画や活動の内容はグループごとの話し合いで決定される．エコ・スクール活動担当教諭の話によると，初めは意見がなかなか出てこないため，しばらくは教諭からの誘導が必要であるという．

また，教諭間においても，エコ・スクール活動担当教諭と 4～6 年生の教諭によって構成されるエコ・スクール推進部会を作り，同部会が職員のエコ活動（裏紙利用やエアコンの気温設定など，エコ・スクール活動のテーマに関連したもの）について提案するようになっている．しかし，実際にはエコ・スクール活動担当教諭がほとんど働きかけているよう

である．なお，教諭間に関しては，エコ・スクール活動担当教諭が中心となり，毎年 1 回の教員研修を行うようにしている．

同校では，エコ・スクール活動を身近に感じるために，後述するエコ・スクール委員会が行う 2003 年度の活動の一つとしてキャッチフレーズとシンボルマークを定めた．

キャッチフレーズは同委員会から全校児童に募集し，集まった作品の中から同委員会が「ぼくたち，わたしたちの　未来のために　きれいな気持ち」を選定した．このフレーズを印刷した紙を学校の玄関に貼り出したり，年に一度行われる南小フェアで用いたり，一学期の全校集会時にみんなで唱和（2003～2005 年度までの間に約 10 回程度の唱和）するなどの形で活用している．

一方，シンボルマークに関しては，学校で取り組んでいるエコ・スクール活動を地域へ知らせ，地域からの協力を得るために，PTA の地区委員を介し，校区内全戸へシンボルマークに関する募集の案内を配布した．その結果，11 個の作品が集まった．シンボルマークの決定には，募集から約 1 ヶ月後に同校で行われた懇談会を利用し，集まった作品に対して保護者と児童による投票を行った. 投票によって決定したシンボルマークが写真 4-10 に示すものである．シンボルマークもキャッチフレーズ同様に，同校の玄関で掲示したり，後述する南小フェアや運動会で用いたりしている．また，シンボルマークに選ばれなかった作品は，同年度の活動の一つとして作成したエコカレンダーの中で用いた．

写真 4-10　能登川南小学校シンボルマーク

③　活動しよう

同校エコ・スクール活動推進組織（エコ・スクール委員会とエコ・スクール支援委員会）が，2003～2005 年度までの間に行ってきたエコ・スクール活動の内容について説明する．

1）エコ・スクール委員会の活動について

能登川南小学校エコ・スクール委員会は，前述したように，同委員会の中でさらに「水」「電気」「ゴミ」の 3 グループに別れている．そのため，活動の種類が他校に比べ，若干多い．従って，活動内容を 3 つの表にわけて示す．

まずは，2003 年度の活動内容をまとめたものが表 4-50 である．

表 4-50　能登川南小学校エコ・スクール委員会の活動内容（2003 年度）

活動名	詳細
キャッチフレーズ募集	全校児童にエコ・スクール活動のキャッチフレーズを募集し決定.
シンボルマーク募集	エコ・スクール活動のシンボルマークを校区に募集.
シンボルマーク決定＆公表	決定したシンボルマークの公表.
エコ・スクール空き缶アート作成	空き缶集めを実施し，集まった空き缶で「ECO-SCHOOL」という文字を作成.
エコ・スクール○×クイズ大会	昼休みに開催．参加者：約 200 人. 「手を洗っている時は，水を出しっぱなしにしない．○か×か」など簡単なもの. ペットボトルのふたでバッジやペンダントを作り，参加賞にした．また，不要文具のリユースも行う.
放課後消灯 チェックカレンダーの点検	各教室に節電チェックのカレンダーを掲示し，各教室の電気をエコ・スクール委員会メンバーが見まわり，同カレンダーに○×のチェックをする.
水の無駄使いアンケート	4 年生は社会科で上下水道に関した学習をしているという理由から，4 年生に水の無駄遣いをしていないかアンケートをとった. アンケートの結果は，全校集会で報告した.
湖南中部浄化センターへの問い合わせ	水の汚れについて，湖南中部浄化センターに問い合わせた.
節電呼びかけシールの設置	電気のスイッチに節電を呼びかけるシールを貼り，節電を呼びかけた.
ごみ箱点検	毎週金曜日に学校から出たゴミの重さを計測. また，ゴミ袋の中を点検し，ゴミの分別が出来ているかの確認を行う.
エコ・スクールカレンダーの制作	シンボルマーク募集時に集まった作品を活用し，カレンダーを作る．できたカレンダーは各教室で掲示したり，シンボルマークを応募した人に配布した.

次に，2004 年度の活動内容を表 4-51 に示す．

表 4-51　能登川南小学校エコ・スクール委員会の活動内容（2004 年度）

活動名	詳細
ごみ箱点検	2003 年度に同じ.
雨水実験スタート	雨水の活用を目指し，学内各所にバケツを置き，雨水のたまりやすい場所を調べた.
照度計測による教室の電気のつけ方ポスター作成	照度計を用いて，各教室の光量を測り，天気によって電気のつけ消しを行うことを呼びかけた.
学校前川そうじ	2 週間に 1 回，全校児童に呼びかけ，学校前の川そうじを行う．参加者は毎回，6～10 人程度.
歯磨きでの水の使い方をビデオで放映	歯磨きをする時には，水を出しっぱなしにしないということを知らせるためのビデオを作成. 給食時に各教室で放映した.
「冬休みのエコ活動」	エコ・スクール活動に関連した活動を冬休みに行うよう，全校に呼びかけた．休み期間が終わってから，休み期間中に行ったエコ活動を全校児童から集めて（8 割ほど集まる），同委員会メンバーで優秀作品を選び，表彰する．「広告の裏をメモ用紙に使う」や「ボールペンを最後まで使いきる」などの作品を表彰.
エコ・スクールカレンダー作成	2003 年度に同じ.
子ども環境交流会議に参加	夏休み期間中にメンバー数人が，環境省事業「子ども環境交流会議」に参加．同会議への参加は，滋賀県からの呼びかけによる.
子ども環境交流会議の内容を校内で発表	「子ども環境交流会議」に参加した児童が，2 学期の始業式にて，同会議での活動内容や感想を全校児童の前で発表する.
滋賀県環境学習のつどい参加	滋賀県環境学習のつどい（環境学習フェア）にて，同校のエコ・スクール活動内容を記した壁新聞の展示と活動発表を行う.

次に，　2005 年度の活動内容を表 4-52 に示す.

表 4-52　能登川南小学校エコ・スクール委員会の活動内容（2005 年度）

活動名	詳細
学校前の川の生き物調査	学校前を流れる川で生き物の調査を行う．
アルミ缶集め	アルミ缶を集め，集めた缶はアルミ缶会社に買い取ってもらう．期間中に約 700 個の空き缶が集まった．
ゴミ箱点検	前年度に同じ．
ゴミ分別クイズ	正しく分別することができるか，クイズを全校対象に行ったが，正解者は誰もいなかった．
エコ・スクールカレンダーの作成	前年度に同じ．
エコ・スクール〇×クイズ	環境に関する簡単なクイズ．1，2 年生の児童全員が参加した．全問正解した児童には賞状を渡す．
インクカートリッジ集め	使用済みのインクカートリッジの回収．回収したカートリッジはベルマークとして換算した．
夏休みのエコ活動	前年度に同じ活動内容であるが，表彰はしなかった．
冬休みのエコ活動	前年度に同じ．表彰も行った．
子ども環境交流会議に参加	前年度に同じ．
子ども環境交流会議の内容を校内で発表	
滋賀県環境学習のつどい参加	

同校エコ・スクール委員会は，3 つのグループに別れ，グループごとに活動テーマや計画を作り，活動していることが特徴的である．毎月 1 回，全校集会の場で活動を発表（5～10 分程度）したり，休み期間中の宿題として，エコ・スクール活動に関連した活動を全校児童に呼びかけたりしており，全校を巻き込んだ活動が盛んである．また，節水や節電といったエコ・スクール委員会の活動の一環として，同校の水道使用量と電気使用量の推移を月別に表したグラフを常時，職員室前に掲示しているなど，校舎内の掲示物は，エコ・スクール活動に関するものが大半を占めている．

2）能登川南小学校エコ・スクール支援委員会の活動内容について

支援委員会の活動は，年 3 回の会合が中心である．各会ともに学校で行っているエコ・スクール活動や授業での環境教育に対する意見交換や助言，また，家庭や地域でのエコ・スクール活動の啓発の推進に関する話し合いを行う．特に，第一回目と第三回目の会合では児童の代表も同席し，第一回目では同年度の活動計画を発表し，活動に対する支援やアドバイスを求める．第三回目では一年間の活動内容の発表を行い，次年度に向けて支援委員から活動に対するアドバイスを受ける．

同支援委員会による，2003～2005 年度までの会合以外の活動を表 4-53 に示す．

表 4-53　能登川南小学校エコ・スクール支援委員会の活動内容（2003～2005 年度）

年度	名称	内容
2004	雨水タンク， 手押し汲み上げポンプ 設置	雨水を貯めるためのタンク（6 個）を校内に設置． 夏場など雨量の少ない時期のために，ガチャコンポンプも同時に設置．
2005	雨水タンクの追加設置	2004 年度に設置した雨水タンクを増設．
	水車の設置	前年度からの懸案であった水車の設置を実現．

エコ・スクール支援委員会の活動は，同支援委員会の会合にて話し合われる．雨水タンクとガチャコンポンプの設置は，児童のエコ・スクール委員会が行っていた雨水実験の取り組みを支援委員会会合において支援委員会のメンバーが知ったことがきっかけであった．雨水をためるためのタンクを行政関係者から譲り受け，さらに，支援委員会メンバーの I.T 氏が水関係の仕事をしていたこともあり，2004 年度に実現することができた．

水車の設置は，学校長の発案であり， 同支援委員会の会合で何回か議論されていた．同校エコ・スクール活動担当教諭が，水車の設置に向けて，さまざまな関係者に水車設置の話をしていたところ, 地域の体育館に活用されていない水車があることを知った. その後, 町に申請し，体育館の水車を同校へ譲りうけることになった．移設することになった水車は，とても大きなものだったので，水車の譲り受けが決まった後も，移設に関して支援委員会の中で議論が交わされたようである．最終的には，支援委員会メンバー以外の人の協力もあったことや，また，同支援委員会メンバーが水車の移設を市町村合併（2006 年 1 月 1 日）前に行いたいと強く願っていたこともあり，2005 年 11 月に水車の設置が実現した．

また，設備面以外の支援内容として，地域役場などの関係者がエコ・スクール支援委員会に入ることにより，同支援委員会メンバーが同校のエコ・スクール活動を地域の広報誌に載せるためのパイプ役を担っているという側面もある．このことにより，エコ・スクール実践校になってからは，町の広報誌等に同校の活動内容が掲載される回数が増えたようである．

④　ふりかえろう

同校では，年度末に，エコ・スクール委員会やエコ・スクール支援委員会等の場で一年間の活動のふりかえりを行なう以外にも，各クラスで行っている環境にやさしい取り組みをビデオに撮り，撮った映像を各クラスで放映し，感想文を書くという取り組みを，年度末に行っている．担当教諭によると，放送が開始された次年度からは，エコ活動に取り組むクラスが増えたそうである．

エコ・スクール認定申請時（2004 年度）にエコ・スクール推進事業事務局へ提出したチェックリストには，エコ・スクール委員会は◎，○，△の三段階で，エコ・スクール支援

委員会は◎と○の二段階で，それぞれが同校のエコ・スクール活動に対する評価（ふりかえり）を行っている. 同チェックリストの中で△印が記入されていた項目を表 4-54 に示す.

表 4-54　エコ・スクール認定申請時のチェックリスト（2004 年度）における△印の項目

	項目
エコ・スクール委員会	計画通り活動が進んでいるか調べているか.

エコ･スクール委員会とエコ･スクール支援委員会が記入したチェックリストを見ると，2004 年度の時点では，エコ・スクール委員会が「計画通り活動が進んでいるか調べていますか？」という活動に△印をつけており，活動の点検が自分たちの実践活動の中での弱い部分であると感じていたことがわかる.

活動成果の発表に関しては，前述したようにエコ・スクール委員会が年度末のエコ・スクール支援委員会の会合において，一年間の活動内容を報告している．一方，学外では，滋賀県環境学習のつどい（環境学習フェア）の場等において一年の活動内容を発表している．また，同校 HP にエコ・スクール委員会のページを設け，学外へ活動の発信を行っている.

⑤　学ぼう，つながろう

1）学ぼう

前述したように，能登川南小ではエコ・スクール実践校になる以前から，周辺の山や川をフィードルとする環境学習（授業）に力を入れていた.

また，実践校となって 2 年目からは，長期休み期間中の宿題として，エコ・スクール活動に関連した実践活動を行うことをエコ・スクール委員会の児童たちが全校児童に呼びかけている.

教諭に関しては，エコ・スクール活動担当教諭が中心となり，毎年 1 回環境に関する教員研修を行うようにしている.

2）つながろう

能登川南小では，エコ・スクール実践校になりエコ・スクール活動を始めてから，教育委員会庶務課の支援を受けるようになった. 同庶務課は, 学校の施設整備を担当している. 能登川南小がエコ・スクール実践校になる以前まで，同校校舎内に設置されていたトイレは，時間が経つと水が流れるというものであった．しかし，同校がエコ・スクール活動をするようになってから，同庶務課は水道水の使用量削減のためにトイレタイマー等を同校

に設置し，水道水の使用量が減るよう支援している．同校と教育委員会との関わりが以前からあったこともあり，同庶務課からの支援に関しては，学校からの依頼だけではなく，教育委員会の方からの申し出もあったようである．

また，能登川南小では，主に地域の人と学校教諭が主体となって取り組む「南小フェア」と呼ばれるイベントを毎年 1 回行っている. 同校がエコ･スクール実践校になってからは，南小フェアの中でも，環境に関連した内容の催し物を設けるようになった．例えば，2005 年度には, 自転車をこいで電気をおこす発電機を, 地域の人と同校教諭が協力して製作し，児童たちに電気の大切さを知らせた.

4-6-3　能登川南小学校におけるエコ・スクール活動のまとめ

能登川南小における児童の活動推進組織であるエコ・スクール委員会（環境グループ）は，児童会組織の中に位置づけられている．同委員会は，さらに「電気」「水」「ごみ」の 3 グループにわかれ，それぞれのグループが節電や節水，ごみの減量などの活動に取り組んでいる．同委員会の活動の特徴は，活動のシンボルマークとキャッチフレーズを地域と全校から募集したり，提案した活動を全校に拡げたり，さらに毎月一回は，全校集会の場で同委員会の活動を報告する等，全校や地域に向けての働きかけが積極的な点である．

大人の活動推進組織であるエコ・スクール支援委員会（エコ・スクール委員会）は，同校の教諭と保護者，行政関係者を含んだ地域支援者から構成され，年 3 回の会合を主な活動としている．特に，年度始めと年度末の会合には，エコ・スクール委員会の児童も参加する．年度始めの会合では，児童から当年度の活動計画や希望する支援の内容を聞き，活動に対するアドバイス等を児童に与える. 年度末の会合では, 児童から活動報告を受ける．同委員会は，エコ・スクール委員会（児童）からの希望に応えて，雨水タンクやガチャコンポンプの設置などの支援も行なっている．

同校の特徴は，上に述べたように，支援委員会が協力的で，児童の活動を積極的に支援している点である．また，各クラスで行っている環境にやさしい活動をビデオで撮り，全校に放映して活動結果を共有化したり，授業と活動で，学校付近の同じ川を対象にしたりするなど，全校をあげての活動にも積極的である．

4-7　滋賀県高島市立今津中学校[5)]

4-7-1　今津中学校および校区の概要

今津中は全校生徒数 427 人の今津町で唯一の中学校である（表 4-55 参照）．学校周辺には饗庭野と呼ばれる台地（東西約 8 km・南北約 5 km・標高 200m，旧陸軍砲兵の演習場として利用され，現在は自衛隊の駐屯場になっている[2)]）やザゼン草群生地などがあり，豊かな自然と市街地が混在した地区に立地している．また，学校の側には一級河川である石田川が流れている．同校は，2005 年 1 月 1 日の市町村合併後，今津町立から高島市立に変わった．

表 4-55　今津中学校の生徒数と学級数（2005 年 7 月　現在）

	1 年生	2 年生	3 年生	合計
人数　　（人）	155	134	138	427
学級数（クラス）	5	4	4	13

同校のエコ・スクール活動に関しては，2005 年 6 月 2 日と 12 月 1 日の 2 度にわたり，同校エコ・スクール活動担当教諭に対してヒアリング調査を行った他，随時，同教諭と電話のやり取りを行った．また，11 月 12 日には後述するパネルディスカッションに参加した．以下，同校におけるエコ・スクール活動について述べる．

今津中では，生徒会を学友会と呼んでいる．学友会による活動が今津中学校の特徴の一つでもある．同会では「あなたの笑顔が私のよろこび」というテーマを掲げ，全校生徒で取り組むボランティア活動や「アジア分校プロジェクト」と呼ばれる活動などを行っている．

同校は，1997 年に滋賀県社会福祉協議会から「福祉活動推進校」の指定を受け，以後，学友会を中心に全校あげてのボランティア活動に取り組んでいる．ボランティアグループには，厚生，美化，自然環境，緑化，広報，文化，図書，社会，体育，基金，国際交流の 11 のグループ(全校生徒がいずれかのグループに入るので, 1 グループ 40 人程度)がある．同校生徒は，各自，希望のボランティアグループに所属し，毎月第 3 土曜日の午前中（同校では，校外ボランティア活動の日と定めている）に校外での活動をグループごとに行っている．

一方,「アジア分校プロジェクト」とは，アジア地域に校舎等の学校設備を贈るための活動である．1996 年より学友会の活動として取り組んでおり，同活動が始まってからは，校舎等を贈る資金を作るために毎年 2 回程度，空き缶や古新聞などの資源回収やバザー等の

活動を行っている．1999 年に資源回収等で集まった資金 300 万円余りを建築のための資金としてネパールの学校に贈呈，同校の生徒数人が，現地を訪問するなど，ネパールとの交流を深めている．近年では，カンボジアに井戸を掘るための支援活動等も始めている．

今津中は，2001 年度 3 学期より，滋賀県エコ・スクール推進事業に参加している．同校の場合は，エコ・スクール活動担当教諭が実践校になる以前から欧州における同活動に関する知識を持ち，前職場（高島市の滋賀県立朽木いきものふれあいの里）で同活動を実践していたという経緯もあり，実践校としての活動を行うようになった．同校は，2004 年 3 月と 2005 年度 3 月に，滋賀県からエコ・スクール認定校としての認定を受けた．

4-7-2　今津中学校でのエコ・スクール活動

同校のエコ・スクール活動の内容を，エコ・スクール活動の流れ（①さあ，はじめよう　②活動テーマと計画をつくろう　③活動しよう　④ふりかえろう　⑤学ぼう, つながろう），に沿って述べていく．

②　さあ，はじめよう（キックオフ宣言，活動推進組織の設立）

1）キックオフ宣言

学校長が 2001 年度 3 学期（2002 年 1 月）の始業式において「環境問題解決のために何ができるか考え，地域と協力し，自分たちで計画して活動していきましょう」とのキックオフ宣言を行った．活動の推進組織を作り，本格的に活動し始めたのは 2002 年度からであるが，部分的には 2001 年度 3 学期から実践校としての取り組みを始めている．

2）活動推進組織

キックオフ宣言の翌年度（2002 年度）より，児童が主体となる「エコ・スクール委員会」と学校教諭や地域の人が主要メンバーとなる「今津中学校エコ・スクール外部（支援・監査）委員会」の 2 つの組織が新たに設立された．この 2 つの委員会が同校におけるエコ・スクール活動の推進組織である．

a．エコ・スクール委員会

実践校になったことに伴い，「エコ・スクール委員会」という委員会（環境グループ）が 2002 年 4 月，学友会（生徒会）組織とは別のグループとして新たに作られた．同委員会が，今津中におけるエコ・スクール活動での生徒推進組織になる．前述したように，同校ではエコ･スクール実践校になった 2001 年 3 学期から実践校としての活動を開始しており，2002 年度までの間は，ボランティアグループの一つである，自然環境グループを同活動の活動推進組織としていた．

エコ・スクール委員会の構成メンバーを表 4-56 に示す．同委員会担当教諭に関しては，できるだけ多くの教諭に活動方法を理解してもらえるようにと, 4 人で担当している. 2005 年度は，生徒会担当教諭なども入るようにしたが，生徒会活動の方が忙しい等の理由のため，同委員会の方は，実質 2 人の教諭で担当している．

表 4-56　今津中学校エコ・スクール委員会の概要（2005 年度）

名称	形態	人数	担当教諭数	常時活動頻度
エコ・スクール委員会	希望者・有志 （2・3 年生）	23 人	4 人 （主に 2 人）	不定期

同委員会は生徒会等の組織に属したグループではない．そのため，定期的な活動日は定められていない．校外での活動日は年度初めにほぼ決定するが，校内での活動についてはおおよその時期だけあらかじめ決めておき，具体的な日程については少し前の活動時に決めてしまう, もしくは急に決めて実行することもあるようだ. 校内で行う活動に関しては，週に 2，3 度行う時もある．メンバーは，生徒会組織と異なり，エコ・スクール委員会担当教諭の呼びかけに賛同して集まった生徒たちであり（2005 年度の場合，2 年生 11 人，3 年生 12 人），年度によっては各ボランティアグループの代表生徒が所属することもある．エコ・スクール活動担当教諭によると，2004 年度は同教諭が 3 年生を担当していたこともあって，メンバーの中で 3 年生の比率が高かったそうだ．

b．今津中学校エコ・スクール外部（支援・監査）委員会

エコ・スクール実践校となったことに伴い 2002 年,「今津中学校エコ・スクール外部（支援・監査）委員会」という委員会が新たに設けられた．同委員会が，エコ・スクールハンドブックにおけるエコ・スクール委員会にあたる．2005 年度の同支援委員会メンバーを表 4-57 に示す．

表 4-57　今津中学校エコ・スクール外部委員会の構成員（2005 年度）

メンバー構成（計 15 人）	
学校教諭	学校長
	エコ・スクール担当教諭
生徒	委員長
	副委員長
	副委員長
	書記
地域等 支援者	O.T　氏（浜分漁業）
	F.S　氏（山上会代表）
	M.S　氏（今津の自然を守る会代表）
	県事務所各課（田園，森林，建設）から各代表計 6 人

同校エコ・スクール外部委員会には，2002 年度から 2005 年度まで生徒，学校教諭，地域支援者（行政関係者を含む）が参加している．2004 年度までは，PTA の代表（自然環境部会代表）者も所属していたが，2005 年度エコ・スクール登録書には PTA 代表が記載されていない．また，同校では，他の実践校とは異なり，同外部委員会に含まれる生徒の割合が高い（小学校と中学校との差でもあるだろうが）．同校外部委員会の主要メンバー構成を図 4-6 に示す．なお，同校の場合は，委員会の構成員の比率が他の実践校とは大きく異なるため，図に示す各構成員の○の大きさを変化させた．

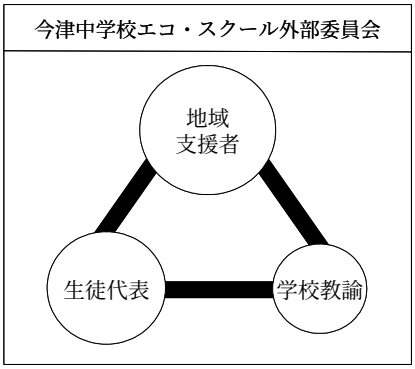

図 4-6　今津中学校エコ・スクール外部委員会の構成

外部委員会のメンバーは，毎年，年度初めのエコ・スクール委員会で話し合われる活動計画の内容に応じて，主にエコ・スクール活動担当教諭によって選任される．同委員会には，毎年度，地域の自然環境ボランティア団体や PTA 代表（2005 年度は含まれていない），地域振興局や町職員代表等が選任されるが，その大半は，同担当教諭と以前から知り合いであった人たちである．

地域支援者に関して，各メンバーの選任された理由や同校との関わりを表 4-58 に示す．

表 4-58　今津中学校エコ・スクール外部委員会メンバー（地域支援者）の選任理由

	支援委員会メンバー	学校との関係および支援委員会としての選任理由
地域支援者	O.T 氏 （浜分漁業）	石田川にアユがいなくなった原因を聞きにいったことがきっかけ．
	F.S 氏 （山上会代表）	同町の山岳会所属． エコ・スクール委員会の生徒から，誰も行ったことのないところへ行きたい，探検したい，という意見が出たことがきっかけ．
	M.S 氏 （今津の自然を守る会代表）	元理科教諭であり，同校エコ・スクール活動担当教諭と以前から知り合いであった．退職後も，今津町の小学校で自然観察の講師を務めてきたため，同校生徒もよく知っている人物である．同校においても，以前から講師を務めていた． また，同氏は「今津の自然を守る会」以外にも，「今津のカキツバタを守る会」や「湿地を守る会」等の会長などを務めている．
行政関係者	田園整備課	以前，同校エコ・スクール活動担当教諭が環境アドバイザーとして同課に関わっていた．また，同課の前課長が，今津町のカキツバタを守るために，カキツバタの会を設立した際に，同校担当教諭に参加の呼びかけがあった．
	森林整備課	学校林の活動を行うために，学校林の場所等を問い合わせたことがきっかけ．
	建設管理部	同校エコ・スクール活動担当教諭は以前，石田川の環境アドバイザーも務めていた． 石田川の改修工事により，川がもっと汚くなるのではないかと生徒が思ったことがきっかけ．

表 4-58 のエコ・スクール外部委員会メンバーに対しては，年度始めに，担当教諭が電話等で就任の内諾を得る．行政関係者に関しては，初めて外部委員に就任してもらうときには，各行政機関を訪問して，就任を依頼する．なお，外部委員会が発足した初年度（2002 年度）には，担当教諭が生徒とともに各行政機関を訪問し，関係者に対して外部委員会委員への就任依頼を行ったそうである．

② 活動テーマと計画をつくろう

今津中におけるエコ・スクール活動では，年度初めにエコ・スクール委員会のメンバーが集まり，それぞれ活動したいことをあげる（メンバーが多い年は一人ずつ紙に書き，少ない年は教室の黒板に書く）．出てきた活動案を見ながら，担当教諭とともに似ている活動

をまとめ，いくつかのテーマに絞り，その年の活動テーマ（1 年に約 10 個の活動テーマ）を決める．それぞれのテーマに，活動の担当者（生徒）を決め，同担当者を中心に各活動の方法等を考え，活動時期等の予定を立てていく．また，年度によって異なるが，エコ・スクール委員会に各種ボランティアグループのリーダー（委員長）が所属している場合には，エコ・スクール委員会の話し合いで出た活動案を各種ボランティアグループで行う活動に取り入れることもある．

エコ・スクール活動担当教諭は 2002 年度エコ・スクール委員会メンバー（3 年生ばかり）が 2 年生の頃から同学年の担当をしており，当時（2001 年度）から，生徒たちに町の池や山，植物の保全地域等のことを説明したりしていた．そのため，2002 年度の委員会メンバーからは，実践的な活動の案が，比較的多く出されたようである．

また，今津中におけるこれまでのエコ・スクール活動の全体テーマを表 4-59 に示す．同表で示す活動テーマは, 学校全体の活動テーマをそのままエコ･スクールの活動テーマとしたものである．

表 4-59　今津中学校におけるエコ・スクール活動全体のテーマ

年度	活動全体テーマ
2002	自然とかかわり，自然にやさしい学校・地域づくり．
2003	
2004	豊かにつながり, 共に生き, 共に高まる活動を目指そう．
2005	

③　活動しよう

同校エコ・スクール活動推進組織（エコ・スクール委員会とエコ・スクール外部委員会）が 2001～2005 年度までの間に行ってきたエコ・スクール活動の実績について説明する．

1）エコ・スクール委員会等の活動について

今津中では，エコ・スクール実践校になった 2001 年度（3 学期のみ）は，同校生徒会（学友会）組織の一つである自然環境ボランティアグループを生徒によるエコ・スクール活動推進組織にしていた．

同ボランティアグループが 2001 年度 3 学期に行った活動を表 4-60 に示す．

表 4-60　今津中学校自然環境ボランティアグループの活動内容（2001 年度 3 学期）

名称	活動概要
節電と節水の呼びかけ	各教室のスイッチや配電盤の横に節電を呼びかけるミニポスターを掲示，また，給食時の校内放送等を活用して，節水の呼びかけを行う．
カキツバタの湿地保全	石田川源流にあるカキツバタの湿地を保全する活動.

この年度の自然環境ボランティアグループは，節電と節水の呼びかけを行った．同年度 2 月の同校消費電力を 1000 kWh 削減することを目標として活動し，その結果，950 kWh の電力削減を達成している．

一方，前述したように，2002 年度からは，生徒のエコ・スクール活動推進組織として，エコ・スクール委員会という組織が新たに設立された．同委員会では，メンバー個々が取り組みたいテーマの活動にだけ参加するような仕組みになっている．なお，同委員会メンバーによる活動に関する話し合いは，年間を通して約 20 回程度行われるそうである．

同委員会が 2002 年度から 2004 年度までの間に行ってきたエコ・スクール活動の内容について説明する．

まずは，2002 年度の活動内容を表 4-61 に示す．

表 4-61　今津中学校エコ・スクール委員会の活動内容（2002 年度）

活動名	詳細
残食を減らす活動	エコ・スクール委員がコンポストを設置する学年，学級を選定し，コンポストを設置．残食のチェックとまとめを行う．
登山ルートの開発 自然観察会の計画	全校自然体験活動の内容とコースの決定および下見.
展望台の製作	自然探索活動で訪れる，三重ヶ岳の見晴らしを良くするための展望台製作（そのための資材の準備）.
石田川河川敷整備活動	石田川河川敷の整備作業の準備段階として,「今の石田川は昔に比べて．どうですか？」などの質問を含んだアンケート調査を周辺住民に対して行った. 同調査がもととなり，緑化のためにドングリ，コブシ，ケヤキなど周辺の河畔林に優占する樹種の種集めおよび種まきを行う. また，エドヒガンザクラ（石田川からマキノ町にかけて自生する今津を代表するサクラ）の苗づくりを行う.
町内の水辺調査	町の農村整備課，町建設課とともに町内の水辺調査を行う．
生き物調査	町内のホタルやメダカの調査.

エコ・スクール委員会として活動を始めた 2002 年度より，学外で行う活動が多く見受けられる．

次に，2003 年度と 2004 年度の活動内容を表 4-62 に示す．

表 4-62　今津中学校エコ・スクール委員会の活動内容（2003～2004 年度）

	活動名	詳細
2003	節電・節水	節電や節水の呼びかけ．
	トビケラシンポジウム参加	同校エコ・スクール担当教諭が携わっていたトビケラシンポジウム朽木セッションに参加．
	「命を守る住民参加の川づくり」参加	石田川の河川改修の開始に伴い行われたイベントに参加．河川改修工事の説明を聞き，河辺の自然調査，河辺林の樹木ウォッチング等に参加．
	ボートで川下り	ゴミ拾いを行いながら，ボートで川を下る．
	砂漠化防止活動	国土交通省淀川河川事務所企画の「子ども特派員（海外視察：中国への旅）」という事業に，委員長が参加し，中国山峡ダムや長江を視察．
	雪について考える活動	椋川にてクロスカントリーやかまくら作り．
	国際交流活動	バイオデッツというインターネットでの国際チャット会議に，エコ・スクール委員会代表者が参加．同事業に関する情報は，活動担当教諭がエコ・スクール認定委員会の場で得た．
2004	希少植物の復元活動	地域の農業用水路整備作業に関わる工事に伴い，ホトケドジョウ等，希少種の移植作業や保全活動を行う．
2003～2004	アルミ缶リサイクル	学友会で行っている資源回収以外のアルミ缶のリサイクル活動を行う．
	散乱ゴミを減らす活動	全校生や地域への呼びかけ，ゴミ拾い．
	ザゼン草，カキツバタの苗の植え付け	今津町建設課から依頼をうけ，ザゼン草やカキツバタの苗を町内 4 箇所に植え付ける．
	琵琶湖などでの生物保護活動	ブラックバスを釣って，外来魚の駆除を行う． 同校近くにある淡海湖では，ボートに乗って，外来魚の駆除作業（ブラックバス釣り）を行う．
	登山ルートの開発	今津の山には道がないところが多いので，途中でわからなくなっている古道をつなげ，山道を復元整備する． エコ・スクール委員会だけでは，年に 3 回程度行う．
	石田川保全活動	さらに，前年度の「命を守る住民参加の川づくり」への参加に続き，関係機関と連携を図りながら，前年度同様，石田川の保全活動に取り組む．
	生き物調査	前年度に同じ
	町内の水辺調査	

今津中エコ・スクール委員会では，2002 年度から毎年「登山ルートの開発」という活動を行っている．同活動は，2002 年度のエコ・スクール委員会メンバーが今津の豊かな自然を守るために「地域の自然の発見と紹介」といった活動テーマをあげたことがきっかけとなって始まった．以来，同委員会では，地域の山の会である山上会の支援のもと，三重ヶ岳の登山道の整備を続けている．三重ヶ岳は，近畿の 100 名山にも選ばれているほどの名

山である．しかし，同委員会が山上会とともに活動を始めるまでは登山道が崩れた状態になっていた．また，登山ルートの整備がほとんど行われておらず，登山を行う人も少なかった．そこで，同委員会のメンバーが，地図で山道を確認し，また，山上会の人たちに山のことを聞きながら登山ルートを開拓していった．その結果，2004 年度に同ルートは完成した．同校では現在，この登山ルートを各学年の遠足で活用している．

表 4-62 中に記したボートで川を下りながら，川のゴミを拾う活動（2003 年度）は，前年度に行った石田川の中を歩いてのぼっていく体験がもととなり，生徒たちの発案によって実施されたものである．翌年（2004 年）度にも同活動と同様の活動計画をエコ・スクール委員会では立てていたが，台風の影響により中止となった．このように，活動の計画を立てていても，天候などによって実行できないものもある．

また，同表中に記した「人と自然にやさしい工事のための環境調査プログラム」にエコ・スクール委員会の生徒が参加し，さらに，同委員会が石田川の河川敷にドングリをまく等の活動を行っていたことがきっかけとなり，2004 年度には，同校と滋賀県湖西地域振興局建設管理課との間で石田川の河川整備に関わる協定が結ばれている（後述する）．

一方，エコ・スクール委員会の活動の中には，活動計画としてあげられたが，同年度には実行されていないものもある．例えば，表 4-61 では示さなかったが，2004 年度には，同校区を流れる天増川において，サケの放流活動や砂金取りなどといった活動案もあげられていた．以前の天増川では多くのサケが遡上している姿が見受けられ，サケは地域の食材として重宝されていた．しかし，現在，天増川に遡上してくるサケは少ない．また，同地域では過疎化が進み（過疎化の影響により，踊り手が高齢化でいなくなったため，毎年，同地域で行われる盆踊りでは同校の生徒会が後援している），自然と人との調和が崩れつつある．そのため，サケの放流活動は地域の自然を復元するために，また，砂金取りは地域のすばらしさを見つめ直し地域でもともと行われていた活動（砂金取り）を楽しむために，と考えられた．しかし，これらの活動は，地域の人やエコ・スクール外部委員会のメンバーたちと入念に話し合う必要があり，同年度には実現されていない．サケの放流に関しては現在検討中であるが，砂金取りに関しては，2005 年度の総合学習において実現されている．

また，エコ・スクール委員会が，自然観察ボランティアグループなどに活動への参加を呼びかけるときもある．さらに，前述したが，同委員会に各種ボランティアグループのリーダー（委員長）が所属しているときには，エコ・スクール委員会の話し合いで出た案を各ボランティアグループが活動として取り入れることもある．エコ・スクール委員会で提案された活動を他のボランティアグループで行っている事例を表 4-63 に示す．

表 4-63　各種ボランティアグループで活かされるエコ・スクール委員から出された活動案

年度	名称	活動概要	担当グループ等
2003	残食を減らす活動	各学級の残食量調査とまとめ. 各学年，学級に設置されているコンポストの残食チェック.	自然環境グループ
	内湖の生き物を守る活動	貫川内湖のブラックバスを減らし，在来魚の稚魚を守り復活させる活動.	
	落ち葉リサイクル	落ち葉を集め，コンポストを作る.	緑化グループ
2004	残食を減らす活動	前年度に同じ.	自然環境グループ
	内湖の生き物を守る活動	前年度に同じ.	
	節電・節水	節電や節水の呼びかけ.	
	湖岸清掃	湖岸の清掃活動.	
	今津川美化活動	今津川の清掃活動．年 2 回行う.	
	庄垂川保全活動	庄垂川の保全活動．年 2 回行う.	
	落ち葉リサイクル	前年度に同じ.	緑化グループ
	石田川保全活動	関係機関と連携を図りながら，石田川の保全活動や改修工事に携わる.	緑化グループ， 自然環境グループ
2005	湖岸清掃	前年度に同じ.	自然環境グループ
	今津川美化活動（清掃）		
	庄垂川保全活動		

表 4-63 で示した残食を減らす活動（自然環境グループ）は，2001 年度のエコ・スクール活動として同グループが行っていたものを直接引き継いだものではない. 同校では, 2001 年度以降，1 年生の総合学習にて同活動を取り入れていた．このことがきっかけとなり，2003 年度からは自然環境グループの生徒たちが同活動を提案し，実施しているそうである.

同表中に示した湖岸清掃，今津川美化活動，庄垂川保全活動（2004～2005 年度）は，地域の今津を守る会と合同で行っている.

また，同表に示した活動およびグループ以外にも，地域の自然を守る活動として，文化グループでは 1990 年代半ばよりザゼン草を守る活動を行っている. さらに, 同グループでは 2004 年度からはエコ・スクール委員会とともに, 某農業大学と共同してザゼン草の増殖にも取り組んでいる.

同校では，生徒が，体験してみたい活動の計画案を立て，実施している．表 4-61 中で示した「落ち葉リサイクル」という落ち葉集めの活動も，もともとは，焼き芋がしたい，という生徒の提案から始まったものである．このように，同委員会のメンバーは，委員会での活動を楽しみながら行っている.

2）エコ・スクール外部委員会の活動内容について

外部委員会の活動としては，年度初めに行う生徒を交えた会合と，秋に行われる校内文化祭でのパネルディスカッション（全校生徒の前で，同委員会メンバーが同校のエコ・ス

クール活動の推進を激励するというものであり，これを同校では「パネルディスカッション」と呼んでいる）の 2 回を基本としている．それ以外は，年度初めの外部委員会で生徒と大人たちで話し合われた活動計画をもとに, 同校のエコ･スクール活動に個別に関わる．同外部委員会のメンバーの中には，年に 10 回以上も，同校のエコ・スクール活動に参加，協力している委員もいる．また，外部委員会のメンバーが所属する，今津の自然を守る会からは，活動に対する支援だけでなく，ヒツジ草という植物が植えられた鉢を譲りうけるなど，比較的深い交流もあるようだ.

④　ふりかえろう

同校では，年度末に，エコ・スクール委員会の場で，同委員会が一年間行ってきた活動ごとに，生徒自身が自分たちの活動を評価する．活動の引継ぎに関しては，担当教諭が生徒から受け継ぎ，次年度のエコ・スクール委員に申し送る.

また，エコ・スクール認定申請時（2003～ 2004 年度）にエコ・スクール推進事業事務局へ提出したチェックリストには，エコ・スクール委員会，外部委員会ともに〇印もしくは無記入で，それぞれが同校のエコ・スクール活動に対する評価（ふりかえり）を行っている．2003 年度申請時に提出されたチェックリストの中で〇印が記入されなかった項目を表 4-64 に示す.

表 4-64　エコ・スクール認定申請時のチェックリスト（2003 年度）における無記入の項目

	項目
エコ・スクール委員会	計画通り活動が進んでいるか調べているか.
エコ・スクール外部委員会	計画にしたがって，活動できているか.
	エコ・スクール委員会以外の保護者，近隣住民，地元企業，地元の行政機関等からの参加や支援があるか.

エコ・スクール委員会と外部委員会が記入したチェックリストを見ると，2003 年度の時点では，学校でのエコ・スクール活動に関して，両委員会とも計画通りに活動が進んでいない点を指摘している．これは，活動の計画を行ったが，実施できていないものもあったからであろう．また，外部委員会は，外部委員会以外の地域の人々による活動への参加や支援が弱いと感じていたことがわかる. ただし, これら無記入だった項目に関しても, 2004 年度のチェックリストでは全て〇印が記入されているため，活動を進めることによって改善されたものと考えられる.

活動成果の発表に関しては，前述したように，エコ・スクール委員会が毎年，秋に行わ

れる校内文化祭において一年間の活動成果を全校生徒に向けて報告する．さらに，同委員会からの報告が終わった後には，外部委員メンバーが，全校生徒に向けて活動への激励を行うようになっている．

⑤　学ぼう，つながろう

1）学ぼう

今津中学校では，エコ・スクール委員会で発案された活動を，総合学習や選択理科の時間を活用して行っている．

エコ・スクール委員会で発案された活動を授業等で行っている事例を表 4-65 に示す．

表 4-65　エコ・スクール委員会で発案された活動を授業等で行っている事例

年度	名称	活動概要	該当授業
2002	生き物 「生き生き」活動	石田川の水生生物の調査活動を行い, 同川の改修工事に関する基礎資料を整える. 水系の調査と生物観察を行い, バイカモの群落を発見する.	選択理科
	自然探索活動	自然保護保全体験活動, ブラックバスを減らす活動を交えたコースもある.	総合学習
2004	琵琶湖などでの 生物保護活動	魚の生息調査など.	選択理科
	石田川保全活動	水生昆虫調査など.	3 年理科・選択理科
	西の湖での学習	サイエンスパートナーシップ事業の指定を受け, また, 近江兄弟社小の協力もあり, 西の湖における内湖の調査などが行った.	3 年生理科 選択理科
2003 ～	自然体験活動	エコ･スクール委員会メンバーが活動で拓いた山の古道等を全校の遠足コースにしている.	全校　遠足
2002 ～	学有林整備活動	学有林の整備作業.	3 年生職業体験の 1 つ（林業に興味をもつ生徒が行う）

表 4-65 で示した活動には，外部委員会のメンバーが協力している．

山道の復元作業に関しては，2002 年度には同校 3 年生の総合学習の時間に取り入れ，さらに，2004 年度からは完成した登山道を各学年での遠足にも取り入れるようにしている．

ここでは，2002 年 10 月に 3 年生の総合学習の時間にて取り組まれた自然体験活動について紹介する．同学習は，4 コースに分けられて行われた．各コースの目標と具体的なコース，引率者を表 4-66 に示す．

表 4-66　自然体験活動（2002 年度）で行われた各コースの目標と具体的なコース，引率者

	各コースの目標と具体的なコース，引率者	
1	目標	平池のカキツバタの保全活動と山を歩き樹木の樹名木板をつける．
	コース	学校集合→出発→酒波→ビラデスト今津→活動 1（カキツバタの保全活動）→昼食→活動 2（樹名板の取り付け）→活動 3（鷹の観察）→ビラデスト今津→酒波→学校到着・解散．
	引率者	同校教諭，町環境グループ会員．
2	目標	淡海湖まで山歩きし，外来魚で淡海ザリガニの天敵であるブラックバスの駆除活動を行う．
	コース	学校集合→出発→酒波→ビラデスト今津→→淡海湖→活動 1（ブラックバス駆除）→昼食→活動 2（ブラックバス駆除）→ビラデスト今津→酒波→学校到着・解散．
	引率者	同校教諭，学校長，町建設課職員，県田園整備課職員，今津漁協．
3	目標	近江坂の登山道の整備活動を行い，山歩きを通して新しい歴史的意義を確認する．
	コース	学校集合→出発→ビラデスト今津→河内谷林道合流点にて昼食→学習（歴史的意義についての講話）→ビラデスト今津→学校到着・解散．
	引率者	同校教諭，講師．
4	目標	三重ヶ岳登山道の復元と整備による新ルートの開発を行う．
	コース	学校集合→出発→酒波→ビラデスト今津→落合→河内谷→三重ヶ岳登山口→山頂にて昼食→尾根道→落合→三重ヶ岳登山口→ビラデスト今津→学校到着・解散．
	引率者	同校教諭，山上会会員，町産業振興局職員．

表 4-66 の引率者欄を見るとわかるように，同活動には，エコ・スクール外部委員のメンバーが多く関わっている．

さらに，同校では，エコ・スクール活動の考え方（生徒が自ら課題を見つけ，方法を考え，解決していく）を同校の教諭間に広めるため，2004 年度には，担当教諭が毎月 1 回，教員研修（学校周辺の自然観察など．強制的なものではない）を行っていた．

2）つながろう

3 年生の総合学習では，2005 年度現在，「よみがえれ写真」と称した活動を行っている．同活動は，今津の歴史や文化を写した昔の写真を生徒が見て，自然と人間とのつながりを探り，未来の今津を想像し，自然とどのように向き合うべきなのか考えるといったものである．某大学の教授が同活動の支援を行っているが，このような活動を行うようになったのは，2002 年度のエコ・スクール委員会の委員長をはじめとするメンバーが，地域の自然を守る会の活動に参加し，同教授と知り合ったことがきっかけである．

さらに，前述したが，今津中学校のエコ・スクール委員会は，2004 年度に，滋賀県湖西地域振興局建設管理課との間で「一級河川石田川における今津中学校エコ・スクール活動に関する協定」を結んでいる．同協定は，エコ・スクール委員会が石田川の河川敷などでの保全活動を行う際に，同建設管理課が連携を図ることを約束したものである．このよう

に, 今津中学校のエコ・スクール委員会の活動は, 地域に発信した活動になってきている.

また，エコ・スクール実践校になったことにより，同校担当教諭と生徒数人が，実践校のうちの一つである近江兄弟社小学校での活動に参加したという事例もある.

4-7-3　今津中学校におけるエコ・スクール活動のまとめ

今津中における生徒の活動推進組織であるエコ・スクール委員会（環境グループ）は，生徒会組織から独立した有志の生徒たちによるグループである．同グループでは，自分の関心や興味のある活動のみに参加する形式をとっている．また，文化祭では，毎年，全校生徒に向けて該当年度の活動報告を行っている.

大人の活動推進組織であるエコ・スクール外部委員会（エコ・スクール委員会）は，同校の教諭と保護者, 行政関係者を含んだ地域支援者から構成され, 年に 1 度の会合以外は, 同校のエコ・スクール活動を同外部委員会メンバーが個別に支援している．また，年度始めの同外部委員会の会合には，環境グループの生徒も参加するようになっており，同外部委員会メンバーは生徒たちから当年度の活動計画や希望する支援内容を聞いた上で，活動に対するアドバイス等を行う. 同校の文化祭では, 環境グループの生徒が報告をした後に, 同外部委員会メンバーが活動に対する激励を行うようになっている.

同校では，エコ・スクール委員会の活動を総合学習や選択理科，さらには各学年で行う遠足にまで取り入れている．同校の活動の特徴は，エコ・スクール委員会の生徒が提案した多様な活動を，生徒と外部委員である地域の支援者が一緒になって実現している点にある．また，外部委員会メンバーの大半は，同校担当教諭と以前から交流のあった人たちや行政機関であり，このことが同校のエコ・スクール活動が地域の人々を巻き込んだ形で実施できている理由の一つであろうと考えられる.

4-8　滋賀県野洲市立野洲中学校[6)]

4-8-1　野洲中学校および校区の概要

野洲中は全校生徒数約 450 人の中学校である（表 4-67 参照）. 学校は国道 8 号線沿線の，比較的交通量の多い場所に立地している．一方，学校裏手には山があり，自然にも恵まれた環境にある．同校は，2004 年 10 月 1 日の市町村合併後，野洲町立から野洲市立に変わった.

表 4-67　野洲中学校の児童数と学級数（2005 年度現在）

	1 年生	2 年生	3 年生	合計
人数　　（人）	141	150	165	456
学級数（クラス）	4	4	5	13

同校のエコ・スクール活動に関しては，2005 年 10 月 11 日，同校エコ・スクール活動担当教諭に対してヒアリング調査を行った他，随時，同教諭とのメールや FAX，電話のやり取りを行った．以下，同校におけるエコ・スクール活動について述べる.

野洲中では，2000 年度から職員室にて，紙の両面使用と使用古紙のリサイクル活動を行っている．2002 年 9 月からは，職員室で行っていた活動をもとに，古紙回収活動（詳しくは後述する）に生徒たちが中心となって取り組むようになった．リサイクル活動の始まりは，旧野洲町環境条例の制定（2000 年）を機に，町（2005 年現在の野洲市）から学校 ISO 活動の要請を受けたことがきっかけであった.

生徒が中心となる古紙回収活動を行うようになった翌年度からは，総合的な学習の時間において環境学習も始まっている．同校では，総合学習の時間に，「人権」（各学年，年間 20 時間）と「環境」（各学年，年間 8 時間），「進路」（各学年，年間 20 時間）を行っており，この 3 分野を総合的な学習の柱としている.

同校には，古紙リサイクル活動が始まるまでは，環境教育あるいは学習と呼ばれるものがなかった．そのため，現在のエコ・スクール活動担当教諭は，学内に環境教育を根付かせたいという思いを持っていた．そのような経緯から，同教諭が県に連絡したことがきっかけとなり，2003 年 4 月にエコ・スクール推進事業に登録，以降，エコ・スクール実践校として活動している.

4-8-2　野洲中学校でのエコ・スクール活動

野洲中では，前述した古紙回収活動を「エコ・スクール活動」と呼んでいる．

同校のエコ・スクール活動の内容を，エコ・スクール活動の流れ（①さあ，はじめよう　②活動テーマと計画をつくろう　③活動しよう　④ふりかえろう　⑤学ぼう, つながろう），に沿って述べていく．

⑥　さあ，はじめよう

3）活動推進組織

同校では，実践校になる以前からあった生徒会の中の委員会を生徒の活動推進組織としている．地域メンバーを含む大人のエコ・スクール委員会は設けられていない．

a．美化委員会

同校では，実践校になる以前からあった，生徒会の美化委員会をエコ・スクール活動における生徒推進組織としている．

同委員会は古紙回収活動と美化点検活動を主に行っている．同委員会では，古紙回収活動を始める以前は，主に校内美化点検とゴミ減量の呼びかけに取り組んでいた．

美化委員会の構成メンバーと活動頻度を表 4-68 に示す．表中の常時活動頻度とは，生徒会活動として定められている時間を指す． 同委員会には，各クラスから男女 1 人ずつ所属する. メンバーの選定方法は, 基本として希望者が同委員会に所属するようになっている．

表 4-68　野洲中学校エコ・スクール委員会の概要（2005 年度）

名称	形態	人数	担当教諭数	常時活動頻度
美化委員会	生徒会（1・2・3 年生）	28 人	3 人	1 回/月

b．エコ・スクール委員会

同校では，保護者や地域の人たちが関わるエコ・スクール委員会が設立されていない．エコ・スクール活動担当教諭自身は，学外の人達が関わるエコ・スクール委員会の必要性を感じている．しかし，人権学習など環境学習以外の課題も多く，同委員会の設立に関して他の教諭からの理解がなかなか得られなかった．2005 年度 5 月，担当教諭が再び，職員会議にて同委員会の設立を提案したところ，同委員会設立に対する同意が他教諭から得られた．しかし 2005 年度現在，エコ・スクール委員会の設立には至っていない．

⑦ 活動テーマと計画をつくろう

美化委員会におけるエコ・スクール活動のテーマは「古紙から始まる循環型社会」というものである．活動テーマを含め，古紙回収活動に関する全ての活動案は美化委員会担当の教諭（エコ・スクール活動担当教諭）によって考案されている．なお，前述したように，同活動はエコ・スクール実践校になる以前から行っていたものであり，実践校になったことによって始まったものではない．

また，同校のエコ・スクール活動担当教諭によると，生徒によるエコ・スクール活動推進組織である美化委員会に関しては，年度によって委員会メンバーの活力がまったく異なるという．そのため，エコ・スクール活動を進めていく上での PDCA サイクルがうまく回っていないようであった．

⑧ 活動しよう

美化委員会の活動である古紙回収活動について説明する．

古紙の回収に関しては，各学級に古紙回収ボックス（ダンボール箱）を設置し，不用な紙が出たら回収ボックスに入れるようにしている．各学級での古紙回収量をあげるために，同委員会からは，活動の呼びかけを行う．また，毎月の活動日には，同委員会メンバーが各学級から出た古紙の重量を測定し，回収重量の上位学級を表彰する．集まった古紙は契約業者に引き取りを依頼し，回収量に応じて「古紙回収券」を発行してもらう．「古紙回収券」を野洲町（現，野洲市）環境課に提出すると「回収協力金」がもらえるシステムになっている．同校では，古紙回収によって得られたお金を生徒会に還元するようにしている．回収した古紙を業者へ引き渡す作業（約 1 時間半程度の作業）は，2003 年 11 月と 2004 年 6 月の放課後に行っており，同作業には，同委員会メンバーと生徒会執行部など約 50 人が従事した．なお，業者へ引き渡した古紙の量は，1 回の引渡し作業につき，4 トントラック 2 台分ほどであった．

ただし，活動記録は残っていないが，上位学級への表彰は活動を始めて半年（2003 年度初め）くらいで途切れたようである．また，回収した古紙の引渡しも業者が変わったため，現在（2005 年度）は行われていない．現在，回収した古紙は空き教室に保管しており，引渡しをするかどうかは検討中である．

⑨ ふりかえろう

同校では，年度末に，美化委員会生徒が一年間の活動のふりかえりを行っている．ただし，同中学校はエコ･スクール認定校への申請を一度も行っておらず，そのため，他校のようなチェックリストへの記入は行っていない．

⑩ 学ぼう，つながろう

1）学ぼう

前述したように，同校では，2003 年度から総合学習の時間の中で環境学習を年間各学年で 6 時間行っている．同環境学習では，1 年生に 4 つ，2 年生に 4 つ，3 年生に 5 つのコースが設けられ，コースごとに違ったテーマの学習を行う．各コースへの配属は，生徒の希望制による．

2003 年度から始まった環境学習であるが，同年度学年末に行われた同校教諭による学校評価会議の際には，環境学習に費やす時間（年間 1 学年 6 時間）が多すぎるとの意見も出たようである．

各学年に設けられた総合学習の中での環境学習のコース名と授業の概要（2003，2004 年度）を表 4-69 に示す．

表 4-69　野洲中学校における総合学習で行われる環境学習の概要（2003，2004 年度）

	コース名	授業概要
1 年生	水	水不足，飲み水，水中成分
	森林とキノコ	森林の働き，森の分解者，有用きのこ
	ゴミ，消費生活	ゴミの種類，再生されるゴミ，消費生活
	衣生活，住生活	ハウスダスト，シックハウス，学習最適照度
	食生活	ファーストフードの恐ろしさ，スローフードのすすめ，地元の食材
2 年生	人口問題，土，農業	滋賀の農業，農業と環境保全，世界の人口問題
	省エネルギー	電気エネルギー，ダム問題，エネルギーのコスト
	緑と森林	CO_2問題，炭で知る，暖房と冷房
	ひとと自然	身近な自然，有用植物，広がる砂漠
3 年生	新エネルギー	風力発電，太陽光パネル，燃料電池
	地域通貨	地域通貨について
	企業と環境問題	ISO14001，企業で行われる環境への取り組み，リサイクル
	環境と文化	滋賀の食文化つけもの，たで寿司
	古代人と環境	古代の環境問題，古代のゴミ，道具とゴミ

総合学習の中で行う環境学習の内容は年度によって多少の変化があり，2005 年度は愛知万博の見学なども行っている．

2）つながろう

地域とのつながりとしては，前述した総合学習で行う環境学習の時間に，地域の NPO や企業，行政等から外部講師を招いている．外部講師に関しては，2003 年度当時の行政（野洲町）職員からの紹介を受け，依頼することができたという．

4-8-3　野洲中学校におけるエコ・スクール活動のまとめ

野洲中では，実践校になる以前からあった組織を環境グループにしているため，同グループの活動に関して実践校になる前後での変化があまり見られない．

生徒の活動推進組織である美化委員会（環境グループ）は生徒会組織の中に位置づけられている．同委員会は，実践校になる以前から実施していた古紙回収活動を行っており，同運動が同校でのエコ・スクール活動となっている．

大人の活動推進組織であるエコ・スクール委員会は，設立されていない．同委員会が設立できていない理由は主に，エコ・スクール活動に対する他の教諭からの理解が得られていないからである．

また，同校は 2005 年度現在もエコ・スクール実践校とはなっているが，2005 年度は活動の登録書を滋賀県エコ・スクール推進事業事務局に提出していない．活動担当教諭は，同推進事業に対して，敷居が高いように思えると話している．また，エコ・スクールの認定に関しても，申請しても何も変わらないので，申請してもしなくても同じであるという意見を持っていた．

4-9　滋賀県エコ・スクール推進事業による各実践校への支援内容について

本節では，まず，滋賀県エコ・スクール推進事業による各実践校への支援として，同推進事業開始から 2004 年度まで事業業務を受託していた環境学習 NPO（環境レイカーズ）が各実践校に対して実施してきた主な支援（2001 年度～2004 年度）の内容について述べる．なお，支援の内容に関しては，前述の実践事例の順に，各校ごと示していく．その後に，連絡協議会議や認定委員会など，実践校一校ずつではなく，全ての実践校を対象とした事業からの支援内容について紹介する．

4-9-1　エコ・スクール推進事業から油日小学校に対して行われた活動支援について

エコ・スクール推進事業から油日小への活動支援として，環境レイカーズが 2004 年度までの間，同校に対して実施してきたものを表 4-70 に示す．なお，同表では各支援の内容を「実践校に対する連絡や活動アドバイス」「教員研修」「学校で行う授業の講師（全校対象あるいは一部の学年や学級対象）」「児童生徒の活動推進組織である環境グループに対する支援」「大人の活動推進組織であるエコ・スクール委員会に対する支援」「各種，式典関係への出席」に分類し，右欄に記している．

表 4-70　エコ・スクール推進事業から油日小学校への活動支援の内容

年度	概要	
2001	学校長・教頭・教務主任・担当教諭への活動説明	連絡・活動アドバイス
	教員ワークショップ「イメージづくり」指導	教員研修
	校内探検チェックプログラムづくり指導（教諭）	
	校内探検チェックプログラムづくり指導（児童）	授業
	エコ・スクール計画づくり指導（環境委員会）	環境グループ活動支援
2002	活動･事業に関する説明および担当者との年度計画づくり	連絡・活動アドバイス
	エコ・スクール支援委員会設立会議参加	
	ヒアリング（エコ・スクール経過報告，今後の動き）	
	児童総会「エコ・スクールについて」参加	授業（全校）
	エコ・スクール支援委員会参加および指導	支援委員会活動支援
	エコ・スクール支援委員会主催校内自然観察会参加	
2003	活動･事業に関する説明および担当者との年度計画づくり	連絡・活動アドバイス
	担当者会議 2「計画づくり」参加および指導	
	4 年生授業講師「環境教育という仕事」	授業（各学年）
	エコ・スクール支援委員会参加および指導	支援委員会活動支援
	エコ・スクールフラッグ授与式出席	エコ・スクール活動に関する式典への出席
	エコ・スクール認定書授与式（認定式）出席	

支援内容の具体例として，エコ・スクール支援委員会会合での支援内容を紹介する．

実践校になって，一番初めに開催されたエコ・スクール支援委員会会合において，環境レイカーズによる指導のもと，エコ・スクールについての理解を深めるためのワークショップがもたれ，エコ・スクール支援委員会として今後どのような支援や取り組みができるか話し合われた．さらに，2003 年度の支援委員会会合でも前年度と同様のワークショップが開催され，活動支援内容について話し合いがもたれた結果,「杣川での自然観察」と「周辺での植物料理」が最終案として残り，実施に向けて検討していくこととなった．

4-9-2　エコ・スクール推進事業から御園小学校に対して行われた活動支援について

エコ・スクール推進事業から御園小への活動支援として，環境レイカーズが 2004 年度までの間，同校に対して実施してきたものを表 4-71 に示す．なお，4-9-1 同様，各支援の内容を分類し，同表の右欄に記している．

表 4-71　エコ・スクール推進事業から御園小学校への活動支援の内容

	概要	
2001	学校長・教頭・教務主任・担当教諭への活動説明	連絡・活動アドバイス
	教員ワークショップ「イメージづくり」指導	教員研修
	校内探検チェックプログラム指導（教諭）	
	校内探検チェックプログラム指導（児童）	授業
	学校周辺環境チェック発表会参加および指導（児童）	
2002	活動・事業に関する説明および担当者との年度計画づくり	連絡・活動アドバイス
	ヒアリング（エコ・スクール経過報告，今後の動き）	
	教員研修「せせらぎの森発見ワーク」指導	教員研修
	児童の学校探検チェック参加および指導	
	6 年生授業講師「環境ワークショップ」	授業（学年）
	エコ・スクール支援委員会参加および指導	支援委員会活動支援
2003	活動・事業に関する説明および担当者との年度計画づくり	連絡・活動アドバイス
	教員研修「せせらぎの森利用法」指導	教員研修
	6 年生授業講師「エコ・スクール課題抽出ワーク」	授業（学年）
	エコ・スクール支援委員会参加および指導	支援委員会活動支援
	エコ・スクールフラッグ授与式（認定式）出席	エコ・スクール旗授与式への出席

支援内容の具体例として，6 年生を対象に行った課題抽出ワーク（2003 年度）の内容を紹介する．

同活動では，6 年生の児童たちが学校内を探検し，学校の課題を見つけ，課題を詩に表した．このとき，あげられた課題には，せせらぎの森にくる虫のこと，学校内の電気利用

のこと，給食残飯を減らす活動のこと等があった．

4-9-3　エコ・スクール推進事業から近江兄弟社小学校に対して行われた活動支援について

エコ・スクール推進事業から近江兄弟社小への活動支援として，環境レイカーズが 2004 年度までの間，同校に対して実施してきたものを表 4-72 に示す．なお，4-9-1 同様，各支援の内容を分類し，同表の右欄に記している．

表 4-72　エコ・スクール推進事業から近江兄弟社小学校への活動支援の内容

	概要	
2001	学校長・教頭・教務主任・担当教諭への活動説明，フィールド視察	連絡･活動アドバイス
	教員ワークショップ「イメージづくり」指導	教員研修
2002	活動・事業に関する説明および担当者との年度計画づくり	連絡･活動アドバイス
	ヒアリング（エコ・スクール経過報告，今後の動き）	
	教員研修「シンボルマーク作り」参加および指導	教員研修
	各学年教員面談「授業での活用について」指導	
	教員研修「北の庄沢探検チェック」指導	
	児童総会 1「北の庄沢を考える」指導	授業（全校）
	児童総会 2「北の庄沢を考える」指導	
	児童総会 3「近江兄弟社村構想」指導	
2003	各学年教員面談「授業での活用について」参加および指導	教員研修
	教員研修「北の庄沢の活用法」指導	
	今津中・近江兄弟社小学校合同職員研修会参加および指導	
	エコ・スクールワークショップ「兄弟社村をつくる」指導	授業（全校）
	エコ・スクールフラッグ授与式出席	エコ･スクール活動に関する式典への出席
	エコ・スクール認定書授与式（認定式）出席	

支援内容の具体例として，教員研修および今津中との合同教員研修の内容を紹介する．

教員研修「授業での活用について」（2003 年度）では，各学年の担当教諭間において，兄弟社村を活用した授業カリキュラムに関する話し合いが行われた．同研修会では，子どもたちが主体的に学ぶことのできるような授業案を作ることに関して議論がなされた．また，レイカーズからは，教諭の意識が活動の計画段階では大切であるとの注意があった．同研修の結果，兄弟社村を活用した授業のテーマとして，1 年生では「水田雑草」，2 年生では「北の庄沢の魚」，3 年生では「近江八幡の特産農産物」，4 年生では「ミニ北の庄沢（ビオトープ）づくり」，5 年生「米作農業」，6 年生「琵琶湖」が決定され，また，レイカーズからは，各テーマの具体的な実施方法についてもアドバイスがあった．

今津中との合同研修会では，レイカーズの支援のもと，両校の教諭たちが西の湖におい

て環境調査を実施した．その他にも，カヌーに関する指導方法の研修や，両校で行われているエコ・スクール活動の情報交換等が行われた．教員研修を合同で行うことにより，実践校同士の親睦を深めることができたようである．

4-9-4　エコ・スクール推進事業から逢坂小学校に対して行われた活動支援について

エコ・スクール推進事業から逢坂小への活動支援として，環境レイカーズが 2004 年度までの間，同校に対して実施してきたものを表 4-73 に示す．なお，4-9-1 同様，各支援の内容を分類し，同表の右欄に記している．

表 4-73　エコ・スクール推進事業から逢坂小学校への活動支援の内容

	概要	
2003	学校長・教頭・教務主任・担当教諭への活動説明	連絡・活動アドバイス
	担当者会議「企画作り」参加および指導	
	教員研修「エコ・スクールイメージ作り」指導	教員研修
	教員研修「校内環境探検チェックプログラム」指導	
	エコ・スクール支援委員会参加および指導	支援委員会活動支援
	エコ・スクールフラッグ授与式出席	エコ・スクール旗授与式
2004	活動・事業に関する説明および担当者との年度計画づくり	連絡・活動アドバイス
	教員研修「エコ・スクールのイメージづくり」指導	教員研修
	1 年生授業講師「秋と遊ぼう　学校の裏庭編」	授業（学年）
	エコ・スクール支援委員会参加および指導	支援委員会活動支援
	エコ・スクール支援委員会活動 「吾妻川の生き物調べ」参加	
	エコ・スクール認定証授与式（認定式）出席	認定証授与式への出席

支援内容の具体例として，教員研修の内容を紹介する．

2003 年度に実施された教員研修では，環境レイカーズの指導の下，同校の教諭 13 人が集まり，「環境」をテーマにしたブレーンストーミングを行った．その後，どのような学校になって欲しいか，教諭たちが意見を出し合い，それをもとに，具体的な行動計画が話し合われた．教諭たちから出された案には，「みんなが環境に目を向けるために，全員が環境主任になろう」というものや，「環境に関して詳しい人になろう」といったものがあった．

4-9-5　エコ・スクール推進事業から老蘇小学校に対して行われた活動支援について

エコ・スクール推進事業から老蘇小への活動支援として，環境レイカーズが 2004 年度までの間，同校に対して実施してきたものを表 4-74 に示す．なお，4-9-1 同様，各支援の内

容を分類し，同表の右欄に記している．

表 4-74　エコ・スクール推進事業から老蘇小学校への活動支援の内容

	概要	
2003	学校長・教頭・教務主任・担当教諭への活動説明	連絡・活動アドバイス
	担当者協議「来年度のエコ・スクールの取り組み」参加および指導	
	教員研修「エコ・スクールのイメージ作り」指導	教員研修
	フローティングスクールでのエコ活動指導	授業（学年）
	エコ・スクール支援委員会参加および指導	支援委員会活動支援
	エコ・スクールフラッグ授与式出席	エコ・スクール旗授与式
2004	活動・事業に関する説明および担当者との年度計画づくり	連絡・活動アドバイス
	6 年生担任協議「エコ・スクール活動の計画作り」参加および指導	教員研修
	5 年生担任協議「エコ・スクール活動の活動計画練り直し」参加および指導	
	西の湖での環境学習「外来魚について」参加および指導	授業（学年）
	5 年生授業講師「知ろうびわこ水がきれいってどんなこと？」	
	6 年生授業講師「学習成果の伝え方」	
	6 年生授業　環境啓発活動「琵琶湖一周サイクリング」参加および指導	
	エコ・スクール認定証授与式（認定式）出席	認定証授与式への出席

支援内容の具体例として，2003 年度に行われたフローティングスクールの内容を紹介する．

滋賀県では，県内の小学校 5 年生の児童が「うみのこ」と呼ばれる環境学習船に乗り込み琵琶湖学習を一泊二日で行う活動が 1983 年から実施されており，同活動を「フローティングスクール」と呼んでいる．老蘇小では，エコ・スクール活動の一環として琵琶湖学習を位置づけていたことから，老蘇小が参加したこの年のフローティングスクールでは，モデル的なプログラムの開発と実践が行われた．具体的には，透明度調査や深層水汲み上げ体験，プランクトン調査などの琵琶湖調査プログラム，水草拾いやしおり作り，砂遊びや琵琶湖の漂流物調査など湖岸での学習などが行われ，夜にはグループごとに活動をまとめ，発表する場がもたれた．

4-9-6　エコ・スクール推進事業から能登川南小学校に対して行われた活動支援について

エコ・スクール推進事業から能登川南小への活動支援として，環境レイカーズが 2004 年度までの間，同校に対して実施してきたものを表 4-75 に示す．なお，4-9-1 同様，各支

援の内容を分類し，同表の右欄に記している．

表 4-75　エコ・スクール推進事業から能登川南小学校への活動支援の内容

	概要	
2003	学校長・教頭・教務主任・担当教諭への活動説明	連絡・活動アドバイス
	教員研修「エコ・スクールのイメージ作り」指導	教員研修
	教員研修「校内探検チェックプログラム」指導	
	エコ・スクール支援委員会参加および指導	支援委員会活動支援
	エコ・スクールフラッグ授与式出席	エコ・スクール旗授与式への出席
2004	活動･事業に関する説明および担当者との年度計画づくり	連絡・活動アドバイス
	教員研修「校内環境チェックプログラム」指導	教員研修
	教員研修「カリキュラムの中のエコ・スクール活動」指導	
	エコ・スクール委員会　活動支援指導	環境グループ活動支援
	エコ・スクール支援委員会参加および指導	支援委員会活動支援

支援内容の具体例として，教員研修の内容と支援委員会での内容を紹介する．

教員研修「校内探検チェックプログラム」（2003 年度）では，同校教諭たちがレイカーズの支援のもと, 学校内の電気使用量や二酸化炭素濃度, 水質の調査などを行った. また, エコ・スクール支援委員会会合（2003 年度末）では, エコ・スクール活動に対する評価と, 今後の取り組み内容が議論され，支援委員会のメンバーから，同委員会でエコ・スクール活動の評価を行って良いのか，という質問が出ている．その際，レイカーズからは「チェック用紙の項目は一定の基準であるが，オリジナルな基準をつくることも可能である」ということや,「評価することで学校の取り組みを詳しく知ろうとするだろう」と言った内容のアドバイスがなされている．

4-9-7　エコ・スクール推進事業から今津中学校に対して行われた活動支援について

エコ・スクール推進事業から今津中への活動支援として, 環境レイカーズが 2004 年度までの間，同校に対して実施してきたものを表 4-76 に示す．なお，4-9-1 同様，各支援の内容を分類し，同表の右欄に記している．

表 4-76　エコ・スクール推進事業から今津中学校への活動支援の内容

	概要	
2001	学校長・教頭・教務主任・担当教諭への活動説明	連絡・活動アドバイス
	教員ワークショップ「イメージづくり」指導	教員研修
	校内探検チェックプログラムづくり指導（教員）	
	校内探検チェックプログラムづくり指導（生徒）	授業
2002	活動･事業に関する説明および担当者との年度計画づくり	連絡・活動アドバイス
	ヒアリング（エコ・スクール経過報告，今後の動き）	
	エコ・スクール発表会（講評と激励）参加	全校活動への参加
	秋の全校自然体験活動参加	
2003	活動･事業に関する説明および担当者との年度計画づくり	連絡・活動アドバイス
	今津中･近江兄弟社小学校合同職員研修会参加および指導	教員研修
	環境教育研修会参加および指導	
	エコ・スクール委員会活動発表会参加	環境グループ活動支援
	エコ・スクール支援委員会参加	支援委員会活動支援
	エコ・スクールフラッグ授与式出席	エコ･スクール活動関係式典への出席
	エコ・スクール認定書授与式（認定式）出席	

支援内容の具体例として，教員研修の内容について紹介する．

2003 年度（2004 年 1 月）に行われた教員研修では，環境グループの生徒たちと同校教諭数人が，椋川という所へ行き，クロスカントリースキーや周辺の散策コース作りを通した体験や，かまくら作りを行った．また，夜には，環境教育を学校内にどのようにして定着させていくか教諭間で話し合いがもたれた．話し合いの結果，主となる教諭が環境に関することだけでなく，学校での発言力を高め，他の教諭たちを巻き込んでいくことが必要であるという意見にまとまったようである．

4-9-8　エコ・スクール推進事業から野洲中学校に対して行われた活動支援について

エコ・スクール推進事業から野洲中への活動支援として，環境レイカーズが 2004 年度までの間，同校に対して実施してきたものを表 4-77 に示す．なお，4-9-1 同様，各支援の内容を分類し，同表の右欄に記している．

表 4-77　エコ・スクール推進事業から野洲中学校への活動支援の内容

	概要	
2003	学校長・教頭・教務主任・担当教諭への活動説明	連絡・活動アドバイス
	担当者会議「計画作り」指導	
	教員研修「環境教育セミナー」参加	教員研修
	生徒「バードウォッチング」参加	授業参加
	エコ・スクールフラッグ授与式出席	エコ・スクール旗授与式への出席
2004	活動・事業に関する説明および担当者との年度計画づくり	連絡・活動アドバイス
	担当者会議「支援委員会づくり」指導	
	教員研修「エコ・スクールづくり」指導	教員研修
	野洲町環境教育部会「環境教育授業・協議」参加および指導	
	全校対象の講演「環境教育」	授業
	1 年生授業講師「環境教育 1」	
	1 年生授業講師「環境教育 2」	

支援内容の具体例として，教員研修の内容を紹介する．

2003 年度の教員研修では，レイカーズが研修の講師を務めるのではなく，某大学教授が講師を務め，地球温暖化やエネルギー問題に関する内容の講義を行った．同研修には，野洲中学校の教諭だけではなく，地域の保育園や幼稚園，小中学校の保育士および教諭，計 15 人が集まった．

4-9-9　連絡協議会議，認定委員会，その他，事業からの支援内容について

ここでは，実践校個別に行った支援ではなく，エコ・スクール実践校間の連絡協議会議や認定委員会，事業から実践校に対するその他の支援の概要を説明する．

1）連絡協議会議について

エコ・スクール実践校間の連絡協議会議（2002～2004 年度）の概要を表 4-78 に示す．

表 4-78　エコ・スクール実践校間連絡協議会議（2002～2004 年度）の概要

<table>
<tr><th>年度</th><th></th><th>出席者</th><th>開催地</th><th>主な内容</th></tr>
<tr><td rowspan="2">2002</td><td>第一回
（2002 年 8 月）</td><td rowspan="2">エコ・スクール実践校担当教諭,

環境政策課担当者,

環境レイカーズ</td><td>滋賀県
厚生会館</td><td>環境政策課担当者より，エコ・スクール活動および事業に関する説明があった後，実践校での活動状況の説明，エコ・スクール旗のデザインに関する話し合いが行われた．</td></tr>
<tr><td>第二回
（2002 年 10 月）</td><td>北の庄沢,

近江兄弟社小</td><td>近江兄弟社小の活動状況報告に兼ねて，出席者が学校近くの北の庄沢をカヌーにて散策した．その後，兄弟社小に戻り，兄弟社小以外の実践校での活動状況の報告が行われた．</td></tr>
<tr><td>2003</td><td>第一回
（2003 年 11 月）</td><td rowspan="2">エコ・スクール実践校担当教諭,

エコライフ推進課担当者,

環境レイカーズ</td><td>老蘇小</td><td>今年度の事業についてエコライフ推進課担当者からの説明があり，その後，各校担当教諭より実践校の活動状況の説明が行われた後，老蘇小のビオトープを出席者全員で視察した．</td></tr>
<tr><td>2004</td><td>第一回
（2005 年 2 月）</td><td>能登川南小</td><td>今年度の事業についてエコライフ推進課担当者からの説明があり，その後，出席者の自己紹介，認定申請の際に必要な資料等の確認，各校担当教諭より実践校での活動状況の説明が行われた．その後，出席者全員が能登川南小の校舎内を回り，エコ・スクール活動の視察を行った．最後に，今後のエコ・スクール活動の広め方に関する議論がもたれた．</td></tr>
</table>

エコ・スクール実践校間の連絡協議会議は，毎回，実践校を開催地として行われる．開催地となる実践校は，各校，持ちまわりである．

連絡協議会議では主に，実践校で行われている活動状況の報告やエコ・スクール活動を県内の小中学校に広めるための方策等についての議論がなされる．また，開催場所に選ばれた実践校の活動視察も同時に行われる．

2）認定委員会について

エコ・スクール認定校を決定するための認定委員会は，2003 年度から開催されている．同認定委員会（2003～2004 年度）の概要を表 4-79 に示す．

表 4-79　認定委員会（2002～2004 年度）の概要

<table>
<tr><th>年度</th><th></th><th>出席者</th><th>主な内容</th></tr>
<tr><td rowspan="2">2003</td><td>第一回
（2003 年 12 月）</td><td rowspan="4">認定委員（実践校担当教諭数人，学校教育課担当者を含む）

実践校担当教諭数人

エコライフ推進課担当者

環境レイカーズ</td><td>各校担当教諭より，エコ・スクール実践校の活動状況が説明された後，実践校で行われている活動に対する質疑応答が行われた．その後，チェックリストの項目に関する検討が行われた．</td></tr>
<tr><td>第二回
（2004 年 3 月）</td><td>チェックリスト評価項目に関して，前回の認定委員会での議論内容を踏まえ，改良された点の説明があった．その後，エコ・スクール実践校の活動状況の報告があり，また，認定の際に必要な資料の説明がエコライフ推進課担当者からあった．認定に関しては，認定委員が，各校から提出された成果物（活動内容を示した壁新聞等）を確認し，各校で行われている活動の良い面に関しての評価や，課題と思われることに対してのアドバイス等が行った．</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2004</td><td>第一回
（2004 年 9 月）</td><td>レイカーズより，エコ・スクール実践校の活動状況が説明された後，実践校で行われている活動に対する質疑応答が行われた．その後，エコ・スクール活動を広めていくことに関する議論がなされた．</td></tr>
<tr><td>第二回
（2005 年 3 月）</td><td>第一回目（2004 年度）の認定委員会と同様の内容に加えて，エコ・スクールの認定に関する話し合いがもたれた．認定の方法に関しては，2004 年 3 月と同じであった．</td></tr>
</table>

認定委員会では，申請のあった実践校をエコ・スクールとして認定することを知事に推薦する．その際，実践校から提出された資料をもとに，認定委員メンバーが話し合いを行う．また，認定の決定を行う以外にも，認定申請を行う際に各実践校がエコ・スクール推進事業事務局に対して提出するチェックリストの項目に関する議論や，エコ・スクール推進事業の今後の展開方法などが話し合われる．

なお，同認定委員会によるエコ・スクールの認定は，学校を評価あるいは選別するものではない．同推進事業のモデルとなっているイギリスのエコ･スクールプロジェクトでは，評価委員に任命されたメンバーが実践校に対して活動に関するヒアリング調査を行い，評価を行っているが，滋賀県でのエコ・スクール推進事業は，環境 ISO など学校の均質化を招くものとは異なり，学校の活性化や環境学習の推進を目的としている．そのため，エコ・スクール活動を評価するのは，各実践校のエコ・スクール委員であり，認定委員会では環境グループやエコ・スクール委員が活用するチェックリストの評価項目を作り，エコ・スクール認定校として知事への推薦を行う機関として存在すると考えられている．

3）事業から実践校へのその他の支援内容について

エコ・スクール推進事業による各実践校へのその他の支援としては，次のようなものが

ある．

滋賀県では，滋賀県環境学習のつどい（2004 年度までの滋賀県環境学習フェア）が毎年，一般公開で開催される．同集いでは，滋賀県教育委員会によって実施されている環境教育モデル校という事業に参加している学校の児童生徒たちが，各校での環境に関する活動状況の報告をポスターセッションによって行っている．同イベントにおいて，エコ・スクール実践校の児童たちも活動の発表を行うが，実践校の児童や教諭には，ポスターセッション以外にも，活動報告を行う場が提供されている．2004 年度および 2005 年度の滋賀県県民環境学習のつどい（2004 年度は滋賀県環境学習フェアという名称）において，実践校の児童または教諭がポスターセッション以外に参加した活動の概要を表 4-80 に示す．

表 4-80　滋賀県県民環境学習のつどい（2004 年度までの滋賀県環境学習フェア）

年度	名称	主な内容
2004	ラウンドテーブル 「知ろう！深めよう！それぞれの思いとつながり～学校での環境学習～」	小学校教諭，保育士，行政，NPO が集い，環境学習について話し合う場において，エコ・スクール実践校の教諭（御園小，近江兄弟社小，能登川南小）が参加し，意見交換を行った． なお，同会が 2004 年度のエコ・スクールセミナーに充てられている．
2005	環境ほっと・カフェ 「わたしたちにできること～学校から地域・家庭へ～」	エコ・スクール実践校（油日小，御園小，近江兄弟社小，逢坂小，老蘇小，能登川南小，本庄小，笠縫東小）の環境グループから各校，代表者 1 人が出席し，一般公開で，普段のエコ・スクール活動の取り組み内容や，環境を良くしていくために，どんなことをすれば良いのか，といった議論を行った．

また，県外で行われる環境に関するイベントとして，滋賀県と山梨県，静岡県の児童たちが集う「三県交流事業」というものが夏休みに行われている．同事業に関しても，毎年，滋賀県エコライフ推進課担当者からの呼びかけを受け，実践校の児童たちが滋賀県の代表者として参加している．

4-9-10　実践校に対する事業からの支援内容のまとめと考察

環境レイカーズによる各校への支援には，活動に関する連絡や相談，授業での講師，教員研修の開催，エコ・スクール委員会への参加など様々なものがあり，エコ・スクール実践校の活動を幅広く支援していたと言えるだろう．また，その支援内容は，知識を体験に結びつけることや，児童生徒の自主性の育成を目指したものなど，エコ・スクール活動の目的に沿ったものばかりである．

各実践校が個別にレイカーズから受けていた支援の内容を見てみると,実践校によって,支援の内容に若干の違いが見られる．例えば，老蘇小では授業の講師として，支援を行うことが多かったのに対して，近江兄弟社小では，主に教員研修を活動支援として開催していた．各校の支援内容は，毎年，各実践校の担当教諭とレイカーズとの話し合いによって決められていた．そのため，各実践校の状況や要望に応じた，きめ細やかな支援を行うことができていたのだと考えられる．

また, 滋賀県環境学習のつどいや三県交流事業など, エコ・スクール実践校だからこそ,参加の呼びかけがかかるということは，実践校の児童や教諭にとって活動の動機づけになっていると考えられる．

4-10　2005 年度新規エコ・スクール実践校について

本節では, 2005 年度から新たにエコ･スクール実践校に登録した 5 つの小中学校のうち, ヒアリング調査を行った笠縫東小，本庄小，石部南小の 3 校でのエコ・スクール活動について紹介する．なお，第三章でも述べたが，2005 年度から新たに実践校となった 5 つの小中学校では，2005 年度現在（調査時点）において活動が始まっていない学校も多い．そのため，同 3 校の活動に関しては，活動推進組織と，今後，どのように活動を進めていく予定であるのかという点を中心に述べることとする. なお, 本節であげる実践校の並び順は, 2005 年度の滋賀県作成資料での並び順に準じる.

4-10-1　高島市立本庄小学校

本庄小は，全校児童数 152 人の比較的小規模な小学校である（表 4-81 参照）.

表 4-81　本庄小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 15 日　現在）

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	合計
人数　　（人）	26	22	21	23	33	27	152
学級数（クラス）	1	1	1	1	1	1	6

同校のエコ・スクール活動に関しては，2005 年 10 月 20 日，同校エコ・スクール活動担当教諭（教頭）に対してヒアリング調査を行った．以下，同校におけるエコ・スクール活動推進組織およびエコ・スクール活動の進め方について述べる.

1）本庄小学校におけるエコ・スクール活動

同校では，2004 年度までのエコ・スクール実践校と異なり，4，5 年生全員（4 年生：23 人，5 年生：33 人の計 2 クラス）を児童の活動推進組織である環境グループとしている.

大人のエコ・スクール委員会に関しても，他の実践校と異なり，同校教諭（学校長，教頭，5 年生担任，理科担当教諭 2 人）によって環境教育推進委員会と呼ばれる組織を立ち上げ，同組織をエコ・スクール委員会とみなしている.

エコ・スクール活動としては，上記の環境教育推進委員会が，環境グループである 4，5 年生の授業での環境学習の内容を検討しているそうである．同校エコ・スクール活動担当教諭はエコ・スクール活動に対し，児童の推進組織を作って実践活動を行っても，なぜ，実践的な活動をする必要があるのかを児童が認識していないと意味がない，という考えを持っている．そのため，他の実践校のように，少人数の児童や生徒で構成される環境グル

ープを設けるのではなく，まずは授業づくりに力を入れようとしているようである．

4-10-2　甲賀市立石部南小学校

石部南小は，全校児童数 386 人の小学校である（表 4-82 参照）．

表 4-82　石部南小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 23 日　現在）

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	合計
人数　　（人）	61	59	69	66	63	68	386
学級数（クラス）	2	2	2	2	2	2	12

同校のエコ・スクール活動に関しては，2005 年 11 月 22 日，同校エコ・スクール活動担当教諭に対してヒアリング調査を行った．以下，同校におけるエコ・スクール活動推進組織およびエコ・スクール活動の進め方について述べる．なお，同校は 2001 年度に滋賀県事業の一つである「おうみ森っこスクール」に登録しており，それ以降，学校の裏山を活用した林業体験を授業等に取り入れている．

1）石部南小学校におけるエコ・スクール活動

石部南小では，エコ・スクール実践校になったことに伴い，全校児童を「エコ・キッズ」と称すことにし，児童の活動推進組織である環境グループを「エコ・キッズリーダー」（エコ・キッズである全校児童のリーダー的存在）という名称で新たに設立した．2005 年度現在，エコ・キッズリーダーは，同校エコ・スクール活動担当教諭が 5 年生に呼びかけ，集まった 7 人の児童で構成されている．

また，同校には，おうみ森っこスクールに登録した当時より，地域の林業経験者を中心（同校教諭もメンバーとなっている）とした「みどりのバトンタッチ」という団体（メンバー数，約 25 人）が設立されており，実践校となってからは，同団体を大人の活動支援組織であるエコ・スクール委員会と位置づけている．みどりのバトンタッチは年に 3 回，同校にて会合を開催しており，同会合で議論された内容を参考に，教諭たちは授業内容（森林学習に関わるもの）の構成を考えている．同校では，エコ・スクール実践校になってからも林業を中心とした活動（森林学習）を行っていくようである．

4-10-3　草津市立笠縫東小学校

笠縫東小は，全校児童数約 600 人の比較的規模の大きな学校である（表 4-83 参照）.

表 4-83　笠縫東小学校の児童数と学級数（2005 年 7 月 20 日　現在）

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生	合計
人数　　（人）	94	93	111	97	104	102	601
学級数（クラス）	3	3	3	3	3	3	18

同校のエコ・スクール活動に関しては，2005 年 10 月 12 日，同校エコ・スクール活動担当教諭に対してヒアリング調査を行った．以下，同校におけるエコ・スクール活動推進組織およびエコ・スクール活動の進め方について述べる．なお，同校が所在する草津市では 2004 年度より，全小学校において学校版 ISO の取り組みが実施されており，同校でも，全校児童で節電やコンポスト（草津市内全校に設置されている），紙の削減活動などに取り組んでいる.

1）笠縫東小学校におけるエコ・スクール活動

前述したように，同校では学校版 ISO の取り組みとして，節電やコンポスト，紙の削減活動に取り組んでいる．同校では 2004 年度まで，全クラスに節電や紙の削減等に関するチェック用紙を配布し，児童会組織のうちの一つである環境委員会のメンバーが同用紙のチェック作業を行っていた．しかし，2005 年度からは，さらに全校あげて環境への取り組みを行っていくために，環境委員会を児童会組織からなくし，児童会全組織を統括している運営委員会の活動の中に環境への取り組みを含めることにした．エコ・スクール実践校となってからは，運営委員会を活動のための児童推進組織に位置づけている.

一方，大人のエコ・スクール委員会に関しては，滋賀県に提出した登録書によると，環境教育部会と記されているが，実際に聞いてみると，環境に関連した部会は学校組織の中にも PTA 組織の中にも存在しているが，教諭と PTA が合同で会議を行うことはない，ということであった.

地域支援者と保護者や学校教諭がともに参加するエコ・スクール委員会の設立に関しては現在，検討中である．ただし，同委員会に関しては，現在，学校だけでも学校版 ISO などの環境実践活動を行うことができているため，あえて，地域の人を含めた委員会のような組織を作る必要はないのではないか，逆に作ることで，ややこしくなるのではないかという懸念を表明していた．また，実践活動を行っている過程で，地域の人たちの参加を児童が求めるのであれば，保護者に声をかけるが，そうでないのならば，保護者や地域の人

に依頼する事もなく，委員会を作っても無駄になる，という意見であった．

エコ・スクール活動に関しては，雨水の利活用を運営委員会の児童が提案している．しかし，雨水を貯めるための設備を児童だけで作ることが困難であることや，運営委員会の活動の多忙さ等によって，実際の活動にまでは至っていない．現在は，雨水の利活用に関しては中断し，学校版 ISO の取り組みをもっと盛り上げていけるような活動を考えているという．

また，エコ・スクール推進事業に関して，同校担当教諭は，形に当てはめなければいけないような仕組みではなく，どこの学校でも適用できるようなものがいいだろうし，そうでないと活動が多くの学校にも拡がっていかないだろう，という意見をもっていた．

4-10-4　2005 年度認定委員会について

2005 年度のエコ・スクール認定委員会として，2005 年度より実践校になった 5 校も加わった認定委員会が 2006 年 3 月に開催された．同認定委員会の概要を表 4-84 に示す．

表 4-84　認定委員会（2005 年度）の概要

年度	出席者	主な内容
2005	・認定委員（実践校担当教諭数人，学校教育課担当者を含む） ・各実践校担当教諭 ・エコライフ推進課担当者 ・環境学習支援センター担当者	各校の活動を報告する子どもたちが作った壁新聞や掲示物をもとに，担当教諭より各実践校における活動状況が説明された後，認定委員や他の実践校担当教諭からの質問に対する質疑応答が行われた．その後，認定委員のみでエコ・スクールの認定に関する話し合いがもたれた．認定の方法については，前年度までとは変わり，新たに 3 つの認定基準が認定委員長より示された．認定に関しては，同基準をもとに認定委員が各実践校の活動を評価し，後日，結果を各校に通知する形に改正された．

上表に記したように，2005 年度の認定委員会では「1. 環境学習の体験や実践を通して，自ら気づき，発見し，自分で考え，行動する力を育てる」「2. 児童・生徒の自主性，主体性を育てる」「3. 先生や保護者，地域の人々の協力支援体制がある」の 3 つの項目が新たな認定基準として設定された．認定委員会では，これらの項目に基づき，各認定委員が各校の活動を評価し，委員全員の評価結果を集計して認定の可否を判断することになった．また同時に，認定委員は，各校の活動に関して良かった点や改善点なども指摘することとなり，これら指摘事項も集約され，認定結果とともに各実践校に通達される仕組みに改善された．

その他，本年度の認定委員会では，例年以上に多くの実践校からの活動報告があり，充

実した情報交換の場となった．しかし，そのぶん，各校の発表時間に制約があり，十分に活動を紹介できない実践校もあったように感じられた．また，2005 年度から新たに実践校となった学校の担当教諭からは, 2001 年度および 2003 年度からの実践校の発表を聞いて，ようやくエコ・スクール活動がどのようなものであるのか，また，一般的な環境教育と同活動とでは何が違うのか理解できるようになった，などの意見も出ていた．

＜参考文献＞

1）東近江市立御園小学校：ようこそ御園小のホームページへ
＜http://www.biwa.ne.jp/~misono/＞，2006-01-20
2）大津市立逢坂小学校：大津市立逢坂小学校
＜http://www.otsu.ed.jp/osaka/＞，2006-1-20
3）安土町立老蘇小学校：老蘇小学校
＜http://www.town.azuchi.shiga.jp/edu/oiso_s/shoukai.html＞，2006-01-20
4）東近江市立能登川南小学校：能登川南小学校ホームページ
＜http://www.notogawaminami.ed.jp/＞，2006-01-20
5）高島市立今津中学校：今津中学校ホームページ
＜http://www.city.takashima.shiga.jp/imachu/＞，2006-01-20
6）野洲市立野洲中学校：野洲中学校ホームページ
＜http://academic1.plala.or.jp/yasujh/index.htm＞，2006-01-20

第五章　エコ・スクール活動および滋賀県エコ・スクール推進事業に関する成果と課題・問題点

本章では，まず，滋賀県エコ・スクール推進事業に関する資料の中から，事業関係者が評価した，エコ･スクール活動と同推進事業の成果や課題･問題点に関する記述部分を抜き出し，まとめる．次に，それら事業関係者の評価を参考に，第四章で報告した各実践校での活動内容などから，エコ･スクール活動と同推進事業に関する成果や課題･問題点を抽出して，再度まとめ直す．

5-1　滋賀県エコ・スクール推進事業関係者によって挙げられたエコ・スクール活動および同推進事業に関する成果と課題・問題点について

第三章 3-1-3 で述べたように，同推進事業では，事業の一環として年に数回，実践校連絡会議と認定委員会が開催されている．このような会議の席上では，必ずエコ・スクール活動や同推進事業の成果や課題・問題点に関する議論が交わされる．また，2005 年 8 月には，滋賀県環境学習支援センターの企画運営委員会が開かれ，その場においても同様の議論がなされている．

また，第三章および第四章で述べたように，エコ・スクール認定校の認定を受けるために実践校が申請を行う際，各校の環境グループとエコ・スクール委員会は，同推進事業事務局から配付されたチェックリストの記入を行う．同チェックリストを見ると，各実践校におけるエコ・スクール活動の課題が見えてくる．

以下，各種委員会の議事録から，エコ・スクール活動および同推進事業による成果や課題・問題点として事業関係者によってあげられた項目を抽出してまとめる．さらに，その後に，実践校が事業事務局に提出したチェックリストから見えてくる実践校の活動における課題をまとめて示す．

5-1-1　滋賀県エコ・スクール推進事業関係者によってあげられたエコ・スクール活動に関する成果と課題・問題点

第三章で述べたように，同推進事業は，環境学習における現状の課題を解決するために「学習から実践活動へ結びつけること（授業と活動）」「学校と地域との連携・協力体制をつくること（地域との関わり）」「児童生徒の自主性を育成すること（子どもの自主性）」の 3 点を主な目的として始められた．また，同推進事業では，エコ・スクール活動を実践するにあたって，全校をあげて活動に取り組むこと（全校との関わり）を推奨している．

エコ・スクール推進事業に関する資料（「エコ・スクール実践校連絡会議」「エコ・スクール認定委員会」「環境レイカーズによる事業に関する各年度の総評」の中であげられていた活動および事業による成果と課題・問題点をまとめた資料[1)]，環境学習支援センター企画運営委員会議事録[2)]）の中から，活動を行ったことによる成果，さらに，活動を行う上での課題や問題点を,事業の目的である上記の 3 点および全校が活動に関わることの,これら 4 つの重点に関してそれぞれまとめ，表 5-1 に示す．なお，同 4 つの重点項目に分類できなかったものに関しては，「その他」という項目にて表中に示してある．また，表中の空欄は事業関連資料の中ではあげられていなかった項目である．

表 5-1　エコ・スクール活動に関する成果と課題や問題点[1) 2)]

	成果	課題・問題点
授業と活動	・教諭たちが環境学習を，より体験的に行う方法を考えるようになり，環境学習の授業の幅も拡がった．	・児童生徒の考えた活動計画を学校の年間カリキュラムに組み込むことが難しい．
地域との関わり	・地域と結びついた学習ができるようになった． ・保護者や地域の人々のエコ・スクール活動に関する関心が高まった．	・活動を行う上で,（教諭，児童生徒）保護者，地域の人の理解が必要であること，地域の人の参画が必要であることが実施上のハードルになっている． ・外部講師の手配に関する担当教諭の負担が大きい．
子どもの自主性	・児童生徒の環境への関心が高まり，学校だけでなく家庭でも環境負荷削減活動に取り組めるようになった． ・児童生徒が，積極的に意見や考えを発言できるようになった． ・児童生徒が自分たちで行動できるようになった．	
全校との関わり	・学校全体の雰囲気づくりになっている． ・学校の特色と児童生徒の発案が具現化されてきている．	・学校全体の活動として，ほかの教諭から協力を得ることが難しい．現状では,（一人の）担当教諭だけが負担を負っている． ・各学年での環境学習を推進するための呼びかけを行う上での担当教諭の負担が大きい． ・クラス単位やクラブ単位での活動ではなく，学校全体の取り組みであることで，活動が難しい． ・カリキュラム以上のことをやることになる負担感で,学内になかなか浸透しない．
その他	・環境グループのメンバーは楽しく活動できた． ・児童生徒が友人と仲良くなった． ・問題行動がなくなった．	・担当教諭の異動がエコ・スクール活動を継続する上での支障になる．

表 5-1 に示すように，エコ・スクール活動による成果としては，全ての実践校についてではないが，まず，教諭たちが環境学習を，より体験的に行う方法を考えるようになり，環境学習の授業の幅も拡がったことがあげられている．さらに，地域と結びついた学習ができたことや保護者をはじめとする地域の人たちのエコ・スクール活動に関する意識が高まったこと，児童生徒の自主性に結びついたこと，学校全体の雰囲気づくりになっていること，学校の特色と児童生徒の発案が具現化されていること，また，その他にも児童生徒同士が仲良くなったことなどもあげられている．

その一方で，課題や問題点としては，活動と授業を結びつけることや活動を全校へ広げることの難しさ,（教諭，児童生徒）保護者，地域の人の理解や協力が必要であることが実施上のハードルになっていること,担当教諭の負担が大きいこと,などがあげられている．

このように，実践校におけるエコ・スクール活動では,「地域」や「全校」との関わりに関する課題や問題点が多いようである．

なお，これら活動に関する課題・問題点のうち，活動を全校に広げるための解決策としては，①系統立てた授業カリキュラムを作ること，②年間計画を立て，エコ・スクール委員会を年度初めに設けること，③エコ・スクール活動の担当教諭をチーム化させること，の 3 点が提案されている．

5-1-2　滋賀県エコ・スクール推進事業関係者によってあげられた同推進事業に関する成果と課題・問題点

次に，エコ・スクール推進事業に関して，その成果と課題や問題点を同推進事業の段階ごとに，同じく関連資料に基づきまとめ直したものを表 5-2 に示す．なお，同推進事業の各段階のうち，どこにも分類できなかったものに関しては「その他」という項目にて表中に示してある．また，表中の空欄は事業関連資料の中ではあげられていなかった項目である．

表 5-2　エコ・スクール推進事業に関する成果と課題や問題点[1) 2)]

	成果	課題・問題点
登録		・ハンドブックだけでは，内容が十分に理解されず，敷居が高いイメージがある． ・「キックオフ宣言」と「支援する組織を構成する」という仕組みのため敬遠されがちである． ・開始や認定に伴う手続きが煩雑との印象がある．
活動	・事業による支援によって，実践校の教諭たちは，児童生徒が主体的に考え，活動するプロセスを学習できた． ・エコ・スクール実践校間での交流が持てた．	・エコ・スクール活動には，継続的な外部からの支援が必要であるが，必要な支援は学校によって異なる．そのため，オーダーメイドの支援が必要となる（が，事業予算に限界がある）． ・実践校は，活動開始前からの取り組みで，実績のある学校が参加しているのが実態であるため，エコ・スクール活動および同推進事業による成果が明らかではない．
認定		・認定のハードルを下げて，何でもありにしたら，エコ・スクールとは言えない． ・認定期間がはっきり決まっていない．
更新		
その他		・学校教育課の行う環境教育モデル校と事業内容に重複がある．

エコ・スクール推進事業を実施したことによる成果（同活動を実施した以外の成果）としては，活動の段階において，事業事務局や事業を受託していた環境学習 NPO である環境レイカーズからの活動支援（指導）によって実践校の教諭たちが環境学習の手法を学べたことや他の実践校との交流が持てたことがあげられている．

一方，課題や問題点としては，登録段階において，敷居が高いといったイメージがエコ・スクール活動にあること，また，同活動の仕組みが複雑で開始や認定に伴う手続きが煩雑だと思われていること等によって，同推進事業に登録する学校がなかなか現われない現状が指摘されている．

活動の段階における課題や問題点としては，エコ・スクール活動を実施する学校に合った外部からの支援が必要であること，また，現在の実践校は実践校になる以前から特徴のある優れた環境教育を行ってきた学校ばかりであるため，実践校における現在の成果が，同活動を開始したことによるものであるかどうかを判別することが難しいこと等があげられている．

認定の段階においては，どんな学校でも取り組みやすくするために認定基準を下げるべきであるとの意見がある一方，認定基準を低くして，どんな学校でも認定してしまっては，エコ･スクールと呼べないのではないかという意見もあった．さらに，認定期間（認定を受けている期間が認定後 1 年間だけか否か）が定まっていない点も指摘されている．

また，エコ・スクール推進事業全体として，学校教育課が行っている環境教育モデル校設置との事業内容での重複が問題視されている．

また，表 5-2 には示していないが，エコ・スクール活動や同推進事業の今後に関して，何を普及させるのか（「エコ・スクール認定校」「エコ・スクール実践校」「エコ・スクールの仕組み」のうちのどれを普及していくのか），さらには，活動を全県に広めることを目指すのか否かが議論されている．これらの課題に関しては，推進事業そのものを広めることが目的ではなく，エコ・スクール的な活動をできるだけ多くの学校に広めていくべきであるが，しかし一方，同活動を県内全ての小中学校に広めていくことは困難ではないか，といった意見が出されている．

上記のような同推進事業の成果と課題・問題点を踏まえ，同推進事業全体として，事業の仕組みを見直すことが求められている．さらに，学校を対象とした他の環境学習関連事業と同推進事業との連携のあり方を検討する必要があることで意見の一致を見ている．

5-1-3　各実践校の自己評価におけるエコ・スクール活動の課題

ここで，第四章でも紹介したが，エコ・スクール認定申請の際に，実践校が事務局へ提出するチェックリストの項目のうち，各実践校の活動推進組織である環境グループおよびエコ・スクール委員会が低い評価をつけた項目を再びあげ，環境グループとエコ・スクール委員会ごとにそれぞれ，まとめる．

まずは，各実践校の環境グループが同チェックリストにおいて低い評価をつけた項目を表 5-3 に示す．なお，表の左列は，実践校が行うエコ・スクール活動の各ステップ（①さあ，はじめよう②活動テーマと計画をつくろう③活動しよう④ふりかえろう）を示している．

表 5-3　活動を評価するチェックリストに環境グループが低い評価をつけた項目

	活動のチェック項目	学校名（年度）
①	みんながキックオフ宣言を知っているか.	逢坂　（2004）
②	活動目標や計画を，学校や地域の人に知らせているか.	油日　（2003）
		逢坂　（2004）
	考えた活動のテーマ（ゴミの量や電気の使用量，生き物，水など）についての詳しい調査をしているか.	逢坂　（2004）
	キャッチフレーズやシンボルマークをみんなや先生と話し合って決めているか.	油日　（2003）
		逢坂　（2004）
③	自分たちから進んで環境グループやエコ・スクール委員会に参加しているか.	油日　（2003）
	自分たちの意見が受け入れられる環境グループ，エコ・スクール委員会や活動になっているか.	油日　（2003）
		逢坂　（2004）
	友だちや先生, 家の人, 地域の人たちからの意見をよく聞いているか.	老蘇　（2004）
	計画通り活動が進んでいるか調べているか.	油日　（2003）
		逢坂　（2004）
		老蘇　（2004）
		能登川南（2004）
		今津　（2003）
④	ふりかえってわかったことや考えたことを学校のみんなや家の人，地域の人たちに知らせているか.	油日　（2003）
		御園　（2004）
		老蘇　（2004）
⑤	クラスでやったことやできたことを，学校のみんなに知らせているか.	御園　（2004）
	学校のことだけではなく，自分たちの住んでいる地域や地球全体のことも考えて活動しているか.	老蘇　（2004）

表 5-3 に示すように，チェックリストのうち「活動目標や計画を，学校や地域の人に知らせているか」「キャッチフレーズやシンボルマークをみんなや先生と話し合って決めているか」「自分たちの意見が受け入れられる環境グループ，エコ・スクール委員会や活動になっているか」「計画通り活動が進んでいるか調べているか」「ふりかえってわかったことや考えたことを学校のみんなや家の人，地域の人たちに知らせているか」の項目に，複数の実践校が低い評価をつけている．

「活動の目標や計画を，学校や地域の人に知らせているか」「ふりかえってわかったことや考えたことを学校のみんなや家の人，地域の人たちに知らせているか」，これら 2 つの項目からは，エコ・スクール活動と地域との関わりが不十分であると感じている環境グループが多いことがわかる．

「キャッチフレーズやシンボルマークをみんなや先生と話し合って決めているか」という項目に関しては 2 校が低い評価をつけていた．しかし，ハンドブックの中で推奨されているキャッチフレーズやシンボルマークの作成ができていない実践校は同 2 校以外にも多いことから，これらの取り組みは，実践校において，あまり重要視されていないようであ

る．これら 2 つを作ることは欧州型エコ・スクールプロジェクトのエコ・コードにならって滋賀県に導入する際に新たに加えられたものである．キャッチフレーズやシンボルマークを作っていないこと自体は，大きな問題であるとは考えられないが，キャッチフレーズもしくはシンボルマークを作っていた学校では，それらを校舎内の外部から見える場所や廊下に掲示する，もしくは，各種学校行事で用いたりと，うまく活用している．これらの事例は，現在，キャッチフレーズやシンボルマークを作っていない学校にとって参考になるのではないだろうか．

「自分たちの意見が受け入れられる環境グループ，エコ・スクール委員会や活動になっているか」「計画通り活動が進んでいるか調べているか」，これら 2 つの項目からは，環境グループの活動において児童生徒の自主性がいかされているか，または，活動の進捗状況を確認できているのかという点において不十分であると感じている環境グループが多いことがわかる．

次に，各実践校のエコ・スクール委員会が同チェックリストにおいて低い評価をつけた項目を表 5-4 に示す．表の左列は，表 5-3 同様，実践校が行うエコ・スクール活動の各ステップを示している．

表 5-4　活動を評価するチェックリストにエコ・スクール委員が低い評価をつけた項目

	活動のチェック項目	学校名（年度）
①	宣言が学校全体で共有されているか.	逢坂　（2004）
		老蘇　（2004）
②	活動のテーマや目標はわかりやすいものになっているか.	逢坂　（2004）
	期限を設定した達成可能な活動目標となっているか.	逢坂　（2004）
	目標達成状況を図る基準づくりのため，より詳細な調査（ex．散乱ゴミ量やリサイクルの程度）ができているか.	油日　（2003）
		御園　（2004）
		逢坂　（2004）
	計画づくりの第一歩である現状調査がきちんとできているか.	油日　（2003）
		御園　（2004）
	活動目標や計画がよく目立つ所に掲示され，新たな項目追加があれば更新されているか.	逢坂　（2004）
		老蘇　（2004）
	活動のためのキャッチフレーズやシンボルマークをつくっているか.	逢坂　（2004）
		老蘇　（2004）
③	計画にしたがって活動できているか.	**今津**　(2003)
	子どもたちは環境グループやエコ・スクール委員会に主体的に参画しているか.	油日　（2003）
	活動の進み具合を確認し，必要に応じて計画を見直しているか.	御園　（2004）
		老蘇　（2004）
④	子どもたち自身が評価・ふりかえりを行っているか.	老蘇　（2004）
	評価・ふりかえりのプロセスを，次の活動や新たな目標につなげるため，ふりかえりの結果が学校で共有されているか.	逢坂　（2004）
	活動の成果やふりかえりの結果を学校や家庭，地域に知らせているか.	油日　（2003）
		逢坂　（2004）
		老蘇　（2004）
⑤	多くの人々に参加を呼びかけ，情報を提供しているか. （ex．全校一斉にエコ・スクール活動に取り組む日を設定する，地域の人たちへの継続的にエコ・スクール活動を PR する，ニュースレターの発行，アンケートの実施，校区地域での活動展示・発表会など）.	油日　（2003）
		逢坂　（2004）
	エコ・スクール委員会以外の保護者，近隣住民，地元企業，地元の行政機関等からの参加や支援があるか.	今津　（2003）

表 5-4 に示すように，チェックリストの「宣言が学校全体で共有されているか」「目標達成状況を図る基準づくりのため，より詳細な調査ができているか」「計画づくりの第一歩である現状調査がきちんとできているか」「活動目標や計画がよく目立つ所に掲示され，新たな項目追加があれば更新されているか」「活動のためのキャッチフレーズやシンボルマークをつくっているか」「活動の進み具合を確認し，必要に応じて計画を見直しているか」「活動の成果やふりかえりの結果を学校や家庭，地域に知らせているか」「多くの人々に参加を呼びかけ，情報を提供しているか」の項目に，複数の実践校が低い評価をつけている．

「宣言が学校全体で共有されているか」「活動目標や計画がよく目立つ所に掲示され，新たな項目追加があれば更新されているか」「活動のためのキャッチフレーズやシンボルマークをつくっているか」，これら 3 つの項目からは，学校全体を巻き込んだ活動が不十分であ

ると感じているエコ・スクール委員会が多いことがわかる．

「目標達成状況を図る基準づくりのため，より詳細な調査ができているか」「計画づくりの第一歩である現状調査がきちんとできているか」「活動の進み具合を確認し，必要に応じて計画を見直しているか」，これら 3 つの項目は，児童生徒の活動推進組織である環境グループの活動において，活動の目標づくり，計画づくり，活動の実施状況確認の各項目において不十分であると考えているエコ・スクール委員会が多いことを示している．

「活動の成果やふりかえりの結果を学校や家庭，地域に知らせているか」「多くの人々に参加を呼びかけ，情報を提供しているか」，これら 2 つの項目からは，エコ・スクール活動と地域とのつながりが不十分であると考えているエコ・スクール委員会が多いことがわかる．

環境グループとエコ･スクール委員会が表記したチェックリストそれぞれを見比べると，チェックリスト全体を通して，エコ・スクール委員会の方が環境グループよりも，評価の低い項目が若干多いようである．このことは，活動に対する評価が大人と子ども，あるいは立場によって異なるということとともに，活動のふりかえりにおいて，両者の間で十分な話し合いが行えていない可能性を示唆している．

5-2　本研究の調査結果を踏まえたエコ・スクール活動における成果と課題・問題点

ここでは，第四章で報告した各実践校での活動事例に基づき，活動を行ったことによる成果と活動を行う上での課題や問題点を，関連する事例とともに，活動のステップごとに再度まとめていく．また，各ステップにおけるまとめは，事業目的である 3 点に加え，「全校が活動に関わること」という項目をあわせた，これら活動の 4 つの重点ごとに，さらに，子どもの活動推進組織である環境グループに関わる項目と大人の組織であるエコ・スクール委員会に関わる項目，学校全体に関わる項目の 3 つの項目に分類して行っていくことにする．

①　さあ，はじめよう（キックオフ宣言と活動推進組織の設立）

エコ・スクール活動の初めのステップ（キックオフ宣言と活動推進組織の設立）において，実践校で行われている活動の事例を事業の重点別に見ていく．なお，当ステップにおいては，授業と活動が直接，関連している事例は見られなかった．したがって，ここでは，「学習から実践活動へ結びつけること（授業と活動）」という項目を除いた残りの 3 点の重点項目に関して順に見ていく．

1）地域との関わりに関して

キックオフ宣言と活動推進組織を設立するステップにおいて，活動と地域との関わりが見られる事例内容を表 5-5 に示す.

表 5-5　エコ・スクール活動を始める際に活動と地域との関わりが見受けられる事例

<table>
<tr><th colspan="3">実践校で行われている事例内容</th><th>実践校名</th></tr>
<tr><td rowspan="7">エコ・
スクール委員会</td><td rowspan="7">大人の推進組織の設立.</td><td rowspan="2">教諭と保護者で構成.</td><td>油日小</td></tr>
<tr><td>老蘇小</td></tr>
<tr><td rowspan="5">教諭，保護者，地域支援者で構成.</td><td>近江兄弟社小</td></tr>
<tr><td>逢坂小</td></tr>
<tr><td>御園小</td></tr>
<tr><td>能登川南小</td></tr>
<tr><td>今津中</td></tr>
</table>

エコ・スクール活動を始める際には，児童生徒と教諭，保護者，地域の人で構成されるエコ・スクール委員会を活動推進組織として設立しなければならない．同委員会をまったく新しく設立することは，学校にとって大きな負担となるだろう．しかし一方，同委員会を設立することによって，活動に対して学外からの支援が受けられる体制が整う．そのため，同委員会を設立することによって期待できる効果は大きいと考えられる.

なお，ここではエコ・スクール委員会を設立する，あるいは設立した時点における成果と課題・問題点のみを考える．活動において見られる同委員会を設立したことによる具体的な成果と課題・問題点については，後の②以降で，活動のステップ毎に考察していくことにする.

また，次の点にも留意する．エコ・スクール実践校になった後も，実践校になる以前からあった組織をエコ・スクール委員会としている老蘇小では，活動に関しても実践校になる前後での変化はあまりない．同校のような事例では，厳密に言うと，エコ・スクール活動として同委員会を設立したことによる成果はないということになるが，本研究では，活動の成果をよりゆるやかに捉え，実践校となった前後の変化に関わらず，現時点における学校での活動が，先に述べた活動に関する 4 つの重点を達成できていれば，それを同活動の成果と見なすことにする．なお，このことに関しては，次の「子どもの自主性を育成することに関して」以降についても同じである.

さて，エコ・スクール委員会を設立する，あるいは設立したことによる成果や課題・問題点であるが，設立したことのみによる成果はあまり考えられない．しかし，設立することに関する課題・問題点はいくつかあげることができる.

エコ・スクール委員会設立に関して，特に学外のメンバーを含む委員会を新たに設ける

ためには，他の教諭の理解と同意が必要となる．しかし，野洲中では，他の教諭の同意がなかなか得られなかったことから，いまだに同委員会の設立に至っていない．同委員会が設立されていないということは，同校のエコ・スクール活動に地域からの協力を求める，あるいは活動を地域に広めるための仕組みがないということにもなる．よって，これは同校にとって，大きな課題であると言えるだろう．

また，同委員会が設立されている実践校 7 校の委員会の構成メンバーを見ると，児童生徒を除いた同委員会のメンバーが教諭と保護者だけで構成されている場合と，教諭と保護者，地域支援者で構成されている場合との 2 つの形態が存在する．

エコ・スクール委員会が学校教諭と保護者だけで構成されている学校では，同委員会が PTA 組織と密接に関係している場合が多い．例えば，PTA 本部の役員が自動的に同委員会の委員を務めるようになっている実践校では，委員の選任や交代に関する問題が少なく，組織や活動の継続性に優れていると考えられる．しかし同時に，地域や学外との関わりが PTA という枠の中に限定されてしまい，委員会活動もパターン化，ルーチン化してしまう傾向が見られる．

一方，同委員会を学校教諭と保護者，地域支援者で構成している学校では，特に地域支援者が，学校と地域をつなぐ重要な役割を果たしている．そのため，地域への活動の広がりも，より多様である．ただし，地域支援者を同委員会に加える場合には，同支援者を選定し，委員就任を依頼する必要がでてくる．例えば，能登川南小や今津中では，担当教諭が地域支援者のもとを訪問し，委員就任を直接依頼していた．このように，同委員会に地域支援者を加える場合は，学校教諭と保護者だけで構成する場合よりも担当教諭の負担が大きいと考えられる．実際に，同委員会に地域支援者を加えている御園小では，エコ・スクール活動担当教諭の多忙さや学校長の異動により，2005 年度は同委員会の会合が開催されていない．

このように，エコ・スクール委員会に関しては，それぞれの形態に良い面と悪い面が見られる．

2）子どもの自主性を育成することに関して

同ステップにおいて，子どもの自主性を育成することに寄与していると考えられる事例内容を表 5-6 に示す．

表 5-6　エコ・スクール活動を始める際に子どもの自主性を育成することに関わる事例

<table>
<tr><th colspan="3">実践校で行われている事例内容</th><th>実践校名</th></tr>
<tr><td rowspan="8">環境グループ</td><td rowspan="8">児童推進組織の設立.</td><td rowspan="6">児童生徒会組織に位置づけ.</td><td>油日小</td></tr>
<tr><td>御園小</td></tr>
<tr><td>逢坂小</td></tr>
<tr><td>老蘇小</td></tr>
<tr><td>能登川南小</td></tr>
<tr><td>野洲中</td></tr>
<tr><td>縦割り授業のリーダー組織に位置づけ.</td><td>近江兄弟社小</td></tr>
<tr><td>単独グループに位置づけ.</td><td>今津中</td></tr>
</table>

エコ・スクール活動では，初めに活動の推進組織として，児童生徒で構成される環境グループを設立しなければならない．同グループの設立に関して，同グループをまったく新しく設立するということは，エコ・スクール委員会の設立と同様，学校にとって負担になるかもしれない．しかし，同グループを設立することで，児童生徒による活動の推進組織ができることになり，同グループを設立することの利点は大きいと考えられる．

なお，環境グループを設立したことによる具体的な成果と課題・問題点については，後の②以降で順次，活動のステップ毎に考察していく．

また，8 つの実践校における環境グループの形態や学校の中での位置づけを見ると，児童生徒会の中の一委員会として同グループを位置づけている学校が 6 校でほとんどであったが，全校が関わる縦割り授業のリーダー組織を同グループとしている学校と，担当教諭が募集して自主的に集まった生徒で構成している学校も各 1 校ずつあり，同グループに関して全部で 3 つの異なる形態が見られた．

同グループを児童生徒会組織の中の一委員会として位置づけている学校では，同グループの設立や組織として存続していくことが比較的容易であると考えられる．そのため，担当教諭の負担が少なくてすむであろう．ただし，本事例の実践校では，全校児童生徒がどれかの委員会に入るという仕組みになっている．そのため，必ずしもやる気のある児童生徒ばかりが同グループに入ってくるわけではなく，グループ内の児童生徒の間で温度差が生じる可能性がある．また小学校の場合，グループの構成員が児童会に所属する上級生に限定されるという制約もある．

一方，近江兄弟社小の場合は，エコ・スクール活動のために環境グループを新たに立ち上げたわけではなく，全校児童の参加する縦割り授業の既存のリーダー組織を同グループとして位置づけていた．そのため，学校の中での同グループの指導的位置づけがしっかりしている上，活動に全校児童を巻き込める形態になっていた．

また，今津中では担当教諭の呼びかけによって集まる生徒だけで同グループを構成していた．それだけに，生徒の自主性が高く，活動も活発である．ただし，毎年のメンバー集めにかかる手間や不安定性，また，公式の学校内組織ではないことから，活動時間が確保

されていない問題など，担当教諭にかかる負担が他の実践校における環境グループより大きいと考えられる．そのため，このような形態はどのような学校にも適用できるものではないであろう．

このように，環境グループに関しても，それぞれの形態によって良い面と悪い面がさまざまである．

3）全校との関わりに関して

同ステップにおいて，活動と全校との関わりがある事例内容を表 5-7 に示す．

表 5-7　エコ・スクール活動を始める際に活動と全校との関わりが見受けられる事例

実践校で行われている事例内容		実践校名
学校全体	キックオフ宣言.	実践校全て

キックオフ宣言は，活動を開始するにあたって，全校への意識づけになっていると考えられる．しかし，同宣言を行ったことによる明確な効果を各実践校の事例から見出すことはできなかった．ただし，同宣言を行うことに関して，特に大きな課題や問題点があるとも考えられない．

② 活動テーマと計画をつくろう

活動のテーマと計画づくりのステップにおいて，実践校で行われている活動の事例を事業の 4 つの重点別に見ていく．

1）授業と活動との関わりに関して

エコ・スクール活動のテーマと計画を作るステップにおいて，授業と活動との関わりが見られる事例内容を表 5-8 に示す．

表 5-8　活動のテーマと計画立案時において授業と活動との関わりが見受けられる事例

実践校で行われている事例内容		実践校名
環境グループ	縦割り授業（シンフォニー）で行う活動計画を立てる.	近江兄弟社小
学校全体	学級でも活動テーマに合わせた計画を作る.	油日小

近江兄弟社小では，兄弟社村づくりを同校のエコ・スクール活動と位置づけており，縦割り授業（シンフォニー）の一環として全校をあげて，村づくりの計画（活動計画）を立てていた．同校の場合は特に，児童たちが自分たちで立てた計画が，現実の兄弟社村（その施設）として形になっていくことから，活動に対する児童のやりがいに通じていると考えられる．

また，油日小では「自分を大切に 人を大切に　もの（自然）を大切に」という同校におけるエコ・スクール活動のテーマに基づき，2005 年度には，エコ宣言と呼ばれるものを各学級でも作り，宣言に沿った活動を各学級で実践していた．このことによる明確な効果は同校の（エコ・スクール活動の）活動事例の報告からは見出せなかったが，全校をあげたエコ・スクール活動への強い意識づけになっていると考えられる．

上記の 2 例ではいずれも，活動のテーマや計画づくりが授業の一環として行われていることによって，活動が全校をあげたものにもなっていると言える．

2）地域との関わりに関して

同ステップにおいて，活動と地域との関わりが見られる事例内容を表 5-9 に示す．

表 5-9　活動のテーマと計画立案時において活動と地域との関わりが見受けられる事例

実践校で行われている事例内容		実践校名
環境グループ	シンボルマークを地域から募集.	能登川南小
エコ・スクール委員会	会合を開く.	油日小
		御園小（2004 年度まで）
		逢坂小
		老蘇小
		能登川南小
		今津中
	1 年の活動計画を立てる.	油日小
		老蘇小
	環境グループの活動に対するアドバイス.	近江兄弟社小

能登川南小では，環境グループの活動の一環として，エコ・スクール活動のシンボルマークを地域からひろく集めていた．この取り組みの成果は，活動の事例報告からは明らかになっていないが，地域にむけたエコ・スクール活動の発信となっており，地域を同活動に巻き込み，同活動を地域へ広げるためのものになっていると考えられる．

また，油日小，御園小，逢坂小，老蘇小，能登川南小，今津中では，エコ・スクール委員会が年に数回の会合を開いており，同会合が PTA を含む地域の人々と学校との，エコ・スクール活動の年間計画を議論する場となっているだけでなく，同校における環境教育の取り組みに関する情報や意見交換を行う貴重な場となっていた．

油日小と老蘇小の 2 校では，年に数回，エコ・スクール委員会が学校ビオトープや地域の自然を活かした自然観察会を開いているが，両校では同委員会の会合が，これら自然観察会に関する実施計画を学校側と話し合う場になっていた．

近江兄弟社小では，エコ・スクール委員会の会合を定期的には開催していないが，同委員会のメンバーより，活動に対するアドバイスをもらうようになっており，そのことが同校の活動の推進に役立っていた．

活動テーマと計画立案時においてエコ・スクール委員会の会合を開催することは，担当教諭の負担になると考えられるが, 上記のように年間の活動を開始する上での学校と PTA, 地域支援者との間の情報や意見交換の場として重要な役割を果たしていると考えられる．

3）子どもの自主性を育成することに関して

同ステップにおいて，子どもの自主性を育成することに寄与していると考えられる事例内容を表 5-10 に示す．

表 5-10　活動のテーマと計画立案時において子どもの自主性を育成することに関わる事例

実践校で行われている事例内容		実践校名
環境グループ	1 年間の活動計画を立てる．	実践校全て
	エコ・スクール委員会会合に同席．	能登川南小
		今津中

各実践校では，このステップにおいて，環境グループに属する児童生徒が年間の行動計画を立てる．児童生徒が自ら計画を立てるということは，子どもの自主性を育成する上で非常に重要な作業であると考えられる．しかし，常に前年度に倣って活動計画を立てているからであろう，毎年度の活動にあまり変化が見られない学校も見られる．また，野洲中では, 環境グループ（美化委員会）の年間の活動計画を担当教諭が一人で全て立てていた．児童生徒の自主性を育成するというエコ・スクール活動の目的を考えると，これらの事例は活動のテーマや計画づくりのステップにおける課題や問題点と言えるのではないだろうか．

一方，能登川南小と今津中では環境グループの児童生徒が，年度初めのエコ・スクール委員会会合に同席して，当年度の活動計画の報告を行い，エコ・スクール委員会メンバーから活動へのアドバイスを受けたり, 活動に対する支援を同メンバーに求めたりしていた．児童生徒がエコ・スクール委員会の会合に出席することは，会合の開催時間などの調節が難しくなるとは考えられるが，このことによって，児童生徒が，自分たちがどのような支援を必要としているかを具体的に，かつ自分たちから直接，同委員会メンバーに伝えることができるようになる．また，同委員会メンバーにとっても，自分たちにどのような支援

ができるか, 何をするべきか, といったことを考えるよい機会になっていると推察される. さらに，会合に出席する児童生徒にとっては，大人の前で自分たちの計画を発表し，協力を依頼することによって，表現能力や対話能力を向上させることにもつながっているのではないかと考えられる.

4）全校との関わりに関して

同ステップにおいて，活動と全校との関わりが見られる事例内容を表 5-11 に示す.

表 5-11　活動のテーマと計画立案時において活動と全校との関わりが見受けられる事例

実践校で行われている事例内容		実践校名
環境グループ	シンボルマークを全校から募集.	御園小
	キャッチフレーズを全校から募集.	能登川南小
その他	学級でも活動テーマに合わせた計画を作る.	油日小

このステップにおけるエコ・スクール活動と全校との関わりとしては，御園小では活動に関するシンボルマークを，能登川南小では活動のキャッチフレーズを環境グループの児童が全校に呼びかけ募集していた. また, 先にも紹介したが, 油日小では 2005 年度, エコ・スクール活動のテーマに応じたエコ宣言と呼ばれるものを各学級でも作り，それに基づいた活動を行っていた．これらの活動による成果は，必ずしも本調査では明らかにできていないが，エコ・スクール活動を全校へ浸透させることに寄与しているものと考えられる.

③　活動しよう

活動を実践するステップにおいて，実践校で行われている活動の事例を事業の 4 つの重点別に見ていく.

1）授業と活動との関わりに関して

活動を実践するステップにおいて，授業と活動との関わりが見られる事例内容を表 5-12 に示す.

表 5-12　活動実践時において授業と活動との関わりが見受けられる事例

実践校で行われている事例内容		実践校名
学校全体	授業でのビオトープの活用.	油日小
		御園小
		老蘇小
	川や水の学習.	逢坂小
		能登川南小
	シンフォニーで全校を巻き込んだ活動.	近江兄弟社小
	授業でも兄弟者村を活用.	
	環境グループの立てた活動計画案を授業で実施.	今津中

油日小と御園小，老蘇小では，環境グループやエコ・スクール委員会が学校ビオトープを利用した活動を行っている以外に，授業でも同ビオトープを活用していた．また，逢坂小と能登川南小では，学校付近の川で，活動と授業での学習の双方を実施していた．近江兄弟社小では，全校が関わる縦割り授業（シンフォニー）の中で，兄弟社村を中心としたエコ・スクール活動を行っていたほか，兄弟社村をシンフォニー以外の授業でも活用していた．これらの事例では，エコ・スクール活動と授業とを同じフィールドで実施することによって，同活動が全校あげての取り組みへとなっている．また，環境グループの児童生徒にとっては，授業で学んだことを実践活動にむすびつけることができる環境が提供されているものと考えられる．

また，今津中では，環境グループが 2002 年度より古道の復元作業に取り組んでいるが，復元された山道は各学年の遠足コースにも利用されていた．このことによって，環境グループの活動成果が全校に広く認められるとともに，同グループの生徒の活動に対する意欲につながっているものと考えられる．

しかし，上記のようなエコ・スクール活動と授業との関わりが最初から簡単に生まれたわけではない．例えば，御園小では実践校になるまでは，ほとんどビオトープが活用されていなかった．現在，同校において，さまざまな形でビオトープが活用されているのは，同校エコ・スクール活動担当教諭が，他教諭に熱心に働きかけた成果でもある．また，能登川南小や今津中の事例も，担当教諭が他教諭に活動への参加を呼びかけ，率先して活動を継続してきたことによる成果であると言えるだろう．一方，近江兄弟社小の場合は，学校から兄弟社村まで距離があるので，低学年児童はスクールバスを用いて移動しなければならないなどの課題を抱えている．これらは活動と授業とを関連させることに関する課題や問題点と言えるだろう．

2）地域との関わりに関して

同ステップにおいて，活動と地域との関わりが見られる事例内容を表 5-13 に示す．

表 5-13　活動実践時において活動と地域との関わりが見受けられる事例

実践校で行われている活動事例		実践校名
エコ・スクール委員会	エコ・スクール委員会主催の自然観察会，ビオトープの整備作業.	油日小
		老蘇小
	エコ・スクール委員が講師の自然観察会.	御園小（2004 年度まで）
	エコ・スクール委員が兄弟社村での活動を支援.	近江兄弟社小
	環境グループの活動をエコ・スクール委員が支援.	今津中
	雨水タンクとガチャコンポンプ，水車の設置.	能登川南小
学校全体	兄弟社村を活用した親子プログラム実施.	近江兄弟社小
その他（地域支援者）	エコ・スクール委員会メンバー以外の地域支援者からの活動支援.	御園小
		逢坂小
		能登川南小
		近江兄弟社小

表に示すように，油日小と老蘇小，御園小では，学校ビオトープをフィールドとする自然観察会を全校児童や PTA，地域の人々を対象に開催していた．このように学校内外に開かれた自然観察会を開催することは，全校や地域に向けてのエコ・スクール活動に関する普及啓発にもなっていると考えられる．

上記の油日小と老蘇小では，学校ビオトープの維持管理作業にもエコ・スクール委員会メンバーが中心的に関わっていた．また，近江兄弟社小では，同委員会メンバーが，兄弟社村で行う活動を個別に支援していた．能登川南小では，環境グループが行っている節水活動を支援するため，学校内に雨水タンクやガチャコンポンプを設置し，また，今津中では，生徒が考えた活動を環境グループのメンバーとともに実践していた．能登川南小の雨水タンクとガチャコンポンプの設置は，水の節約につながるだけではなく，地域に向けたエコ・スクール活動の啓発にもつながっていると考えられる．

ただし，前述の自然観察会の企画準備を，油日小と老蘇小では，学校教諭と保護者が協力して行っていたのに対し，御園小ではエコ・スクール活動担当教諭が一人で行っていた．そのため，同教諭の負担が大きく，同校では，継続した活動ができていない．

以上，見てきたように，エコ・スクール委員会を設けることによって，同委員会を運営することに関する連絡調整業務は増えるものの，児童生徒の活動への助言や支援を得ることができ，学校だけではできなかったことが各校において可能になっている．

さらに，学校と地域との連携に関しては，いくつかの学校で，エコ・スクール委員会メンバー以外からの活動に対する支援も見られた．例えば，御園小では，環境グループで行っている活動（メダカの里親制度）がきっかけとなり，2004 年度に「御園野生メダカの会」という組織が発足しており，同会のメンバーが，翌年のメダカの里親活動において，メダカの飼育方法を児童に教えていた．逢坂小では，大津環境フォーラムや淡海環境保全財団の職員が，同校の環境グループの活動を支援していた．能登川南小では，環境グループが

中心となって行っている節水活動に対して，教育委員会が同校のトイレ等を節水用のものに変更する支援を行っている．また，近江兄弟社小では，地域の財団よりマツの木を譲り受けていた．これらの事例は，実践校のエコ・スクール活動が広く地域に認知されるまでになってきたことを示唆している．

その他の地域と活動との関わりとしては，近江兄弟社小において，兄弟社村を活用した親子プログラムを学校の休みの日に設定するようにしていた．親子プログラムで，兄弟社村を保護者に開放することによって，同校のエコ・スクール活動がさらに地域で認知されるようになり，本研究では明らかにできていないが，周辺地域の人たちの活動に対する関心も高まってきているものと考えられる．

3）子どもの自主性を育成することに関して

同ステップにおいて，子どもの自主性を育成することに寄与していると考えられる事例内容を表 5-14 に示す．

表 5-14　活動実践時において子どもの自主性を育成することに関わる事例

実践校で行われている活動事例		実践校名
環境グループ	活動の実践.	実践校全て

本研究ではその成果を明らかにすることができていないが, 環境グループの児童たちは, エコ･スクール活動の実践を通じて, 自主性を伸ばすことができているものと考えられる．

ただし，環境グループを児童生徒会組織の一つとして位置づけている学校では，環境グループが活動に費やすことができる時間（児童生徒会活動として定められている活動時間）が月に 1，2 回程度に限定されている．この活動時間の少なさが，課題と言えるだろう．これらの学校の中には，活動時間の少なさを補うため，昼休み時間など，通常の活動時間とは異なる時間帯で活動を行っている学校もあり，環境グループの児童生徒にとっては負担になっているものと考えられる．

これに対して，近江兄弟社小では，エコ・スクール活動を縦割り授業と関連付けているため，週 1 回という活動時間が確保されており，決められた時間帯以外で活動することが少なくてすんでいる．一方，今津中のように，自主的に集まった任意の生徒組織では，児童生徒会組織とは違い，活動時間等が定まっていないため，活動時間の確保が難しく，担当教諭の負担も大きくなっているものと考えられる．

4）全校との関わりに関して

同ステップにおいて，活動と全校との関わりが見られる事例内容を表 5-15 に示す．

表 5-15　活動実践時において活動と全校との関わりが見受けられる事例

実践校で行われている活動事例		実践校名
環境グループ	全校を対象とした活動を実施する.	油日小
		御園小
		逢坂小
		老蘇小
		能登川南小
		野洲中
エコ・スクール委員会	全校を対象とした活動を実施する.	油日小
		逢坂小
		老蘇小
学校全体	シンフォニーで全校を巻き込んだ活動.	近江兄弟社小
	環境グループの立てた活動計画案を他委員会で行う.	今津中
	環境グループの立てた活動計画案を授業等に反映させる.	
	ザリガニ専用池の造成.	御園小

実践校の多くでは，環境グループが全校を対象とした活動を行っていた．例えば，油日小と御園小，老蘇小では環境グループが全校児童対象の自然観察会やウォークラリー，ビオトープを活用したクイズ大会等を行っていた．また，逢坂小では，全校児童に廃油の回収を呼びかけ，能登川南小では環境に関する○×クイズなどを実施，野洲中では古紙の再利用活動を行っていた．さらに，前述したように，近江兄弟社小では，エコ・スクール活動を全校が関わる縦割り授業の中で行っていた．このように，全校を対象とした活動を行うことによって，環境グループのみならず全校の児童生徒がエコ・スクール活動に参加できるような仕組みになっている．そのため，本研究ではその成果は明らかにできていないが，環境グループに所属する児童生徒以外の子どもたちの意識向上にもつながっているものと考えられる．

さらに，活動と地域との関わりの部分でも紹介したが，いくつかの実践校ではエコ・スクール委員会が, 自然観察会の開催など, 全校や保護者等を対象とする活動を行っていた．これらの活動も，また，全校をあげてエコ・スクール活動に取り組んでいるということであり，児童生徒や教諭の意識付けに役立っているものと考えられる．

また，御園小では，教諭たちの協力によってザリガニ専用の池（ザリガニ池）が作られていた．同校では，ザリガニ池が造られたことにより，ビオトープ内にある池（やすらぎ池）でつかまえたザリガニを児童が再び，やすらぎ池に戻すことがなくなった．同校ではエコ・スクール活動のテーマを，学校ビオトープの保全としている．教諭たちのこのような取り組みは，同校においてエコ・スクール活動のテーマに沿ったものであり，全校をあげての取り組みによる成果の一つだと言えるだろう．

④ ふりかえろう

活動のふりかえりや成果の発表のステップにおいて，実践校で行われている活動の事例を事業の 4 つの重点別に見ていく．

1）授業と活動との関わりに関して

活動のふりかえりや成果の発表のステップにおいて，授業と活動との関わりが見られる事例内容を表 5-16 に示す．

5-16　活動のふりかえり時において活動と授業との関わりが見受けられる事例

実践校で行われている事例内容		実践校名
学校全体	学級でも活動のふりかえり．	油日小
		能登川南小

活動のふりかえり時において，油日小では，年度末に教諭から全校に向けてアンケートを行い，活動のふりかえりを授業の一環として行っていた．また，能登川南小では，各学級で行っているエコ活動の様子をビデオで撮影し，撮ったものを年度末に放映し，児童たちが他の学年や学級で行われている活動を見て，感想を作文に書くという活動を授業として行っていた．これら 2 校の事例のように，活動のふりかえりを授業の中で行っている学校では，ふりかえりが全校へ向けたエコ・スクール活動の啓発となっており，本研究では明らかにできていないが，これによって全校の活動に対する意識が高まっているものと考えられる．また，エコ・スクール活動に全校あげて取り組むための教諭間での意識の共有にもつながっていると考えられる．

2）地域との関わりに関して

同ステップにおいて，活動と地域との関わりが見られる事例内容を表 5-17 に示す．

表 5-17　活動のふりかえり時において活動と地域との関わりが見受けられる事例

実践校で行われている事例内容		実践校名
エコ・スクール委員会	校内文化祭でのエコ・スクール委員からの激励.	今津中
	委員会の会合.	油日小,
		御園小（～2004 年度）
		逢坂小
		能登川南小
環境グループ	地域での発表.	油日小
		逢坂小
	エコ・スクール委員会会合で発表.	油日小
		御園小
		能登川南小

今津中では毎年，文化祭において，環境グループが同グループの活動を報告した後，エコ・スクール外部委員会のメンバーが全校生徒に向けて，エコ・スクール活動を推進していこう，といった内容の激励を行っていた．このことは環境グループの生徒たちの励みになっているとともに，全校に向けたエコ・スクール活動の喧伝になっているものと考えられる．

また，油日小と御園小，逢坂小，能登川南小では，年度末のエコ・スクール委員会会合において，担当教諭もしくは環境グループ児童が同年度の活動の報告を行っており，この場が，同委員会委員が環境グループの活動の実態を知る大切な機会となっていた．

その他にも，油日小と逢坂小では，環境グループの児童や担当教諭が地域で行われたイベントにおいて各校の活動紹介を行っていた．このような活動は，地域に向けた学校の活動の発信になるとともに，児童にとっても活動の励みになっているものと考えられる．

3）子どもの自主性を育成することに関して

同ステップにおいて，子どもの自主性を育成することに寄与していると考えられる事例内容を表 5-18 に示す．

表 5-18　活動のふりかえり時において子どもの自主性を育成することに関わる事例

実践校で行われている事例内容		実践校名
環境グループ	1 年間の活動ふりかえり.	実践校全て
	校内文化祭での活動発表.	今津中
	毎月の全校集会で活動報告.	能登川南小
	エコ・スクール委員会で児童が活動報告を行う.	油日小
		御園小（～2004 年度）
		能登川南小
	環境学習フエアでの発表.	油日小
		御園小
		近江兄弟社小
		（逢坂小，老蘇小）
		能登川南小

実践校では環境グループの児童が 1 年間の活動のふりかえりを行っていた.

活動のふりかえりを行う際，環境グループメンバーの児童生徒は，壁新聞に 1 年間の活動内容をまとめたり，全校の前で発表したり，また，校外においても児童生徒または活動担当教諭が発表を行っている．それ以外にも，能登川南小では，毎月 1 回の全校集会の時に環境グループの児童が，活動の報告や呼びかけを行うという仕組みができていた．今津中では，環境グループの生徒が文化祭で，全校生徒や保護者に対して，活動の報告を行っていた．また，エコ・スクール委員会会合にて，児童が同席している実践校では，児童が活動の発表を行っていた. このような活動の報告や発表, あるいはそのための準備作業は, 環境グループの児童生徒にとって活動のふりかえりとなっていると同時に，全校や地域の人たちに向けた活動の発信や広報ともなっており，本研究では明らかにできていないが, 全校や地域の人たちの活動への関心を高めるとともに，発表を行う児童生徒のプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の向上にもつながっていると考えられる.

ただし，発表を準備するためには，児童生徒に対する適切な指導が必要となる．また，学外において発表を行う際には，付き添いが必要である．これらは担当教諭の新たな負担になっていると考えられる．なお，壁新聞は児童生徒が作ることになっているが，同グループの活動時間の少なさによって，なかなか困難な学校もあるようである．これらは，活動のふりかえり時における課題や問題点であると言えるだろう.

4）全校との関わりに関して

同ステップにおいて，活動と全校との関わりが見られる事例内容を表 5-19 に示す.

表 5-19　活動のふりかえり時において活動と全校との関わりが見受けられる事例

実践校で行われている事例内容		実践校名
環境グループ	シンフォニーの活動を全校の前で発表等.	近江兄弟社小
	校内文化祭での活動発表.	今津中
	校内での活動発表.	逢坂小
	6 年生を送る会での引き継ぎ.	老蘇小
	毎月の全校集会で活動報告.	能登川南小
エコ･スクール委員会	校内文化祭にて, 活動に関する激励を全校に向けて行う.	今津中
その他	学級でも活動のふりかえり.	油日小

前述したように, 各実践校では, 活動のふりかえり時に環境グループから全校に向けて, 1 年間の活動報告が行われていた．例えば，近江兄弟社小では，同グループメンバーがシンフォニーの活動の報告を全校の前で行っていた．これらの活動は，エコ・スクール活動の推進に向けた全校への意識付けになっているものと考えられる.

その他，環境グループとエコ・スクール委員会が行う活動以外でのふりかえり時の事例としては，油日小や能登川南小の例があるが，これらの詳細や事例から期待できる効果については，先の授業と活動との関わりのところで述べたとおりである.

5-3　本研究の調査結果を踏まえた同推進事業に関する成果と課題・問題点

次に，エコ・スクール推進事業に関する成果や課題・問題点を,「登録」「活動」「認定」「更新」の各段階に沿ってまとめる.

A．登録

まずは，同推進事業の登録段階において，事業事務局および実践校が行うことを表 5-20 に示す.

表 5-20　事業の登録段階において事業事務局および実践校が行うこと

事務局	実践校
募集*	登録書提出
エコ・スクール旗授与	

*希望があれば，エコ・スクール活動（および事業）説明のため学校を訪問

また，実践校への登録のために事務局が過去に実施した募集活動の内容と各実践校が同推進事業に登録したきっかけを表 5-21 にまとめる.

表 5-21　事業事務局の募集活動と実践校の登録のきっかけ

<table>
<tr><th colspan="3">事務局</th><th colspan="3">実践校</th></tr>
<tr><td rowspan="13">募集</td><td rowspan="4">2001</td><td rowspan="4">全国環境学習大会にて呼びかけ.</td><td rowspan="4">2001</td><td>油日</td><td rowspan="2">全国環境学習大会の呼びかけにより参加.</td></tr>
<tr><td>御園</td></tr>
<tr><td>近江兄弟社</td><td>自ら参加登録.</td></tr>
<tr><td>今津</td><td>担当教諭が以前からエコ・スクール活動を実践していた.</td></tr>
<tr><td rowspan="4">2003</td><td rowspan="4">エコ・スクールセミナーの開催.</td><td rowspan="4">2003</td><td>逢坂</td><td>セミナー参加.</td></tr>
<tr><td>老蘇</td><td>レイカーズとの話し合い.</td></tr>
<tr><td>能登川南</td><td>セミナー参加.</td></tr>
<tr><td>野洲</td><td>自ら参加登録.</td></tr>
<tr><td rowspan="5">2005</td><td rowspan="5">各校へ，個別に依頼.</td><td rowspan="5">2005</td><td>本庄</td><td rowspan="5">事務局から個別に登録依頼.</td></tr>
<tr><td>石部南</td></tr>
<tr><td>笠縫東</td></tr>
<tr><td>安土</td></tr>
<tr><td>虎姫</td></tr>
</table>

事業が始まった初年度（2001 年度），滋賀県エコ・スクール推進事業事務局は，滋賀県で行われた全国環境学習大会において，実践校を募集している．また，翌 2002 年度には，事業業務として実施したエコ・スクールセミナーにおいても実践校を募っている．一方，このような事務局の募集活動に対して実践校側も，2001 および 2003 年度に関しては，ほとんどの学校が同推進事業に対して自主的に参加の意志を示していた．しかし，2005 年度から新たに加わった 5 校に関しては，事務局が個別に参加の依頼を行っており，その上，これら 5 校に対しては，実践校となったからといって，特別に新しい取り組みを始めなくても良いから，という説明を行っている．

推進事業事務局にとっては，実践校が増えることは事業としての一種の成果であろう．また，参加の経緯がどうであれ，より多くの学校においてエコ・スクール活動が実践されることは好ましいことである．いずれの実践校もユニークな活動を展開しており，実践校が増え，各校で行われている活動に関する情報量が増えることによって，他校での活動を参考に，各校における活動がより活性化される可能性もある．しかし，本来，同推進事業への参加は，各校の自主性に基づいて行われるべきものである．むしろ問題は，各校に個別に参加を依頼しなければ，自主的に参加する学校が現れない現状にある．前述したように，同推進事業に対しては，敷居が高いというイメージがあるようである．また，参加することのメリットが見えないということもあるだろう．それ以外にも原因があるのかもしれない．これらのことが，登録段階における同推進事業の最大の課題や問題点であると言えるだろう．

同推進事業に登録した学校には，事業事務局より，実践校であることを示す旗（エコ・フラッグ）が授与される．各実践校では，この旗を，学校の玄関や職員室近くの廊下など，全校および保護者や地域の人の目につくところに掲げることになっている．旗を掲げるこ

とによって，学校内外にエコ・スクール活動の実践校であることを明示できるとともに，全校の活動に対する士気の高揚に役立っているものと考えられる．

B．活動

次に，同推進事業の活動段階において，事業事務局および実践校が行うことを表 5-22 に示す．

表 5-22　事業の活動段階において，事業事務局および実践校が行うこと

<table>
<tr><th colspan="2">事務局</th><th>実践校</th></tr>
<tr><td colspan="3">活動に関する打ち合わせ等.</td></tr>
<tr><td>活 動 への支援.</td><td>・授業への講師派遣.
・環境グループとエコ・スクール委員会の活動への支援.
・認定授与式への参列.</td><td>・活動計画書提出.
・エコ・スクール活動の実施（2 つの活動推進組織を作って，進めていく）.</td></tr>
<tr><td colspan="2">実践校間の連絡協議会開催.</td><td rowspan="2">連絡協議会へ参加.</td></tr>
<tr><td colspan="2">HP で実践校の活動を PR.</td></tr>
</table>

滋賀県エコ・スクール推進事業では，各実践校に対して，活動の支援を行っている．第四章で述べたように, 2004 年度までは環境学習 NPO が同推進事業を受託しており, 同 NPO と各実践校が年間の支援内容を話し合って決めていたため，各校の状況に応じたきめ細かい支援が可能だった．例えば，油日小では，活動を開始し始めた数年間，同 NPO が体験型のワークショップ等をエコ・スクール委員会会合の場において実施している．現在，同委員会が毎年，自然観察会を開催しているのは，このワークショップによって同委員会メンバーの活動に対する関心と理解が高まったためであると考えられる．また，いくつかの実践校で同 NPO が実施した教員研修は，教諭たちが NPO 流の環境学習の手法を学ぶ場となるとともに，教諭の活動への関心を高めることにも役立ったものと考えられる．近江兄弟社小では, 同推進事業における環境学習 NPO への事業委託が行われなくなった後も, 独自に授業や教員研修の講師を同 NPO に依頼している．なによりもこのことが，同 NPO の支援が有効であったこと示していると言えるだろう．

また，同推進事業では，実践校間での交流を深めるため，年に数回，連絡協議会と呼ばれる実践校間の交流会を開いている．2004 年度までは，各実践校の持ち回り開催で，同連絡協議会を開催していた．当番校となった実践校にとっては負担となるが，このような交流会を定期的に開催することによって，実践校間の情報交換や交流が図られていた．例えば，同連絡協議会をきっかけとし，今津中と近江兄弟社小では，両校のエコ・スクール活動担当教諭がお互いの学校で行われている活動に参加するなどといった交流が生まれてい

た．

さらに，滋賀県では，滋賀県・山梨県・静岡県の子どもたちが集まり，環境に関する活動を行う「三県交流事業」にエコ・スクール実践校の児童を優先的に参加させている．また，2004 と 2005 年度には，県内で毎年開催される環境学習フエア（滋賀県県民環境学習のつどい）の場においてエコ・スクール実践校の活動担当教諭もしくは環境グループの児童が発表する場を設けている．このような県の事業に優先的に参加できることは，実践校にとって，同推進事業に参加することのメリットと言えるだろう．また，環境グループの児童にとっては活動の励みにもなっているものと考えられる．

C．認定

次に，同推進事業の認定段階において，事業事務局および実践校が行うことを表 5-23 に示す．

表 5-23　事業の認定段階において，事業事務局および実践校が行うこと

事務局	実践校
・認定委員会の開催. ・認定証の授与.	・エコ・スクール認定への申請と申請書類の提出.

エコ・スクール実践校は，認定の申請を行う際，活動計画書や活動の成果物（壁新聞など），環境グループの児童生徒数人が書いた感想文，エコ・スクール委員会メンバーによる一言寄せ書き，チェックリストなどの書類を揃え，提出することになっている．この申請のための成果物や書類の作成は，担当教諭にとってかなりの負担になっているようである．また，活動の認定に関しては，現在，認定のための明確な基準がなく，基本的には申請すれば，すべて認定されるような制度になっている．認定されたことによるメリットが特にあるわけでもなく，エコ・スクール活動担当教諭の中には，認定されてもされなくても同じであるという意見をもつものもあった．これらは，認定の段階における課題や問題点と言えるだろう．

しかし一方，実践校にとって，認定の申請を行うことのメリットと考えられるものもある．まず，認定申請を行う際，活動に関する環境グループとエコ・スクール委員会の両者によるチェックリストを提出することになっている．各実践校では，このようなチェックリストを用いることにより，自らの活動を自己評価することができ，各実践校での活動のふりかえりに役立っていると考えられる．

また，認定の申請を行うことで，認定委員会から活動に関するアドバイスを受けることができる．認定委員会の中には，4 人の実践校教諭が含まれており，それらの教諭にとっ

ては, 同委員会はまた, 前出の連絡協議会と同様に, 活動の情報交換の場ともなっている. 例えば，今津中学校環境グループの生徒がバイオデッツという事業に参加したことは，同認定委員会の席上において，同校活動担当教諭が他の認定委員から同事業の情報を聞いたことがきっかけであった.

エコ・スクール認定校として認定された学校には，認定校であることを示すエコ・スクール認定証が授与される. また, 事業事務局が認定校を訪れ, 終業式などの場を利用して, 認定証の授与式を行うようになっている．特に，環境グループの児童生徒は，一年間の活動の成果としてこの認定証の交付を受けることを楽しみとしており，このために実践校の多くは毎年，認定を申請している．認定校となり，認定証の交付を受けることは，次年度の環境グループの児童生徒にとっての活動の励み, 目標にもなっているものと考えられる.

D．更新

最後に，同推進事業の更新段階において，事業事務局および実践校が行うことを表 5-24 に示す.

表 5-24　事業の更新段階において，事業事務局および実践校が行うこと

事務局	実践校
活動の打ち合わせ等	登録書の提出

エコ・スクール実践校としての活動を継続する学校は，毎年，登録書を提出することになっている．しかし，野洲中からは，同校担当教諭の多忙さのためか，2005 年度の登録書が提出されていない．それにも関わらず，事務局は，同校をそのまま実践校として扱っている．野洲中のように，登録書が未提出の学校の取り扱いをどうするかが，更新段階の課題や問題点と言える.

5-4　エコ・スクール活動および推進事業に関する成果と課題・問題点のまとめ

本節では，エコ・スクール活動および推進事業に関する成果と課題・問題点として，5-1 でまとめた事業関係者による活動および同推進事業の評価や, 5-2 と 5-3 でまとめた本研究によって見えてきたものの中から特に重要と思われる点を再度まとめ直す．また，活動推進組織である環境グループとエコ・スクール委員会の形態別の特徴に関してもここでまとめておく.

5-4-1　エコ・スクール活動に関する成果と課題・問題点のまとめ

まず，エコ・スクール活動による成果を表 5-25 にまとめる．ここでも，これまでと同様に，事業の 4 つの重点ごとにまとめる．なお，同 4 つの重点項目に分類できなかったものに関しては，「その他」という項目で表中に示してある．

表 5-25　エコ・スクール活動による成果

	成果
授業と活動	・教諭たちが環境学習を，より体験的に行う方法を考えるようになり，環境学習の授業の幅が拡がった．
地域との関わり	・地域と結びついた学習ができるようになった． ・保護者や地域の人々のエコ・スクール活動に関する関心が高まった． ・エコ・スクール委員会ができたことによって，学校だけではできなかった活動が可能になった． ・地域への活動の発信によって，地域の人たちの活動に対する関心が高まった．
子どもの自主性	・児童生徒の環境への関心が高まり，学校だけでなく家庭でも環境負荷削減活動に取り組めるようになった． ・児童生徒が，積極的に意見や考えを発言できるようになった． ・児童生徒が自分たちで行動できるようになった． ・環境グループのメンバーの実践・行動力の向上に結びついた．
全校との関わり	・学校全体の雰囲気づくりになっている． ・学校の特色と児童生徒の発案が具現化されてきている． ・全校に対する活動の啓発になっている． ・教諭間での活動に対する意識共有になっている．
その他	・環境グループのメンバーは楽しく活動できた． ・児童生徒が友人と仲良くなった． ・問題行動がなくなった．

本研究によって見えてきたエコ・スクール活動による成果も，先に示した表 5-1 とほぼ同様の内容となった．ただし，表 5-1 にあげられていなかった，地域との関わりに関する成果としては，エコ・スクール委員会が設立されたことによって，学校だけではできなかった活動が可能になった点と，地域に対して活動を発信することによって，地域の人たちのエコ・スクール活動に対する関心が高まったと考えられる点がある．また，子どもの自主性に関しては，活動が環境グループのメンバーの実践・行動力の向上に結びついているであろうことと，活動と全校との関わりとしては，全校に対する活動の啓発になっていることや，教諭間での活動に対する意識共有につながっているであろう点が考えられる．

次に，エコ・スクール活動によって生じる課題や問題点を表 5-26 にまとめる．まとめ方は，表 5-25 と同様である．

表 5-26　エコ・スクール活動によって生じた課題・問題点

	課題・問題点
授業と活動	・児童生徒の考えた活動計画を学校の年間カリキュラムに組み込むことが難しい.
地域との関わり	・活動を行う上で,（教諭，児童生徒）保護者，地域の人の理解が必要であること，地域の人の参画が必要であることが実施上のハードルになっている. ・外部講師の手配に関する担当教諭の負担が大きい.
子どもの自主性	
全校との関わり	・他の教諭から協力を得ることが難しい．現状では,（一人の）担当教諭だけが負担を負っている. ・各学年での環境学習を推進するための呼びかけを行うための担当教諭の負担が大きい. ・クラス単位やクラブ単位での活動ではなく，学校全体の取り組みであるために活動が難しい. ・カリキュラム以上のことをやることになる負担感で，学内になかなか浸透しない. ・他教諭の同意がないとエコ・スクール委員会が設立できない．同委員会がないことは，活動を地域に広め，あるいは地域の協力を求めるための組織がないことになる.
その他	・担当教諭の異動がエコ・スクール活動を継続する上での支障になる. ・環境グループやエコ・スクール委員会を，まったく新しく作る場合は学校にとって大きな負担となる. ・エコ・スクール委員会の開催運営が担当教諭の新たな負担となる.

本研究によって見えてきたエコ・スクール活動に関する課題や問題点も，先に示した表 5-1 とほぼ同様の内容となった．ただし，表 5-1 にあげられていなかった，活動と全校との関わりに関する課題・問題点としては，エコ・スクール委員会を設立することの難しさがある．前述したように，野洲中では，他教諭の同意が得られず，同委員会を設立できていない．同委員会がないということは，エコ・スクール活動を地域に広め，あるいは地域の協力を求めるための組織がない（あるいは，弱い）ということであり，このことは活動を推進していくための大きな課題だと言えるだろう．また，それ以外にも，環境グループとエコ・スクール委員会ともに，これらの組織をまったく新しく作ることは学校にとって大きな負担になると考えられる．さらに，設立されたエコ・スクール委員会の開催や運営も活動担当教諭の新たな負担になっているものと考えられる.

さらに，各実践校が自己評価したチェックリストをもとに，エコ・スクール活動に関する課題や問題点を表 5-27 にまとめる.

表 5-27　チェックリストから見えてくるエコ・スクール活動の課題・問題点

・活動推進組織メンバーの意志が活動の計画に反映されていない.
・活動の PDCA サイクルがうまくまわっていない.
・活動と地域とのつながりが弱い（特に，計画段階とふりかえりの段階）.
・活動と全校とのつながりが弱い（特に，ふりかえりの段階）.

各実践校の環境グループとエコ・スクール委員会のメンバーが記入したチェックリストを見ると，活動計画に活動推進組織の各メンバーの意見が十分に反映されていない（同グループもしくは委員会において活動に関する十分な意見交換が行えていない）ことや，活動の基本である PDCA サイクルがうまく回っていないこと，活動と地域や全校とのつながりが弱いことなどがエコ・スクール活動の全般的な課題や問題点であることがわかる．これらの点もエコ・スクール活動に関する課題や問題点と言えるであろう.

以上を踏まえ，エコ・スクール活動による成果の中から特に重要と思われるものを抽出すると次のようになる.

- エコ・スクール委員会ができたことによって，学校だけではできなかった活動が可能になった.
- 地域への活動の発信によって，地域の人々の活動に対する関心が高まった.
- 環境グループのメンバー（児童生徒）の実践・行動力の向上に結びついた.
- 学校全体の雰囲気づくりになっている.
- 学校の特色と児童生徒の発案が具現化されてきている.
- 教諭間での活動に対する意識共有になっている.

一方，エコ・スクール活動による課題・問題点の中から特に重要と思われる課題・問題点を抽出すると次のようになる.

- 活動を行う上で，（教諭，児童生徒）保護者や地域の人々の理解が必要であること，特に，地域の人々の参画が必要であることが実施上のハードルになっている.
- 児童生徒の考えた活動計画を学校の年間カリキュラムに組み込むことが難しい.
- クラス単位やクラブ単位での活動ではなく，学校全体の取り組みであるために活動が難しい.
- 他の教諭から活動に関する協力を得ることが難しく，現状では，（一人の）担当教諭だけが負担を負っている．そのため，学内になかなか活動が浸透しない.

次に，各活動推進組織である環境グループとエコ・スクール委員会を形態別に見た場合のそれぞれの良い面と悪い面を考えていく．

まず，子どもたちの活動推進組織である環境グループについて見ていく．前述したように，環境グループの組織形態は実践校によって異なり，本研究で中心的に取り上げてきた8 校の実践校では，3 つの形態が見られた．油日小，御園小，逢坂小，老蘇小，能登川南小，野洲中など，児童生徒会組織の一委員会としている場合と，近江兄弟社小のように縦割り授業のリーダー組織としている場合，今津中のように任意のグループとしている場合である．以下，それぞれの長所と短所を考察していく．

まず初めに，環境グループを児童生徒会組織の中の一委員会として位置づけている場合の特徴（良い面と悪い面）を表 5-28 にまとめる．

表 5-28　環境グループを児童生徒会組織の一委員会にした場合の特徴

良い面	・グループの設立が比較的容易である．運営に関する担当教諭の負担も少ない． ・PDCA サイクルで活動を実施しやすい．
悪い面	・全校児童生徒が何かしらの委員会に入るという仕組みになっているため，意識の高い児童生徒だけが同グループに所属するとはかぎらない． ・毎年度の活動にあまり変化が見られない． ・活動に費やせる時間が月に 1，2 回程度に制限される．

児童生徒会組織内の一委員会の形態をとった場合，同グループの設立が比較的容易であること，また，児童生徒会活動は，もともと，児童や生徒の自発的で自治的な活動をねらいとしている[1)]ため，計画の立案からふりかえりまでの一連の活動（PDCAサイクル）が行いやすいといった長所が考えられる．しかし，毎年度の活動がパターン化してくることや，活動時間の少なさが短所としてあげられる．

次に，環境グループを縦割り授業のリーダー組織として位置づけている場合の特徴（良い面と悪い面）を表 5-29 にまとめる．

表 5-29　環境グループを縦割り授業のリーダー組織にした場合の特徴

良い面	・学校の中での同グループの位置づけがしっかりしている．エコ・スクール活動の中心組織であることが明確である． ・週 1 回という活動時間が確保されているため，同時間内での活動が可能である． ・授業として全校をあげての取り組みであるため，環境グループの児童のみならず，全校児童の意見を活動に活かすことができる．

近江兄弟社小のように，環境グループとして縦割り授業のリーダー組織を位置づけた場合,学校内での活動の中心的存在としての同グループの位置づけが明確である.そのため，全校挙げての活動が行いやすい．また，同グループは，授業として週 1 回という活動時間が確保されているため，それ以外の時間外で活動することも少ないようである．本研究において，この形態の悪い面を見出すことはできなかった．ただし，同校のように縦割り授業というシステムが確立されていない学校では，導入が困難な形態であると考えられる．

最後に，環境グループを児童生徒会組織内には位置づけず，任意のグループとして結成した場合の特徴（良い面と悪い面）を表 5-30 にまとめる．

表 5-30　環境グループを任意のグループとして設立した場合の特徴

良い面	・自主的に参加した児童生徒のみによって環境グループが構成されるため，メンバーの意識が高く，活動が活発である．
悪い面	・毎年，一定人数のメンバーが集まるとは限らず，グループの存続が不安定である． ・学内の正式な組織ではないため，活動時間が確保されていない．

学校の中のどの組織にも所属しない任意のグループを環境グループとして位置づけた場合，自主的に参加した児童生徒のみで同グループが構成されることになるため，メンバーの意識が高く，活動が活発になると考えられる．しかし，正式な学内の組織ではないために，グループの存続が不安定であり，メンバー集めや活動時間の確保の問題など，担当教諭の負担が他の形態のグループ以上に大きくなることが考えられる．

続いて，大人の活動推進組織であるエコ・スクール委員会について見ていく．同委員会に関しては，同委員会が立ち上がっていない野洲中を除いた 7 つの実践校において 2 つの形態が見られた．油日小と老蘇小のように同委員会を学校教諭と保護者で主に構成している場合と，御園小と近江兄弟社小，逢坂小，能登川南小，今津中のように学校教諭と保護者に加えて，地域支援者が同委員会に入っている場合である．以下，それぞれの特徴を示していく．

まず，エコ・スクール委員会が学校教諭と保護者で主に形成されている場合の特徴（良い面と悪い面）を表 5-31 にまとめる．

表 5-31　エコ・スクール委員会が学校教諭と保護者で構成される場合の特徴

良い面	PTA 組織と密接に関係していることから，組織や活動の継続性に優れている．
悪い面	地域や学外との関わりも PTA という組織の中に限定されてしまい，委員会活動もパターン化，ルーチン化してしまう恐れがある．

同委員会の構成メンバーが学校教諭と保護者だけである場合,例外なく,同保護者はPTAの本部役員の充て職かPTA関係者であった．そのため，メンバー選定や就任依頼の必要がほとんどなく，組織や活動が継続しやすいという良い面がある．しかし一方，地域や学外との関わりがPTA組織だけに限定されてしまいがちな点や, 活動がパターン化やルーチン化してしまうことが問題点として考えられる．

次に，同委員会が学校教諭と保護者，地域支援者で構成されている場合の特徴（良い面と悪い面）を表5-32にまとめる．

表5-32　エコ・スクール委員会が学校教諭と保護者，地域支援者で構成される場合の特徴

良い面	様々な立場の人が参加することによって，多様な情報や支援が得られる．
悪い面	メンバーの選定や個別に同委員会委員への就任依頼を行う必要がある．

同委員会の構成メンバーに特に地域支援者を加える場合の良い面は，様々な立場の地域の人が活動に関わるようになることによって，多様な情報や支援を得ることができることと，活動と地域とのつながりがより深くなることであろう．一方，同地域支援者を選定しなければならないことと,選定した支援者から委員就任の受諾を得なければならないため,担当教諭の負担が増えるといった悪い面も考えられる．

5-4-2　滋賀県エコ・スクール推進事業に関する成果と課題・問題点のまとめ

事業関係者によって議論されてきた内容と，本研究によってまとめたものをあわせて，同推進事業に関する成果と課題や問題点を表5-33にまとめる．

表 5-33　エコ・スクール推進事業に関する成果と課題や問題点

	成果	課題・問題点
登録	・エコ・スクール活動を実践する学校数が増えた．また，実践校は，これによって，より多くの他の実践校での環境教育に関する情報を得られるようになった． ・実践校になったことによって，実践校は全校や地域に対する環境啓発活動をより効果的に行えるようになった．	・ハンドブックだけでは，内容が十分に理解されず，敷居が高いイメージがある． ・「キックオフ宣言」と「支援する組織を構成する」という仕組みのため敬遠されがちである． ・開始や認定に伴う手続きが煩雑との印象がある． ・2005 年度は，事務局が個別に参加を依頼しており，実践校が自主的に活動に参加したとは言いがたい．
活動	・環境 NPO からの研修によって，実践校の教諭たちは，児童生徒が主体的に考え，活動するプロセスを学習することができた． ・実践校の児童生徒は，三県交流事業などの環境関連事業に優先的に参加することができた．これによって，環境グループ児童の興味・関心が高まったと考えられること．	・エコ・スクール活動には，継続的な外部からの支援が必要であるが，必要な支援は学校によって異なる．そのため，オーダーメイドの支援が必要となる（が，事業予算に限界がある）． ・実践校は，活動開始前からの取り組みで，実績のある学校が参加しているのが実態であるため，エコ・スクール活動および同推進事業による成果が明らかではない．
認定	・実践校は，認定を申請したことで，認定委員会から環境教育に関する情報や活動に対するアドバイスを受けることができた． ・実践校にとっては，認定証の交付および校内への掲示によって全校や地域の人々の環境啓発活動に対する意識が高まったと考えられること．	・認定申請に関する必要書類をそろえるのが大変である． ・認定の基準がはっきり決まっていない． ・認定期間がはっきり決まっていない． ・実践校にとって，認定されたことによるメリットが少ない．
更新		・実践期間および認定期間があいまい．
その他	・各種関係会議によって，実践校間で，情報交換や交流を行うことができた．	・学校教育課の行う環境教育モデル校と事業内容に重複がある．

同表に示した成果と課題・問題点の中から，特に重要と思われる成果を抽出すると次のようになる．

- エコ・スクール活動を実践する学校数が増え，実践校間の情報交換や交流が盛んになった．
- 実践校になったことによって，実践校は全校や地域に対する環境啓発活動をより効果的に行えるようになった．
- 環境 NPO からの研修によって，実践校の教諭たちは，児童生徒が主体的に考え，活動

するプロセスを学習することができた.

- 実践校にとっては，認定を申請したことで，認定委員会から環境教育に関する情報や活動に対するアドバイスを受けることができた.

続いて，表 5-33 に示した成果と課題・問題点の中から，特に重要と思われる課題・問題点を抽出すると次のようになる.

- エコ・スクール推進事業は，ハンドブックだけでは，内容が十分に理解されず，敷居が高いイメージがある．また,「キックオフ宣言」と「支援する組織を構成する」という仕組みのため，敬遠されがちである.
- エコ・スクール活動には，継続的な外部からの支援が必要であるが，必要な支援は学校によって異なる．そのため，オーダーメイドの支援が必要となるが，事業予算に限界があり，それができていない.
- 認定の基準が明確でなく，現在は，申請すれば，すべて認定されるようになっている．しかし, 認定のハードルを下げて, 何でもありにしたら, エコ・スクールとは言えない.
- 学校教育課の行う環境教育モデル校と事業内容に重複がある.

上に示した課題や問題点以外にも，推進事業の今後の展開に関しては，何を普及させるのか（「エコ・スクール認定校」「エコ・スクール実践校」「エコ・スクールの仕組み」のうちのどれを普及していくのか)，さらには，活動を全県に広めることを目指すのか否かについての議論に決着をつけることが大きな課題となっている．この事業展開に関する基本的な議論に決着がつけば，事業に関する課題や問題点についても，解決に向けた方向性が定まるものと考えられる.

また，滋賀県で同県教育委員会によって実施されている環境教育モデル校の設置に関する事業との重複が指摘されている．ここで，環境教育モデル校の設置事業とエコ・スクール推進事業の事業内容を比較しておくと，表 5-34 のようになる.

表 5-34　環境教育モデル校の設置事業とエコ・スクール推進事業との比較[2)]

	環境教育モデル校	エコ・スクール
管轄	滋賀県教育委員会．	滋賀県エコライフ推進課．
対象	県内の小中高等学校．県内の小中高等学校	県内の小中学校．
登録校	約35校/年．	13校（2005年度現在）．
事業	特色	エコ

・スクール活動の実施，活動に対する支援，認定．

ある環境教育を展開している学校をモデル校として指定．環境教育情報の提供と指導・助言．環境学習フェアで

内容

活動の発表の場を提供．	応募校を全てモデル校に指定．	先ず，実践校として登録，活動のプロセスを経て，認定をうける．特に決まっていない
認定に関して	1年間．	認定期間

環境教育モデル校の設置事業は，県内の小中高等学校を対象にしており，応募のあった学校をすべて同モデル校として認定（指定）している．同モデル校は，滋賀大学教育学部付属教育湖沼実習センターの客員研究員と位置づけられ，環境教育に関する情報や支援などを受けられることになっている[2)]．また，同モデル校は毎年行われる滋賀県環境学習フェアで日ごろの活動の発表を行うことになっている．しかし，毎年，約 35 校もの小中高等学校が同モデル校として指定されているため，全モデル校に対してきめ細かい支援が行えているとは考えにくい．なお，同モデル校に関しては，認定は 1 年間である．

両事業の最も大きな違いは実施主体の違いである．環境教育モデル校設置事業が滋賀県教育委員会によって実施されているのに対して,エコ･スクール推進事業は同県のエコライフ推進課によって実施されている．

エコ・スクール実践校の中には，かつて，環境教育モデル校に認定されていた，あるいは，現在も認定を受けている学校が多く，環境教育モデル校の中でも特に取り組みが盛んである学校が同実践校となっている一面もある．

＜参考文献＞

1）文部省：小学校学習指導要領解説　特別活動編，p.41，文部省（1999）
エコ・スクールプロジェクトのはじまり

2）滋賀県：滋賀県教育委員会　滋賀の教育 welcome to　滋賀の教育
5 環境教育研究の推進
<http://www.pref.shiga.jp/edu/content/06_education/environment/5.html>，2006-03-22

第六章　滋賀県エコ・スクール推進事業およびエコ・スクール活動の今後の進め方に関する考察・提案

本章では，前章までの調査結果を踏まえて，滋賀県エコ・スクール推進事業およびエコ・スクール活動の今後の進め方に関する考察と提案を行う．

6-1　滋賀県エコ・スクール推進事業の今後の展開の方向性について

まず初めに,滋賀県エコ･スクール推進事業の今後の展開の方向性について考えていく．

同事業の今後の展開の方向性に関しては，前章で述べたように，次の 2 つの議論について決着をつける必要があった．一つは，エコ・スクールの「仕組み」「実践校」「認定校」のうち，いずれの普及を目指していくのかという議論である．もう一つは，活動を全県に広めることを目指すのか否かについての議論である．これらの議論に決着をつけることによって，事業や活動に関する具体的な課題や問題点の解決に向けた方向性も見出せるものと考えられる．

1）何の普及を目指していくのか，という議論について

推進事業関係者の間では，エコ・スクールの「仕組み」「実践校」「認定校」のうちのいずれの普及を目指していくのか，ということが大きな問題として決着がつかずに残っていた．この問題を考えるためには，最初に，同推進事業におけるそれぞれの用語が意味するところを再確認しておく必要がある．

まず，エコ・スクールの「仕組み」とは,「授業から活動に結び付けること」「地域との関わりを持つこと」「子どもの自主性を育成すること」「全校あげて活動すること」の 4 つの目的を達成するために，同推進事業において欧州のエコ・スクール事業を参考に考案された手段であった．具体的には，児童生徒で構成する環境グループと大人たちで構成するエコ・スクール委員会を設立し， PDCA サイクルに則って全校あげての活動に取り組んでいくことなど（第三章 3-2 で示した B）のエコ・スクール活動そのものを指す．広い意味では，実践校としての登録やエコ・スクールフラッグの付与，エコ・スクール校としての認定なども「仕組み」と呼べるものであるが，ここでは活動に関わるものだけを「仕組み」と呼ぶことにする．

次に,「実践校」とは，推進事業に登録し，上記のような「仕組み」を導入し，エコ・スクール活動を実践している学校のことであった．実践校には推進事業事務局から，支援とともに他実践校との情報交換の場などのサービスと便宜が提供される．実践校とはエコ・スクールの「仕組み」を導入してもらうための仕掛けであると言えるだろう．

さらに「認定校」とは，上記「実践校」のうち，優れたエコ・スクール活動を実践（同

推進事業の 4 つの目的が達成）できている学校のことであり，そのことが認められ，認定された実践校のことを言った．認定校になることが実践校にとっては目標となり，認定された実践校にとっては活動が高く評価されたことになる一種の表彰制度である．したがって，認定校とは，エコ・スクール活動が求める規範を外部に示すとともに，実践校におけるエコ・スクール活動を促進するための仕掛けの一つであるとも言えるだろう．

このように，エコ・スクールの「仕組み」「実践校」「認定校」とは，それぞれが事業の「目的」を達成,「仕組み」を普及,「実践校」での活動を促進するための手段であった．そのため，いずれの「手段」の普及を目指していくべきか，という当初の問題設定は表現として適切ではないように思える．より的確には，次のように言い換えるべきであろう．推進事業としては，県内すべての学校において事業の 4 つの目的が達成されることを目指している．また，その具体的な方策として，エコ・スクール活動という「仕組み」の普及に努め,「仕組み」の普及のために「実践校」の数を増やし，さらに実践校における目標達成を促進するために「認定校」という仕掛けを利用している．しかし，推進事業の今後の展開の方向性を考えるためには,「仕組み」「実践校」「認定校」のうち，いずれの手段に重点を置いていくことが，事業の目的を達成するためにもっとも効果的であるかについて考える必要がある，と．

以上の整理に立って考えるならば，これまでの推進事業は「実践校」の数を増やすことにはある程度努力してきたが，エコ・スクールの「仕組み」そのものの普及や「認定校」という仕掛けの活用にむけた努力は十分ではなかったように考えられる．

例えば，推進事業として，実践校への登録の呼びかけは行ってきたが，エコ・スクール活動（仕組み）の導入に関する幅広い呼びかけはこれまで一度も行ってこなかった．後述するように，実践校にならなければ，エコ・スクール活動の考え方や仕組み（従来の環境教育と同推進事業の目指すところとの違い）を理解することが難しく，また，全校をあげての取り組みが各学校において実践されにくいといった技術的な問題がその大きな理由であろう．そのため，これまでの推進事業においては「エコ・スクール活動の導入」＝「実践校となること」であった．しかし，活動の完全な理解や実践は難しくとも，考え方や仕組みの部分的な導入も可能なはずである．実践校にわざわざならなくとも，推進事業が掲げる目的の一部でもそれによって達成できるのであれば,事業の目的には適うことになる．これは次の 2）の議論とも密接に関係するが，エコ・スクール活動の“マス”としての普及を目指す考え方といってよい．

推進事業としては今まで，このマスとしての普及を目指す努力や広報活動などがほとんどできていなかった．今後は，このようなマスとしてのエコ・スクール活動の普及を目指す活動も事業として積極的に取り組んでいく必要があると考えられる．また，このような努力や広報活動は，エコ・スクール活動の認知度の向上にも繋がり，後述する実践校の増加にも役立つはずである．

とはいえ，エコ・スクール活動の考え方や仕組みは，実践校にならなければ，パンフレ

ットや研修などだけでは理解が難しいことも事実である．2005 年度から実践校になった 5 校ですら，当初は理解が十分でなく，同年度末に開催された認定委員会の席上で，他の実践校における活動の説明を各校の担当教員から聞いてやっとエコ・スクール活動とはどのようなものであるか，また，一般の環境教育と何が違うのかを理解できたようであった．一方，エコ・スクール活動の仕組みのうち，大人のエコ・スクール委員会の設立や全校をあげた取り組みなどは，実践校となり，学校全体として取り組むことを学校長が宣言しなければ，一部のやる気のある教員だけの力ではどうしようもないことが多かった．実践校になることは，やる気のある教員が学校全体を活動に巻き込む大義名分になる利点もあると考えられる．その意味で，実践校を増やしていく努力を継続していくこともまた重要であろう．ただし，今までのように実践校の数を何年かに数校ずつ増やしていくやり方では，県内でエコ･スクール活動を実践する学校数はなかなか増えてはいかないだろう．今後は，実践校をもっと増やすための今までとは違った形の努力と工夫が必要になると考えられる．

最後に「認定校」について考える．「認定校」に関しても，推進事業はその仕掛けをこれまで十分に活用できていなかったようである．現在の認定校の認定基準は非常にあいまいなものであり，認定の申請を行った実践校は原則，全て認定されるという仕組みになっている．確かに，申請した実践校を認証しないことは難しいことであろう．しかし，実践校になりさえすれば，認定されるというのであれば，活動を実践するインセンティブが実践校にまったく働かず，何のための認定制度なのかということになる．また，「認定校」が，推進事業が要求するエコ・スクール活動のレベルを対外的に示す計器となり得る点にももっと注目するべきであろう．現在の認定制度では，あいまいな基準のまま認定された学校が増えていくことによって，同推進事業やエコ・スクール活動の目指すところが余計わかりにくくなっていると思われる．

2）活動を全県に広めることを目指すのか否か，という議論について

エコ・スクール活動および同推進事業の目的は「授業から活動に結び付けること」「地域との関わりを持つこと」「子どもの自主性を育成すること」「全校あげて活動すること」の 4 点を目指した活動を普及していくことであった．したがって，最も望ましいのは，県内のすべての学校でこれらの目的が達成されることである．しかし，これらの目的は簡単に達成できるものではない．そのために手段として提案，実施されてきたのがエコ・スクール活動であった．

しかし，現実としては，前述のように，今までの推進事業では限られた実践校数の積み上げのみを実施してきており，マスとして活動を全県に広めることに関する努力は十分になされてこなかった．現在の事業の進め方の延長線上では，全県的なマスとしてのエコ・スクール活動の普及は難しいといわざるを得ない．一方，マスの反対を目指すとなれば，限られた数のモデル校あるいはエリート校を養成することが考えられるが，推進事業では，これもできていなかったようである．確かに事業開始当初は，エリート校養成のために，

限られた校数ながら，環境 NPO の派遣など，きめ細かな活動支援が実践校に対して行えていた．しかし，近年では，人的および財政的資源の制約から，ごく限られた数の実践校に対してですら十分な支援ができていない現状にある．実践校となり，エコ・スクールの「仕組み」を導入したからといって，受けられる支援など実利的なメリットがほとんどない（あるいは今後も見込めない）のであれば，自主的に実践校となる学校が現われないのも当然のことである．このように，さまざまな制約から実利的な活動導入のインセンティブを産み出すことが難しいのであれば，それに替わるものとしては，実践校あるいは認定校になることがステータス（社会的地位・名誉）となるような方向に進めて行くしかないのではないだろうか．しかし，現在のような認定制度では，認定基準があいまいであり，実践校ならどの学校でも認定校になれることから，ステータスにもならない状況にある．

要するに，現在の推進事業は，エコ・スクール活動の普及に関して，マスとしての普及にも対極のエリート校養成の方向にも向かっておらず，どちらつかずの中途半端な方向に進んでいると言える．事業として提案した手段としての活動の「仕組み」に中途半端に固守していることが最大の原因だと考えられる．

3）滋賀県エコ・スクール推進事業の今後の展開の方向性についての提案

以上のことから，本研究としては，滋賀県エコ・スクール推進事業の今後の進め方に関して，次のような提案を行う．

エコ・スクール推進事業をマスとしての活動の普及とエリート校養成の 2 つを同時に目指しながら推進していく．マスとしての普及に関しては，活動の事例集やパンフレットの配布など，活動の幅広い広報活動に努めるとともに，実践校への登録を募る．また，活動の「仕組み」など，実践校になるためのハードルをできるだけ低くして，どんな学校でも，気楽に実践校となれるようにする．もともとエコ・スクールの「仕組み」とは，あくまで目的達成のための参考手段であり，絶対的なものではなく，同推進事業に登録した実践校には，各校の事情にあわせて「仕組み」を自校に適した形に改変する自由度が認められていた．以上のような活動によって，実践校の数を一気に増やすこと（実践校のマス化）がエコ・スクール活動の“マス”としての普及にも繋がると考えられる．

もちろん，このような実践校のマス化を目指した場合，従来のような事務局から実践校への助言や支援などは行えないようになる．それによって，支援を受けられるという実践校となる利点がなくなり，また，エコ・スクール活動の考え方が十分に実践校に伝えられない可能性もある．しかし，後者の，実践校におけるエコ・スクール活動に対する理解を深め，実践活動を促進するという問題に関しては，次に述べる認定制度の改革とともに，実践校間の情報交換や交流の場を設けることによって補えるのではないかと考えられる．前述したように，2005 年度から実践校になった 5 校については，認定委員会という情報交換の場が，エコ・スクール活動の理解には有効であった．また，そのような場としては，滋賀県環境学習のつどい（2004 年度までの滋賀県環境学習フェア）の活用も考えられるだ

ろう．

その一方で，認定校の評価をより客観的で，かつ厳格なものとし，毎年，きわめて優れた活動を実践できた数校のエリート校のみ（最優秀校１校と優秀校数校）が認定されるような狭き門とする．同時に，マスコミなどを利用して認定校の表彰や活動内容を幅広く，かつ頻繁に喧伝する．これによって，認定校のステータスの向上に努めるとともに，実践校や他の学校に対して，推進事業の要求する活動のレベルや規範を示すようにする．認定校のステータスが高まることが，認定校を目指して実践校となる新たなインセンティブを産み出し，かつ認定校における活動内容の紹介がエコ・スクール活動の理解を高めることに役立つと考えられる．

6-2　エコ・スクール活動に関する考察と提案

次に, 本研究で明らかになったエコ･スクール活動による成果と課題や問題点をもとに, 同活動の今後の進め方に関する考察と提案を行う．

まず，エコ・スクール活動によって得られた成果（5-4-1）の中から，特に重要であったものを再掲する．

- エコ・スクール委員会ができたことによって，学校だけではできなかった活動が可能になった．
- 地域への活動の発信によって，地域の人々の活動に対する関心が高まった．
- 環境グループのメンバー（児童生徒）の実践・行動力の向上につながった．
- 学校全体で活動に取り組むことにより，各校の特色や学校全体の雰囲気づくりになっている．また，教諭間での活動に対する意識共有にもなっている．

続いて同様に，エコ・スクール活動に関する課題や問題点（5-4-1）の中から，特に重要であったものを再掲する．

- 活動を行う上で，（教諭，児童生徒）保護者や地域の人々の理解が必要であること，特に，地域の人々の参画が必要であることが実施上のハードルになっている．
- 児童生徒の考えた活動計画を学校の年間カリキュラムに組み込むことが難しい．
- クラス単位やクラブ単位での活動ではなく，学校全体の取り組みであるために活動が難しい．
- 他の教諭から活動に関する協力を得ることが難しく，現状では，（一人の）担当教諭だけが負担を負っている．

以下，エコ・スクール活動による上記のような成果をさらに伸ばし，課題や問題点を解決していくための方策をエコ・スクール活動のサイクルに沿って，考察し提案していく．

① さあ，はじめよう（キックオフ宣言，活動推進組織の設立）

まず，活動推進組織に関して次のことを提案したい．

・ PTA をエコ・スクール委員会の核にする．
・ 地域で活動している幅広い分野の人たちをエコ・スクール委員会のメンバーとする．
・ 活動を統括する教員チームをつくる．

活動推進組織に関する 1 点目の提案として，まず PTA を中心にエコ・スクール委員会を構成することを提案する．例えば，油日小では同委員会メンバーの大半を PTA の役員が占めることで，同委員会による同校ビオトープを活用した自然観察会が PTA 活動の一環として継続的に行われていた．また，能登川南小では，前年度の PTA 会長が次年度のエコ・スクール委員会の委員長になることにより，活動に対する PTA からの積極的な支援を得ることができていた．したがって，PTA をエコ・スクール委員会の核にすることによって，保護者たちを活動に巻き込める仕組みができ，活動を行う上で保護者の理解や参画が必要であることが実施上のハードルになっているという課題･問題点の解決につながると考える．

ただし，エコ・スクール委員会を PTA の役員だけで構成した場合には，活動がパターン化やルーチン化してしまうことが懸念される．そのため，あわせて地域で活動している幅広い分野の人々を同委員会のメンバーに加えることを提案したい．例えば，今津中では，幅広い分野の地域支援者が同委員会メンバーに加わることで，活動の内容に対応した様々な支援が可能となり，生徒が発案した活動を実現することができていた．したがって，地域で活動している幅広い分野の人々をエコ・スクール委員会のメンバーとすることによって，子どもが発案した活動を実現していける可能性が高まり，このことが児童生徒の実践・行動力の向上につながると考えられる．また，幅広い分野の人々をエコ・スクール委員会のメンバーに加えるためには，同推進事業事務局である滋賀県環境学習支援センターが各実践校とその地域で活動している地域の人や NPO などの団体とをつなげる役割を果たす必要があると考える．

3 点目として活動を担当する教員チームを設置（あるいは，より現実的には既存の教員チームが活動を担当することに）し，活動を複数の教員で指導することを提案する．例えば，油日小では数人の教諭で構成される「やさしさ部会」という部会をもち，同部会がエコ・スクール活動を担当する教員チームとなり，それによって全校あげての活動が可能となっていた．したがって，教員チームを設け，集団体制で活動を担当することによって，学校全体で活動に取り組むことができ，また，このことが教諭間での活動に対する意識共有にもつながると考えられる．また，教員チームで活動を担当することで，教員の異動に

関わらず，継続した活動が可能になるとも考えられる．

② 活動のテーマ・計画づくり

活動のテーマ・計画づくりのステップに関しては次のことを提案したい．

- 児童生徒の活動計画をエコ・スクール委員会のメンバーに周知させる．
- 学校の教育テーマとエコ・スクール活動のテーマを同じにし，毎年，全校挙げて取り組む活動内容を教員チームで決定する．
- 毎年度の活動内容をある程度固定しておく．さらに，年度を超えた長期計画で，児童生徒が発案した活動案を授業に取り込むようにする．

活動のテーマ・計画づくりに関する 1 点目の提案としては，まず児童生徒の活動計画をエコ・スクール委員会のメンバーにきちんと伝えることを提案する．例えば，能登川南小や今津中では，エコ・スクール委員会会合の場において，環境グループの児童生徒が年度の活動計画を同委員会メンバーに発表しており，それによって，活動のための有効なアドバイスや支援を同委員会から受けることができていた．したがって，環境グループが計画した活動内容をエコ・スクール委員会のメンバーに知らせることにより，同メンバーから活動に関するアドバイスや支援が得られ，学校だけではできなかった活動や児童生徒が発案した活動の実現化につながると考えられる．また，児童生徒の活動をよく知ることによって，同委員会メンバーである地域の人たちの活動に対する関心も高まり，さらに，児童生徒としては，エコ・スクール委員会メンバーという大人の前で発表することによってコミュニケーション能力を向上させることにつながると考えられる．

2 点目として, 学校の教育テーマとエコ･スクール活動のテーマを同じものにすること，そして，先に設置を提案した教員チームが全校で行う活動計画を児童生徒とともに立案することを提案する．油日小では，学校の教育テーマとエコ・スクール活動のテーマを同じものとしていた．このため，既存の「やさしさ部会」という教員チームをエコ・スクール活動の担当チームとすることが可能となり，さらに，同教員チームが同テーマに沿った全校で取り組む活動内容を話し合いで決定することにより，各学級や他の児童生徒委員会でも同テーマにそった活動が行われ，全校あげての活動が可能になっていた．したがって，学校の教育テーマとエコ・スクール活動のテーマを同じものにすることによって教員チームの設置が容易となり，さらに，同教員チームが全校で行う活動を考案していくことによって，学校全体で活動に取り組むことができるようになると考えられる．

3 点目として，学校で行う毎年度の活動内容をある程度固定しておくことと，年度を超えた長期計画によって，児童生徒の発案による活動案を授業に取り込んでいくことを提案する．例えば，御園小では，同校ビオトープである「せせらぎの森」を活用した年間の授業計画をあらかじめ決めておくことで，エコ・スクール活動と授業とのつながりが無理な

く図れていた．また，今津中では，生徒が発案した活動案を，その年度内に実現できなくとも，次年度以降の授業の中で活かしていた．児童生徒の発案による活動案を同年度のカリキュラムに取り込むことはなかなか困難なことである．しかし，以上のように，毎年度の活動内容をある程度固定しておくことや，年度を超えた長期計画で活動を考えていくことによって，児童生徒の考えた活動計画を学校の年間カリキュラムに組み込むことが可能になると考えられる．

③ 活動しよう

活動のステップに関しては次のことを提案したい．

・ 全校が参加する授業や行事をエコ･スクール活動と関連付ける．
・ 児童だけではなく，保護者や地域の人々も一緒にできるような活動を企画し，活動の案内を地域にも出す．

活動のステップに関する 1 点目の提案として，全校の児童生徒が参加する授業や行事をエコ･スクール活動と関連付けることを提案する．例えば，近江兄弟社小では全校で取り組む縦割り授業をエコ・スクール活動と位置づけていたため，全校あげて活動に取り組むことができていた．このように，全校が参加する授業や行事をエコ･スクール活動と関連付けることによって，学校全体で活動に取り組むことができると考える．

2 点目として，児童だけではなく，保護者や地域の人々と一緒にできるような活動を行うことと，学校からの配付物だけでなく地域の広報誌なども活用して活動への参加を地域にひろく呼びかけることを提案する．油日小では親子で参加できる自然観察会を，近江兄弟社小では兄弟社村を活用した親子で参加できるプログラムを企画し，保護者にも活動への参加を呼びかけていた．また，能登川南小では活動のシンボルマークをひろく地域の人からも募集していたほか，老蘇小では同校ビオトープの維持管理活動への参加を地域にも呼びかけており，これらの努力によって，保護者や地域の人々を活動に巻き込むことができていた．したがって，保護者や地域の人々も参画できるような活動を企画し，それら活動への参加をひろく地域に呼びかけることにより，保護者や地域の人たちの活動に対する理解や関心が高まることにつながると考えられる．

④ ふりかえろう

活動のふりかえりに関しては次のことを提案したい．

・ 地域のイベントや広報誌を活用して活動内容を発信する

活動のふりかえりに関しては，各校で行っている活動内容を地域の広報誌やイベントなどで積極的に発信することを提案する．例えば，油日小や逢坂小などでは，担当教諭や環境グループの児童・生徒が一年間の活動内容を地域のイベントなどを活用し，学外に発表していた．また，能登川南小では，地域の広報誌に同校でのエコ・スクール活動の様子を掲載してもらっていた．このように，地域の広報誌やイベントを活用して活動内容を発信することにより，地域の人々の活動に対する理解や関心が高まることにつながると考えられる．

6-3　滋賀県エコ・スクール推進事業に関する考察と提案

最後に，本研究で明らかになった滋賀県エコ・スクール推進事業による成果と課題や問題点をもとに，同事業の今後の進め方に関する考察と提案を行う．

まず，同推進事業によって得られた成果（5-4-2）の中から，特に重要であったものを再掲する．

- エコ・スクール活動を実践する学校数が増え，実践校間の情報交換や交流が盛んになった．
- 実践校になったことによって，実践校は全校や地域に対する環境啓発活動をより効果的に行えるようになった．
- 環境 NPO からの研修によって，実践校の教諭たちは，児童生徒が主体的に考え，活動するプロセスを学習することができた．
- 実践校にとっては，認定を申請したことで，認定委員会から環境教育に関する情報や活動に対するアドバイスを受けることができた．

続いて同様に，同推進事業に関する課題や問題点（5-4-2）の中から，特に重要であったものを再掲する．

- エコ・スクール推進事業は，ハンドブックだけでは，内容が十分に理解されず，敷居が高いイメージがある．また,「キックオフ宣言」と「支援する組織を構成する」という仕組みのため，敬遠されがちである．
- エコ・スクール活動には，継続的な外部からの支援が必要であるが，必要な支援は学校によって異なる．そのため，オーダーメイドの支援が必要となるが，事業予算に限界があり，それができていない．
- 認定の基準が明確でなく，現在は，申請すれば，すべて認定されるようになっている．しかし，認定のハードルを下げて，何でもありにしたら，エコ・スクールとは言

えない.

- 学校教育課の行う環境教育モデル校の設置事業と事業内容に重複がある.

以下，滋賀県エコ・スクール推進事業による上記のような成果をさらに伸ばし，課題や問題点を解決していくための方策を考察し提案していく.

提案方法としては先ず，事業全体に対する提案事項をあげ，そのあとで，事業の各段階に対する提案を行っていくこととする.

同事業全体に対しては次の点を提案したい.

- 各種メディアの活用により，活動のより一層の広報に努める.
- 実践校同士の交流や情報交換，さらに外部へのアピールの場として「滋賀県環境学習のつどい」の場を活用する.

事業全般を通じた提案の 1 点目として，各種メディアを活用し，活動のより一層の広報に努めることを提案する．具体的には，活動事例集やパンフレットの作成と配布，環境学習支援センターの HP やニュースレターなどを活用した，エコ・スクール活動に関する情報の発信である．特に広報手段としては，環境学習支援センターの HP を用いて，実践校で行われている活動を紹介することが有効であろうと考えられる．また，マスコミなどを利用して，認定校の表彰や活動内容，連絡協議会などの様子をひろく宣伝することも同時に提案したい．同事業では，過去に 1 度，各実践校の活動内容を紹介した事例集（2004 年）を作成し，県内各地に配布している．また，エコライフ推進課の HP に同事業のページを設け，各実践校での活動内容を紹介している．しかし，予算の関係もあるのだろうが，事例集は，それ以降は作成されておらず，また，HP の情報もここ 1 年以上更新されていない．自主的に実践校となる学校が少ないなど，同事業が抱える課題や問題点の一部は，事業や活動に関する情報の不足,広報不足によるところが大きいと考えられる.したがって，各種メディアを活用して，活動のより一層の広報に努めることにより，エコ・スクール活動の知名度を高めることが，実践校を増やすことに有効であろうと考えられる．実践校数が増えれば，実践校間の情報交換や交流が盛んになるという成果をさらに伸ばすことにもつながるだろう．また，広報活動のために各実践校における活動を適時まとめておくことが，実践校間の情報交換や，認定時の判定材料としても役立つものと考えられる．活動のまとめ方に関しては，認定委員会や連絡協議会の場で各実践校の活動を紹介するための資料として使用でき，かつ HP など広報媒体にそのまま載せられるように，事務局が書式などをあらかじめ決めておくことによって，実践校側としては認定の申請時に慌ててまとめるということがなくなり，また，事務局としても HP 更新の労力を軽減できるだろうと考えられる.

2 点目として，滋賀県が毎年開催している「滋賀県環境学習のつどい」の場を，実践校同士の交流や情報交換のための連絡協議会や，さらに外部へのアピールの場として活用することを提案する．現在，同事業で行われている連絡協議会のような実践校同士の情報交換会を「環境学習のつどい」の場において同時に開催し，一般に公開することによって，実践校で行われている活動を実践校だけでなく，他校や一般の人たちにも知ってもらうことができるようになる．具体的な活動内容を知ってもらうことにより，エコ・スクール活動への理解が高まり，実践校数の増加につながることが期待できる．また，エコ･スクール推進事業と環境教育モデル校設置事業との違いをアピールすることにも役立つと考えられる．さらに，この場での発表を認定校としての認定の判断材料として利用することも可能であろう．「環境学習のつどい」という，毎年必ず開催される行事に連絡協議会を組み込むことは，予算面から考えても，発表を準備する実践校側にとっても，一度で済むことから効率的であろうとも考えられる．

次に，事業の登録，活動，認定のそれぞれの段階のみに関する提案を段階ごとにあげていく. なお, 本論文では, 同事業の更新段階における大きな課題や問題点はなかったため, ここでは，更新段階の提案は省く．

まず，事業の登録段階に関しては次のことを提案したい．

・ 実践校になるための条件を緩和すること．

登録段階に関しては，実践校になるための条件を緩和することを提案する．前述したように，エコ・スクール活動は「キックオフ宣言」と「支援する組織を構成する」という仕組みのため，敬遠されがちであった．そのため，自主的に実践校となる学校がなかなか現われないといった問題を抱えていた．6-1 でも述べたように，同事業の今後の方向性としては，実践校数を大きく増やしていく必要があると考える．そのためには，どんな学校でも実践校になれるよう，実践校になるための条件を一層，緩和していくべきである．実践校数が増えれば，実践校間の情報交換や交流が盛んになったという成果をさらに伸ばすことができるはずである．しかし，実践校をただ単に増やせばいいわけではない．現在のように，あいまいな認定基準のままで実践校の数だけ増やしたのでは，同推進事業やエコ・スクール活動の目指すところが余計わかりにくくなってしまう恐れがある．そのため，後述するように，認定の基準を明確にし，認定校になるためのハードルを上げるという認定段階での改定を同時に行う必要がある．

続いて，活動の段階に関しては次のことを提案したい．

・ 実践校同士の交流を奨励し，ネットワークを構築する．

活動の段階に関しては，実践校同士の交流を奨励して，実践校間のネットワークを構築することを提案する．現在の同事業では，事務局と各実践校という関係は構築されているが，実践校同士の交流は薄く，交流活動としては今津中と近江兄弟社小との間に見られた事例だけであった．具体的には，担当教諭間のメーリングリストや教諭のみならず児童生徒も利用できる電子会議室の開設，それらインターネットを活用した活動の告知や情報交換などである．また，複数校の児童生徒が実際にオフラインで交流できる活動を奨励し，あるいはそのような場を事務局が積極的に提供することが望ましいであろう．実践校同士のネットワークを構築することによって，実践校間の情報交換や交流がさらに盛んになり，また，このようなネットワークは実践校になることの動機付けになるとも考えられる．

最後に，認定の段階に関しては次のことを提案したい．

・ 認定の際に各実践校が提出する活動資料をより効果的なものにする．
・ 認定の基準を明確化するとともに，基準を引き上げ，きわめて優れた活動を実践できた数校程度のみが認定されるような狭き門とする．

認定の段階に関する 1 点目の提案として，認定の際に各実践校が提出する活動資料をより効果的なものにすることを提案する．具体的には，先にも述べたように，提出する資料の書式などを HP などの宣伝媒体にそのまま掲載できるようなものに統一することである．また，連絡協議会や認定委員会に関しては今後，実践校数が増えていくとともに，活動報告に費やせる 1 校当たりの時間がどんどん短くなることが想定される．現在は認定の際に壁新聞で活動を発表することが主流となっているが，各実践校の活動をビデオ撮影し，連絡協議会や認定委員会などでの活動報告の際には同ビデオを放映するなどのより効率的な発表方法を考えていくことも必要になると考えられる．

2 点目として，認定の基準を明確化するとともに，基準を引き上げ，きわめて優れた活動を実践できた数校のみが認定されるような狭き門とすることを提案する．6-1 でも述べたように，現在の認定基準はあいまいなものであるため，実践校にとって認定校となることに価値が見出せない状況にある．したがって，エコ・スクール活動および同事業の 4 つの目標にそった具体的かつ客観的な認定基準項目を設けるべきであると考える．また，認定基準の項目と評価内容および認定結果を HP などで公表することにより，認定校のステータスの向上につながるだけでなく，同推進事業が目指すものがどのような学校であり活動であるのかを明確に示すことができるだろう．

そのような明確な認定基準を設けた上でさらに，認定に関しては，きわめて優れた活動

を実践できた，例えば最優秀校１校と優秀校数校のみが認定されるような狭き門とすることを提案する．認定校数を極端に少なくすれば，認定基準が引き上げられ，認定を受けられない学校数が増えても，受けられないことに対する不満は少ないはずである．

なお，認定校に現在授与されている認定証については，児童生徒の活動の励みにもなっていると聞くので，認定校になれなかった実践校にもその活動をたたえる認定賞に代わる賞状を授与するようにすべきであろう．また，効果は低いかもしれないが，認定校のステータスを高める別の手段としては，認定校だけに付与するロゴマークのようなものを考えることも効果的かもしれない．第二章で述べたように，海外のエコ・スクールプロジェクトではエコ・スクールになればエコ・スクールであることを示すマーク（ロゴ）がもらえるようになっていた．このような認定校のマーク（ロゴ）などの設定も，実践校の認定校を目指した活動の動機付けの一つになると考えられる．

第七章　論議

本研究では，滋賀県のエコ・スクール実践校におけるエコ・スクール活動の実態と，実践校になったことによる成果や課題，問題点を明らかにし，本研究で明らかになったことをもとに，エコ・スクール活動および滋賀県エコ・スクール推進事業の成果をさらに伸ばし，課題や問題点を解決していくための方策を考察して提案しようとした．その結果として，2005 年度までに登録した実践校 8 校に関しては本研究の目的で掲げたことをおおよそ達成することができたものと考えられる．さらに同事業全体の今後の展開の方向性に関する提案まで行うことができた．

しかし，本研究で行った調査・研究を振り返ってみると，調査に関してはいくつかの課題が残された．本研究では主に，各実践校の担当教諭や同推進事業の担当者へのヒアリング調査および同事業関係資料をもととして調査を進めてきたが，そのために，各実践校での活動担当教諭以外の教諭や活動を支援する大人のグループであるエコ・スクール委員会メンバー，実践校の活動に参加したり支援したりしている地域の人々の同活動や同事業に対する評価を把握することができていない．同活動および同事業の目的である全校あげての活動，地域を巻き込んだ活動という部分をさらに深めて調査するならば，これらの対象者にもヒアリングを行うべきであったと考える．

しかし，本研究では，実践校で行われている活動に関して，実践校になってから現在（2005 年度）に至るまでの毎年度の活動内容を全て整理した上，各実践校とエコ・スクール委員会メンバーとの関係など，各実践校が事務局に提出する書類や 2004 年に発行されたエコ・スクール実践事例集にも報告されていなかったような細かな内容まで把握することができた．さらに，同事業関係資料も含めた調査を行うことにより，現在までに同事業で論議・実施されてきた事業の内容を振り返るとともに実践校で行われている活動を考えた上での事業全体の考察・提案までも行うことができた点は評価できると考えられる．

このように本研究では，いくつかの問題点は残ったものの，今後のエコ・スクール活動や同推進事業を推進していく上で参考になるような資料の整理や指針の提案はできたのではないかと考える．本研究が今後のエコ・スクール活動および滋賀県エコ・スクール推進事業の発展に少しでも役立ち，滋賀県での環境教育がさらに伸展していくことを願う．

謝辞

本研究を進めるにあたり，毎日熱心に指導して下さった井手慎司助教授に深く深く感謝いたします．井手先生のもと論文を作成することで，改めて自分自身と向き合うことができました．苦しんだことも多々ありましたが，そのぶん，大きく自分を成長させることができたに違いないと思います．

また，本研究は多くの方々の献身的な御支援がなければ，完成することはありませんでした．特に，ヒアリング調査にて大変お世話になったエコ・スクール実践校である滋賀県甲賀市立油日小学校，滋賀県東近江市立御園小学校，近江兄弟社学園近江兄弟社小学校，滋賀県大津市立逢坂小学校，滋賀県安土町立老蘇小学校，滋賀県東近江市立能登川南小学校，滋賀県高島市立今津中学校，滋賀県野洲市立野洲中学校の担当教諭の皆様をはじめとする各校教諭の皆様，また，滋賀県高島市立本庄小学校，滋賀県湖南市立石部南小学校，滋賀県草津市立笠縫東小学校の担当教諭の皆様，そして滋賀県環境学習支援センター，環境レイカーズの皆様に深く感謝いたします．

井手研究室でともに過ごした仲間たちとの時間も貴重なものでした．同じ研究室の先輩であり，私が困っている時や悩んでいる時に話を聞いて下さり，的確なアドバイスを下さった木村道徳さん．いつも笑顔で，悩んでいる私を励まして下さり，時には私と一緒になって考えて下さった平山奈央子さん．院生の先輩方がいて下さったことで，私の卒論に関する悩みや精神的な負担は軽くなりました．

同じ 4 回生のみんなとは，良くも悪くも切磋琢磨できました．何でも確実にこなして行く石本貴之さん．あなたのバイタリティにはいつも感心していました．いつも元気で常に前向きに突き進んでいた二村昌輝さん．あなたからはいつも元気をもらっていた気がします．毎日毎日誰よりも真面目に卒論に取り組んでいた福江岬さん．あなたは，素晴らしいゼミ長ですよ．いつも研究室を明るく盛り上げてくれていた松尾さかえさん．さかえ母さんは本当にいつも元気でしたね．あなたのお陰でいつも研究室が明るかった気がします．寝起きの時以外はいつも穏やかで研究室の癒しキャラクターである望月毅瑠さん．あなたには，たくさんのドーナッツをもらいましたね．そして，私と同じで環境教育関連の卒論に取り組んだ米沢高明さん．私が悩みに悩んで，学内の水路をぼーっと見ているとき，励ましに来てくれたのはあなたでしたね．コメなりのアドバイス，いつもありがとう☆彼らと過ごした 1 年間，時には励まし合い，時には良い刺激となり，本当にこの研究室に来て良かったと心から思えます．

また，金谷研究室の中谷侑子さん，土屋研究室の斉藤祐佳莉さん，あなたたちとは何度も夜遅く明け方まで研究について討論していましたね．私にとって，あなたたちと過ごした時間はとても有効で貴重なものでした．

最後になりましたが，滋賀県立大学や他方面で出会った全ての人に感謝して本論文を終わります．4 年間，この大学で琵琶湖とカモたちを見ながらすごし，たくさんの人たちと出会えて幸せでした．

中村　敦子